

北房町埋蔵文化財発掘調査報告 4

谷尻遺跡  
赤茂地区

1986年3月

北房町教育委員会



## 序

備中川を中心に広がる平野と温暖な気候に恵まれた我が北房町には古くから人が住まい、生活が営まれてきました。あちこちの丘陵の裾に残された古墳等の遺跡は二百数十を数えます。まさに備北の要衝として古くから政治経済文化が栄えてきた歴史のあかしであり誇りをもってこれから貴重な文化遺産を保存すべきであります。この度大字上水田赤茂地区では20ヘクタールに及ぶ広範囲な圃場整備が計画されましたが、この地域は奈良時代に建立されたとする英賀廃寺の拡大な寺域が周知されており、岡山県教育委員会と協議の結果、岡山県教育委員会として、国の補助を得て確認調査を実施されたところ55,000㎡に及ぶ遺跡の広がり確認されました。これに基づき地元関係者と保存協議を重ねましたが13,500㎡に及ぶ調査区域が確定しました。このため急拠、町教育委員会として調査体制を組み、昭和58・59・60年度の3ケ年で全面発掘調査の運びとし、ここに予定どおり完了を見たのであります。

土地基盤整備の時代的な要請と文化遺産の保存との目的を全うすることができたことは誠によろこばしいことであります。

この報告書は2年6ヶ月に及ぶ広範囲な区域を発掘調査した遺跡の総まとめであります。

これが文化財の保存に代わり、また歴史探求の資となるならば幸甚に存じます。この調査を推進された森田、岩崎両調査員の並々ならぬ御苦心と共に、灼熱風雪に耐え発掘作業に取り組まれた作業員の御労苦に深甚の敬意と謝意を表します。

おわりに終始本調査事業を御指導御援助下さった、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センターをはじめ、岡山県高梁地方振興局、隣接落合町教育委員会関係各位の御支援並びに地元地権者の御理解御協力に対し衷心より厚くお礼申し上げる次第でございます。

昭和60年10月

北房町教育委員会

教育長 加 戸 明



## 例 言

1. 本書は北房町教育委員会が昭和58・59・60年度国庫補助事業を受けて実施した「谷尻遺跡（赤茂地区）」の発掘調査の概要報告書である。
2. 遺跡は上房郡北房町赤茂に所在する。
3. 発掘調査は森田友子（落合町教育委員会職員派遣）、岩崎仁司（北房町教育委員会職員）が担当し、専門委員の指導、助言を得て昭和58年4月15日から昭和60年8月3日まで実施した。
4. 遺物の整理は坂本光代、植田靖子、森美和、坂本和恵、下森洋子、竹田早苗、山本小百合、山本裕子、梶田志津恵、西谷いずみ、坂本幸子、米井由佳の協力で森田・岩崎が行った。
5. 本報告書の執筆・編集は坂本（光）、植田、森の協力を得て、森田、岩崎が行った。文責は文末に記した。また、赤茂1号墳出土の馬具については大谷猛（東京都教育委員会）の指導をいただいた。記して謝意を表す。
6. 本書に使用したレベルの数値は仮原点からの高さである（仮原点は海拔6.02m）。方位は磁北である。
7. 本書第3図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図（嵯部、刑部、勝山、井倉）を複製・縮小したものである。
8. 発掘調査で出土した遺物、及び実測図・写真類は、すべて北房町教育委員会に保管している。
9. 図版1（調査地点航空写真）については石井写真館の協力を得た。



## 目 次

序	
例 言	
目 次	1
第1章 調査の経緯・経過	9
第2章 地理的・歴史的環境	15
1 地理的・歴史的環境	15
2 遺跡の位置と現状	18
第3章 発掘調査の概要	22
第1節 第1地点の調査	22
1 弥生時代の遺構・遺物	22
(1)住居址	22
(2)土壌	42
2 古墳時代の遺構・遺物	55
(1)住居址	55
(2)土壌	59
(3)赤茂1号墳	60
3 奈良時代の遺構・遺物	84
(1)建物	84
4 中世の遺構・遺物	87
(1)建物	87
(2)溝	107
(3)井戸	111
(4)土壌	118
第2節 第2地点の調査	132
第3節 第3地点の調査	134
第4節 第4地点の調査	134
第4章 まとめ	138
第1節 谷尻遺跡赤茂地区発掘調査概要	138
第2節 赤茂1号墳	140
第3節 中世の建物	141

目 次

第 1 図	遺跡位置図	15
第 2 図	北房町内主要遺跡図 (1/75000)	16
第 3 図	谷尻遺跡周辺遺跡図 (1/25000)	18
第 4 図	圃場整備後畦畔図 (1/3000)	19
第 5 図	調査地点位置図 (1/3000)	21
第 6 図	1号住居址 (1/80)	22
第 7 図	1号住居址出土遺物 (1/4)	23
第 8 図	2・3号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2)	25
第 9 図	7号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	26
第 10 図	8号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	27
第 11 図	9号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	29
第 12 図	9号住居址出土遺物 (1/4)	30
第 13 図	10・11・12・13・14号住居址 (1/80)	31
第 14 図	11号住居址出土遺物 (1/4)	32
第 15 図	21号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	32
第 16 図	26号住居址 (1/80)	33
第 17 図	26号住居址出土遺物 (1/4)	34
第 18 図	28号住居址 (1/80)	35
第 19 図	20号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	35
第 20 図	22号住居址 (1/80)	36
第 21 図	22号住居址出土遺物 (1/4)	36
第 22 図	27号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	37
第 23 図	15号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	37
第 24 図	25号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	38
第 25 図	19号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/4)	39
第 26 図	18号住居址 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4)	40
第 27 図	16号住居址 (1/80)	41
第 28 図	土壙 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	42
第 29 図	土壙 2 (1/30)	43
第 30 図	土壙 2 出土遺物 1 (1/4)	44



第 31 図	土壙 2 出土遺物 2 (1/4・1/2) .....	45
第 32 図	土壙43 (1/30) .....	46
第 33 図	土壙43出土遺物 (1/4).....	46
第 34 図	土壙59 (1/30) ・出土遺物 (1/4).....	47
第 35 図	土壙60 (1/30) ・出土遺物 (1/4).....	48
第 36 図	土壙867 (1/30) ・出土遺物 (1/6) .....	49
第 37 図	土壙1088 (1/50) .....	49
第 38 図	土壙1088出土遺物 (1/4).....	50
第 39 図	土壙1086 (1/50) .....	51
第 40 図	土壙1086出土遺物 (1/4).....	51
第 41 図	土壙1205 (1/50) .....	52
第 42 図	土壙1205出土遺物 (1/4).....	52
第 43 図	土壙608 (1/30) .....	53
第 44 図	土壙3000 (1/30) .....	53
第 45 図	土壙608出土遺物 (1/4) .....	54
第 46 図	5号住居址 (1/80) .....	55
第 47 図	5号住居址出土遺物 (1/4).....	55
第 48 図	6号住居址 (1/80) .....	56
第 49 図	17号住居址 (1/80) ・出土遺物 1 (1/1) .....	56
第 50 図	17号住居址出土遺物 2 (1/4).....	57
第 51 図	23号住居址 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	58
第 52 図	土壙1418 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	59
第 53 図	赤茂 1 号墳全体図 (1/200).....	60
第 54 図	赤茂 1 号墳石室 (1/60) .....	62
第 55 図	赤茂 1 号墳遺物出土状況 (1/40) .....	63
第 56 図	赤茂 1 号墳出土遺物 1 (1/4).....	65
第 57 図	赤茂 1 号墳出土遺物 2 (1/4).....	66
第 58 図	赤茂 1 号墳出土遺物 3 (1/4).....	68
第 59 図	赤茂 1 号墳出土遺物 4 (1/4).....	69
第 60 図	赤茂 1 号墳出土遺物 5 (1/4).....	70
第 61 図	赤茂 1 号墳出土遺物 6 (1/4).....	73
第 62 図	赤茂 1 号墳出土遺物 7 (1/2).....	74

谷尻遺跡（赤茂地区）

第 63 図	赤茂 1 号墳出土遺物 8 (1/2)	75
第 64 図	赤茂 1 号墳出土遺物 9 (1/2)	76
第 65 図	赤茂 1 号墳出土遺物 10 (1/2)	77
第 66 図	赤茂 1 号墳出土遺物 11 (1/2)	78
第 67 図	赤茂 1 号墳出土遺物 12 (1/2)	79
第 68 図	赤茂 1 号墳出土遺物 13 (1/2)	81
第 69 図	赤茂 1 号墳出土遺物 14 (1/2)	82
第 70 図	建物 36 (1/80)	84
第 71 図	建物 42 (1/80)	85
第 72 図	建物 47 (1/80)	86
第 73 図	建物・包含層出土遺物 (1/4)	86
第 74 図	建物 1 (1/100)	87
第 75 図	建物 2・2'・3 (1/100)	88
第 76 図	建物 4・5 (1/100)	89
第 77 図	建物 6・7 (1/100)	90
第 78 図	建物 8・9 (1/100)	91
第 79 図	建物 10 (1/100)	92
第 80 図	建物 11・12 (1/100)	93
第 81 図	建物 13 (1/100)	94
第 82 図	建物 14~16 (1/100)	95
第 83 図	建物 17・18 (1/100)	96
第 84 図	建物 19 (1/100)	97
第 85 図	建物 20・21 (1/100)	99
第 86 図	建物 22 (1/100)	100
第 87 図	建物出土遺物 (1/4)	100
第 88 図	建物 30 (1/80)	101
第 89 図	建物 46 (1/80)	102
第 90 図	建物 31 (1/80)	102
第 91 図	建物 33 (1/80)	103
第 92 図	建物 45 (1/80)	103
第 93 図	建物 44 (1/80)	104
第 94 図	建物 32 (1/80)	104
第 95 図	建物 29 (1/80)	105

第 96 図	建物28 (1/80)	105
第 97 図	建物27' (1/80)	105
第 98 図	建物43 (1/80)	106
第 99 図	建物40 (1/80)	106
第 100 図	溝 1 出土遺物 (1/4)	107
第 101 図	溝 1 (1/500) ・断面図 (1/150)	107
第 102 図	溝 2 (1/40)	108
第 103 図	溝 2 出土遺物 (1/4)	109
第 104 図	井戸 1 (1/4)	110
第 105 図	井戸 1 出土遺物 (1/4)	111
第 106 図	井戸 2 (1/30)	112
第 107 図	井戸 2 出土遺物 (1/4)	112
第 108 図	井戸 2 北側出土遺物 (1/4)	113
第 109 図	井戸 3 (1/60)	114
第 110 図	井戸 4 (1/60)	115
第 111 図	井戸 5 (1/60)	116
第 112 図	井戸 7 (1/60)	117
第 113 図	井戸出土遺物 (1/4)	117
第 114 図	土壇52 (1/30)	118
第 115 図	土壇52出土遺物 (1/4)	118
第 116 図	土壇 9 (1/30)	119
第 117 図	土壇 9 出土遺物 (1/4)	119
第 118 図	土壇23・24・33・40・88・83 (1/30)	121
第 119 図	土壇24・33・88出土遺物 (1/4)	121
第 120 図	土壇40出土遺物 (1/8)	122
第 121 図	土壇墓126 (1/30)	123
第 122 図	土壇墓126出土遺物 (1/4)	123
第 123 図	土壇墓1676 (1/30)	123
第 124 図	土壇墓124 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	123
第 125 図	その他の土壇・柱穴出土遺物 1 (1/4)	124
第 126 図	その他の土壇・柱穴出土遺物 2 (1/4)	125
第 127 図	その他の土壇・柱穴出土遺物 3 (1/4)	126
第 128 図	包含層出土遺物 1 (1/4)	127

谷尻遺跡（赤茂地区）

第 129 図	包含層出土遺物 2 (1/4).....	128
第 130 図	包含層出土遺物 3 (1/4).....	129
第 131 図	包含層出土遺物 4 (1/4, 100~111は1/2).....	130
第 132 図	第 2 地点全体図 (1/200) ・ 谷状遺構断面図 (1/80) .....	132
第 133 図	谷状遺構出土遺物 (1/4).....	133
第 134 図	第 3 地点全体図 (1/200) ・ 土層図 (1/60).....	134
第 135 図	第 4 地点全体図 (1/200).....	135
第 136 図	建物 1 ・ 2 ・ 3 (1/100).....	136
第 137 図	建物 4 (1/100).....	137
第 138 図	第 4 地点出土遺物 (1/4).....	137
第 139 図	弥生時代主要遺構図 (1/1000) .....	139
第 140 図	中世建物配置図 (1/500).....	143

図 版 目 次

図版 1	谷尻遺跡航空写真
図版 2	1. J~K-7~10区全景 (北より) 2. J~K-6~7区全景 (北より)
図版 3	1. I-7区全景 (北より) 2. J~K-5区全景 (西より)
図版 4	1. 1・2・3号住居址 2. 7号住居址
図版 5	1. 7号住居址土器出土状況 2. 8号住居址
図版 6	1. 9号住居址 2. 10・11・12・13・14号住居址
図版 7	1. 19号住居址 (東より) 2. 21号住居址 (南東より)
図版 8	1. 26号住居址 (西より) 2. 20号住居址 (西より)
図版 9	1. 16号住居址 (東より) 2. 土壌1205遺物出土状況 (南より)
図版 10	1. 土壌 1 ・ 2 2. 土壌 2 遺物出土状況

- 図版11 1. 土壙43遺物出土状況  
2. 土壙59遺物出土状況
- 図版12 1. 土壙3000（北より）  
2. 土壙 867（北より）
- 図版13 1. 土壙1088（南より）  
2. 土壙 608（南東より）
- 図版14 1. 5号住居址  
2. 6号住居址
- 図版15 1. 17号住居址（北より）  
2. 17号住居址小型仿製鏡出土状況
- 図版16 1. 23号住居址（南より）  
2. 土壙1418遺物出土状況（北より）
- 図版17 1. 赤茂1号墳全景  
2. 赤茂1号墳遺物出土状況
- 図版18 1. 赤茂1号墳遺物除去後  
2. 赤茂1号墳石室全景
- 図版19 1. 建物36（北より）  
2. 建物42（南より）
- 図版20 1. 建物1  
2. 建物2～9周辺
- 図版21 1. 建物14周辺  
2. 建物20周辺
- 図版22 1. 建物28・29（北より）  
2. 建物30・31・32（南より）
- 図版23 1. 溝1  
2. 溝2遺物出土状況
- 図版24 1. 井戸1  
2. 井戸1断面
- 図版25 1. 井土2  
2. 井戸2完掘状況
- 図版26 1. 井戸3検出状況（南より）  
2. 井戸4（北より）
- 図版27 1. 井戸5（北より）

谷尻遺跡（赤茂地区）

2. 井戸7（西より）

- 図版28 1. 土壙9  
2. 土壙40
- 図版29 1. 炉  
2. 土壙墓126
- 図版30 1. 土壙墓1676  
2. 土壙墓124
- 図版31 1. 第2地点全景  
2. 第4地点全景
- 図版32 1. 遺構検出風景  
2. 作業風景
- 図版33 1. 作業風景  
2. 見学会
- 図版34 1・2・3・7・8号住居址出土遺物
- 図版35 8・10号住居址出土遺物
- 図版36 土壙1出土遺物
- 図版37 土壙1・43・59出土遺物
- 図版38 赤茂1号墳出土遺物（須恵器）
- 図版39 赤茂1号墳出土遺物（須恵器）
- 図版40 赤茂1号墳出土遺物（須恵器）
- 図版41 赤茂1号墳出土遺物（須恵器）
- 図版42 赤茂1号墳出土遺物（土師器、鉄器）
- 図版43 赤茂1号墳出土遺物（馬具）
- 図版44 赤茂1号墳出土遺物（装身具類）
- 図版45 溝1・2、井戸1・2出土遺物
- 図版46 土壙出土遺物
- 図版47 土壙40出土遺物
- 図版48 出土遺物
- 図版49 出土遺物
- 図版50 出土遺物
- 図版51 出土遺物
- 図版52 出土遺物
- 図版53 出土遺物

## 第1章 調査の経緯・経過

谷尻遺跡周辺は昭和5年に永山卯三郎の著した「岡山県通史」によって英賀廃寺が備中北部唯一の古代寺院であると世に知られるようになったのが最初である。英賀廃寺のある赤茂地区から谷尻地区にかけての水田には以前から遺物の散布が見られ、赤茂地区からの出土品は旧北房中学校に保管されてきた。また谷尻地区については昭和48年～50年にかけて行われた中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査によってその一部が明らかにされている。

昭和52年になって赤茂地区では地元から圃場整備事業の要望が町当局へ出された。

昭和54年にいたって英賀廃寺の寺域内で団体営の圃場整備事業が計画されることになり、岡山県教育委員会と北房町教育委員会は寺域、主要伽藍を明確にすることによって保存を図る資料を得るために発掘調査を実施した。それにより寺建立以前及び廃絶後の遺構、遺物も検出しており、寺域外にも遺構が存在することが確認された。その結果、英賀廃寺については一たん工事区域から外す計画をたてたが、全体計画に対し著しい支障をきたすため、昭和55年10月28日、町建設課より寺域は盛土により整地する計画が出された。これを受けて町教育委員会は昭和56年9月10日付で文化財保護法第57条の3に基づき文化庁と協議した。そこで、岡山県教育委員会は圃場整備計画の範囲内で遺跡の規模、種類、性格等を確認し、遺跡の保護、保存対策を講ずる基礎資料を得るため、昭和56年度の国庫補助を受けて昭和56年10月26日から翌年2月10日まで発掘調査を実施した。発掘調査の結果は、弥生時代～中世に及ぶ集落址であり、その範囲は55,000㎡にも及び備中北部では最も大きい遺跡であることが判明した。そのため岡山県教育委員会は遺跡の重要性から出来る限りの保存措置をとるよう町当局、町教育委員会、設計者である岡山県土地改良連合会と協議した。しかし、全域を盛土保存することは搬入土の量、水利面、全経費の面で困難であることから、工事の設計変更をし、英賀廃寺の寺域は埋土保存とし、地形上やむをえず切土にしなければならない部分については発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとした。協議で合意した主な内容は次に述べるとおりである。

1. 発掘調査は切土で破壊、消滅する部分11,500㎡とし、記録保存の措置を講ずる。
2. 発掘調査は調査面積が広大であるため昭和58・59・60年の3ヶ年計画で実施する。
3. 発掘調査の経費は農林省と文化庁において了解されている「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日 庁保記第211号）の1の5項を適用するものとする。
4. 発掘調査は北房町教育委員会が事業主体となって実施する。

調査員については北房町で確保するよう岡山県文化課から指導を受けたが専門的知識を必要

## 谷尻遺跡（赤茂地区）

とする調査員の確保に苦慮し、昭和58年度は落合町より職員の派遣を要請することで切り抜けた。昭和59年度からは北房町で調査員を1名確保し、昭和59年度は調査員2名の体制で調査にあたった。

発掘調査は昭和59年度末までの予定で昭和58年4月18日より開始したが、昭和59年4月に入ってから北房町建設課より、昭和60年度事業に予定されていた山田地区の圃場整備事業に伴う発掘調査（備中平遺跡）を昭和59年度事業で行いたいとの意向を示した。昭和59年度は調査員2名の体制でのぞんでいたが森田は報告書作成作業に入っているため、1人で谷尻遺跡と備中平遺跡の2つを同時に発掘調査をすることは不可能の状況であった。しかし、圃場整備の工事工程上昭和59年度に発掘調査を実施したいとの意向のため、再三にわたり協議した結果代案として一時谷尻遺跡の調査を中断して備中平遺跡の調査を行い昭和60年4月より谷尻遺跡の発掘調査を再開するという事になった。北房町教育委員会は岡山県教育委員会文化課、北房町建設課、地元地権者と話し合い、谷尻遺跡の発掘調査は昭和59年10月までとし、残りは報告書の発行も含めて昭和60年度事業とすることで合意に達した。

発掘調査にあたっては岡山県教育庁文化課、岡山県古代吉備文化財センターの指導、助言を得て行われ、農林水産省中四国農政局、岡山県農林部農村整備課、岡山県高梁地方振興局、北房町役場、北房町文化財保護委員をはじめ地権者等関係各位には多大の御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。

## 調査体制

### 専門委員

- 鎌木義昌 岡山理科大学教授
- 近藤義郎 岡山大学教授
- 水内昌康 岡山女子看護専門学校教頭

### 北房町教育委員会

- 加戸 明 教育長（～60.11）
- 武村邦夫 " （60.11～）
- 長田成徳 事務局長（～59.3）
- 新田 昌 " （59.4～）
- 井原隆志 係長（庶務担当）
- 森田友子 主事補（落合町教育委員会より派遣58.4.1～60.3.31）（調査担当）
- 岩崎仁司 主事補（59.4.1～61.3.31）（調査担当）



調査作業員

池田 孝雄	板谷 忠士	畦崎 宜久	畦崎 操	坂本 国男	坂本 重吉
坂本 善六	坂本 博	坂本 芳夫	清水 延夫	清水孫三郎	武村 三夫
西谷 貞雄	伴野 幸一	藤本 良一	美藤 哲雄	森谷 雄大	柳田 一男
山崎静太郎	池田 春子	今石 和美	植田 靖子	畦崎 翠	梶田喜美子
梶田 鹿野	梶田志津恵	坂本 和恵	坂本 絹子	坂本サトエ	坂本 光代
坂本 幸子	坂本 芳枝	下森 洋子	竹田 早苗	西谷いずみ	武村 奈美
西谷寿美江	西谷 春恵	西谷 秀子	西谷 文子	西谷満智子	堀内 菊代
森 美和	山崎 綾子	山崎千津恵	山崎日出子	山本小百合	山本 裕子
米井 由佳					

（アイウエオ順 敬称略）

日誌抄

以下発掘調査の経過については日誌抄により追っていきたい。

昭和58年

- 4月15日 H-15区の耕作土を重機により除去。
- 4月18日 本日よりH-15区から調査開始。
  - 21～22日 H-1-1～2区の耕作土を重機により除去。
- 5月6日 H-1-1～2区の調査に入る。
  - 9日 H-15区の実測。
  - 26日 北房町教育委員、教育長、教育委員会事務局長見学。
  - 31～6月6日 重機により次の調査区（J-2～4、K-3～4区）の耕作土除去。
- 6月1～4日 作業員の田植えのため農繁休暇。
  - 13日 H～G-1区遺構検出及び遺構掘り開始。本日より作業員の増員をはかる。
  - 15日 J～K-4区の作業開始。
  - 18日 プレハブ事務所が建つ。
  - 21日 G～H-2区遺構掘り開始。
  - 22日 北房町長見学。
  - 27～28日 G～H-1～2区平板実測。
  - 29日 J～K-3～4区遺構検出。
- 7月6～7日、11日 次の調査区（I-3区）の耕作土を重機により除去する。
  - 15日 岡山県農林事業部耕地課職員2名見学。
  - 18日 J～K-2～4区全景写真撮影。I-3～4区の作業開始。

谷尻遺跡（赤茂地区）

- 26～29日 J～K-2～4区平板実測。  
29～30日 I-2～4区遺構検出。
- 8月2日 衆議院議員藤井勝志氏一行来跡。  
8日、18日、19日、23日 J-2区の耕作土を重機により除去する。  
13～15日 お盆のため作業中止。  
20日 J-1～2区の調査開始。
- 9月7日 J-1区の東端から赤茂1号墳の存在することを確認した。  
8日 J-1～2区遺構検出開始。赤茂1号墳の調査開始。トレンチ内より馬具出土。  
17～18日 I-2区、J-1～2区の遺構検出。  
28日 北房町文化財保護委員来跡。
- 10月7日 井戸1の清掃及び写真撮影。  
11日 赤茂1号墳の床面検出。  
18～25日 赤茂1号墳遺物出土状況図作成。石室床面の実測。赤茂1号墳の全景写真。  
28日 井戸1の断面実測及びレベリング。
- 11月4日 H-1区より竪穴住居址1軒を検出。  
7日 H-2区からも竪穴住居址2軒を検出。G-2～3区の耕作土排土開始。  
7～9日 H-3～4区の耕作土除去のため重機が入る。  
8～15日 I～K-1～2区の平板測量及びレベリング。  
10日 文化庁技官黒崎直氏来跡。  
14日 G-1～2区遺構検出。H-4区より表土層の排土開始。  
21日 高梁地方振興局耕地課課長、北房町建設課課長ほか2名来跡。
- 12月7日 H-3区より竪穴住居址2軒検出。  
12日 B～C-2区の耕作土を重機により除去する。  
13日～14日 A-15～16区の耕作土を重機で除去。  
14～17日 H-3～4区平板実測及びレベリング。  
19日 A-15～16区調査開始。  
24日 専門委員会開催（鎌木先生、水内先生、河本課長補佐来跡）。
- 12月28～1月4日 年末年始休暇。

昭和59年

- 1月5日 悪天候のためスライド会を開催。  
6日 B～C-2区遺構検出。  
11～13日 H-5、I～K-4～5区の耕作土を重機で除去。

- 18日 K-4区から溝1の南半を掘り始める。  
20～24日 B～C-2区平板測量及びレベリング。  
31～2月5日 大雪のため作業中止。
- 2月16日 溝1を掘りあげ、全景写真の撮影。  
20日 溝1平板測量開始。H-5区調査開始。  
24日 H-5区より竪穴住居址のプランを検出。
- 3月5日 I-4区井戸2上面の石組の平面実測を開始。  
7日 備中町文化財保護委員（8名）見学。  
15日 高梁教育事務所社会教育主事一行9名来跡。  
27～30日 H-5区平板測量及びレベリング。  
27～29日 J-1区赤茂1号墳周湟掘り。  
29日 有漢町教育委員会より2名来跡。
- 4月2日 調査員1名増員2名で調査体制を組む。  
7日 1985年度調査区、I-4～6区より調査開始。  
10日 井戸1を重機により半裁、断面実測。  
11日 町文化財保護委員来跡。  
12日 赤茂1号墳実測。  
12日 基盤層上面で遺構検出。検出状況写真撮影後、掘り下げる。
- 5月7日 J～K-4～5区上土排土。  
10日 I-4～5区実測後写真撮影。  
15日 岡山県文化課、逸見課長代理ほか4名来跡。  
16日 建設課、教育委員会事務局と今後の調査方針について打ち合わせ。  
24日 J～K-4～5区清掃後写真撮影。  
25日 高梁地方振興局耕地課来跡。
- 6月4日 森田報告書作成作業のため、本日より室内作業にうつる。  
9日 I-6～7区包含層排土。土壙3000検出、炭化米多量出土。  
19日 K-10区重機により表土剥ぎ。
- 7月4日 県教育委員会松元課長ほか3名、水内先生、堀川純氏来跡。  
9日 17号住居址床面で小型仿製素文鏡出土。  
11日 上房郡校長会、北房町長、町議会、文教委員、文化財保護委員、教育委員会事務局来跡、見学会開催。  
12日 小型仿製素文鏡について記者会見を行う。

谷尻遺跡（赤茂地区）

- 16日 岡山県農林事業部耕地課長ほか5名来跡。学生バイトにより注記再開。  
26日 K-9～10区遺構検出。  
8月2日 水田小学校6年生16名来跡、見学会開催。  
3日 K-8～9区排土。  
9日 町内教員見学会開催。  
17日 K～L-8～9区遺構検出後掘り下げ。  
24日 I-6～7区、清掃後写真撮影。下部遺構検出。  
9月7日 「月」と線刻された須恵器杯身出土。  
8日 水田小学校スライドによる見学会開催。  
10月2日 高梁教育事務所長有安氏来跡。  
16日 全体写真撮影、機材の片付け。  
30日 実測終了。1985年度現場作業完了。  
11月1日～岩崎備中平遺跡の調査へ。森田引きつづき、報告書作成作業を続ける。

昭和60年

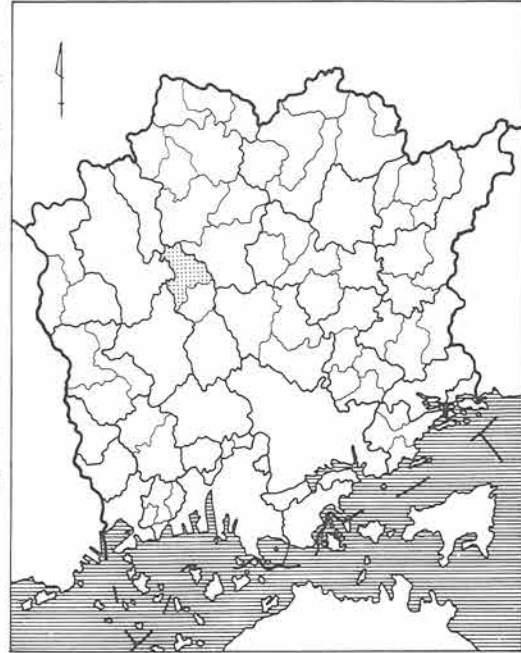
- 3月31日 森田本日をもって落合町教育委員会へもどる。  
4月22日 60年度分調査開始。テント設営後、I-8区から耕作土排土開始。  
5月6日～10日 重機によりJ～K-6～7区耕作土排土。  
8日 上水田小学校、校長・6年生32名来跡、見学会開催。  
9日 J～K-6～7区へ移動、造成土・包含層除去。  
9日～12日 最上寺古墳を平行して調査する。  
21日 水田小学校6年生26名来跡、見学会開催。  
27日 J～K-6～7区検出状況写真撮影。  
29日 井戸1・2の掘り下げ再会。  
6月1日 J～K-6～7区遺構掘り始める。  
7日 梅雨入り。女性作業員により、雨の日は土器洗いを行う。  
25日 土壙墓の慰霊祭を行う。  
7月5日 遺構掘り下げ終了。  
6日 プレハブ移転のため、事務所を移す。  
8日～11日 清掃、全体写真撮影。  
15日～8月3日 実測・測量を行う。現場作業すべて完了。  
8月20日 炉を切り取り、ふるさとセンターへ移築。  
28日～以後整理作業を行う。

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 1 地理的・歴史的環境

谷尻遺跡（赤茂地区）は、岡山県中北部にある上房郡北房町赤茂に所在する。付近一帯は石灰岩地帯で、北房町から新見市にかけては石灰岩の採掘場が多く見られる。また、カルスト地形が各所に見られるとともに、洞穴・岩陰が散在する。このような岩陰の一つに縄文式土器の採集された地蔵ヶ淵遺跡（注1）がある。

この石灰岩地帯の間を旭川の一支流である備中川が流走しており、北房町内においては、砦部を中心とする地域と上水田を中心とする地域に一定の広さとまとまりをもった平地が形成されている。さらに、備中川の支流である中津井川により開析された地域とを合わせた地域が、この一帯の中心地を形成しており、当町内で現在までに知られている遺跡も、その大多数がこの周辺に存在している。

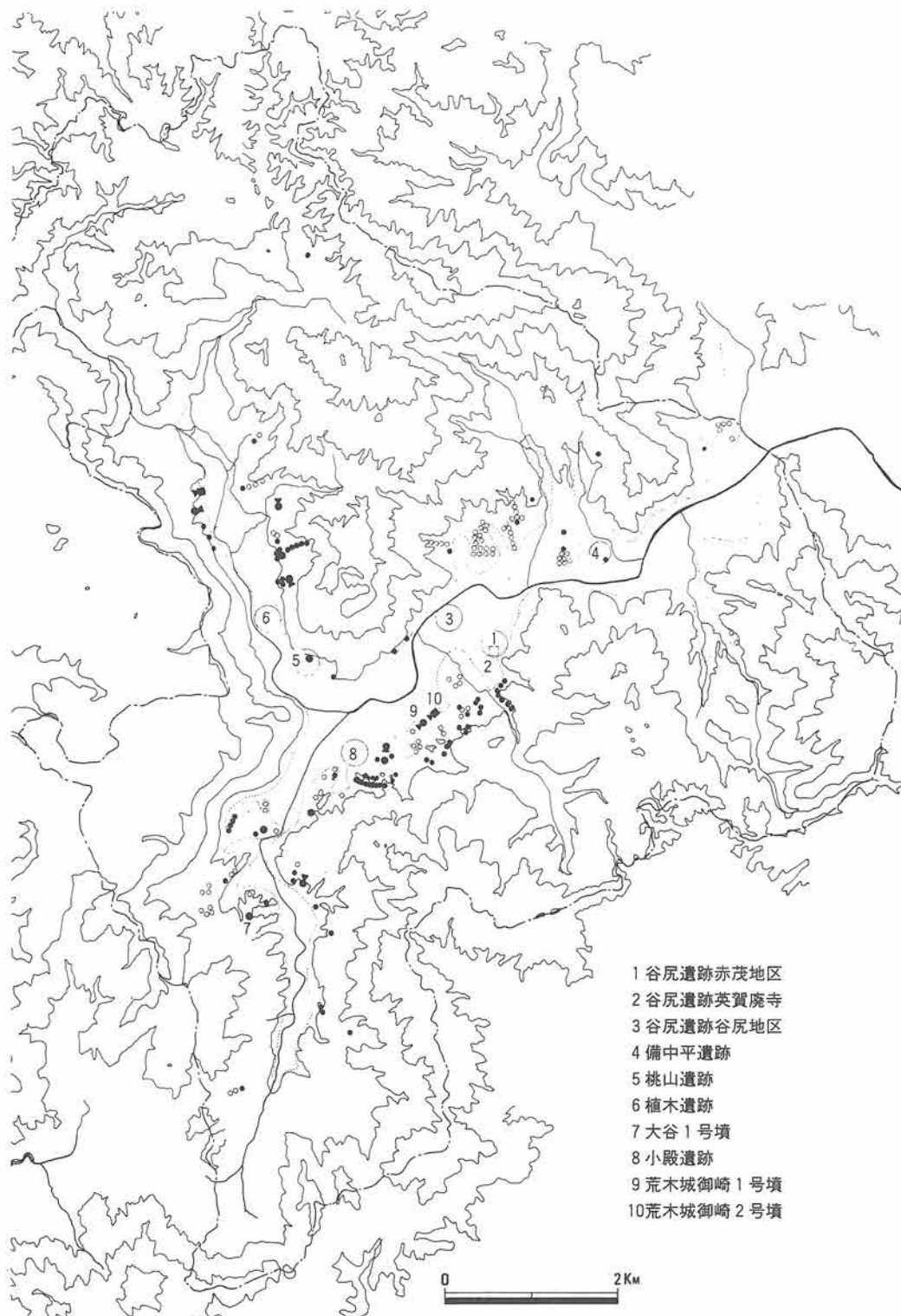


第1図 遺跡位置図

北房町内において現時点で最古の遺物は、中国縦貫自動車道路建設に伴って発掘調査された谷尻遺跡谷尻地区（以後、谷尻地区と略す）（注2）、備中平遺跡（注3）、空古墳盛土内（注4）において検出された山形及び楕円の押型文土器であり、縄文時代早期まで遡ることができる。以後、後期までは遺構遺物は希薄である。これに対し、縄文時代晩期になると遺物の出土量が急増する。谷尻地区では爪形文を主体にする土器をもつ土壌や、堆積土中から多くの遺物を出土している（注5）。縄文時代晩期に続く弥生時代前期の遺跡は現在のところ僅かに谷尻地区において数片の土器が出土しているだけであり、遺跡の広がりには確認されていない。後期になると、谷尻地区において60数基の土壌墓や、竪穴住居址が多数検出されたほか、町内各地の低丘陵上に散布地が広がっている。また、祭祀遺跡として知られる矢の内遺跡では、多数の丹塗りの土器が出土している。

古墳時代に入ると集落の数はさらにふえるとともに、丘陵上には数多くの古墳が存在している。中でも、北房町内で最も広い沖積地を有する上水田の南の丘陵上には町内で最も古い時期と考えられる荒木城御崎1号墳をはじめ、同2号墳、立古墳、下村古墳などの大型前方後円（方）墳が系列的につくられる。以後、上水田及び砦部、中津井の3地域を中心として古墳群

谷尻遺跡（赤茂地区）



第2図 北房町内主要遺跡図（1/75000）

が展開されるとともに、唐尺使用を思わせる切石積石室をもつ大谷1号墳（注6）など注目すべき古墳が点在する。

歴史時代の遺跡としては法起寺式または観世音寺式の伽藍配置と考えられる白鳳時代創建の英賀廃寺（注7）があり、この廃寺の南西約2kmには郡衙に推定される小殿遺跡（注8）が所在し、谷尻地区でも建物が検出されている。

中世に入ると谷尻遺跡のほか、備中平遺跡（注9）で多くの建物群、そして植木遺跡（注10）では掘切りをもつ城館が検出されている。これらの遺跡の背後の山々の頂には山城がこの平野を見下ろす様に築かれている。このように、上水田一帯は、古墳時代～中世にかけて英賀郡の中心として一大発展をとげた地域である。（岩崎）

注1 北房町川崎地蔵ヶ淵洞穴入口で突帯文土器が採集されている。

注2 高畑知功、山磨康平、井上弘他 「谷尻遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』  
11 岡山県教育委員会 1976年

注3 田仲満雄、井上弘 「備中平遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 12 岡山  
県教育委員会 1976年

注4 田仲満雄 「空古墳」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 11 岡山県教育委員会  
1976年

注5 注2に同じ

注6 伊藤晃 「大谷3号墳発掘調査報告」 付載 『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』  
1 北房町教育委員会 1975年

注7 平井勝 「英賀廃寺」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 38 岡山県教育委員会  
1980年

注8 平井勝 「小殿遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 38 岡山県教育委員会  
1980年

注9 注3に同じ

注10 田仲満雄 「植木古墳」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 11 岡山県教育委員  
会 1976年

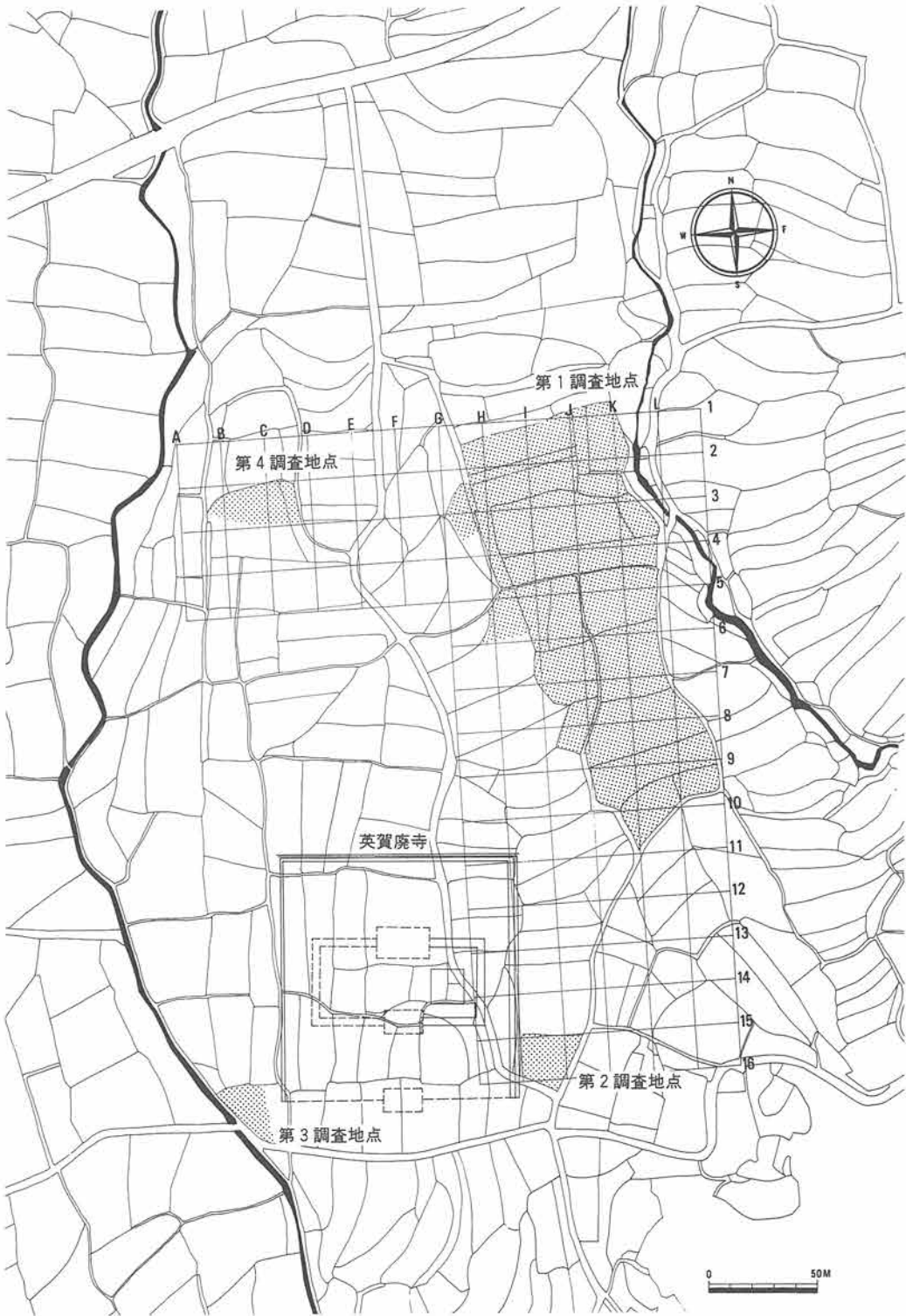
本章は、江見正己 「谷尻遺跡赤茂地区」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 48 岡山  
県教育委員会 1982年の第1章を加筆したものである。







第4図 圃場整備後畦畔図（1/3000）



第5図 調査地点位置図（1/3000）

### 第3章 発掘調査の概要

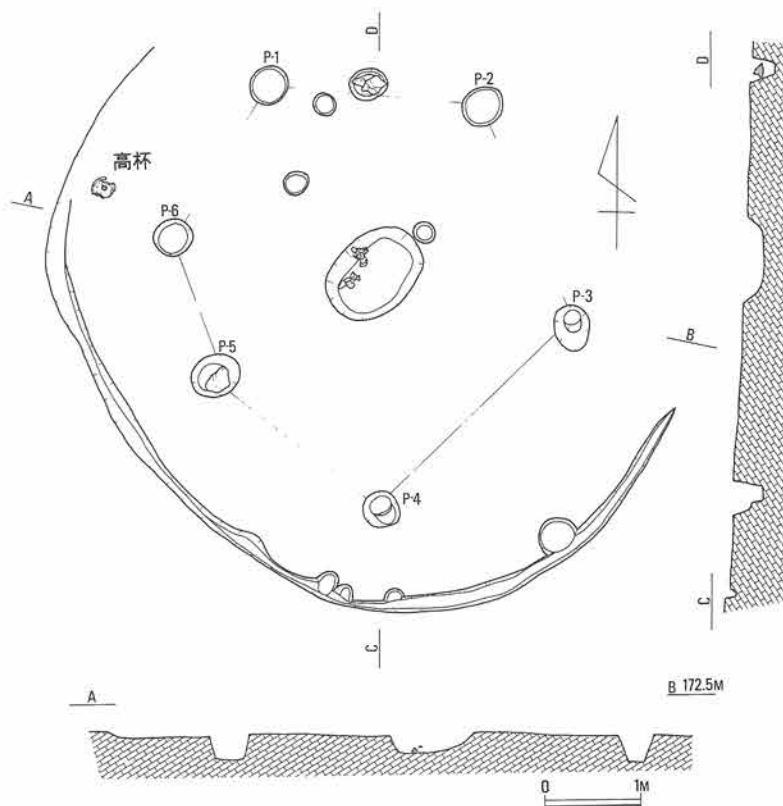
#### 第1節 第1地点の調査

##### 1 弥生時代の遺構・遺物

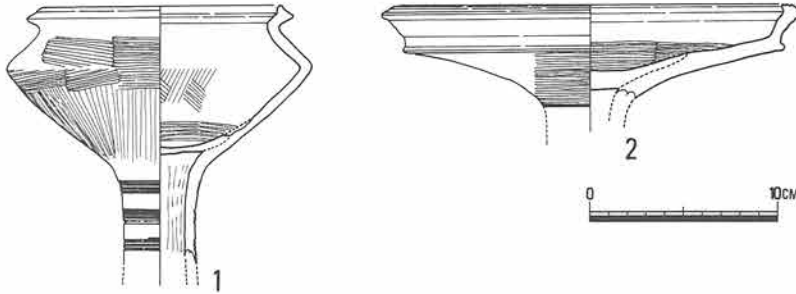
##### (1) 住居址

##### 1号住居址（第6・7図、図版4-1）

1号住居址はH-1区、調査区の北西端近く、建物1の下層から検出されたもので英賀廃寺の位置する尾根より谷1つ隔てた尾根筋の北端にあたるため堆積土は厚い。1号住居址は地山を切り込んで掘り込まれているが、開墾時の削平が著しく残存状況は悪い。平面プランは円形を呈し、直径約6.9mを測る。床面の周溝は北東端を欠くもので全体の約2/3が残っているにすぎない。柱穴は6穴で中央に平面楕円形状の中央穴を持つ。中央穴には木炭の小片と地山土である黄色土の小ブロックを含む暗茶褐色粘質土が入っており、北西寄りの中位には台付壺（第7図1）が入っていた。底部にはうっすらと炭の層が認められた。床面からの遺物はP-6の西60cmのところに高杯（第7図2）が杯の部分を伏せた状態で出土した。



第6図 1号住居址（1/80）



第7図 1号住居址出土遺物（1/4）

出土遺物（第7図）は2点図示した。1は中央穴から出土した台付壺である。脚部の下半を欠く。内外面ともよく磨耗していたが、端正なつくりである。体部はソロバン玉様を呈し、外面上半は横位の、下半は縦位のヘラミガキを施してある。内面は小さい単位の手刻みを格子状に施してあり、底部近くは横位の手刻みに変わる。脚部外面には5本で1単位の手刻み線文が認められる。2は高杯である。口縁端部には三条の凹線文がめぐる。内外面とも横位のヘラミガキが施されている。

時期は出土土器から弥生後期の前半と考えられる。

#### 2・3号住居址（第8図、図版4-1）

2・3号住居址は1号住居址の南側に隣接して検出された。2つの住居址が重なり合った状態であるが、後世の削平によるため残存状況はきわめて悪い。内側を2号住居址、外側を3号住居址とするがどちらの周溝も南西部分が1/3～1/4周しか残存してなく北東半は床面にも削平を受けている。平面プランは、少し角が出現しかけており隅丸方形に近い円形である。大きさはどちらも推定で直径約7mである。柱穴は床面から20余検出されているが、規則的に並ぶものはなくこの住居址に伴う柱穴については不明である。中央穴は2つの住居址のものが重複しており、その前後関係は南側の3号住居址のものを北側の2号住居址の中央穴が切っている。従って3号住居址より2号住居址の方が新しい。中央穴は平面楕円形を呈し、底部は二段に挿鉢状に掘り窪められており一番底には地山土に似た黄茶褐色粘質土が入り、その上には木炭、焼土片を多く含む土が入っていた。2号住居址に伴う中央穴内には小破片に砕けた土器片ばかりで実測可能なものはないが、3号住居址に伴う中央穴中には高杯と土器片が10数片、用途不明の土製品が含まれていた。

中央穴の2m東方の床面上には20×20cm大の平坦な石が1つ検出された。作業台に用いた石である。

出土遺物は覆土がほとんど無いため点数は非常に少ない。1・2は床面から、3・4はP-6か

## 谷尻遺跡（赤茂地区）

ら、5はP-4、6は3号住居址の中央ピット、7はP-10から出土した。また2号住居址の中央ピットからは用途不明の土製品が出土した。これは焼成をうけており直径約2.5cm大の不整形な球状を呈し全面に烈点文が施されている。そして直径1.5mm大の円孔が穿たれている。

時期は明らかに住居址に伴うものから判断して弥生後期中葉と思われる。

### 7号住居址（第9図、図版4-2・5-1）

2・3号住居址の10m南方に位置する竪穴住居址である。東西6.2m、南北5.6mの多少いびつな円形プランを呈する。真中よりやや西寄りに中央ピットが掘り込まれており、柱穴は6本である。中央穴は直径40cmで小さく深さも浅い。中に入っていた土は覆土と同じ暗茶褐色粘質土が入っており焼土や木炭片は認められなかった。この住居址も開墾時の削平を受けており、覆土は5～20cmの厚さしかない。特に南側より北側の方がひどく削平を受けており周溝は南側1/3周程度しか検出できなかった。

出土遺物は小破片が主であり多くはない。第9図1・2・5・6はP-2周辺の床面上より出土した。1は明茶褐色を呈し、内面にはハケメが認められ古い様相をもつ。5はP-2の北側に杯部を伏せた状態で出土した。3・4はP-4内、7・8は覆土中からの出土である。P-6の50cm南方の床面からは石鏃が1点出土した。サスカイト製でよく風化しており灰色を呈す。時期は縄文時代のもので住居址の時期とはやや異なる。石器の剝片は覆土中からも9片出土している。1片は黒曜石で残りはすべてサスカイト製である。

時期は1がやや古い様相を呈し、5が逆に新しい様相を呈するがいずれも後期前半の範ちゅうに入るものと考えられる。

### 8号住居址（第10図、図版5-2）

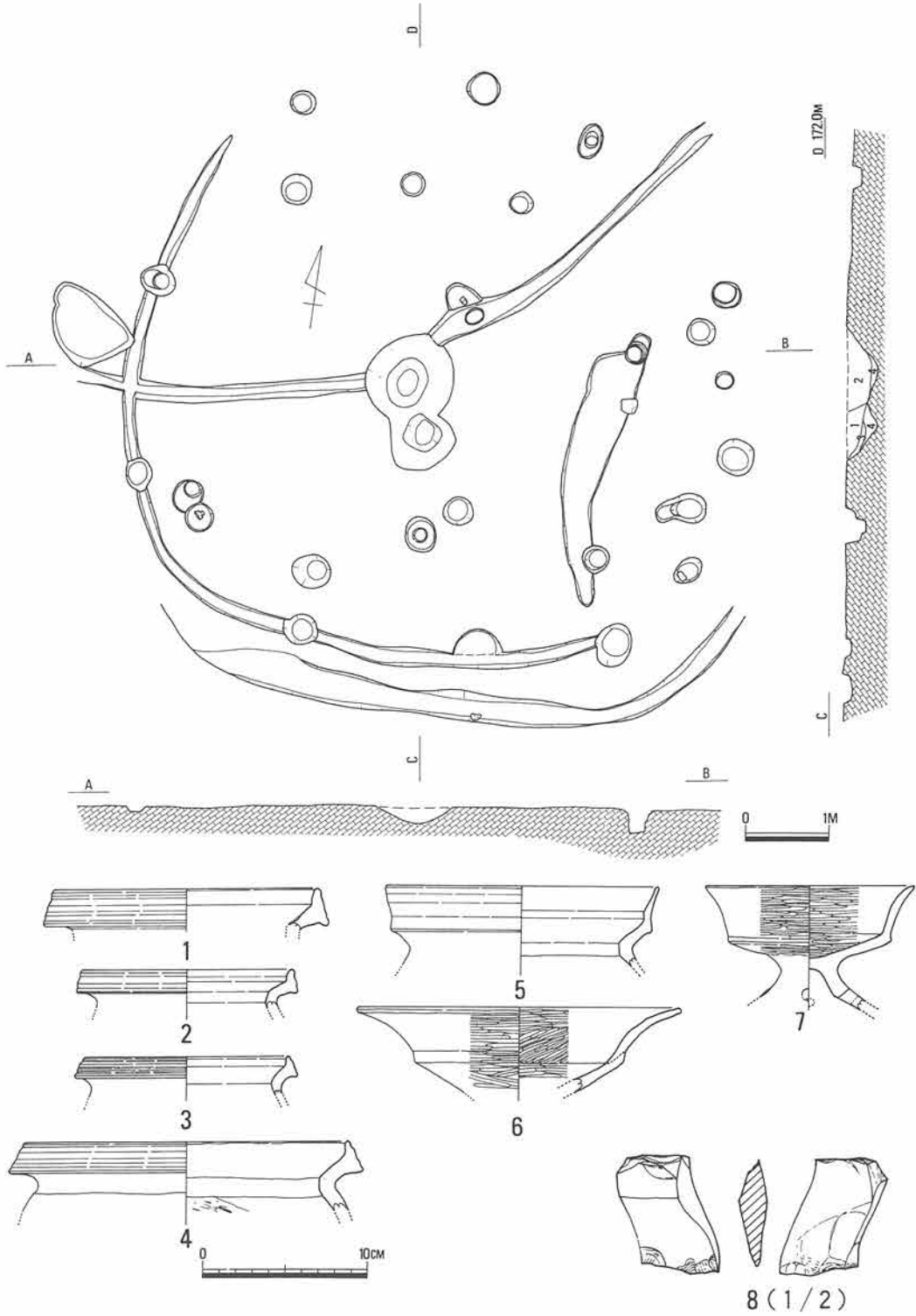
7号住居址の2.5m西方に位置する竪穴住居址である。住居址は調査区の端に位置するため全体の1/2程度を検出したにすぎない。西側は後世の溝によって切られており、4本の柱穴のうち1本は欠けている。平面プランは円形を呈し、直径は推定で約4.6mと思われる。中央穴は楕円形を呈し南側が一段深くなっている。中には5の砥石が1つ入っていた。覆土は20～25cmの厚さがあり、この中では厚い方だが、出土遺物は小破片ばかりで床面からのものは一点もない。

出土遺物は少なく、5を除いてすべて覆土中よりの出土である。いずれも小片である。5は砥石である。網目のスクリーントーンの部分は研磨痕の部分である。よく使用されたらしく中心部分は相当磨滅している。色調は淡緑灰色を呈す。

住居址の時期は出土遺物から後期後半であると考えられる。

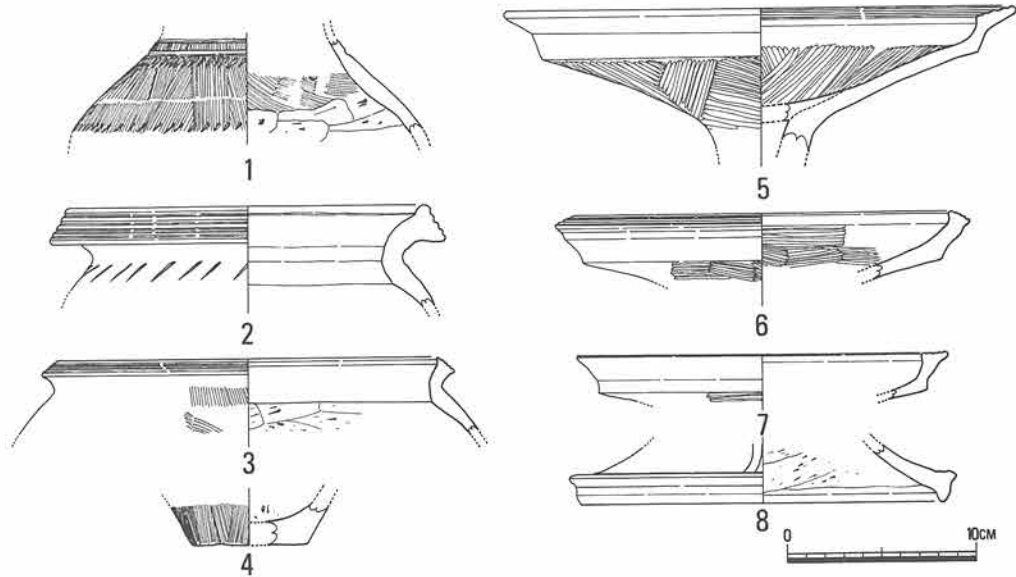
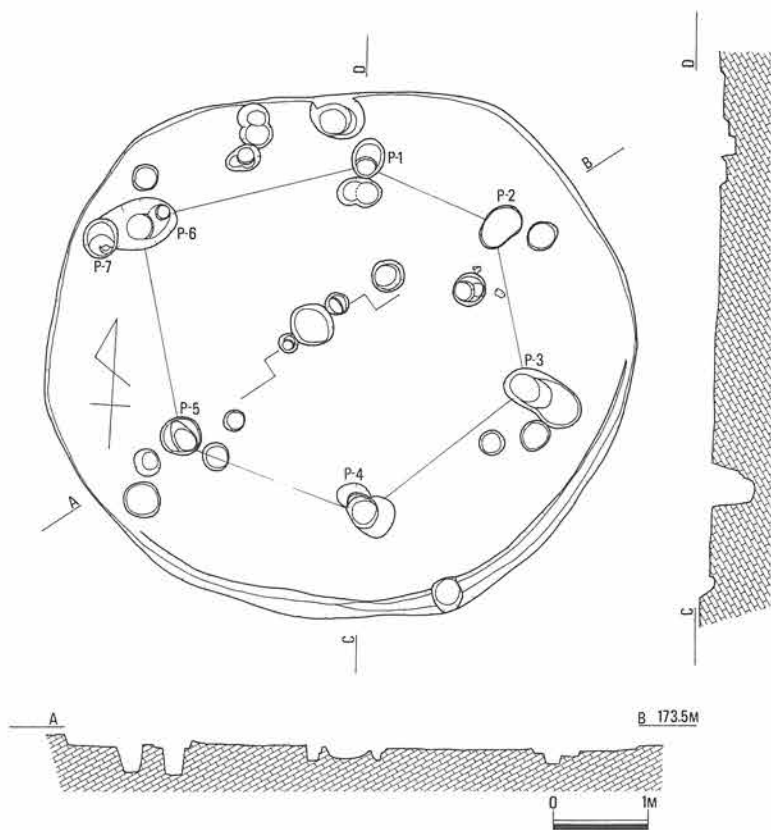
### 9号住居址（第11図、図版6-1）

H-5区、7号住居址の50m南方に位置する竪穴住居址である。床面のプランは円形を呈し、同心円状に2本の周溝が検出された。この住居址も南側は調査区域外になるため、西側は

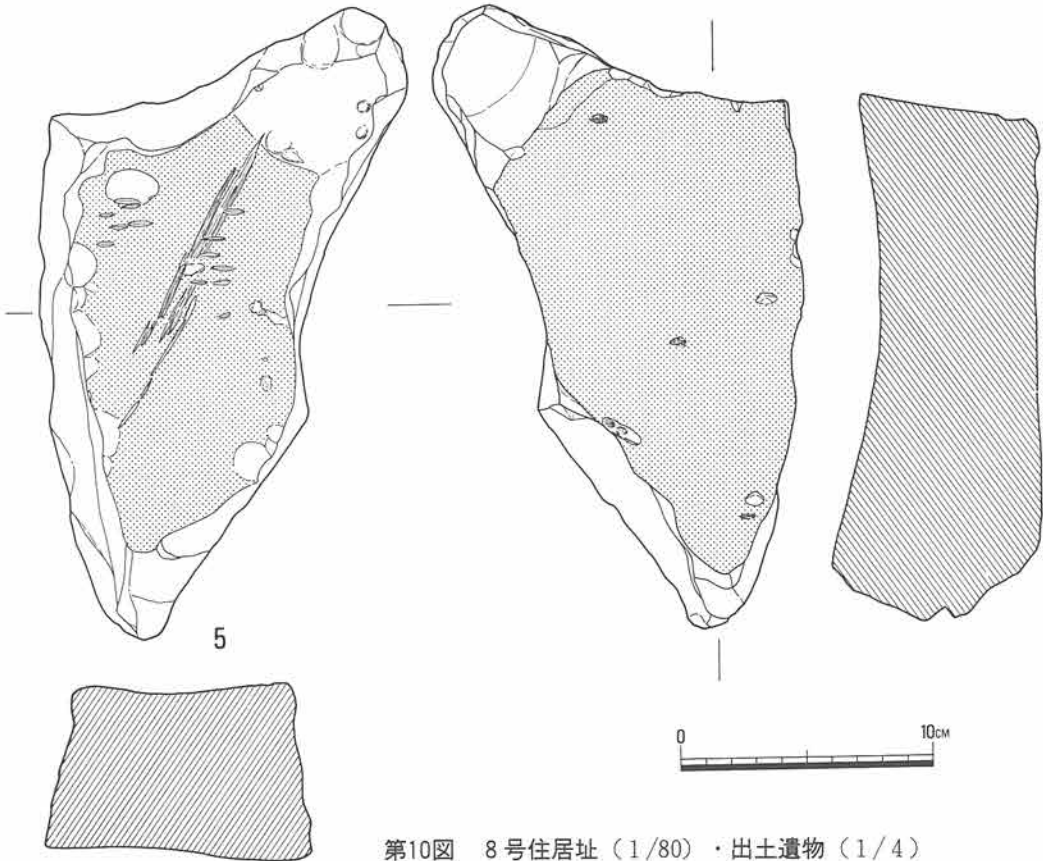
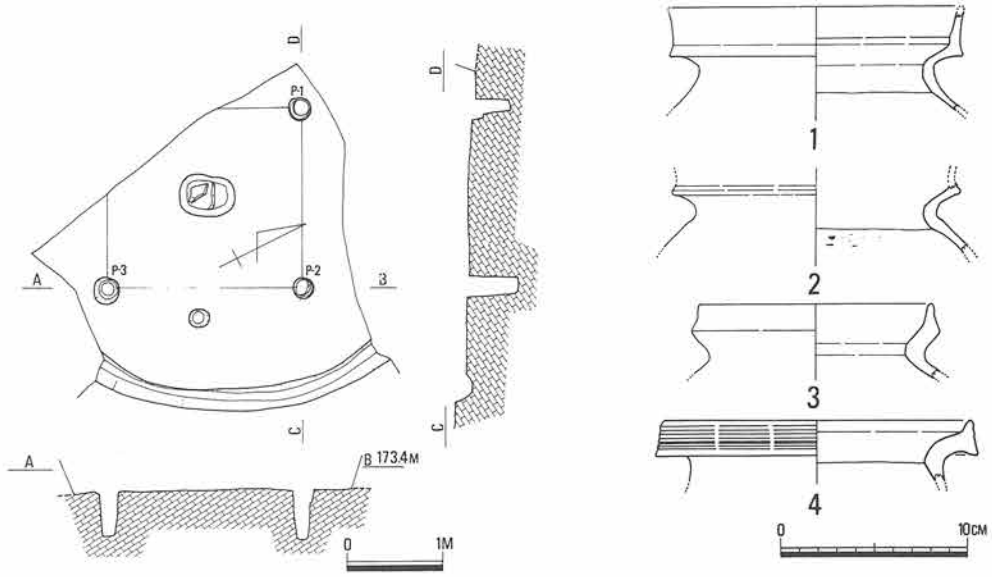


第8図 2・3号住居址（1/80）・出土遺物（1/4・1/2）

谷尻遺跡（赤茂地区）



第9図 7号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）



第10図 8号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）



## 谷尻遺跡（赤茂地区）

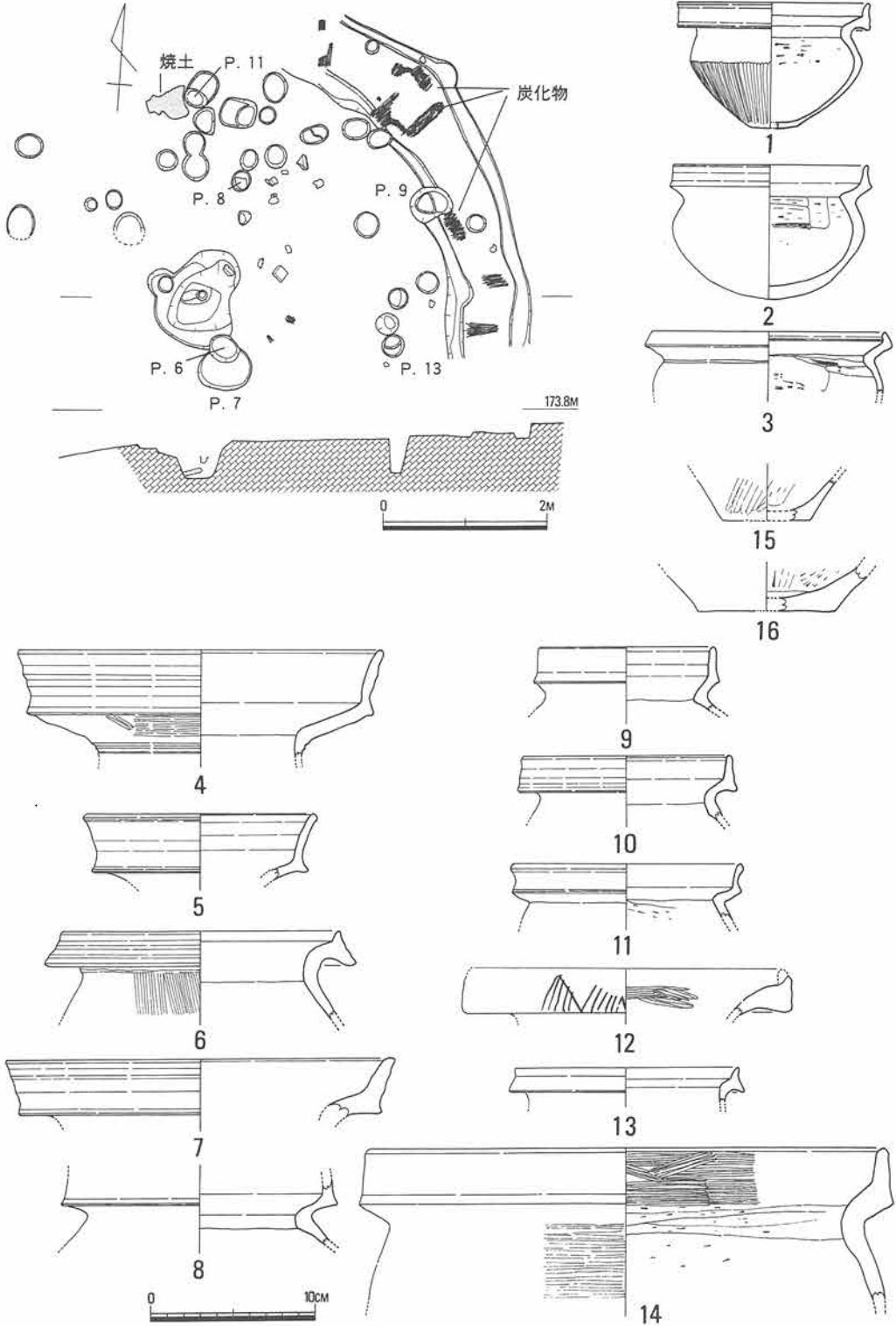
自然地形で落ちていくために検出不可能で、全体の約1/4が明らかにされたにすぎない。周溝は1/4弱しか廻っていないので床面の直径は全く推定であるが、中央穴をほぼ中心と考えた場合内側のものは約6.2m、外側のものは約8mである。中央穴は三段に深くなっており、中には木炭と焼土片が多量に入っていた。中央穴は一度埋めて再び掘り返された形跡はなく2つの住居址で連続して使用されたことを示す。2つの周溝の前後関係は土層から内側のものが古く外側の方が新しい。この住居址は火災に遭っており床面からは炭化材が検出された。炭化材は主に内側の周溝より外方に認められ、中心部には少ないことから火災にあったのは拡張後の住居址であると考えられる。中央穴の1.6m北方には40×30cm大の焼土が床面上に認められた。これは火災の際のものではなく床面自体が赤橙色に堅く焼けていたものである。また中央穴の40cm東方には15cm余の偏平な作業台の石が置かれていた。

出土遺物は多いが大半が覆土中のもので床面に貼り付いていたものは少ない。床面から出土したものは第11・12図3・4・7・27・28・38・42である。中央穴からは2・12～14・16・40である。1・6が内側の周溝内から出土した。5はP-9、8はP-11、11はP-13から出土した以外はすべて覆土中に含まれていたものである。1～3は鉢形土器である。1は外面下半にヘラミガキを施しており、またわずかながら底部を残しており2よりやゝ古い要素をもつ。2は外面に赤色顔料を塗付していた痕跡がある。4～6は壺形土器で、4の口縁内面と外面全体には赤色顔料が塗付されている。6は上下に拡張された口縁を有し、4・5にくらべてやゝ古い要素をもつ。7～32は甕形土器である。27・28は「く」の字に外方に伸びる単純口縁を有する。28は小片のために確認できないが27の外面にはタタキが見られる。胎土は他との相異はあまり認められないが焼成は全体に白っぽい。他の甕形土器の大部分は上方又は上下に拡張された二重口縁を有するものである。14・17～19は内外面とも丹塗りである。33～40は高杯形土器である。33の杯部は外反しながら開くもので33～36よりは古相である。また脚部の39・40もしっかりした端部をもち古相と考えられる。34・36～38は丹塗りである。41は直口壺の口頸であるが、体部は不明である。残存部は内外面とも丹塗りである。42は蓋形土器で外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリによる調整を施している。

時期は出土遺物から多少開きが認められる。前述した古相を呈するものは後期中葉に比定され、残りは後期後半に属するものであると考えられる。

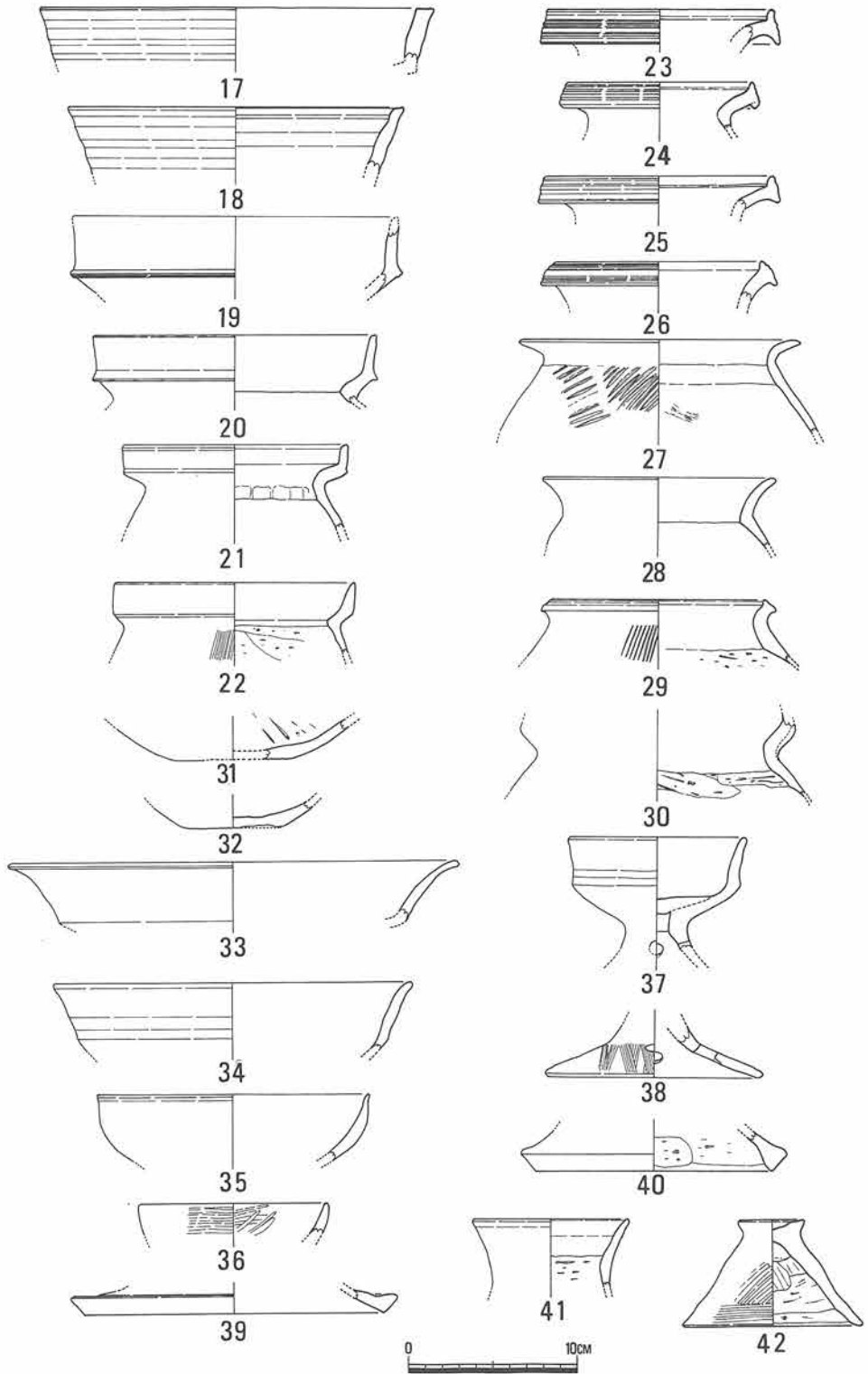
### 10・11・12・13・14号住居址（第13・14図、図版6-2）

5軒の竪穴住居址はいずれも円形プランをもつものでそれぞれ重複した状態で検出された。この付近は後世の削平のために遺構の残りは悪くこれらの住居址も壁体溝の1/3周～1/4周しか残存してなく、各住居址の切り合い関係については把握できなかった。各住居址の直径は、10号住居址5.15m、11号住居址8.35m、12号住居址6.8m、13号住居址10.5m、14号住居址6.1m

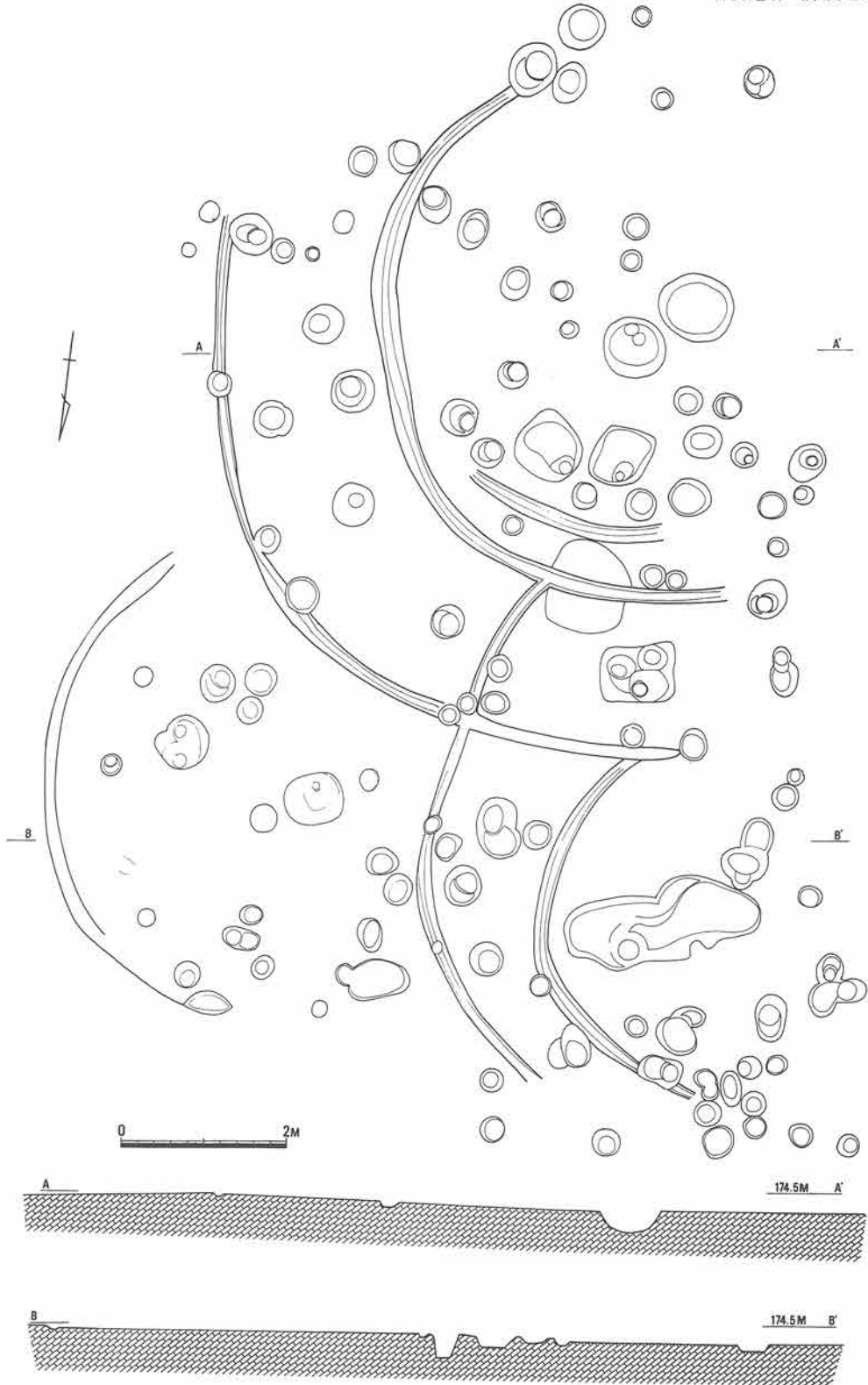


第11図 9号住居址 (1/80) · 出土遺物 1 (1/4)

谷尻遺跡（赤茂地区）



第12図 9号住居址出土遺物2 (1/4)

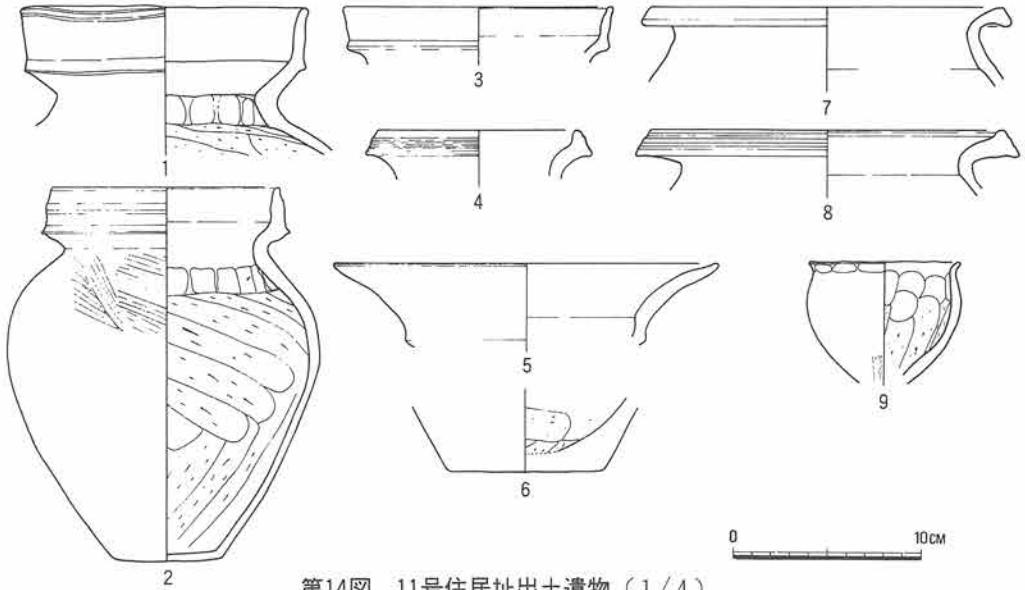


第13図 10・11・12・13・14号住居址（1/80）

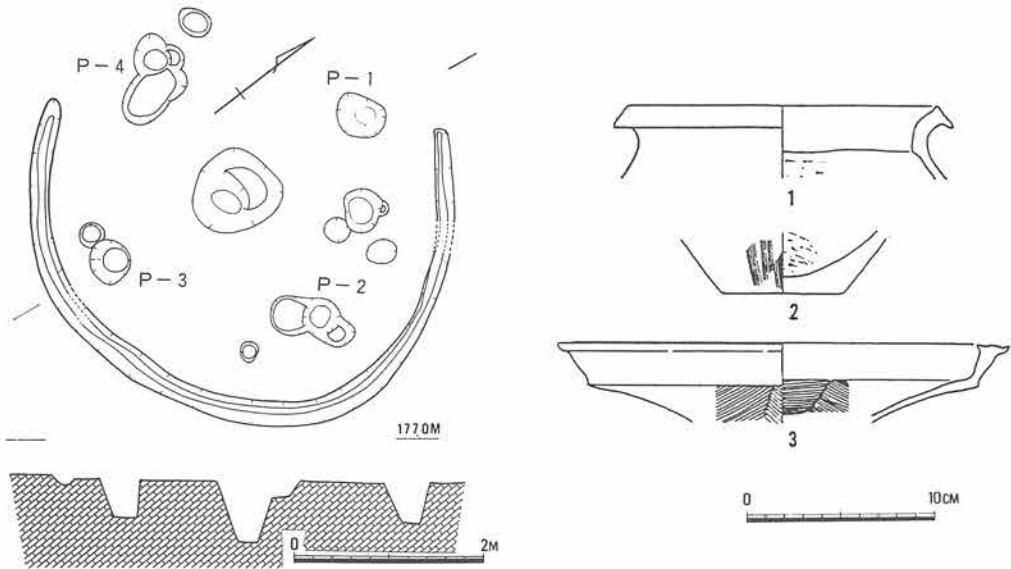
谷尻遺跡（赤茂地区）

であり、13号住居址は他より抜きん出て大きい。

出土遺物についてはいずれの住居址とも覆土のほとんど無い状態であったため、床面出土の遺物は極少ない。しかも小片であるため図化できなかつた。柱穴内の土器も小片ばかりであったが、11号住居址に伴うと考えられる中央穴には何点か図示しうる土器が入っていた。第14図に示すとおりである。1・2は外面に赤色顔料の付着する小型の甕である。これらの時期は、11号住居址内出土の土器から弥生時代後期後半～後期末と考えられる。（森田）



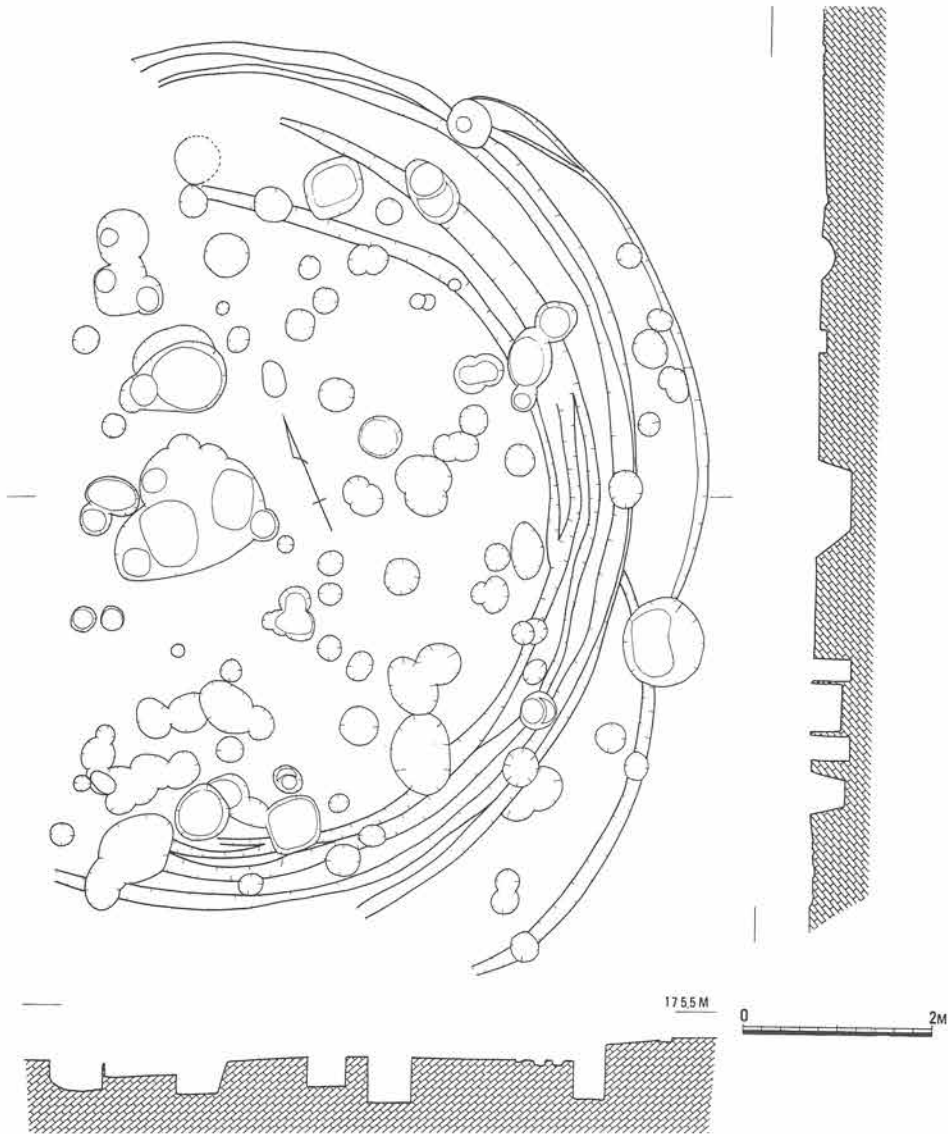
第14図 11号住居址出土遺物（1/4）



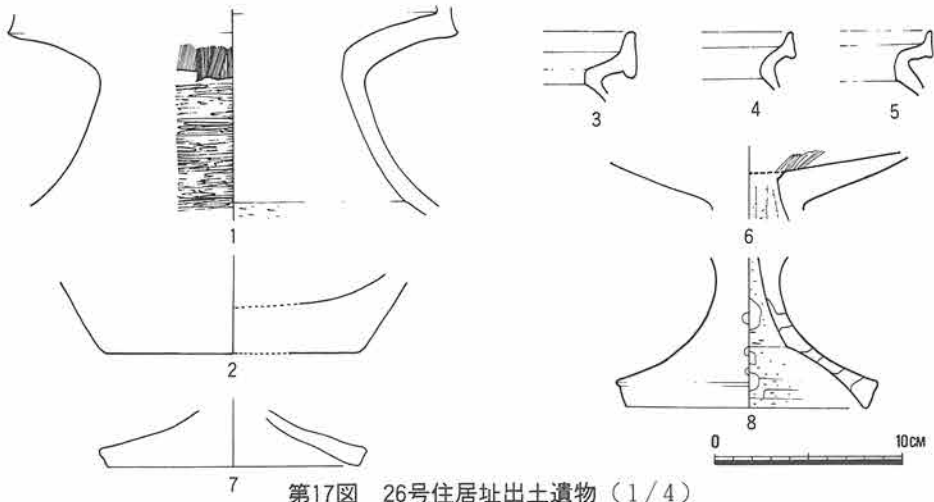
第15図 21号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）

21号住居址（第15図、図版7-2）

調査区南端、20号住居址の南東15mに位置する竪穴住居址で基盤層が北西に向ってゆるやかに傾斜しているため、壁体溝は一周していない。削平により現存する壁体溝の深さは僅かに10cm程度である。平面形は直径4.5mの円形を呈す。主柱穴は4本で掘り形は径約40cmの円形を呈し、深さ40cmを測る。柱穴のうち3本からは直径約15cmを測る柱痕跡が確認された。中央穴は検出面で85×100cmの楕円形を呈し、北側部分を一段浅く掘り下げてフラットな面をつくっている。フラットな面より下層には炭が多く観察された。また中央穴中央には長さ20cm、幅10cm、高さ12cmの焼けた角礫が入っていた。床面付近には炭が散っていた。さらに、床面には焼



第16図 26号住居址（1/80）



第17図 26号住居址出土遺物（1/4）

土が3ヶ所見られ、当住居址は火災を受けたものと考えられる。また、P-3の西で22×18cm、厚さ5cmの丸みをもった台石が床面に密着して検出された。

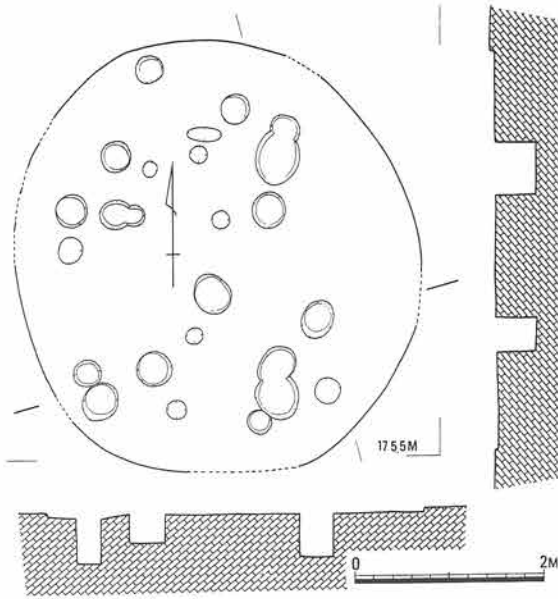
遺物は覆土内から数点出土したのみで柱穴内からは小破片が出土しただけである。甕形土器1は、口縁部が斜め外方に開き、端部は斜め下方に引き出されている。器表面は磨滅が激しく調整は明らかでないが、胴部内面はヘラケズリしている。2は平底を呈す甕形土器である。外面はハケメ、内面はヘラケズリしている。1・2いずれも淡茶褐色を呈し、2mm前後の砂粒を含む。高杯形土器3は、口縁部が斜め外方に立ち上がり、端部は肥厚し、外方に摘み出されている。杯部は逆「ハ」の字状にすぼまっている。口縁部内外面は横ナデ、杯部内外面は蜘蛛の巣状のヘラミガキが施されている。

#### 26号住居址（第16・17図、図版8-1）

24・25号住居址と並んで検出した遺構で、住居址の約1/2は調査区域外となる。調査区内において同一地点で建て換えがされていたのは、この24・25・26号住居址のみであった。

南北に延びる低位台地の西斜面に近く、基盤層が西に向って傾斜しているためテラス状に削り出している。平面形態は約9.2mの円形を呈するものと思われる。そして、重複して9本の壁体溝が検出された。基盤層が傾斜しているためか、壁体溝はいずれも一周していない。しかも壁体溝の切り合いは不明瞭で、住居址の新旧は不明である。また壁体溝と支柱穴の関係も同様に不明確である。

出土遺物は、柱穴内及び床面にほとんどなく覆土中から主に出土した。1は長頸壺の頸部で、外面に細かいヘラミガキが施されている。6は円板充填により成形された高杯形土器である。杯部上面は放射状にヘラミガキされている。8は脚端部を肥厚させた高杯形土器脚部で、外面は磨滅して不明だが内面は、ヘラケズリしている。



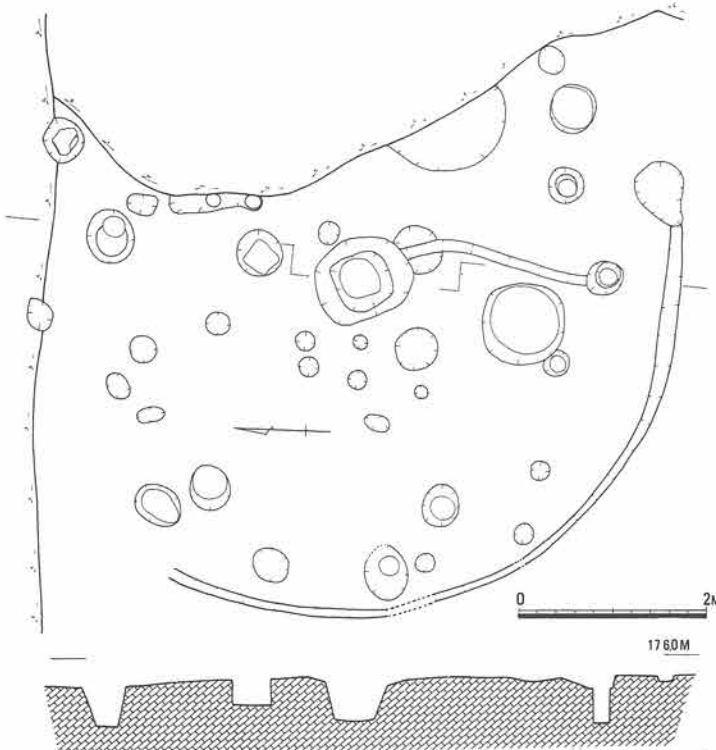
第18図 28号住居址（1/80）

28号住居址（第18図）

27号住居址と並んで調査区中央部で検出した。残存状態が悪く検出面での平面形態は4.8×4.25mの楕円形を呈し、壁体高はわずか5cmしか残存していなかった。床面は東へゆるやかに傾斜していた。壁体溝は検出できなかったが主柱穴は4本が確認されている。いずれも径35～45cmを測り、平面形は円形もしくは楕円形を呈し、深さ約50cmを測る。柱穴の心々距離は北より右回りに、1.80m・1.70m・1.85m・1.70mを測り、面

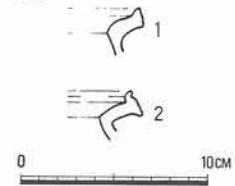
積16.90㎡の広さである。出土遺物は覆土及び柱穴内で出土しているが、小破片のため図化できなかった。

20号住居址（第19図、図版8-2）



第19図 20号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）

22号住居址の北約10m、低位台地のほぼ中央部に位置する竪穴住居址である。後世の削平及び近代の瓦粘土採掘場に切られ、柱穴と壁体溝の一部しか検出できなかった。床面は基盤層同様に北にゆるやかに傾斜している。





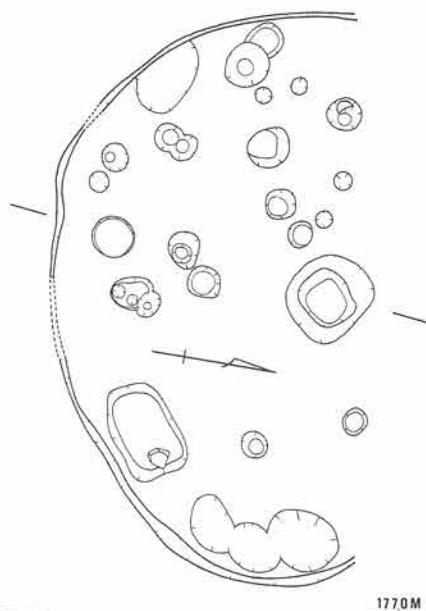
谷尻遺跡（赤茂地区）

検出しえた柱穴及び壁体溝から推定復元してみると、6本柱で44.40㎡のほぼ円形を呈する住居址となる。主柱穴は4本検出された。柱間距離は2.50m・2.85m・3.00mを測りばらつきがある。いずれも径40～50cmの円形で、深さ約50cmを測る。中央穴は、少し胴張りぎみの100cm×80cmの長方形で、底部は方形を呈し、下層に多量の炭と焼土が出土した。南側柱穴から中央穴に向って浅い溝が検出された。出土遺物はいずれも小片で図化できたのは中央穴から出土した1・2のみである。甕形土器1は口縁部が斜め外方に開き、端部は上方に肥厚する。胴内面はヘラケズリされている。2も甕形土器の口縁部で、口縁端部は上下に引き出されている。

22号住居址（第20・21図）

21号住居址の西15mに位置する竪穴住居址である。削平により半分しか検出できなかった。

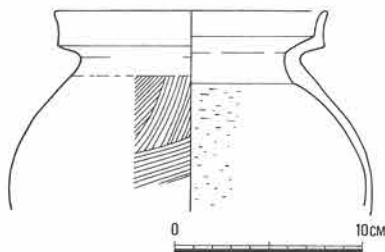
壁体高は16cm程残すのみである。径約6mの楕円形を呈する竪穴住居址と推定される。床面は平坦で壁体溝が途切れ途切れに浅く一周している。主柱穴は3本検出できた。柱穴はそれぞれ径30～40cmの楕円形あるいは隅丸方形を呈し、深さ30cmを測る。心々距離はそれぞれ2.20m前後を測る。中央穴は一辺90cmの隅丸方形の平面形を呈する。中層に一部炭及び焼土が検出されたが量はあまり多くはない。出土遺物は覆土内にはほとんどなく甕形土器が中央穴上層より出土したほかは各柱穴とも壺・甕の小破片が少量出土したのみであった。甕形土器は口縁部がやや外反ぎみに立ち上がり、外面はハケメ、内面は細かいヘラケズリを施している。



第20図 22号住居址（1/80）

27号住居址（第22図）

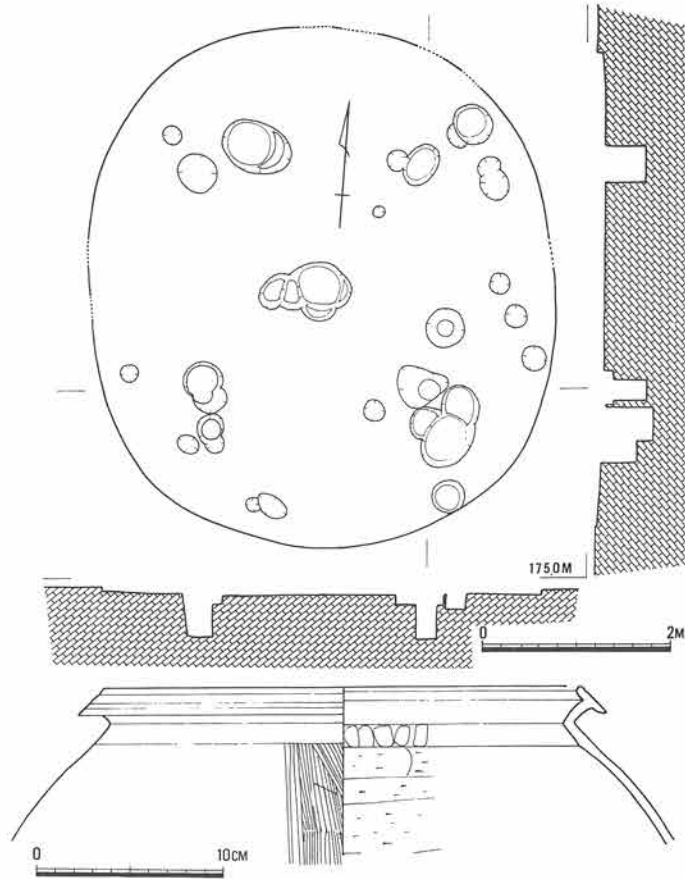
28号住居址の南7mにおいて検出された竪穴住居址である。平面形は長径5.5m、短径5.0mの楕円形を呈する。床面は平坦で壁体高はわずかに2～4cmを残すのみである。壁体溝は検出できなかった。28号住居址と同様の形態を示すが一回り大きく、床面積は28号住居址が16.90㎡に対し27号住居址は21.90㎡を測る。柱穴は4本が確認されている。いずれも径50cm前



第21図 22号住居址出土遺物（1/4）

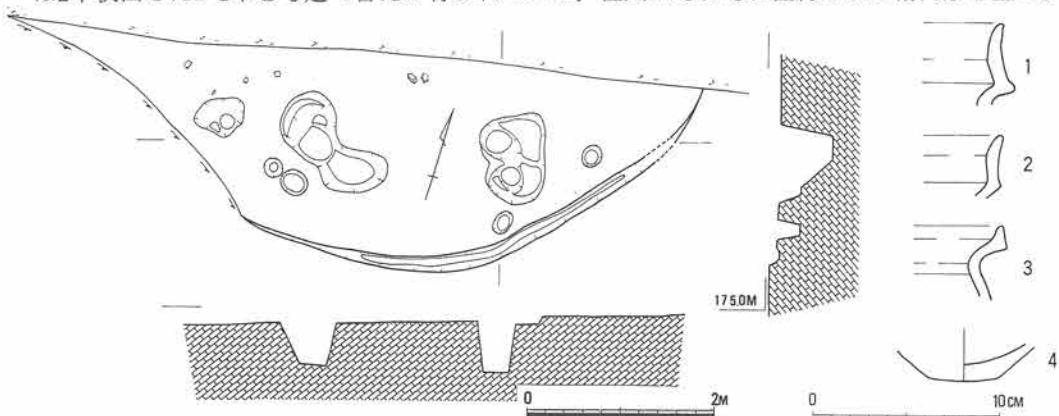
後の規模で円形もしくは楕円形を呈し、深さ50cmを測る。柱穴の心々距離は、北から右回りに2.35m・2.35m・2.40m・2.20mを測る。中央穴は径60cmの円形を呈し途中に段を持つ。深さ55cmを測るが炭も焼土も検出されなかった。

出土遺物は、床面より甕形土器が出土した。口縁部は強く屈曲して外方に開き、折り返して上下方向に拡張する。胴部外面は縦方向のハケメ、頸部内面には指頭圧痕が残り、胴部内面はヘラケズリしている。他は小片で割愛した。



第22図 27号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）

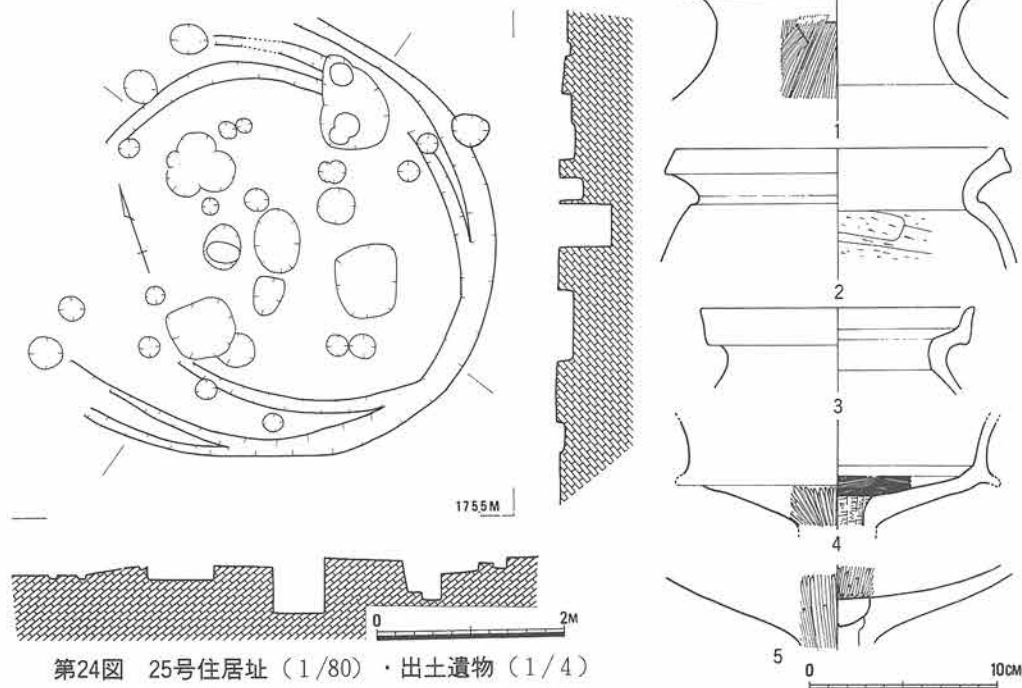
17号住居址の西5mに位置し、西側の一部を16号住居址に切られ、北側を後世の地下げで切り取られ1/4程、検出できた。壁体高6cmを残すのみで、壁に沿って幅18cm、床面からの深さ3~4cmの壁体溝が部分的に巡っている。4本柱で平面形は円形を呈すると思われる。支柱穴は2本検出したが2本とも建て替えが行われていた。柱穴はそれぞれ径約50cmの楕円形を呈し、



第23図 15号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）

床面からの深さは、50～55cmを測る。床面は一部に貼り床が認められ、握り拳大の円礫が床面に散在していた。

25号住居址（第24図）

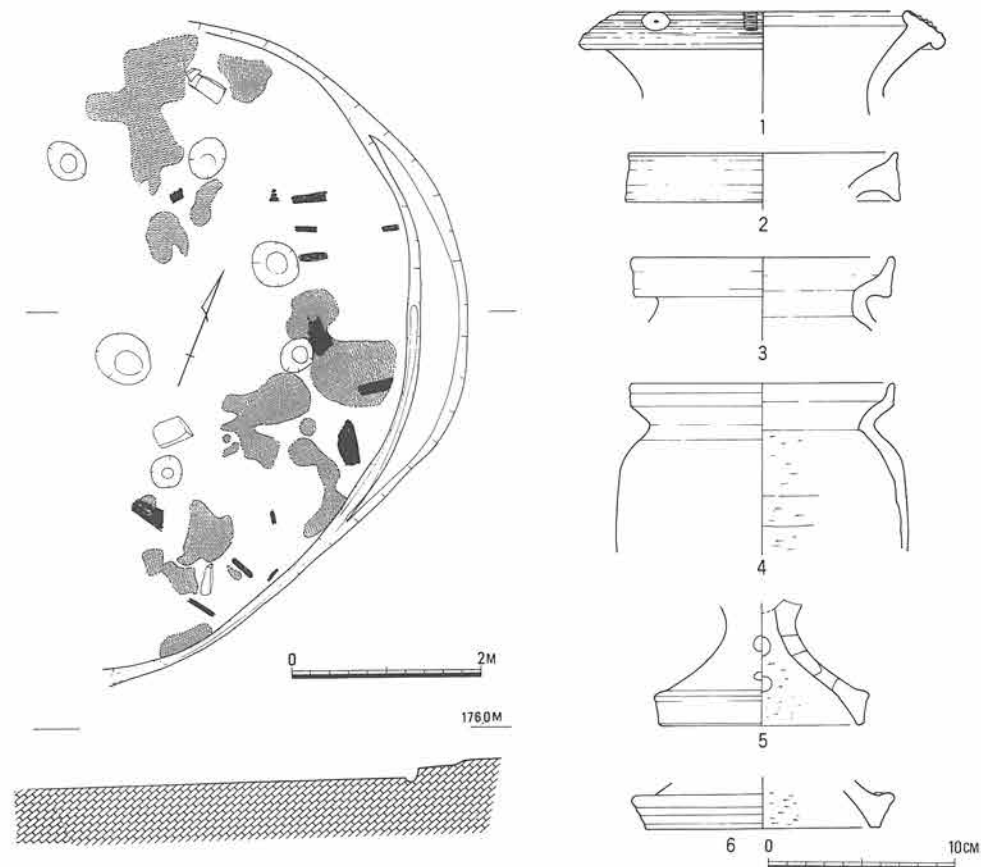


第24図 25号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）

24号住居址の北隣に北側を26号住居址に一部切られて検出した。低位丘陵の西端部に位置し基盤層は北西に傾斜している。この基盤層をテラス状に削り出して建てられていた。壁体溝は3本検出したが、いずれも深さ2～4cmと浅く一周しておらず、新旧の切り合い関係は不明である。平面形はほぼ円形を呈すると推定され、床面は北西に向ってゆるやかに傾斜している。支柱穴は4本確認されており、それぞれ径24～28cmの円形を呈し床面からの深さ40～45cmを測る。心々距離は北より右回りに2.30m・2.35m・2.30m・2.15mを測る。中央穴は2ヶ所確認され、いずれの穴からも炭、焼土が検出された。床面には浅い窪み状の土壇が2ヶ所検出された。それぞれ62×70cm・65×78cmの隅丸方形の平面形を呈し、深さ15cmを測る。

出土遺物は、覆土及び床面から少量出土した。壺形土器1はゆるやかに外反する口縁端部を真横に肥厚させ、上縁部を貼り付けている。外表面はハケメ、胴部内面はヘラケズリしている。甕形土器2は口縁部が斜め外方に立ち上がり、端部は少し肥厚し上下に引き出されている。頸部付け根に段を持つ。外表面は磨滅が激しく調整は明らかでないが、胴内部はヘラケズリしている。4は高杯杯部である。口縁部付け根に凸帯を斜め下方へ貼り付けている。皿部内部は蜘蛛の巣状のヘラミガキ、外面は縦方向のヘラミガキがなされ、丹塗りが全面に施されている。5も高杯杯部で内外面はヘラミガキされ、全面に丹塗りが施されている。

19号住居址（第25図、図版7-1）



第25図 19号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）

16号住居址の南8mにおいて検出した竪穴住居址で、西半分が調査区外に延びている。ゆるやかに傾斜する基盤層をテラス状に削り出し造られている。北東側に最大幅45cmの三ヶ月状の段がつく。床面は基盤層の傾斜に沿って南西方向に若干傾斜しており、壁面に沿って幅12~15cm床面からの深さ3~4cmの壁体溝が一部確認された。火災に遭遇して放棄されたもので、炭化材が多量に残存している。炭化材は住居址中央に向かって放射状に存在しており、板材の炭化物ならびに茅炭化物も一部に見られた。なお、火災により形成されたと見られる焼土が散在していた。主柱穴は3本確認され柱間距離は北より、2.45m・2.50mを測る。床面は薄い貼り床が部分的に2回見られる。作業台と推定される平坦な石が2個と火災により割れた砥石が床面に密着して出土した。中央穴は中央より南東にずれて検出した。中層より下は炭・灰と焼土の薄い互層になっており底部に小児の頭大の円礫2個が配されていた。

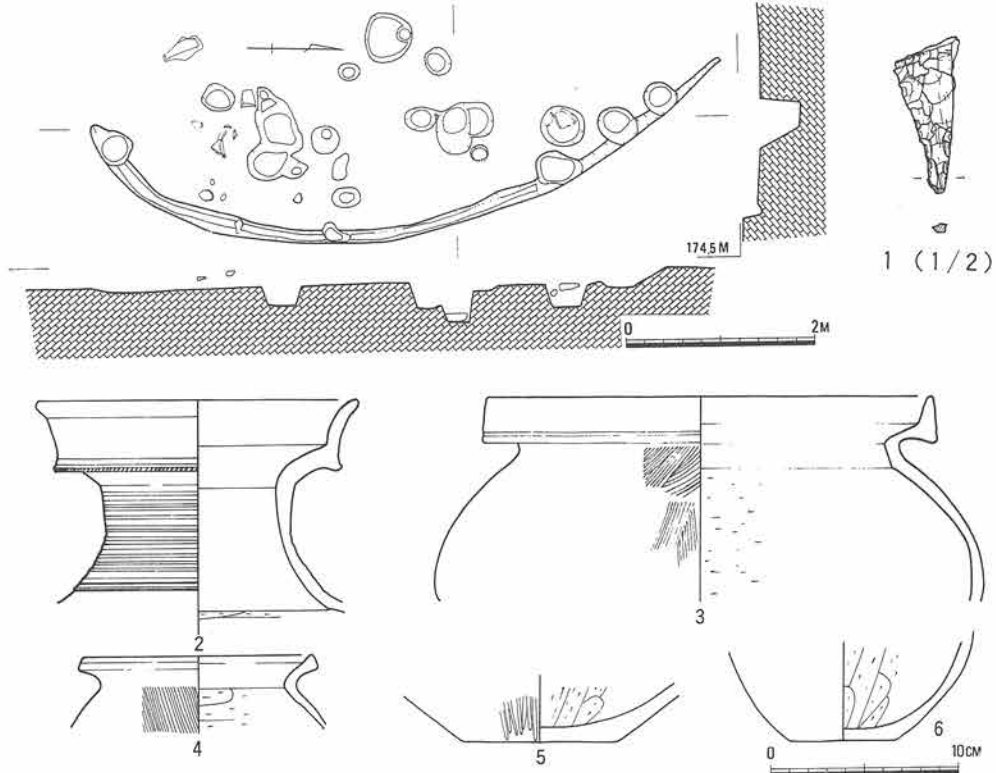
出土遺物は床面及び覆土下層より出土したものであり、床面出土のものは火災による二次的焼成を受けている。1は壺形土器口縁部で、口縁部はゆるやかに外方に立ち上がり、端部は下

方に引き出し折り返して上部を形成する。端部外面には棒状と円形の浮文を交互に貼り付けている。4は床面に密着して出土した。二次的焼成でかなりひずんでいる。胴部は直立ぎみで内面のヘラケズリも荒い。

18号住居址（第26図）

19号住居址の北10mにおいて検出された竪穴住居址で東側は16号住居址を切り込んでいる。調査区外に延びており検出できたのは約1/4弱である。ゆるやかに傾斜する基盤層に切り込んだ壁体と壁面に沿って幅15～18cm、床よりの深さ6～8cmの壁体溝によって確認したもので、推定径約9mの円形を呈すると思われる。主柱穴は2本検出した。柱穴の平面形はそれぞれ40×55cm、42×58cmの隅丸方形を呈し、深さは42cm、23cmを測る。どちらの柱穴も抜き取り痕が認められる。

出土遺物は床面に比較的まとまって出土した。1はサヌカイト製石錐で、使用痕がわずかに認められる。2は上東式類似の長頸壺で、内傾した頸部に沈線文をめぐらせている。口縁部は大きく外方に開き、上方に立ち上がる。口縁屈曲部外面にはキザミメを入れている。頸部内面は横ナデ調整を施している。3の甕形土器は、「く」の字形に屈曲する口縁部の端部を直立ぎみに上方に摘み出している。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケメを部分的に施す。



第26図 18号住居址（1/80）・出土遺物（1/2・1/4）

16号住居址（第27図、図版9-1）

15号住居址を一部切り込んで、検出した竪穴住居址である。ゆるやかに西に傾斜する基盤層を切り込んで、東側に壁体を作り出し壁に沿って深さ3cmの壁体溝が検出された。推定径約10cmのやゝひずんだ円形を呈すると推定される。床面は西に傾斜している。主柱穴は12本と思われる。柱間距離は1.60m～2.25mとばらつきがあるが、ほぼ1.90m前後を測るものが多い。中央穴は、ほぼ中央部に検出したがいびつな平面形を呈しており炭灰が少量検出された。

出土遺物は床面、覆土とも少なく柱穴内遺物も小破片で図化できず割愛した。（岩崎）



第27図 16号住居址（1/80）

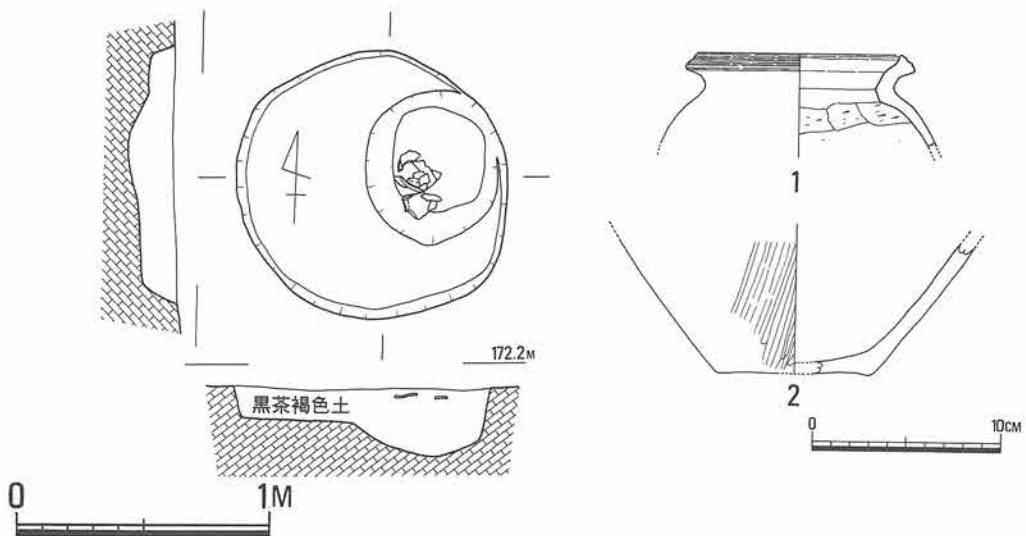
(2) 土壌

土壌 1（第28図、図版10-1）

1号住居址の4m北西方向に土壌2と並んで検出された。上面は直径1.08mを測る円形を呈しほぼ垂直に掘り込まれて底部は平坦面をなすが東側約1/4は更に一段深くなる。50×60cmの楕円形状を呈す。底部はゆるやかな挿鉢状を呈し一番深い部分で深さ27cmを測る。土壌内には木炭片、黄色土（地山土）ブロックを含む黒茶褐色土が入っていた。

出土遺物は甕の口縁部分と甕又は壺の底部の2点である。どちらも上面に近い部分から出土しておりほかは削平されて既に無い可能性がある。1の甕形土器の口縁端部には凹線が廻り上下にわずかに拡張されている。外面の調整は磨耗のため不明だが内面はヘラケズリを施している。

時期は点数が少ないので決定し難いが後期初頭と考える。

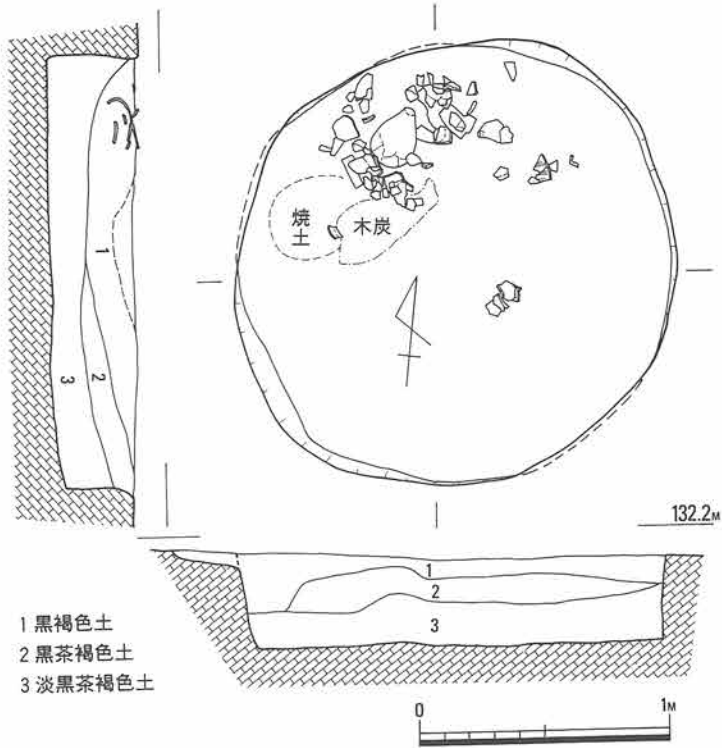


第28図 土壌 1（1/30）・出土遺物（1/4）

土壌 2（第29～31図、図版10-1・2）

土壌 1の南側に隣接して検出された。上面は直径1.72mの円形状を呈し、断面は少し袋状に下部が膨らんだ状態に掘り込まれている。そのため底部径は上面とほぼ同じで底部は平坦である。土壌 1同様に上面は既にいくらか削平されており深さは現状で35cmを測る。中に入っていた土は3層に分かれ、遺物は主に一番上層の黒褐色土中より出土した。黒褐色土中には土器と一緒に焼土片や木炭片とともにワラのような植物の繊維の焼けた痕跡も混入していた。これらの出土遺物は土壌の北西部分に集中してしかも上から押しつぶされたような状況で出土した。いずれも小破片に破碎されていたが遺物の点数は豊富であった。

出土遺物は8・9以外は小片に砕かれており図示した15点以外にも何点か出土しているが、いずれも相当磨耗していて同一個体になるものとそうでないものとの区別が難しく正確な個体数はわからない。1～4は壺形土器である。4点とも表面の磨耗が著しく1の外面の調整は下方1/3までヘラミガキを施していることしかわからない。1は全体に小型で、口径の大きさに対

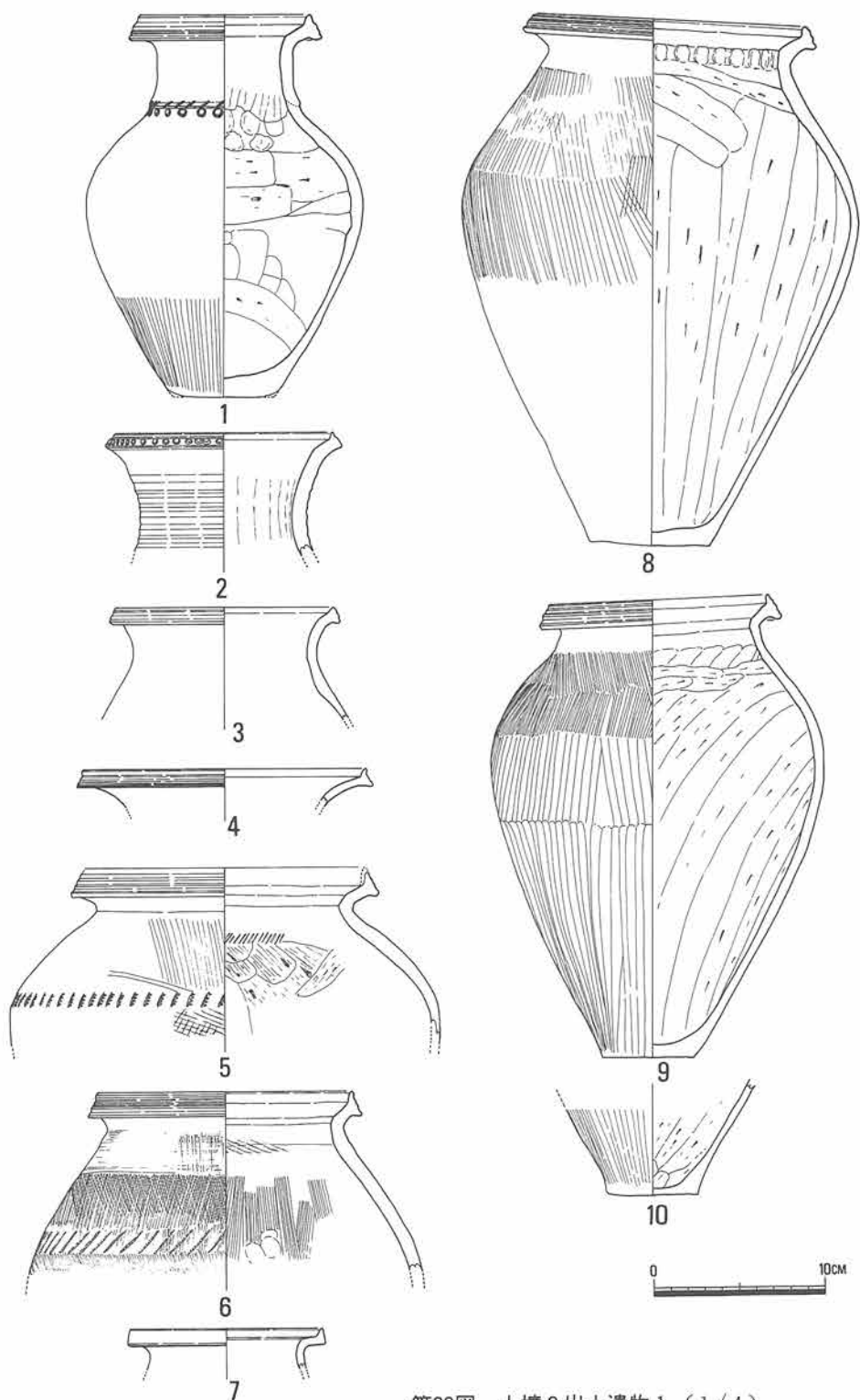


- 1 黒褐色土
- 2 黒茶褐色土
- 3 淡黒茶褐色土

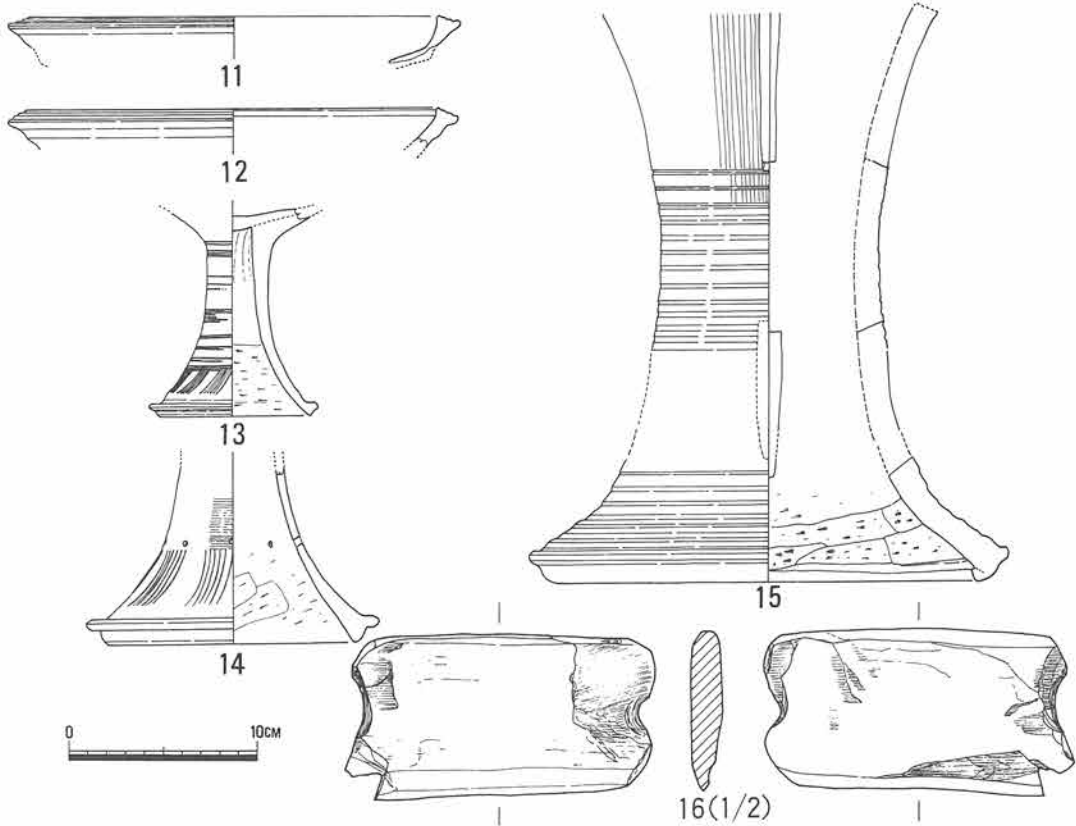
第29図 土壌2 (1/30)

し底部径はやゝ大きく安定の良さを感じさせる。上下に拡張された口縁端部には凹線、頸部には竹管文と斜行沈線文が廻る。内面はヘラケズリであるが頸部近くには指頭圧痕が見られる。2の口縁部には竹管文がめぐらされ頸部には多条の凹線文が認められる。5～10は甕形土器である。いずれも体部の最大口径は真中より上部に位置する形状である。5はやゝ大きめの甕形土器で肩部の最大口径部分には楕状工具を押し当てた連続文様が施されている。外面はハケメであるが内面はヘラケズリである。6は肩のあまり張らない形状をし、内外面とも細かいハケメによる調整が施されており他よりやゝ古い様相を呈する。8・9は2点ともほぼ完形に近い状態に復元できたものである。2点ともよく似た形状であるが8の方が口径、器高ともにやゝ大きい。外面の調整は上半部はハケメ、下半部はヘラミガキである。内面は頸部までヘラケズリである。11～14は高杯形土器である。杯部2点と脚部2点が出土しており、11は13と、12は14とそれぞれが同一個体になる可能性もあるが、現状では13を除いてやっと口径を割り出せる程度の小片でありしかも相当磨耗しているため同一個体になるかどうかの判別は難しい。13の外面には磨耗のため消えかかっているが5条で1単位の沈線文がめぐらされ、その下方は縦位に6条で1単位の沈線文が施されている。14も同様の文様が施されているが14には斜行沈線文の上方に直径1cm大の小さい円孔が穿たれている。15は器台形土器である。小片に破砕されて





第30図 土壙2出土遺物1 (1/4)



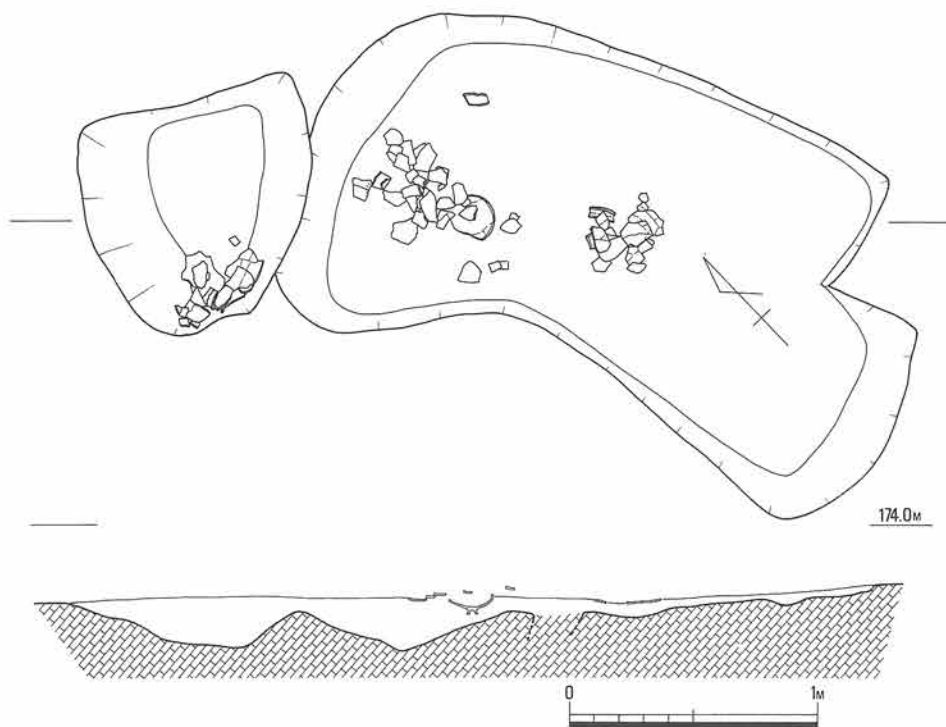
第31図 土壙2出土遺物2（1/4・1/2）

いるため図上での復元による。長方形の透かしが上下二段に入っておりその間及び下段の透かしの下方には凹線が見られる。脚部裾は端部を内へ折り曲げてから荒くへらで削って仕上げていることから内面下方は上下をひっくり返して仕上げを行ったと考えられる。16は磨製石庖丁である。一部分を欠くが完形に近い。片岩系の石を用いており緑白色を呈する。

時期は甕形土器の6がやゝ古相を呈する以外はほぼ同一時期と考えられるもので、後期初頭の時期である。

土壙43（第32・33図、図版11-1）

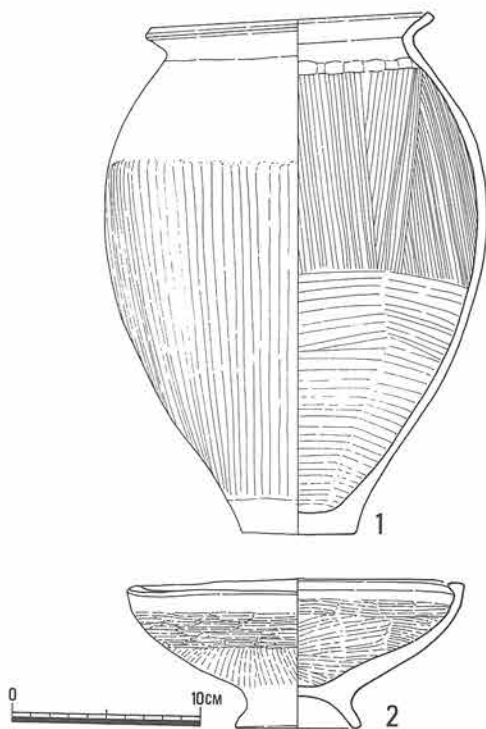
I-3区、住居址7の16m東方に位置する。2つ並んで検出されたもので左側を土壙43A、右側を土壙43Bと呼ぶ。土壙43Aの平面は不整形な四角形を呈しておりゆるやかな挿鉢状に掘り込まれている。上面は既に削平されており遺物は上面から出土した。中には暗茶褐色粘質土が入っており1の甕形土器が上から押しつぶしたような状態で出土した。土壙43Bは南北2.6m、東西1.15~1.35mを測り細長い不整形な形状をしている。土壙は地山である黄色土を掘り込んでおり土壙43Aに近い側は挿鉢状に深くなり南側へ向って徐々に浅くなっている。また浅い部分の底面は平坦ではなく凹凸が見られる。上面は土壙43A同様既に削平されていて出



第32図 土壙43（1/30）

土遺物は表土層のすぐ下から出土した。中に入っていた土層も土壙43Aと同じく暗茶褐色粘質土である。

出土遺物は1が土壙43A、2が土壙43Bから出土した。1は甕形土器で小片に破碎されていたが、ほぼ完全に復元することができたものである。あまり肩が張らず、胴部の最大径は真中よりわずか上方に位置し、口縁は「く」の字状に折れ端部はわずかに肥厚して平坦面をなす。外面は下から2/3までヘラミガキ、内面は下方1/2までは横位のヘラミガキ、上方1/2にはハケメが施されている。2は台付鉢形土器である。体部は半球状を呈し、端部は内側に肥厚して幅8mmの平坦面をもつ。内外面ともヘラミガキによる調整が施されている。土壙43Bからは2以外にも甕形土器が1点出土している。体部しか



第33図 土壙43出土遺物（1/4）

残存していないため図示することができなかったが1よりは大型である。体部は内外面ともにヘラミガキによる調整が施されている。

時期は出土した土器から中期中葉と考えられる。

土壌59（第34図、図版11-2）

7号住居址の南方5mに位置する土壌である。上面で82×67cmの楕円形状を呈し、底部はゆるやかな楕鉢状に掘り込まれている。上面は削平されており土器は表土層の直下から出土した。土壌内には暗茶褐色土が入っていた。

出土遺物は台付壺が1点出土したのみである。最大径は下から2/3のところを位置し「ハ」の字に外方にふんばる形状の台がつく。口径はやゝ広く口縁は上下に拡張して端部には凹線文がめぐる。表面の磨耗が著しく外面の調整は不明だが内面には頸部のすぐ下までヘラケズリが施されている。

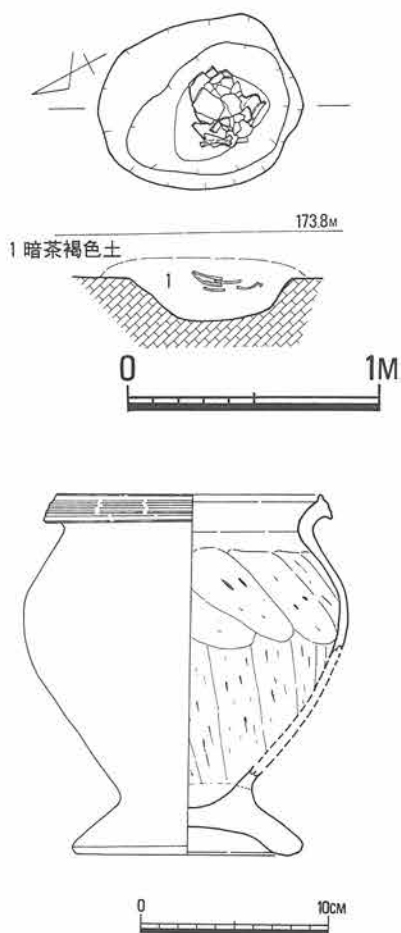
時期については、台部はやゝ古相を呈するが口縁の形状、体部内面の調整技法から後期初頭に属するものと思われる。

土壌60（第35図）

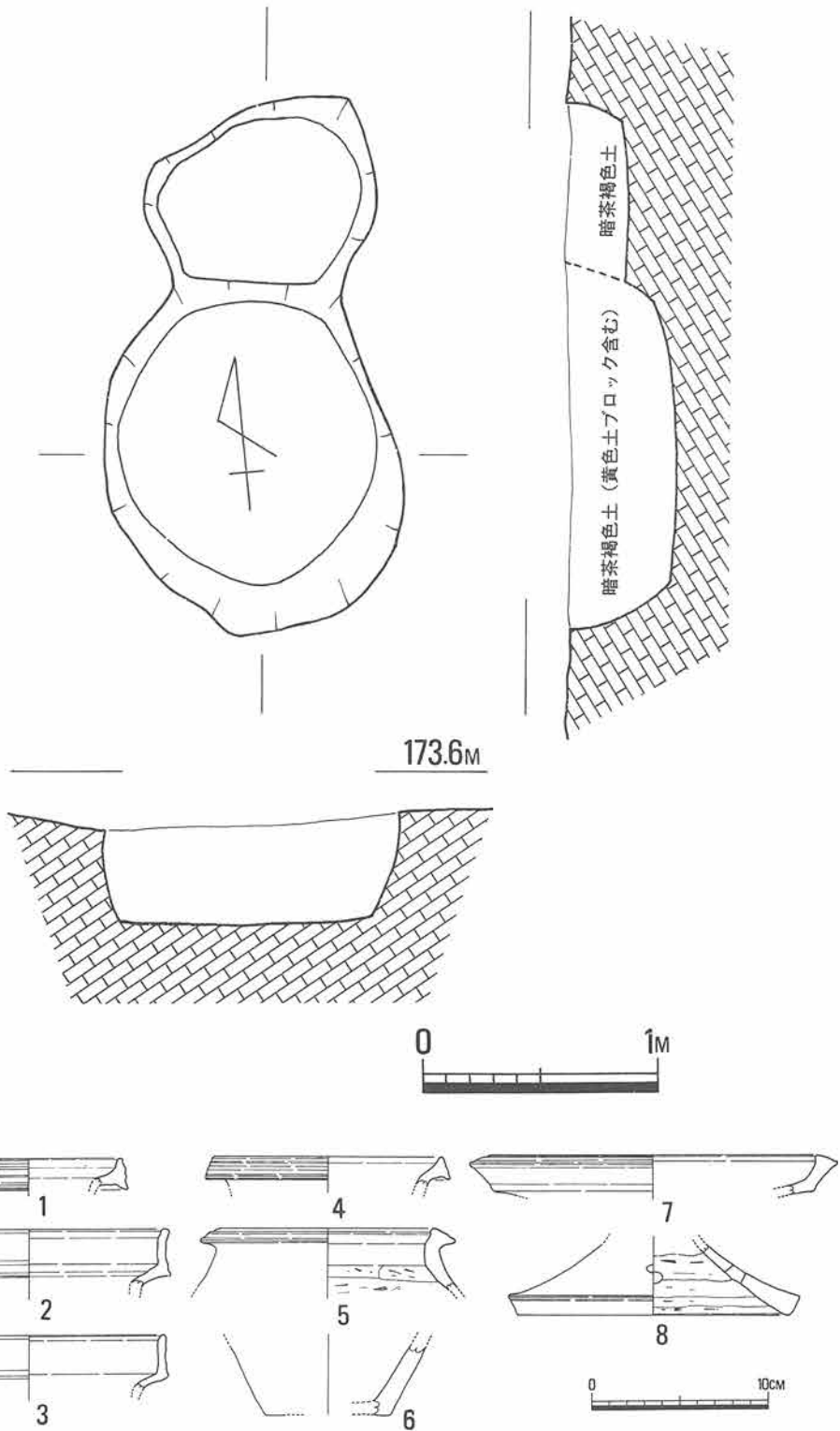
H-5区、住居址9の北方6mに位置する土壌である。平面は瓢形を呈し、2つの土壌が重複している。南側の土壌が北側の土壌を切っており、南側の土壌の方が新しく深い。底部はどちらの土壌も上面より一回り狭い平坦面をもつが壁は樽形に中央が膨らんで掘られている。中には黄色土ブロックを含む暗茶褐色土が入っていた。

出土遺物はいずれも小片であるため器種は明確には決め難いが、1は壺形土器、2～6は甕形土器、7・8は高杯形土器である。2・3は二重口縁で垂直に真直ぐ立ち上がる口縁を有し、端部は丸く収める。5は口縁をあまり誇張しないタイプで当遺跡での出土例は多くない。7・8は高杯形土器であるが同一個体ではない。8の外面には赤色顔料が施されている。

時期については2・3の甕形土器は新相を呈し、7・8の高杯形土器はやゝ古相を呈すが、おしなべて後期中葉と考える。 （森田）



第34図 土壌59（1/30）・出土遺物（1/4）

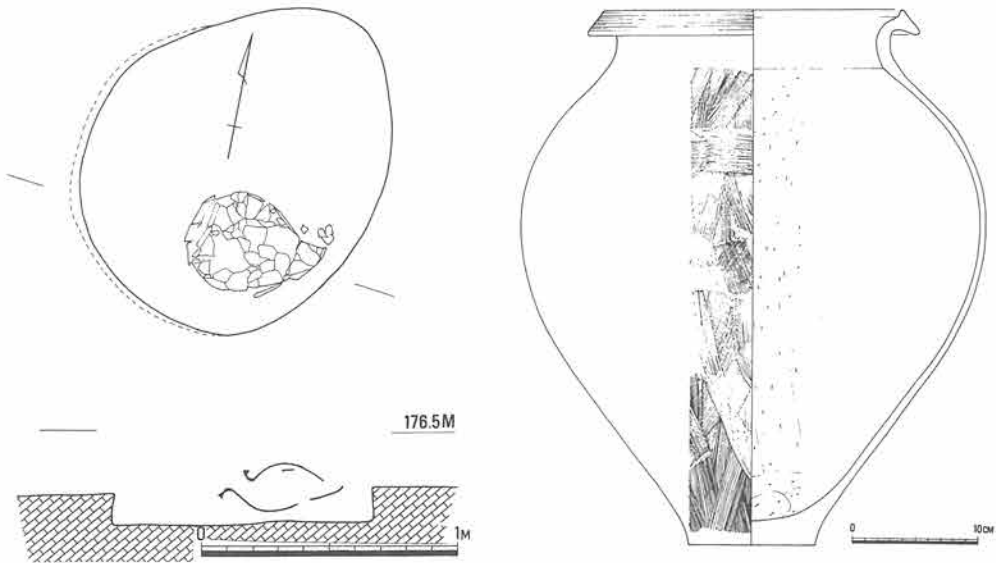


第35図 土壙60 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

土壌867（第36図、図版12-2）

22号住居址の東7mの位置に検出した土壌である。平面形は116×138cmの若干いびつな卵形を呈し、深さ12cmを測る。たび重なる削平で残存状況が悪いが、断面形は西側でわずかに「ハ」の字形に底部が広がり台形を呈し、底面は平坦である。

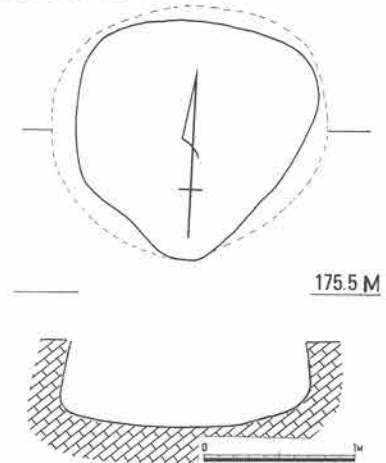
竈穴状の穴倉と推察され、底より少し浮いた位置に横倒しの状態で、甕形土器が出土した。甕内部からは焼土塊が検出された。甕形土器は円盤状の粘土を底として成形されており、厚みのある底部となっている。胴部は中央部や上に最大径を持ち、内面をヘラケズリ、外面は荒いハケメが施されている。短く外反する口縁部は斜め下方にひき出され、上縁部は貼り付けにより成形される。



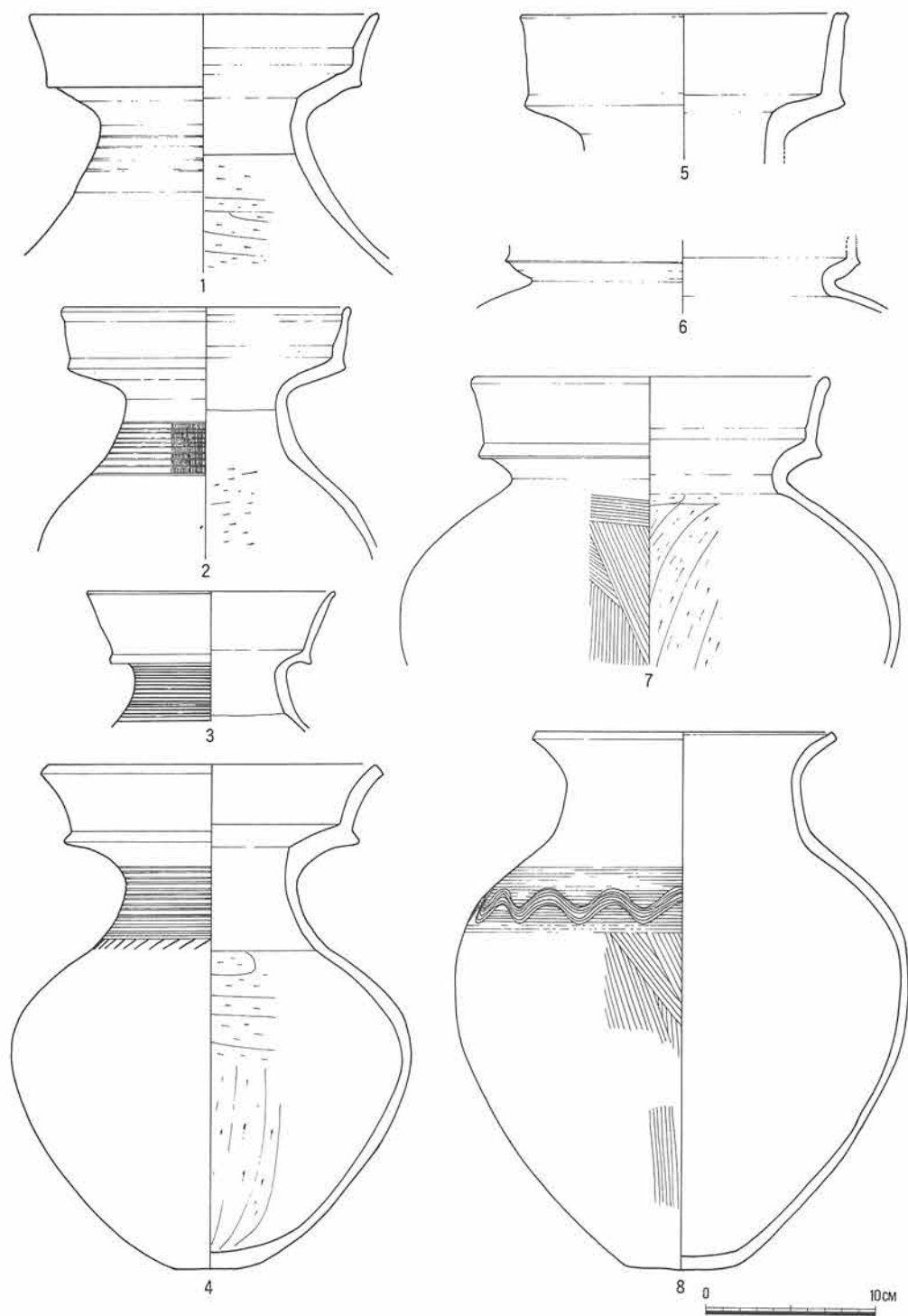
第36図 土壌867（1/30）・出土遺物（1/6）

土壌1088（第37・38図、図版13-1）

27号住居址の南12mの位置に検出した。耕作土直下で遺物の出土により想定されたが、確実に検出なしえなかったため包含層を約6cm除去し基盤層上面にて確認した。検出平面形は南側が一部崩れて若干いびつな隅丸方形、底面はほぼ円形を呈し、径1.50mを測る。断面形は深さ62cmのフラスコ状を呈す。上・中層より遺物が多量出土した。出土遺物は、完形品はなく4・8どちらも復元品である。図示しえなかった遺物は、平底を呈する壺・甕形土器の底部5個体分及び胴部の小破片のみである。



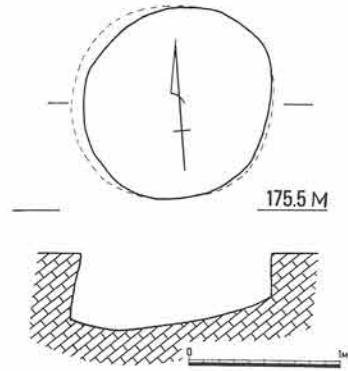
第37図 土壌1088（1/50）



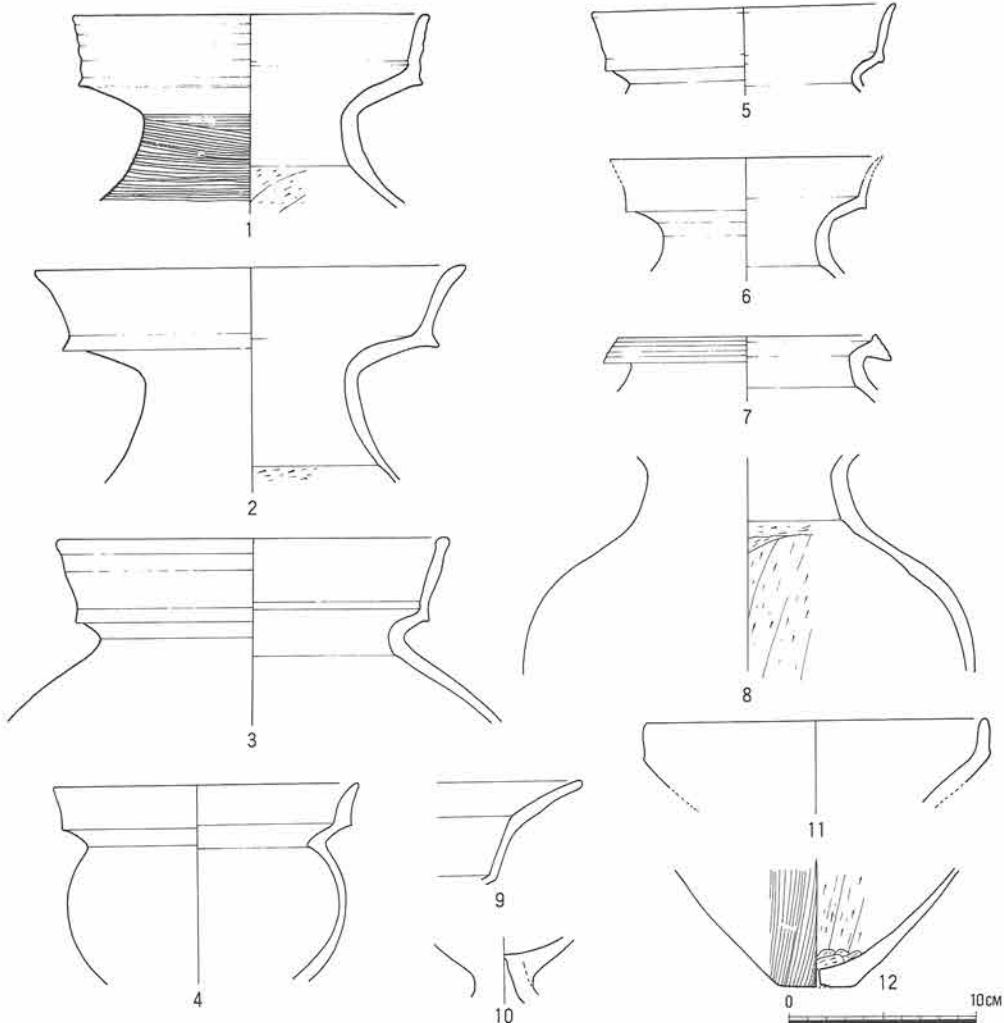
第38図 土壙1088出土遺物（1/4）

土壙1086（第39・40図）

土壙1088と近接して基盤層上面で確認した袋状土壙である。検出面での規模は直径60cmの円形を呈し深さ40cmを測る。底面はやゝ南西方向に傾斜している。出土遺物は図示したもの他には壺・甕形土器の胴部の小破片である。土壙1088同様、完形品はなくいずれも復元品である。ほとんどの遺物が器表面の磨滅が著しく、中には二次的焼成を受けた土器片も混在していた。3は土壙1088出土遺物と接合関係にあり、2つの土壙は同時期に放棄され、土器捨て場として使用したと考えられる。



第39図 土壙1086（1/50）

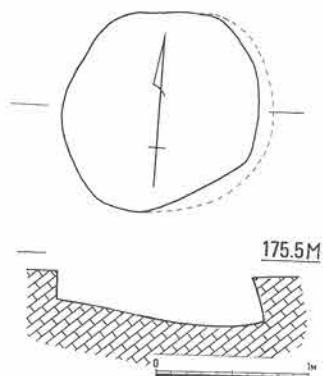


第40図 土壙1086出土遺物（1/4）

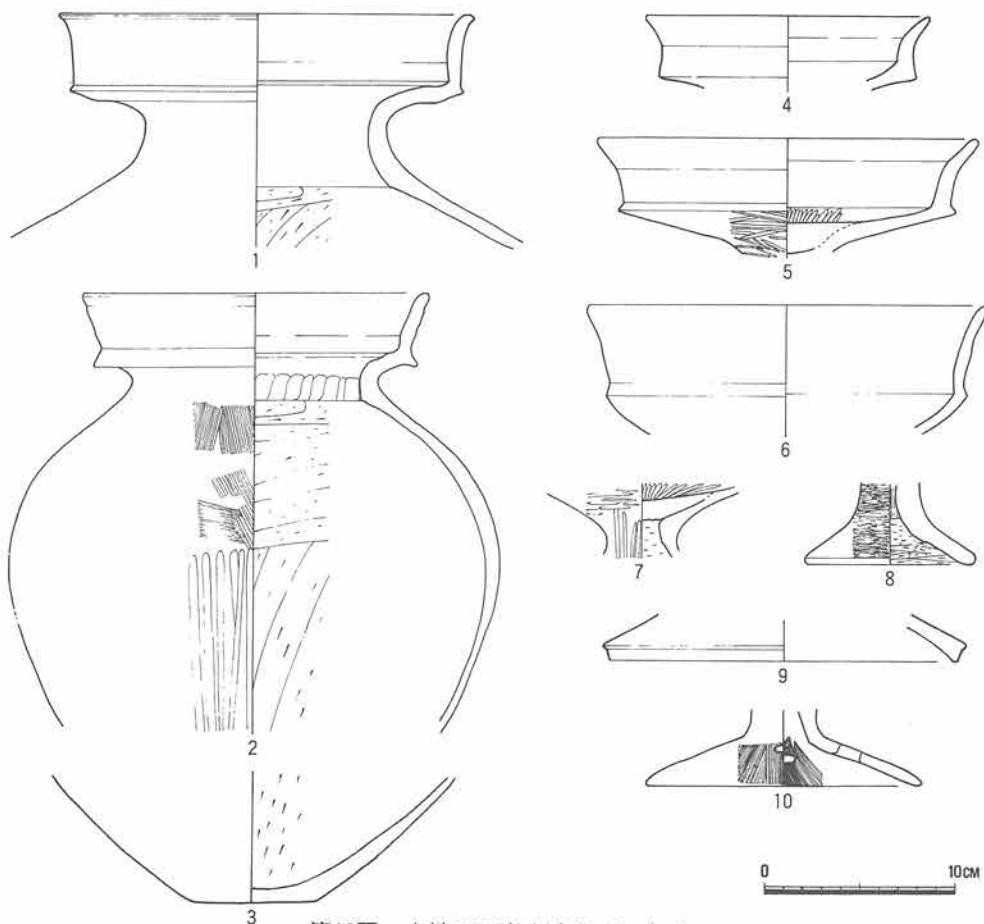


土壌1205（第41・42図、図版9-2）

26号住居址の東15mの位置に検出した袋状土壌である。検出面での平面形は直径約65cmの若干いびつな円形を呈し、深さ21~29cmを測る。底面はほぼ円形を呈し、東にゆるやかに傾斜している。土壌1088・1086に比較して高杯形土器の数の多さが目を引く。出土遺物は少なく、図示した遺物の他は小破片が少量出土したのみである。甕形土器2は肩の張った胴部を持つ。口縁部は「く」の字状に外反し、斜め上方に拡張して複合口縁をなす。胴部外表面の下半はヘラミガキ、上半はハケメを施し、内面はヘラケズリしており、頸部内面に指オサエが見られる。4~10は高杯形土器である。5の皿部内面は放射状に、外面はやゝ乱れぎみにヘラミガキが施される。



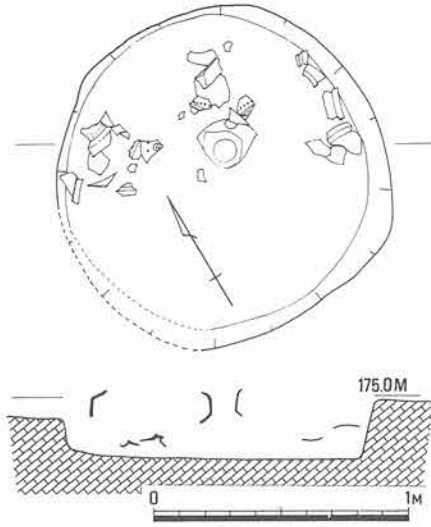
第41図 土壌1205（1/50）



第42図 土壌1205出土遺物（1/4）

土壙608（第43・45図、図版13-2）

19号住居址の東13mの位置に検出した土壙である。径約1.30mの円形を呈し、検出面より深さ14～22cmを測る。底面は平坦である。出土遺物はいずれも底面より少し浮いた状態で出土した。谷尻地区の発掘調査で、畿内型の土器をもった孤立した集落が検出されたが、今回の赤茂地区では畿内型土器は極めて少なく、ほぼ完形で出土したのは11の鉢形土器1点のみである。6は上東式土器に似た器形で、複合口縁をなす。口縁端部は面をなす。同一固体と思われる破片の中には貝殻腹縁による圧痕を肩部沈線の



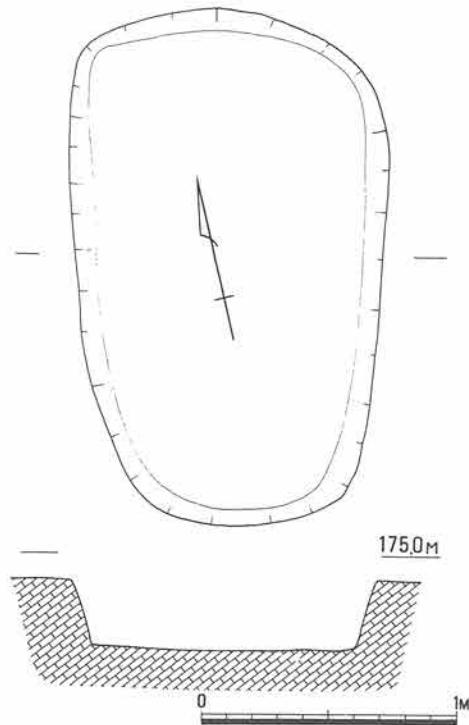
第43図 土壙608（1/30）

の少し下方に施したものもあった。高杯形土器は短脚で端部を肥厚させない13・14と、端部を肥厚させ円板充填により成形する15の二器種が併存する。11は丸底の鉢形土器で外面は上半に平行タタキメ、下半に右上がりのタタキメが見られ、輪積み接合面と境は一致する。内外面に赤色土の塗布が認められ、丹塗りを意識したと思われる。

土壙3000（第44図、図版12-1）

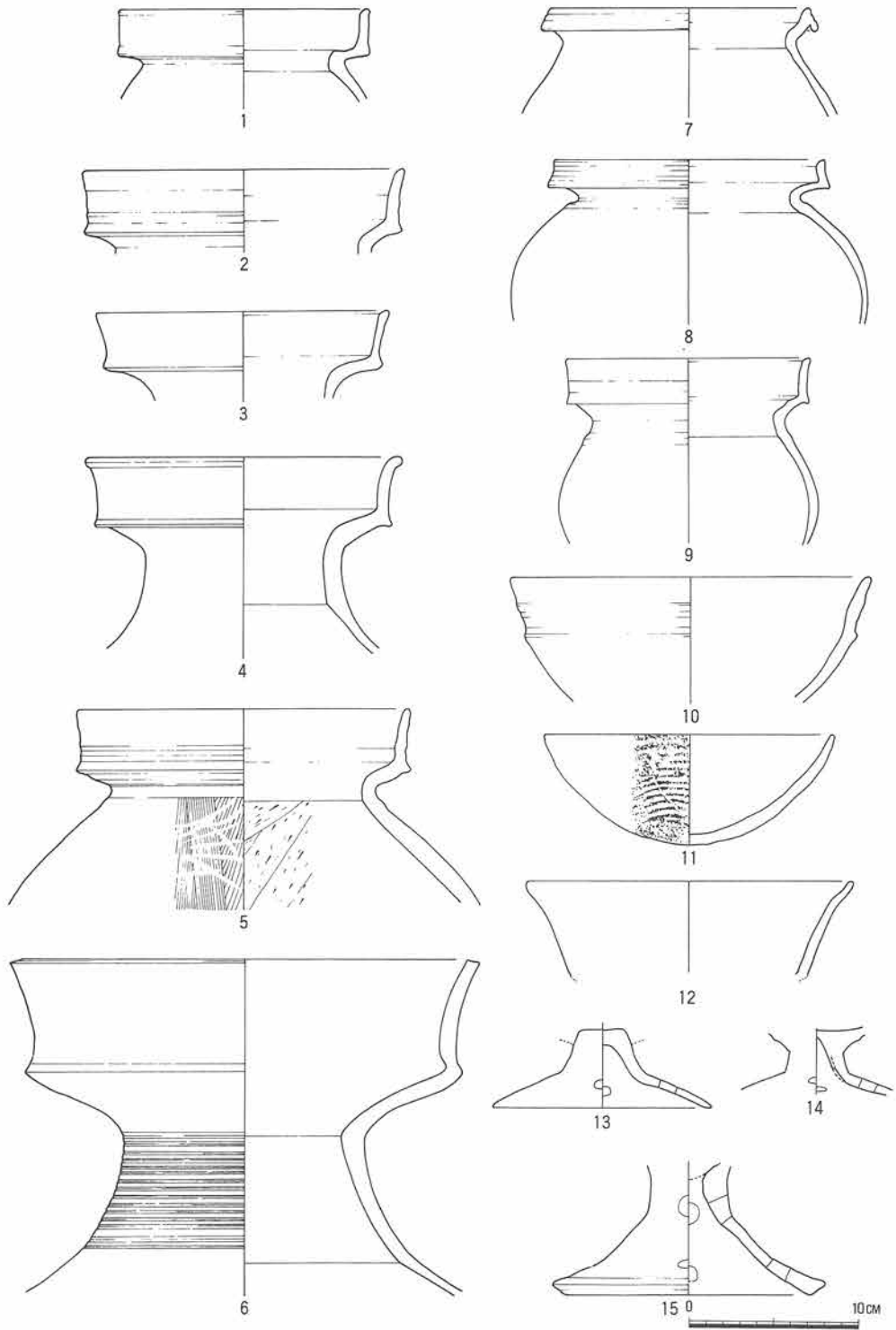
火災を受けて放棄された19号住居址の東南約9mの位置に検出した土壙である。平面形は205×125cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ22～31cmを測る。

土壙内から多量の炭化米が出土した。この炭化米は籾殻が付いたまま焼けたと思われる灰白色の籾殻の灰が米粒の回りに付着していた。ほとんどが一粒ずつばらばらになっていたが、中には握り拳程の塊になったものもあった。総量はコンテナ（34×54×15cm）に約3箱であった。その他に、焼骨3点・トチの実2点・大豆大の種子1点等が出土した。時代は土器片が少量出土しただけなので確定しがたいが、19号住居址とほぼ同時期と考えられる。（岩崎）



第44図 土壙3000（1/30）

谷尻遺跡（赤茂地区）



第45図 土壙608出土遺物（1/4）

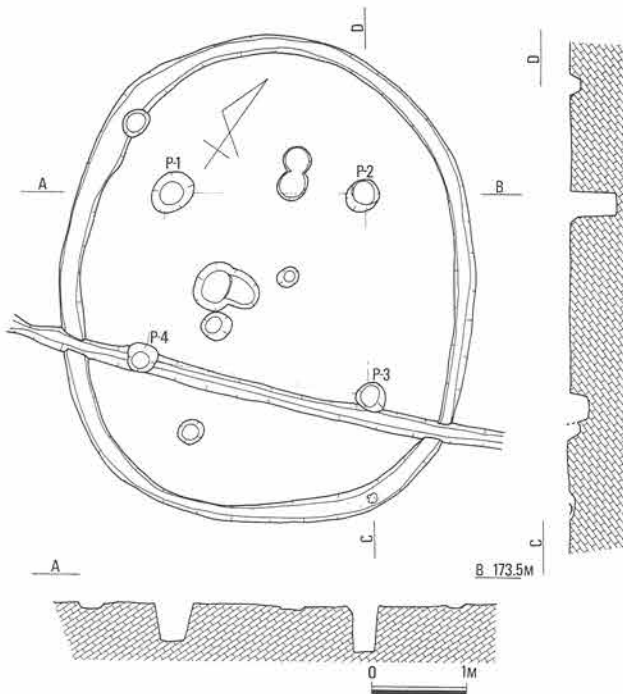
## 2 古墳時代の遺構・遺物

### (1) 住居址

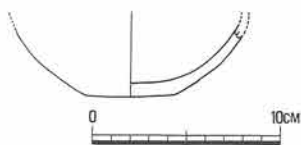
#### 5号住居址（第46・47図、図版14-1）

G-3区、住居址8と溝1を隔てた西方10mに位置する竪穴住居址である。平面は4.4×5.2mの楕円形状を呈す。耕作土の直下から検出されたもので床面直上まで削平をうけており覆土はない。柱穴は4本でP-4は他の3本よりやゝ西にずれた位置にある。P-4とP-3を結ぶように1本新しい溝が住居址を切っていた。

出土遺物はP-3の南方90cmの周溝内から土師器の碗が1点出土した。淡茶褐色を呈し、わずかだが底部をもつ。表面はよく磨耗しており調整は不明である。時期は遺構に伴うものは図示した碗が1点だけなので判定は難しい。しかし周囲の表土層中に混入していた土器は須恵器を含んでおり、弥生式土器片はほとんど見当たらないことから一応古墳時代の竪穴住居址であると考えられる。



第46図 5号住居址（1/80）

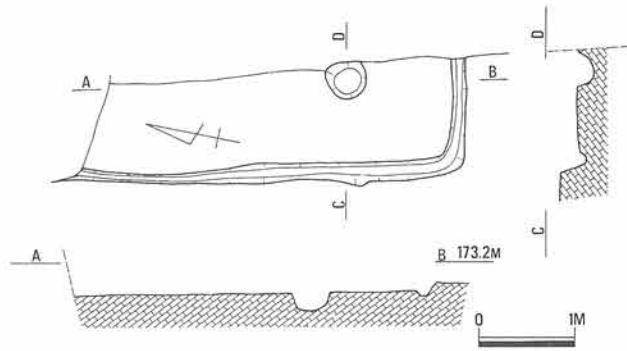


第47図 5号住居址出土遺物（1/4）

#### 6号住居址（第48図、図版14-2）

G-2区、5号住居址の10m北方に位置する竪穴住居址である。平面プランは隅丸方形を呈すが、北は調査区域外、東は溝1によって切られており一部分しか検出することができなかったため規模については不明である。柱穴は1つだけ出土した。住居址内には暗茶褐色粘質土が20cm程度堆積していたが出土遺物は全く無かった。

時期については供伴する遺物が無いので確定はできないが周辺から出土する土器類は須恵器、土師器が主で弥生式土器の出土が見られないことから一応古墳時代であると考えられる。（森田）



第48図 6号住居址（1/80）

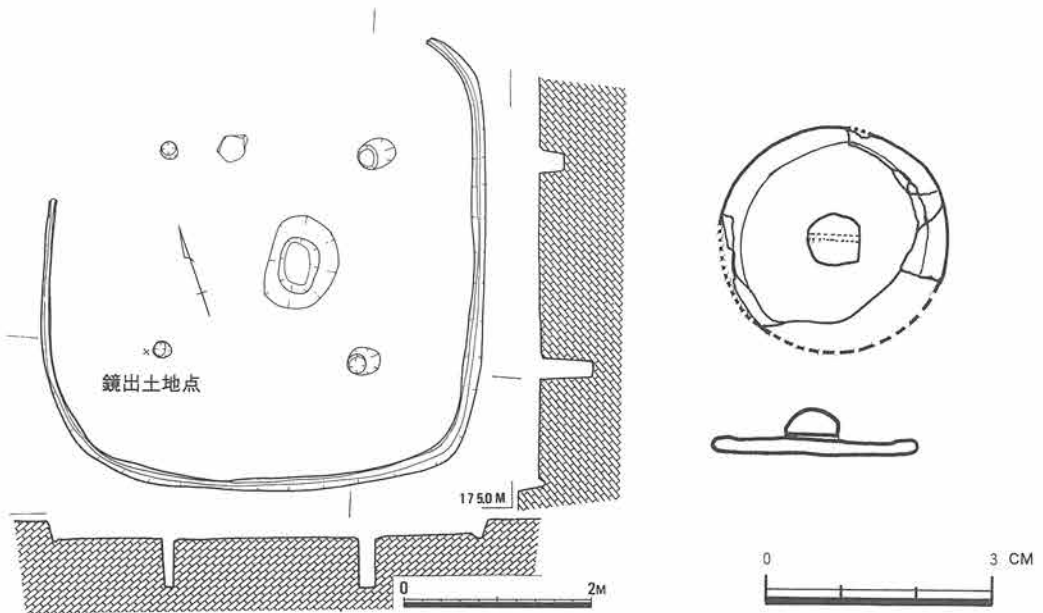
17号住居址（第49・50図、図版15-1・2）

調査区中央部に位置し、北側が一部削平されている。隅丸方形を呈し、長辺5.00m・短辺4.60mを測り、床面積は、約21.90㎡で現存壁体高は18cmである。

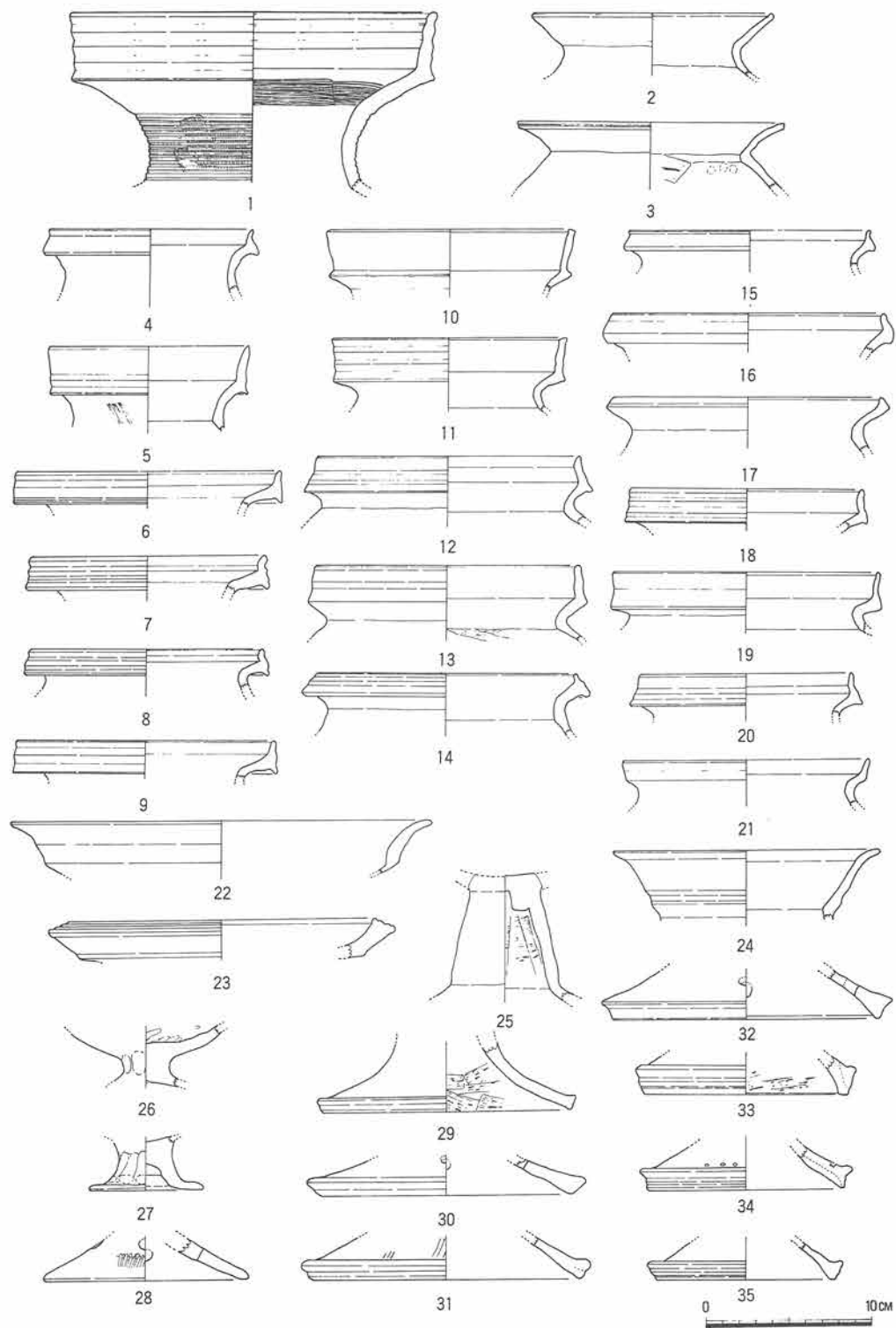
支柱穴は4本で、柱間距離は北辺より右回りに2.10m・2.20m・2.05m・2.15mを測る。中央穴は102cm×73cmのいびつな隅丸長方形を呈し、中層より下層にかけて薄い炭層が数層確認された。また、北側住穴横からは調理台と思われる28×28cm、厚さ12cmの丸みをもった礫が床面に密着していた。

出土遺物は、床面から小型仿製素文鏡が鏡背を上面に何らの施設も伴わず単独で出土した。

他の出土遺物は、ほとんどが覆土中で、床面からの出土はわずかに高杯脚部28と小片のみである。どの遺物も器表面の磨滅が激しく調整の明らかなものは少なかった。14は鼓形器台の口



第49図 17号住居址（1/80）・出土遺物1（1/1）



第50图 17号住居址出土遺物 2 (1/4)

谷尻遺跡（赤茂地区）

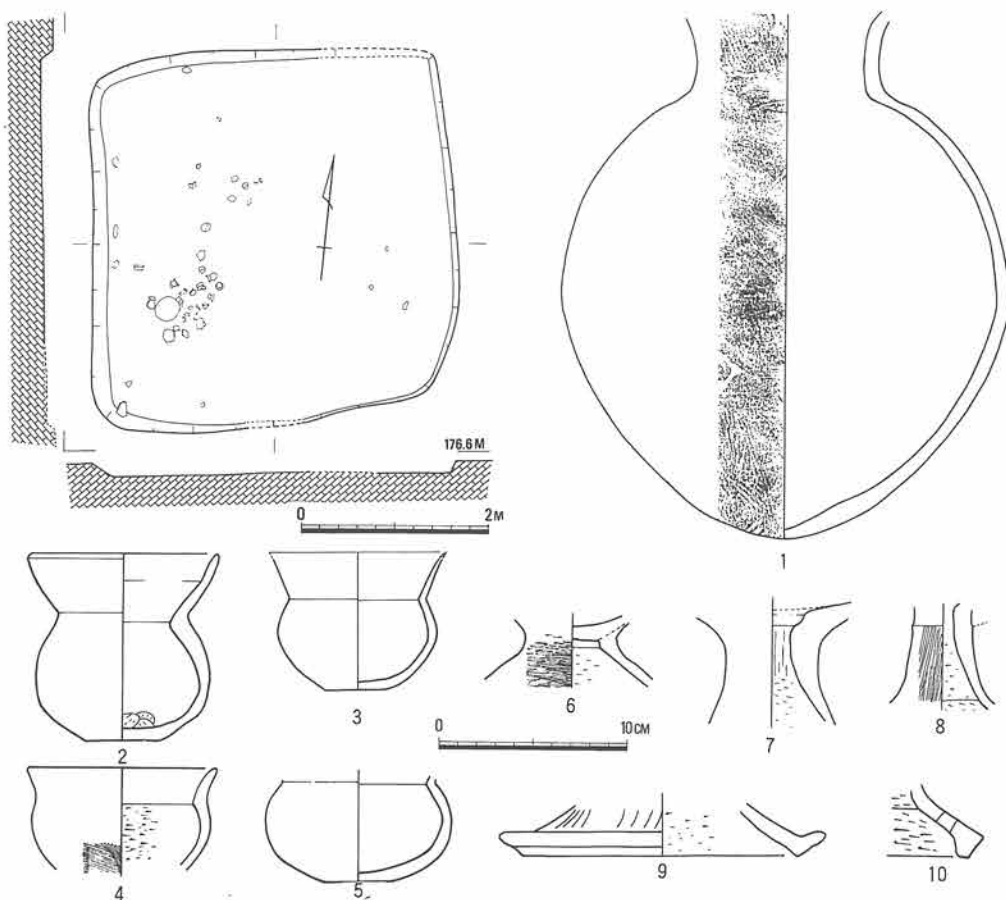
縁部で磨滅が著しいが一部に丹塗りの痕が残る。

岡山県下における、小型仿製素文鏡の出土例は、現時点で岡山市高島遺跡（「サヌカイト」岡山理科大学 19年）百聞川沢田遺跡（「百聞川沢田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 岡山県教育委員会）の二例が知られている。前者は祭祀遺跡でしかも時期が明確ではないが、後者は住居址内の浅い鉢状の窪みから出土しており、形、大きさも、今回出土のものに似ている。伴出土器からほぼ同時期と考えられる。

23号住居址（第51図、図版16-1）

調査区南端近く、22号住居址の南3.5mの位置において検出された竪穴住居址である。検出面で長辺4.03m・短辺3.72mと若干いびつな方形を呈しており、壁体高はわずかに14cmを残すのみである。柱穴は検出できず、その上住居址中央部を後世の溝に切られているため中央穴も不明であり、壁体溝も認められなかった。床面は整地され叩き締められており、敷石の一部と思われる握り拳大の円礫が10数個床面に散在していた。

出土遺物は南西コーナーよりにまとまった形で床面より出土したが、いずれも完形品はな



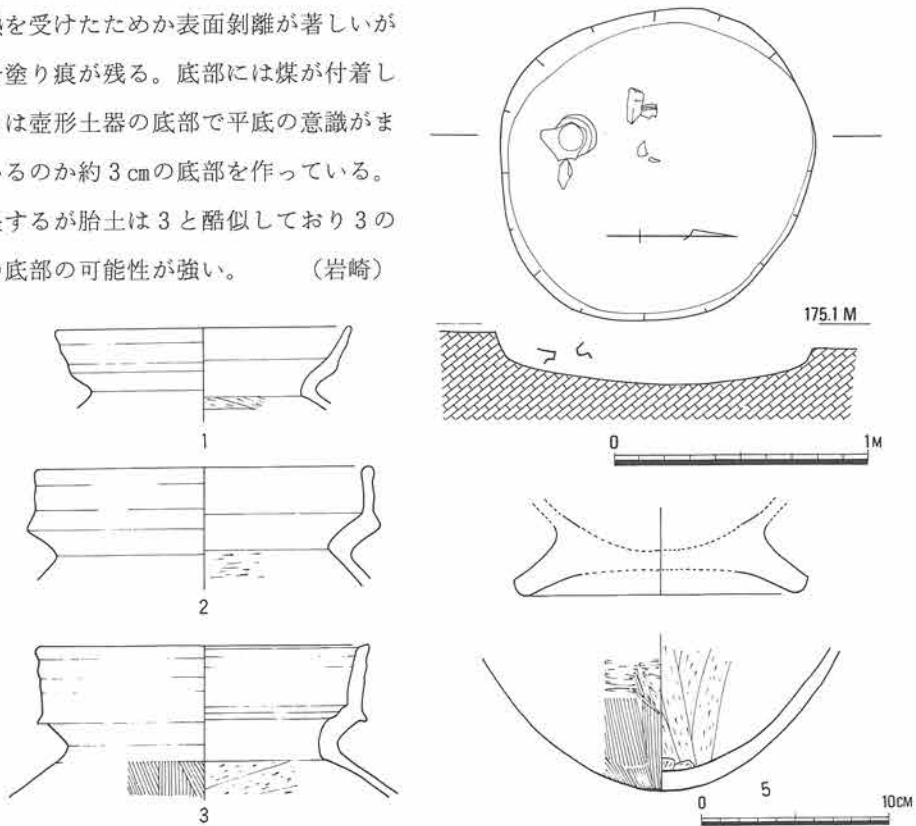
第51図 23号住居址（1/80）・出土遺物（1/4）

かった。1の壺形土器は外面はタタキメの上を縦方向のヘラミガキが施され、頸部はハケ調整されている。2・4・5は平底を呈する小型壺形土器である。器表面の磨滅が著しく調整は明らかではないが、胴部内面はヘラケズリしている。6～10はいずれも高杯脚部である。6・7と8では一部手法が異なるが、いずれも円板充填により成形されている。（岩崎）

(2) 土壌

土壌1418（第52図、図版16-2）

調査区中央部で検出した古墳時代唯一の土壌である。径約1.65mのいびつな円形を呈し、残存状況が悪く検出面からの深さ40cmを測る浅い土壌である。底部から少し浮いた状態であるがまとめて土器が数個の礫を伴って出土した。しかし小破片が多くあまり図化できなかった。3は口縁部が少し外反ぎみに直立し、外表面はハケ調整を行っている。外面及び口縁部内面は丹塗りが行われており、淡黄褐色を呈す。胎土は1mm以下の砂粒特に黒雲母粒を多量に含む。甕形土器1は口縁部が斜め外方に立ち上がり若干内湾ぎみである。外面はナデ調整、胴部内面はヘラケズリしている。外面全面が煤けている。2は焼成のやゝ悪い壺形土器である。胎土は精製粘土に1mm大の砂粒をまぜたもので、外面は丹塗りが施してある。4は脚付甕形土器の脚部で再加熱を受けたためか表面剝離が著しいが外面には丹塗り痕が残る。底部には煤が付着している。5は壺形土器の底部で平底の意識がまだ残っているのか約3cmの底部を作っている。黒灰色を呈するが胎土は3と酷似しており3の壺形土器の底部の可能性が高い。（岩崎）



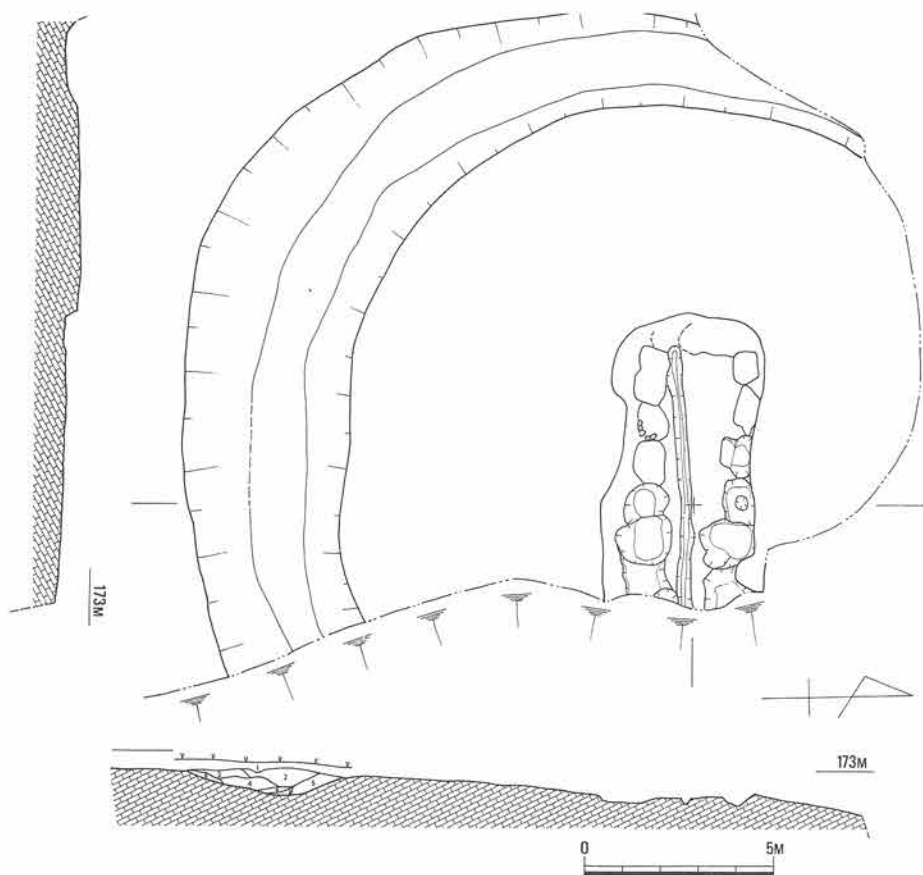
第52図 土壌1418（1/30）・出土遺物（1/4）



(3) 赤茂1号墳

1 古墳の位置

赤茂1号墳はJ-1区、調査区全体から言えば北東端に位置する。ちょうど英賀廃寺の立地する尾根より谷一つ隔てた東側の丘陵の突端部にあたる。谷尻遺跡（赤茂地区）の南側の丘陵裾部には赤茂と西谷の集落があり、その集落の背後の丘陵中腹部から下方にかけては横穴式石室を内部主体とする円墳が群集する。赤茂1号墳は赤茂の集落から北へ約30mは離れておりこれらの群集墳から更に隔っており1基だけ単独に築造されたような状況である。また赤茂の集落の東側には隣接して寺平、川崎の集落があるがそれらの集落の背後の丘陵には古墳は一基も確認されていない。赤茂1号墳は備中川の南側の丘陵に中津井地区から続く町内でも最大の規模の古墳群の東端にあたり、しかもこの時期としては珍しい単独墳である。調査前は茶畑であった。その周辺は牧草地で丘陵はフラットに削平されており古墳であることを示す墳丘や石材の露出は全く見られずその存在は発掘調査を実施するまで知られていなかった。



第53図 赤茂1号墳全体図（1/200）

## 2 墳丘の規模

古墳は丘陵の北東端に位置するため東側と北側は畑を開墾する際に削り取られていた。そのため周滄は約1/4周しか検出することができなかった。また調査前は茶畑であり耕作面は完全なフラットの状態で墳丘の盛土は全く認められなかった。しかも石室の石材もすべて抜き取られており石室床面と掘り形及び周滄を検出したのみである。

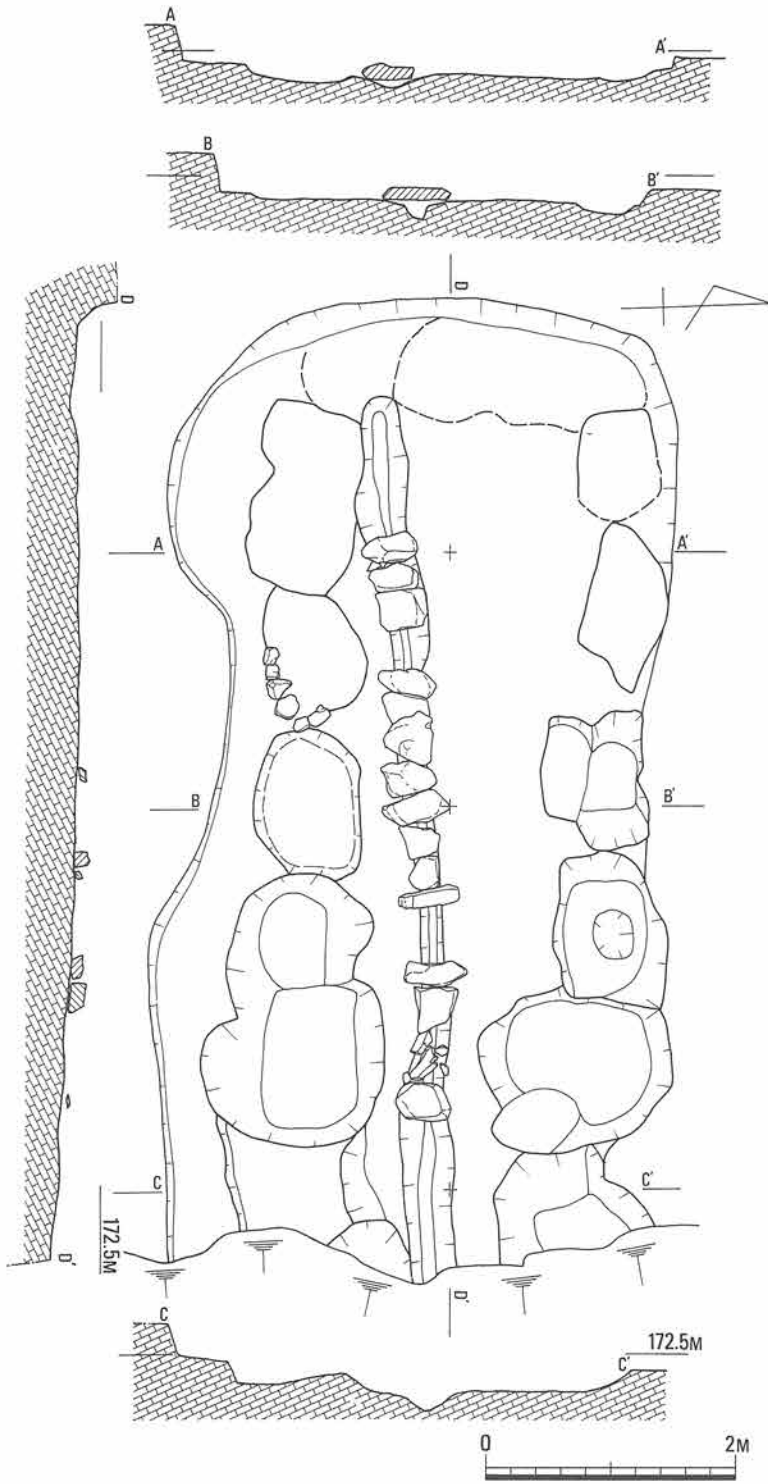
石室掘り形の位置及び残存していた周滄の廻り方から推定して墳丘は直径16m余の円墳であったと思われる。高さについては不明である。周滄は幅2.3m～4.7m、深さ0.2m～0.6mを測る。周滄及び石室掘り形は地山である黄色土を切り込んでいるが、検出時の深さは築造時のそれとは一致しない可能性もある。石室掘り形の深さも10cm～30cmと比較的浅いばかりでなく、周滄より内側に存在する後世の遺構も浅く、旧地表面も畑に開墾する際にいくらか掘り下げられたと考えられる状況である。

## 3 内部構造及び遺物の出土状況

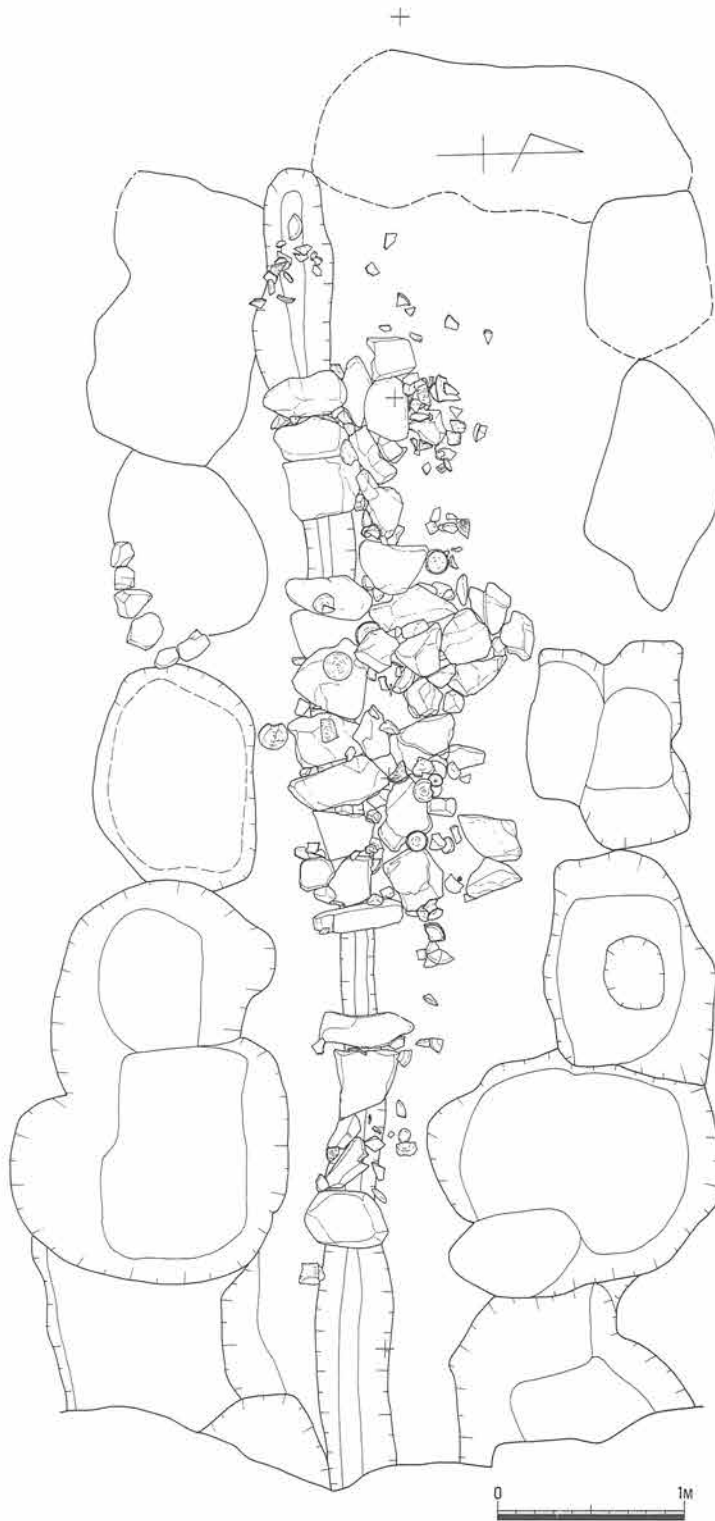
石室は東へ開口する左片袖の横穴式石室である。しかし前述した如く東側は畑に開墾する際に削除されており石室は羨導の一部を欠いている。石室掘り形の規模は長さ7.6m（残存長）、幅3.3～4.1mを測る。石室内部の規模は全長6.8m（残存長）、玄室長4.7m、玄室幅1.4～1.7m、羨導長2.1m（残存長）、羨導幅0.5mである。石室内に石材はいくつか残っていたがすべて原位置を動いており石材の位置は石材を据置いた時の窪みから基底部分についてのみ判明することができる。それによると玄室の側壁は1～1.5m大の石を左右4個ずつ計8個用いてある。奥壁は石を据える時の窪みが浅いためはっきりしないが北寄りに2m余の大きな石を置き南側には1m大の石を添えるように置いたと考えられる。羨導部については左右2個ずつ計4個までは確認できるが、墳丘の径から推定してあと1個ずつ、合計6個で基底部分が構成されていたと考えられる。基底部分の石は北側の側壁と奥壁部分には掘り形との間隙が無く掘り形に対して石材は北西に寄せて置いてある状態を示す。このことから基底部分の石を積むに当っては北側の側壁→奥壁→南側の側壁の順に構築していったことがわかる。基底部分の痕跡は奥壁と奥から2つ目までの側壁の石を除いて明瞭に掘り込まれている。玄室部と羨導部の基底部分の痕跡も1.55×1.2mの大きさをもっており、比較的大きな石を用いていたと考えられる。石室床面には南西の最奥から中軸線より南に寄りながら入口中央へ向って排水溝が1本走っている。残存長7.1m、幅0.2～0.45m、深さ10cm余を測るしっかりしたものである。排水溝の上にはちょうど蓋をするように長さ50cm程度の扁平な石が1列に置かれていた。本来は排水溝全体の上に置かれていたと思われるが、現状では歯が欠けるように所々抜けていた。

埋葬主体は木棺である。棺はすでに腐蝕して無く、石室内からは釘が出土したのみである。また石室内の状況は攪乱されているため出土遺物の位置はどれが原位置を止めているのかいな

谷尻遺跡（赤茂地区）



第54図 赤茂1号墳石室（1/60）



第55図 赤茂1号墳遺物出土状況（1/40）

いのか明確には捉え難い。土器類はかなり小破片に破碎されて散乱している状況を呈しており、奥壁近くの破片が入口付近のものと接合したのもあってかなり動いている感じをうける。しかし玄室中央付近のものは比較的完形に近いものはいくつかあり、比較的原位位置に近い状態と考えられる。奥壁付近のものと羨導付近のものが小破片になっているのと対称的である。また玄室中央部には排水溝の北側に排水溝の蓋石よりやや小さい石を置いてあるのが見られる。これらの石は床面上に置かれていて排水溝の蓋石とほぼレベルを合わせているが、石は高さも大きさも不揃いで敷石として石室全体をおおっていた状態ではない。むしろ無造作に置いた感じである。遺物はこの石の上から検出されており、石の下からみつかったのは64と67の2点だけであった。したがってこれ

## 谷尻遺跡（赤茂地区）

らの石は築造時に置かれたかどうかはわからないが遅くとも追葬時には置かれていたもので一部は棺台として用いたと考える。しかしこの程度の大きさの石は大部分が壁の間隙を埋めるのに用いており、床面から多少浮いているものは石材を抜き取る際に落ちたものが混入していると思われる。

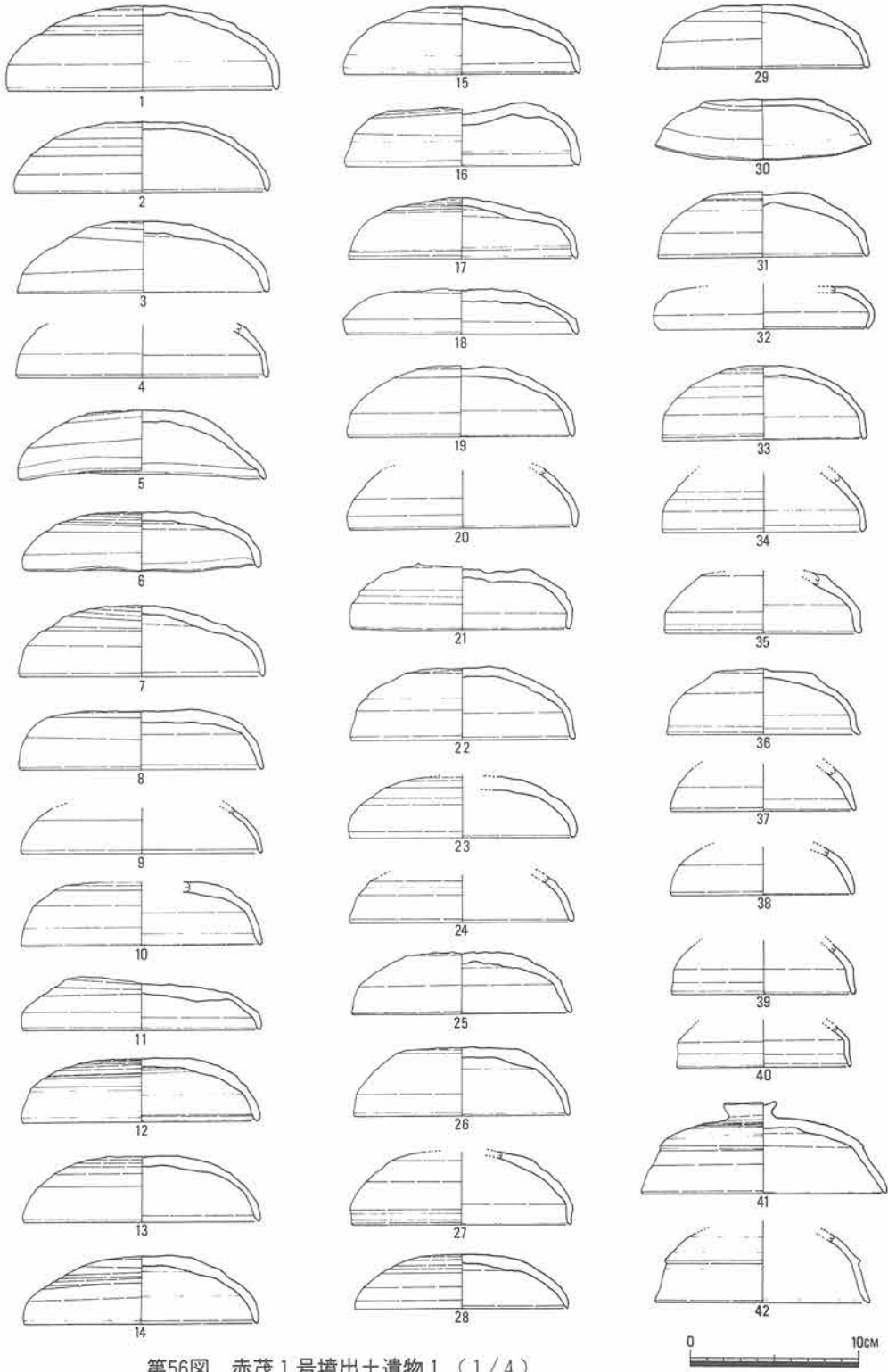
遺物の取り上げ後、須恵器を中心に遺物の検討をした結果、須恵器はかなりの小片に砕けていたが、奥壁に近い破片は比較的古い様相を呈するもの（2・8・14・15・16・46・50・52・55）が認められ、羨導及び玄室入口付近のもの（25・33・34・57・65）はやゝ新しい様相を呈することがわかった。したがって石室内の出土遺物は破碎されていて埋葬時の現状は止めないが、比較的原位置に近い場所にあると言える。それらから推定しうる棺の数は少なくとも3個体はあったと考えられ、奥の古い様相を呈する須恵器をもつ一群、中央部の石のあるあたりの一群、羨導及び玄室入口付近の一群の3群に分かれる。出土遺物は出土状況図に示した以外のものは床面近くの覆土中より検出されたものである。

### 4 出土遺物

図示することのできたものは須恵器106点、土師器3点、鉄器75点、装飾品99点である。そのうち土師器と装飾品は出土したものをすべて図示することができたが、他は小破片のため図示不可能なものがある。石室内は開壟時に相当荒され床面近くまで攪乱されていたにも拘らず出土遺物の数量は多くその総数は300点近くにも及んでいる。

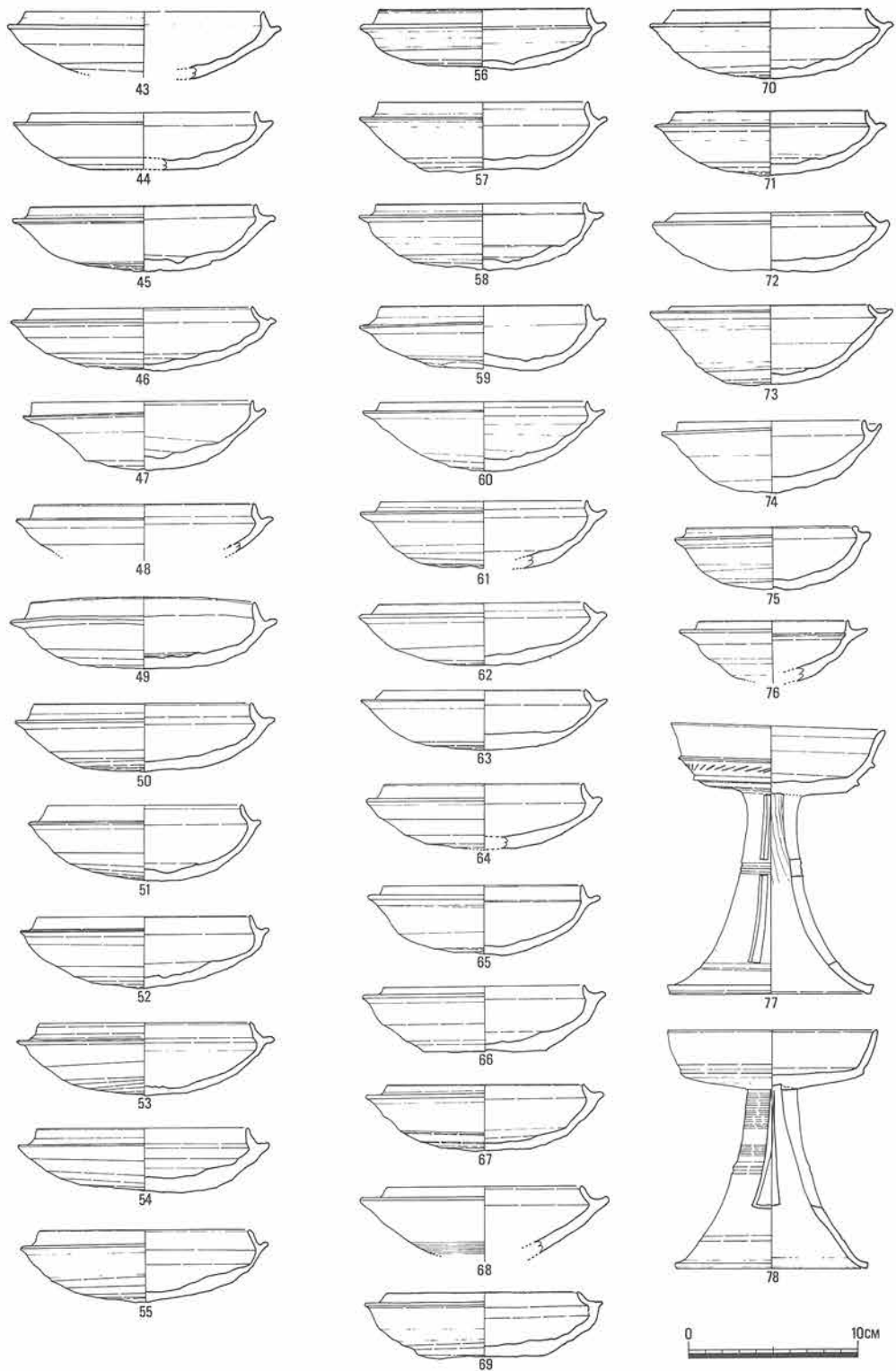
#### （須恵器）

須恵器は106点を図示したがこれ以外にも図示不可能な小破片は10数点以上ある。それらは破片が小さいため、同一個体か別個体かの判別が難しいため個体数は正確には把握できない。杯蓋（1～40） 宝珠つまみやかえりをもつものは1点も見当らず、すべて杯身に立ち上がりをもつものとセットになる形の杯蓋である。詳細は表1～3に記したので特徴を大ざっぱに見てみることにする。口径は10.2cm～16.0cmまで大小の幅がある。天井部の調整はヘラケズリを施したものとヘラ切り未調整のものと2種類あり、それぞれさらに細分される。まずヘラケズリ調整を施したもののなかでは口径が大きく器高の高いもの（Aタイプ）、Aタイプより口径はやゝ小さくなるが、器高が低くなって扁平な感じになるもの（Bタイプ）、口径はさらに小さくなるが器高はBタイプと変わらず、全体が丸味を帯びてくるもの（Cタイプ）に細分される。ヘラ切り未調整のものは口径が大きく器高の低い、全体に扁平な形のもの（Dタイプ）、Dタイプより口径はやゝ小さくなるが器高は逆に高くなるもの（Eタイプ）、器高はEタイプと変わらないが、口径がさらに小さくなり身と合わせた状態は球に近いもの（Fタイプ）に別れる。各タイプはそれぞれ次のとおりである。A…1・2・7 B…6・8・10・12・13・14・15・16・17 C…19・20・23・28・29 D…11・18 E…21・22・24・25・26・27 F…30・31・33～40



第56図 赤茂1号墳出土遺物1（1/4）

谷尻遺跡（赤茂地区）



第57図 赤茂1号墳出土遺物2（1/4）

杯身（43～76） すべて立ち上がりを有するものばかりである。底部の調整は杯蓋同様ヘラケズリを施したものとヘラ切り未調整のものと2種類あり、蓋と同様、それぞれさらに細分化される。その分類の区分は蓋と同じく、ヘラケズリ調整の施されているものは口径、器高ともに大きいもの（Aタイプ）、口径はAタイプよりやや小さくなるが、器高はずっと低くなって扁平な形になるもの（Bタイプ）、口径はさらに小さくなるが器高は高くなるもの（Cタイプ）に分かれる。ヘラ切り未調整のものは口径が大きくて器高の低いDタイプはなく、口径はDタイプとあまり変わらず器高のみ高くなるEタイプと、さらに口径が小さく、器高の高くなって球形状を呈し、立ち上がり短くなっていくFタイプの2つに分かれる。各タイプはそれぞれ次のとおりである。 A…43・45・46・49・50 B…44・54・56 C…51・52・53・55・58・59・61～64・67・68・70・71・73 E…47・57・60・65・66・69・72 F…74～76

蓋（41、42） つまみを有する蓋であるが杯蓋とは異なる。形状も異なり、天井部と体部は境の明瞭な稜線で区画され体部は外反ぎみに「ハ」の字に開く。天井部は41はカキメ、42はヘラケズリによる調整が施されている。

高杯（77～87） 高杯は10個体を図示した。それらは立ち上がりのないもの（77～82）と立ち上がりを有するもの（83～86）の2種類に分かれる。さらに立ち上がりのないものの中も、脚部に透かしのあるもの（77・78・82）とないもの（79～81）に分かれる。77は長脚二段透かしが三方に穿たれている。杯部には2本の凸帯の間に箭状工具による刺突文が施されている。焼成、胎土とも良好で他と異なり洗練された印象を受ける。78は長脚一段透かしが三方に穿たれたもので、脚部上部はカキメによる調整が施されている。82は短脚で四方に円孔が穿たれたものである。87は三角形を呈し三方に穿たれた透かしをもつ脚部である。一応高杯の中に入れたが台付壺等の脚部とも考えられる。

器台（88） 三角形を呈す透かしを有するものだが脚部の極小片しか見つかっていないので全体については不明である。

蓋付短頸壺（89・90） 89と90は蓋とセットで検出されたのではないが、本来セットで使われていたと考えられるものである。

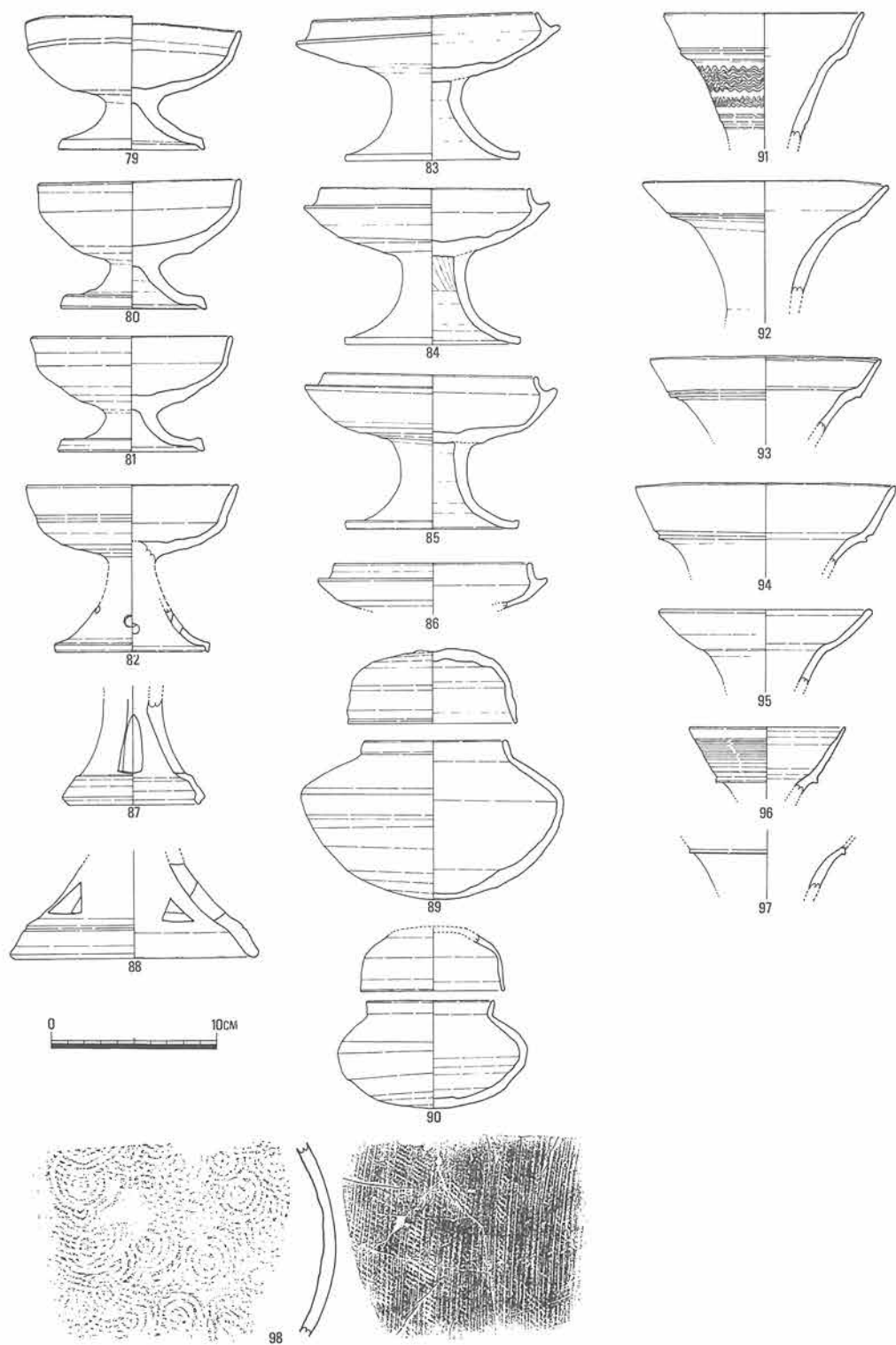
罎（91～97） 7個体分検出したがいずれも口頸部分のみの残存で体部は全く残存していない。口径の大きさは多少差があるがいずれもラップ状に大きく開く形状を呈する。91は箭描きの波状文が廻る。95は他と焼成が異なり非常に美しい自然釉の付着が認められる。

横瓶（98） 横瓶は小片のため大きさは不明である。内面には同心円状の当て板の痕跡が、外面には格子状のタタキメを施したのち、カキメを施している。

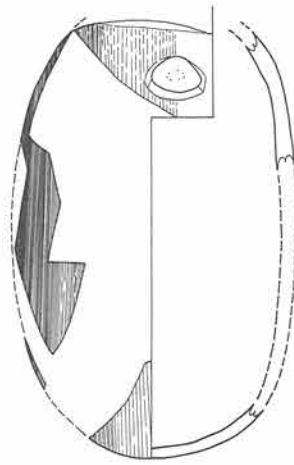
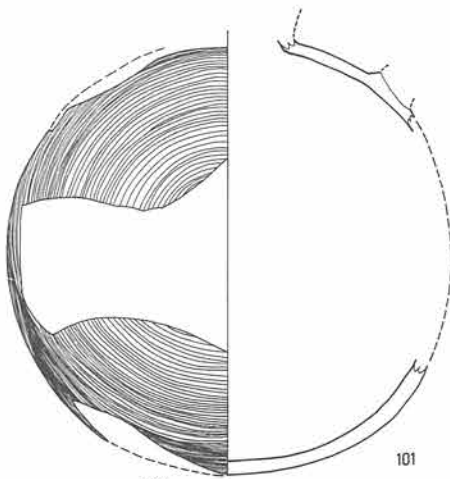
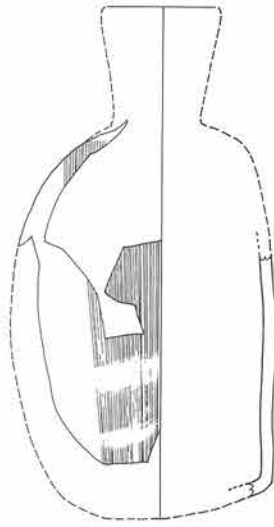
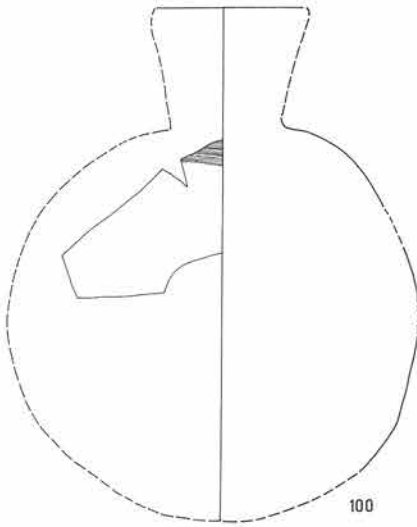
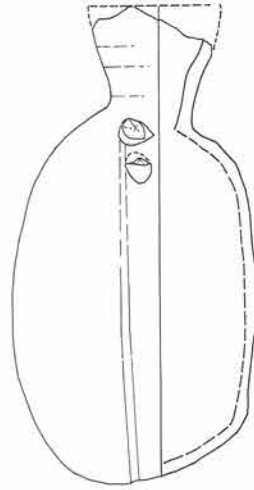
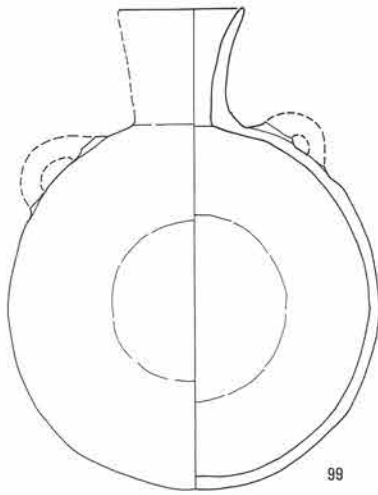
提瓶（99～106） 体部は5個体分検出したが100・101の口頸は無い。104～106は口頸と思われるが極小片のため100・101と同一個体になるかどうかは不明である。99以外はすべて外面には格子状のタタキメを施したのちカキメを施している。



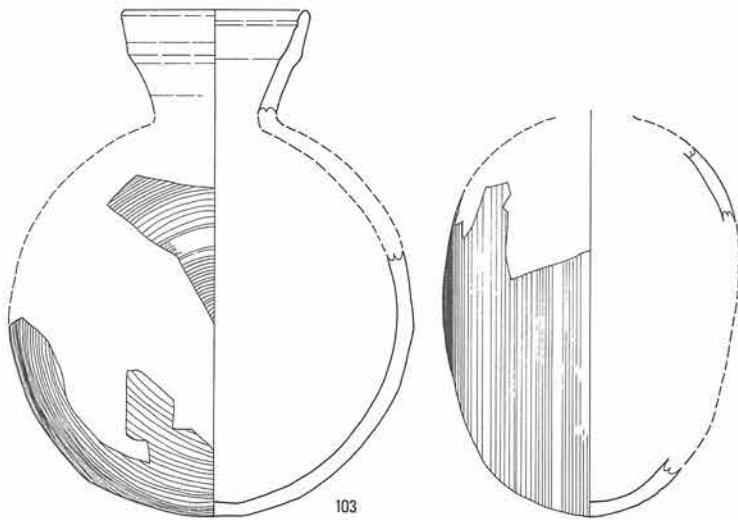
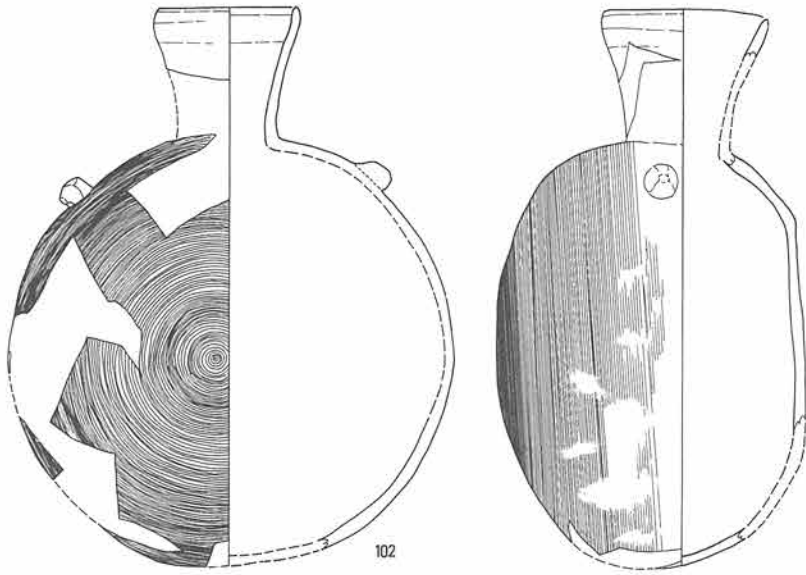
谷尻遺跡（赤茂地区）



第58図 赤茂1号墳出土遺物3（1/4）



第59図 赤茂1号墳出土遺物4（1/4）



第60図 赤茂1号墳出土遺物5 (1/4)

赤茂1号墳出土須恵器計測表

（単位 cm）

番号	器種	残存	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	
1	杯蓋	1/2	16.0		5.0	緑灰色	荒い土	良	ヘラ 削り
2	"	1/4弱	15.0		4.15	灰白色	砂粒混じり	やや軟質	ヘラ 削り
3	"	3/4程	14.85		4.2	（両面）暗灰色	石、砂粒の混じった荒い土	軟質	ヘラ 削り
4	"	口縁一部	14.8			暗灰色～灰色	やや不良	良好	ヘラ 削り
5	"	80～90%程	14.5～14.9 （平均14.7）		4.1	内面、外面ともに灰色一部釉がかっている	荒い土を作っているようで、ヘラ削りのあとにはザラザラしている	きわめて良好	ヘラ 削り
6	"	75%程	14.2～14.7 （平均14.45）		3.6	外面、内面ともに暗灰色	3～5mm程の石がところどころ見られる	良好	ヘラ 削り
7	"	95%程	14.4		4.2	（内外）暗灰色	2～3mmの石がところどころ見られる	良好	ヘラ 削り
8	"	1/4強	14.4		3.4～3.6	灰白色	石が多く混じっている	やや軟質	ヘラ 削り
9	"	口縁一部	14.2			灰白色	良	やや良	ヘラ 削り
10	"	1/4程	14.2		3.9	灰色	ところどころ砂粒混じり	良好	ヘラ 削り
11	"	3/4程	14.1		2.2～3.15 （平均2.68）	暗灰色		きわめて良好	ヘラ 削り
12	"	3/4弱	14.0		3.8	灰色	2～3mmの石と砂粒混じり	良好	ヘラ 削り
13	"	1/2	14.0		3.9	暗灰色		きわめて良好	ヘラ 削り
14	"	3/4程	14.0		4.0	（内）灰白色～緑灰色 （外）暗灰色	小石が2～3個ある	やや軟質	ヘラ 削り
15	"	85%程	14.0		4.0	白灰色～暗灰色	比較的砂粒の混じっていない土を使っている	やや良	ヘラ 削り
16	"	80%程	14.0		3.1～3.7 （平均3.4）	灰色	石、砂粒混じりの荒めの土	良好	ヘラ 削り
17	"	75%程	13.4～14.0程まで （平均13.7）		3.6	表裏とも暗灰色	砂粒混じりの土	きわめて良好	ヘラ 削り
18	"	3/4弱	13.7		2.7～2.8	表裏ともに暗灰色	やや荒い土	良好	ヘラ 削り
19	"	1/4程	13.4		4.0～4.2	暗灰色	砂粒混じり	きわめて良好	ヘラ 削り
20	"	口縁一部	13.4			薄い青灰色	良好	良好	
21	"	80%程	13.0～13.5 （平均13.25）		3.3～3.9 （平均3.6）	（内）灰色～暗灰色 （外）黒暗灰色	荒い砂粒混じりの土	良好	ヘラ 削り
22	"	3/4	13.25		4.3	乳白色		良	ヘラ 削り
23	"	1/2	13.2		3.8	灰白色	混じりものが多い	やや不良	ヘラ 削り
24	"	口縁一部	13.2			乳白色	良	良好	ヘラ 削り
25	"	1/4程	13.1		3.7	（内）灰茶色～暗灰色 （外）暗灰色		きわめて良好	ヘラ 削り
26	"	1/2	13.0		4.05	灰白色	砂粒混じり	軟質	ヘラ 削り
27	"	1/4強	13.0		4.3～	乳白色	荒い土	軟質	ヘラ 削り
28	"	1/4強	12.8		3.2	暗灰色	3～3個小石がある	良好	ヘラ 削り
29	"	1/4強	12.5		3.8	暗灰色		きわめて良好	ヘラ 削り
30	"	1/2	11.0～14.0 楕円形 （平均12.5）		3.6	黒灰色	荒い土	良好	ヘラ 削り
31	"	1/4程	12.4		3.7～3.9	緑灰色～灰色	良	きわめて良好	ヘラ 削り
32	"	口縁一部	12.4			暗青灰色	荒い土	良好	
33	"	1/4程	12.0		4.35	乳白色	良好	きわめて良好	ヘラ 削り
34	"	口縁部1/2	12.0			灰白色	普通	やや不良	ヘラ 削り
35	"	1/4弱	11.6		3.6～	灰白色～暗灰色		不良	ヘラ 削り
36	"	1/4残	11.5		3.9	茶白色		軟質 生焼け	ヘラ 削り
37	"	口縁一部	11.0			青灰色 （中がサンド）	きわめて良	きわめて良好	
38	"	口縁一部	10.8			黒灰色 （中がサンド）	良	きわめて良好	
39	"	1/4程	10.8			薄い緑灰色	少し砂粒まじりの荒い土	やや不良	
40	"	口縁の一部	10.2			青灰色	やや荒れ	良好	
41	"	90%程	14.5		5.1～5.4	（内）自然釉 （外）灰色	砂粒まじり	きわめて良好	
42	"	口縁の一部	12.7			暗灰色～灰色	小石がところどころあるが良質	良好	

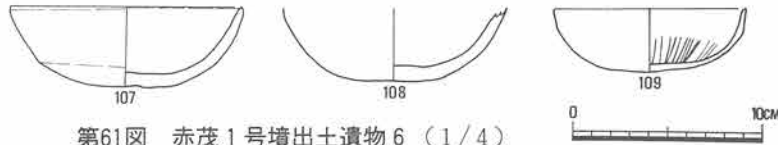
谷尻遺跡（赤茂地区）

番号	器種	残存	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	
43	杯身	3/4程	14.0		4.0~	緑灰白色	砂粒まじり	良	ヘラ削り
44	"	1/4程	13.4		3.3~	(外) 緑色~灰白色 (自然釉) (内) 灰白色	砂粒まじり	きわめて良好	ヘラ削り
45	"	80%弱	13.3		3.9	灰色	石、砂まじり	良好	ヘラ削り
46	"	90%程	13.25		3.7	(外) 灰色 (内) 暗灰色	砂粒混り	良好	ヘラ削り
47	"	3/4程	13.1		4.0	黒灰色	2~3個小石がある	きわめて良好	ヘラ削り
48	"	口縁一部	13.0			灰白色	良	やや不良	ヘラ削り
49	"	95%程(口縁一部損失)	12.95		4.2	(外) 灰色で自然釉 (内) 赤茶色	砂粒まじり	きわめて良好	ヘラ削り
50	"	3/4程	12.8		4.0	灰色 (少し緑っぽい)	砂粒まじりの荒い土	良好	ヘラ削り
51	"	90%程	11.5		4.45	灰色~暗灰色 (表は自然釉)	砂粒まじり	きわめて良好	ヘラ削り
52	"	80%程	12.7		4.35	外は暗灰色~灰色 内は暗灰色	表面に小さい穴がいくつもあいているが石はみられない	きわめて良好	ヘラ削り
53	"	3/4程	12.6		4.3	灰白色		良好	ヘラ削り
54	"	完形	12.5		3.85	薄茶色と黒	ところどころに石がある	軟質	ヘラ削り
55	"	90%程	12.4		4.3	赤茶色~暗灰色 (外は自然釉)	2~3mmの石が2, 3個ある	きわめて良好	ヘラ削り
56	"	ほぼ完形(底部一部損失)	12.4		3.4~3.6	灰色~暗灰色	2~3mmの石があり動いた跡も多数ある	良好	ヘラ削り
57	"	60%程	12.4		4.1	暗灰色	底部のあたりが荒い石粒がある	良	ヘラ削り
58	"	完形	12.3		3.9	灰色	ところどころに小石	きわめて良好	ヘラ削り
59	"	ほぼ完形(口縁一部損失)	12.3		3.3~3.8	緑灰色	石がところどころある砂粒まじり	良好	ヘラ削り
60	"	3/4程	12.3		4.1	暗灰色	砂粒まじり	きわめて良好	ヘラ削り
61	"	40%程	12.2		3.95	(外) 灰色、一部火だすき (内) 灰色	石が2~3個あと土のかたまりがある	良好	ヘラ削り
62	"	3/4弱	12.1		3.65	内外面とも暗灰色	石が混じっている荒い	良好	ヘラ削り
63	"	1/4強	12.0		3.5	(外) 黒色~灰色 (自然釉) (内) 暗灰色	砂粒、小石混じり裏面にひびわれ	きわめて良好	ヘラ削り
64	"	1/4強	11.8		3.8~	(外) 暗灰色 (内) 黒灰色	砂粒混じり	良好	ヘラ削り
65	"	1/2程	11.8		4.1	乳白色~灰白色	普通	やや軟質	ヘラ削り
66	"	1/2程	11.8		3.7~3.9	灰白色	荒い土	軟質	ヘラ削り
67	"	95%程	11.6		3.95	緑っぽい灰色	2~3mmの石や砂粒まじり	良好	ヘラ削り
68	"	1/4程	11.5			黒色~白色 (外に自然釉)	普通	きわめて良好	ヘラ削り
69	"	95%程(口縁一部損失)	11.4		3.95	灰色~暗灰色 (火だすき)	石、砂粒まじりザラザラした土	きわめて良好	ヘラ削り
70	"	80%程	11.35		4.1	外は自然釉 内は暗灰色	ところどころに小石がみられる	きわめて良好	ヘラ削り
71	"	90%程	11.3		3.8	暗灰色	2~3mmの石が多くある	良好	ヘラ削り
72	"	95%程	11.3		3.4~3.6	暗灰色	2~3mmの小石がところどころ見られる	きわめて良好	ヘラ削り
73	"	60%程	11.25		4.7	内外面とも暗灰色	砂粒混じり	良好	ヘラ削り
74	"	ほぼ完形(口縁一部損失)	11.0		4.2	灰白色~黒色	小石、砂粒混じり、やや不良	きわめて良好	ヘラ削り
75	"	完形	9.9		3.5~3.7	暗灰色	不良(きわめて荒い土)	良	ヘラ削り
76	"	1/4弱	8.8			乳白色	普通	やや不良	ヘラ削り
77	高杯	90%程	12.5		15.5~16.0	黒灰色~灰色 (全体に自然釉)	砂粒がまじっているが良質	きわめて良好	ヘラ削り
78	"	3/4程	12.3		13.1	黒灰色	小石砂粒を多数含む やや不良	良好	ヘラ削り
79	"	90%程	10.6~12.9		7.0~8.0	灰白色	やや良質	軟質	ヘラ削り
80	"	ほぼ完形	12.0		7.5~7.8	灰白色	良質	軟質	ヘラ削り
81	"	3/4程	12.0		6.9	暗灰色	やや荒い土	きわめて不良	ヘラ削り
82	"	1/4強	12.7		10.0 (推定)	灰色	砂粒まじり	良好	ヘラ削り
83	"	3/4程	13.5		8.4~8.8	黒灰色	砂粒まじりの荒い土	きわめて良好	ヘラ削り
84	"	ほぼ完形(脚部一部損失)	12.5		9.35~9.45	暗灰色~黒灰色	小さい砂粒まじりの荒い土	きわめて良好	ヘラ削り

番号	器種	残存	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	
85	高杯	95%程	12.6		9.0~9.3	黒灰色 (断面内面は赤茶色)	きわめて小さい砂粒まじりの荒い土、小石を含む	きわめて良好	
86	"	杯身が1/4程	11.8			黒灰色	荒い土	きわめて良好	
87	"	脚の一部分				灰色	良質	良好	
88	器台	脚裾の一部分				灰白色~灰色	荒い土	やや軟質	
89	壺の蓋	3/4程	10.0		4.3~4.4	暗灰色	砂粒まじりだが良質	きわめて良好	ヘラ切り
"	短頸壺	70~80%程	8.35	15.8	9.45	紫色がかかった灰色 (外は自然釉)	きわめて良質	きわめて良好	
90	壺の蓋	1/4強	8.5			黒青灰色	やや荒めの土	良	
"	短頸壺	90%程	7.55	11.4	5.5	緑色がかかった灰色	少し荒めの土	良好	
91	縁	口縁の部分	11.8			青灰色	やや良質	良質	
92	"	口縁から頸の部分	14.5			黒灰色~灰色	良質	良好	
93	"	口縁から頸の部分	15.8			黒灰色~灰色	砂粒まじりだが良質	良好	
94	"	口縁の一部分	15.5			灰白色~黒灰色	ところどころ小石をはさんでいるが良質	軟質	
95	"	口縁の一部分	12.5~15.6			灰色に自然釉がかかっている	良質	きわめて良好	
96	"	口縁の一部分	9.2			暗灰色~暗青灰色~茶灰色	良質	きわめて良好	
97	"	口縁の一部分				灰色 (自然釉)	良質	きわめて良好	

(土師器) (107~109)

土師器はすべて碗である。3点とも内外面がよく磨耗しており調整は不明である。109は内面に中心から放射線状に暗文を施してあるが、中位から上は磨耗のため消えている。



第61図 赤茂1号墳出土遺物6 (1/4)

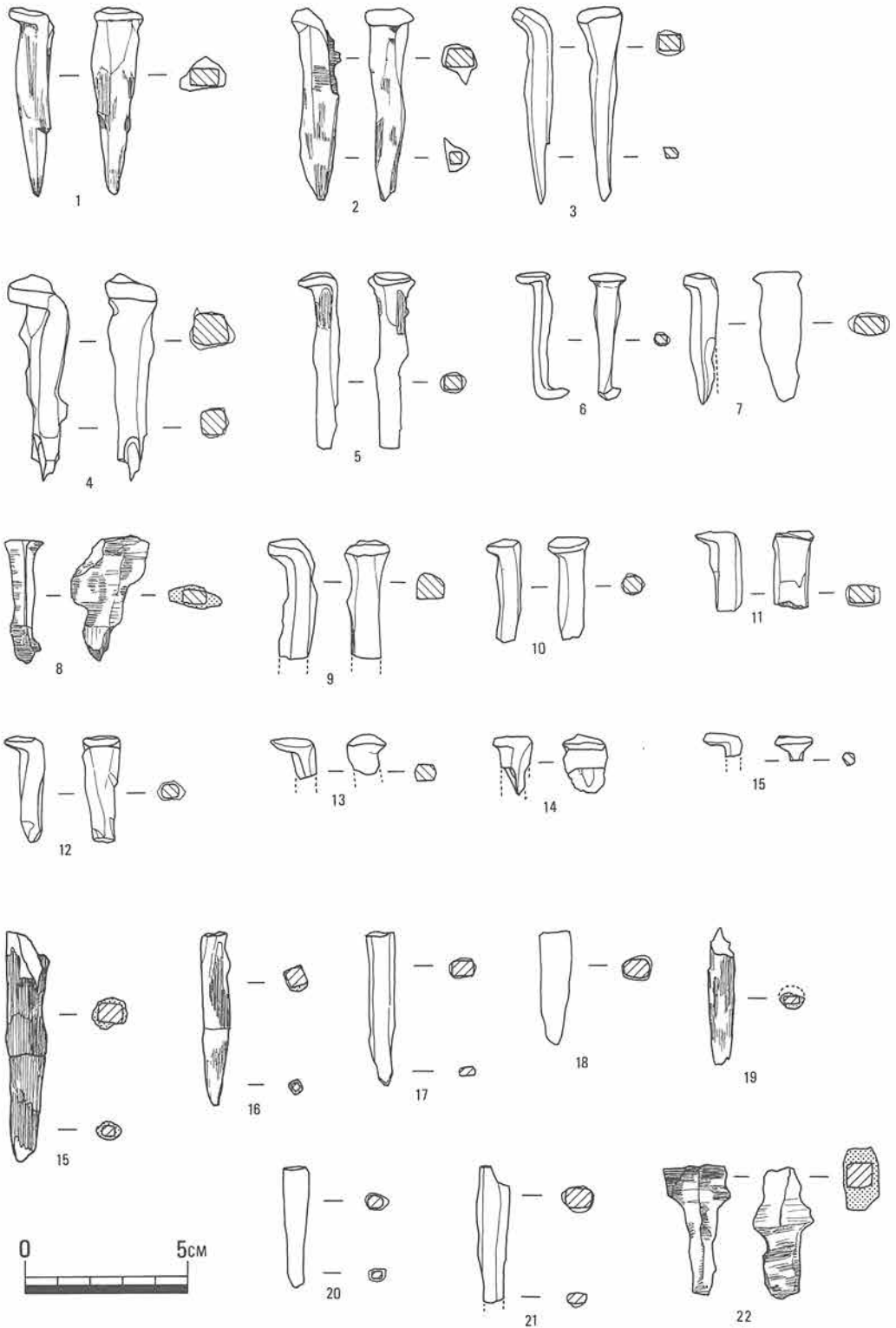
(鉄器)

釘 (1~22) 小片を含めて52片余を出土しているが、その中には同一個体のものも含まれており、本数は正確にはわからない。そのうち図示しえたのは22本である。釘は木棺に用いられたものと考えられるが、床面直上まで攪乱されており原位置を止めるものは見当らなかった。

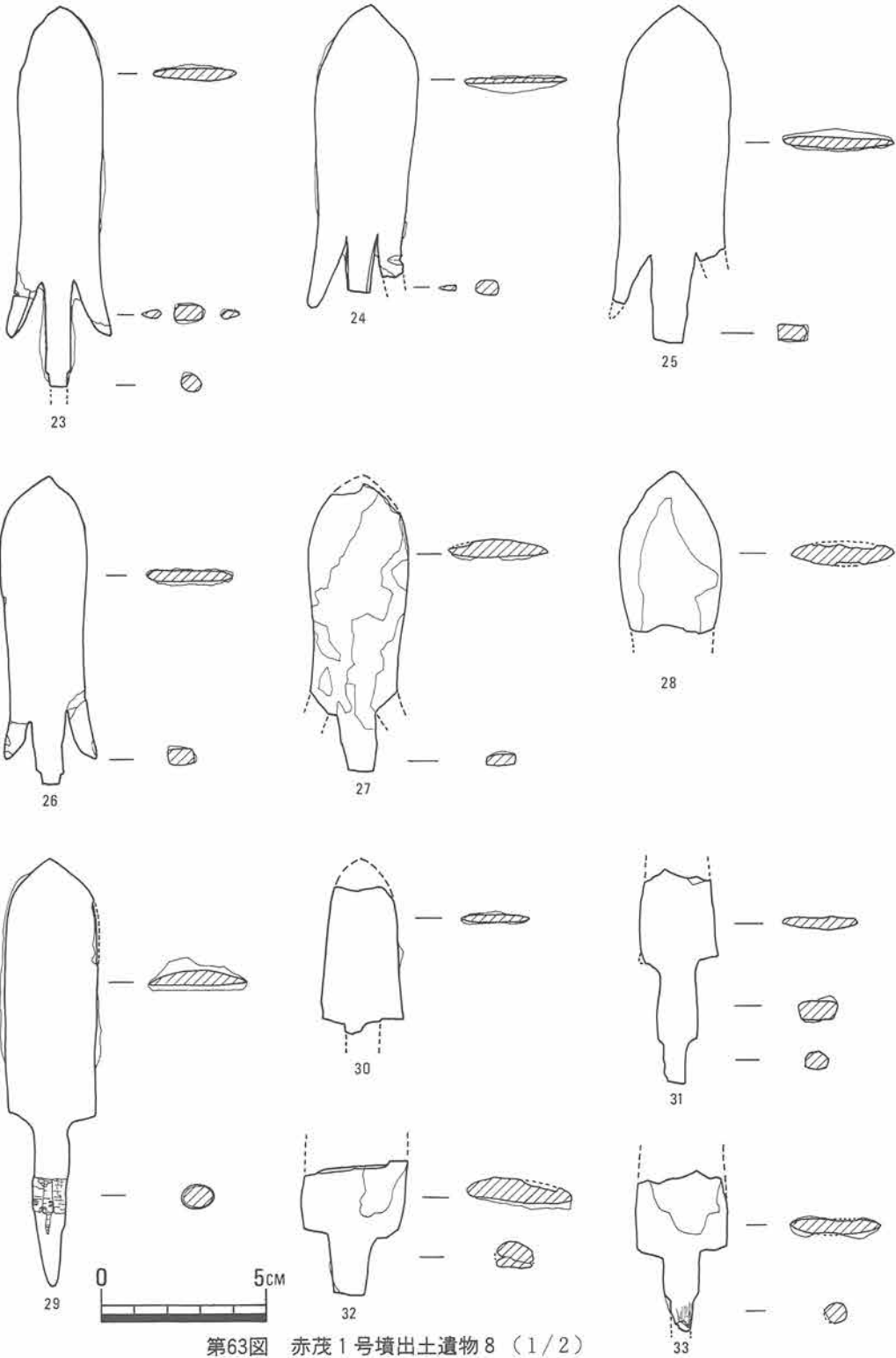
鉄鏃 (23~57) 鉄鏃は判別できるものだけで43片検出した。そのうち図示しえたのは35個体である。鉄鏃はその形状から平根式と尖根式に大別され、さらに6種類に分類される。まず平根式のものからみていくと、23~28は柳葉形を呈し逆刺のあるもので平造である。29~35は同じく平造で五角形状を呈す。36~38・44は柳葉形の逆刺のないものである。39~43・45はノミ頭式のもので幅のやゝ広いものと狭いもの(42・43)がある。46・47は雁股式であるが、46についてはノミ頭式のものに中央に逆三角形の透かしの入る形式になる可能性も考えられる。48~57は尖根式で平造のものである。完形品はなく、全長のわかるものはない。

刀子 (58~67) 検出しえたものは13点で、そのうち図示したものは11点である。58はかなり完形に近い状態で残存していたが他は一部分しか残っていない。63は鞘と思われる木質痕が付着している。

谷尻遺跡（赤茂地区）



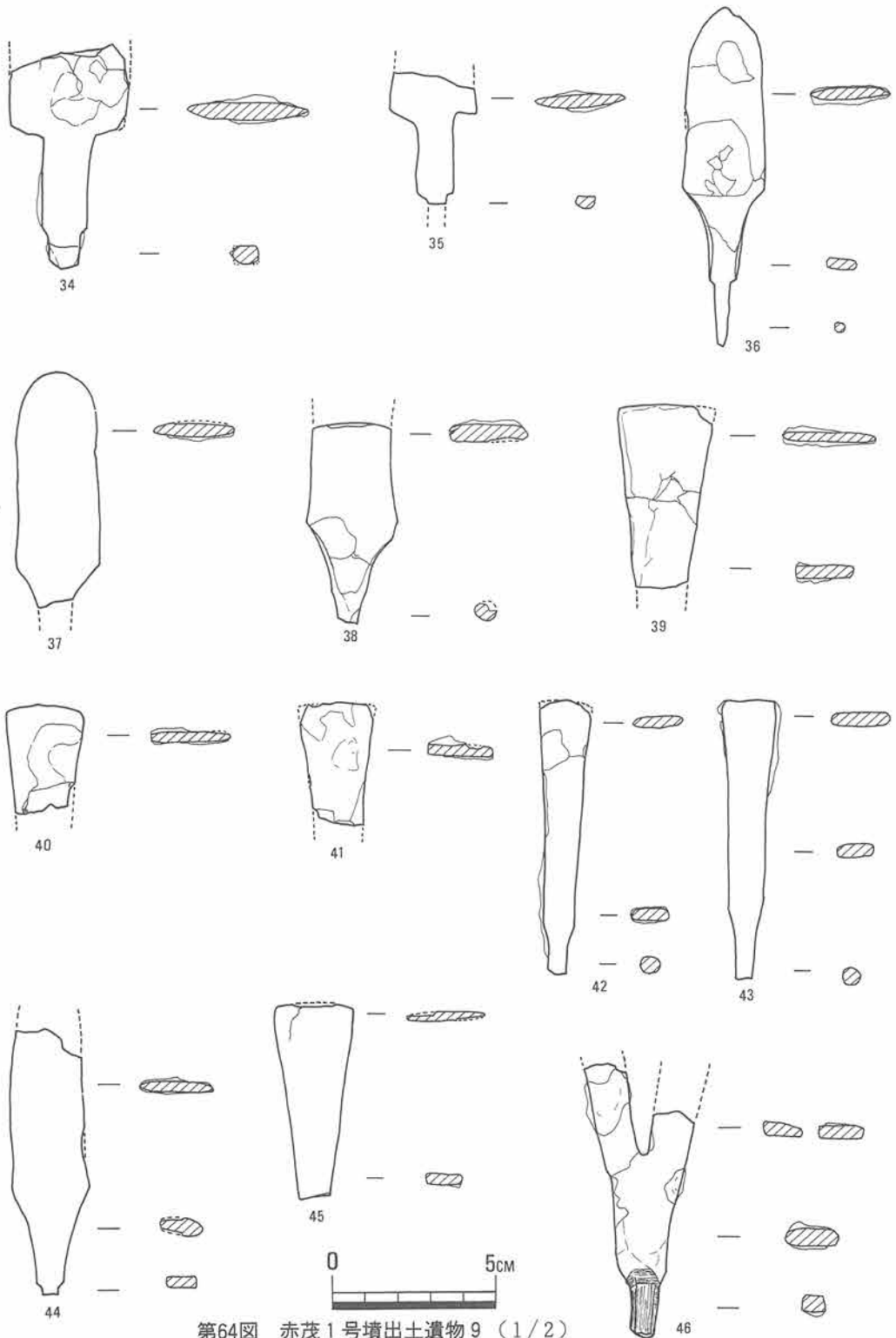
第62図 赤茂1号墳出土遺物7 (1/2)



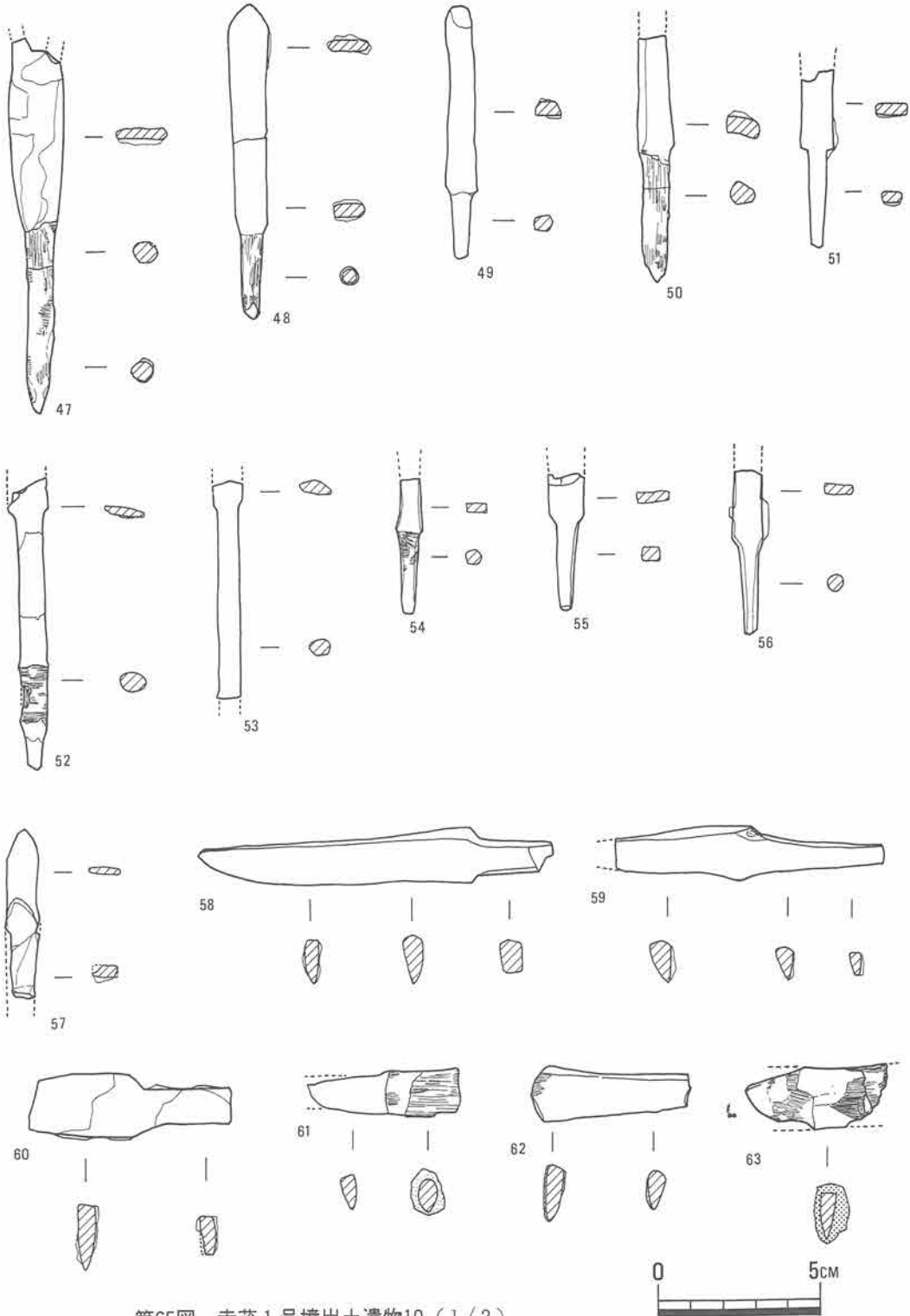
第63図 赤茂1号墳出土遺物8 (1/2)



谷尻遺跡（赤茂地区）

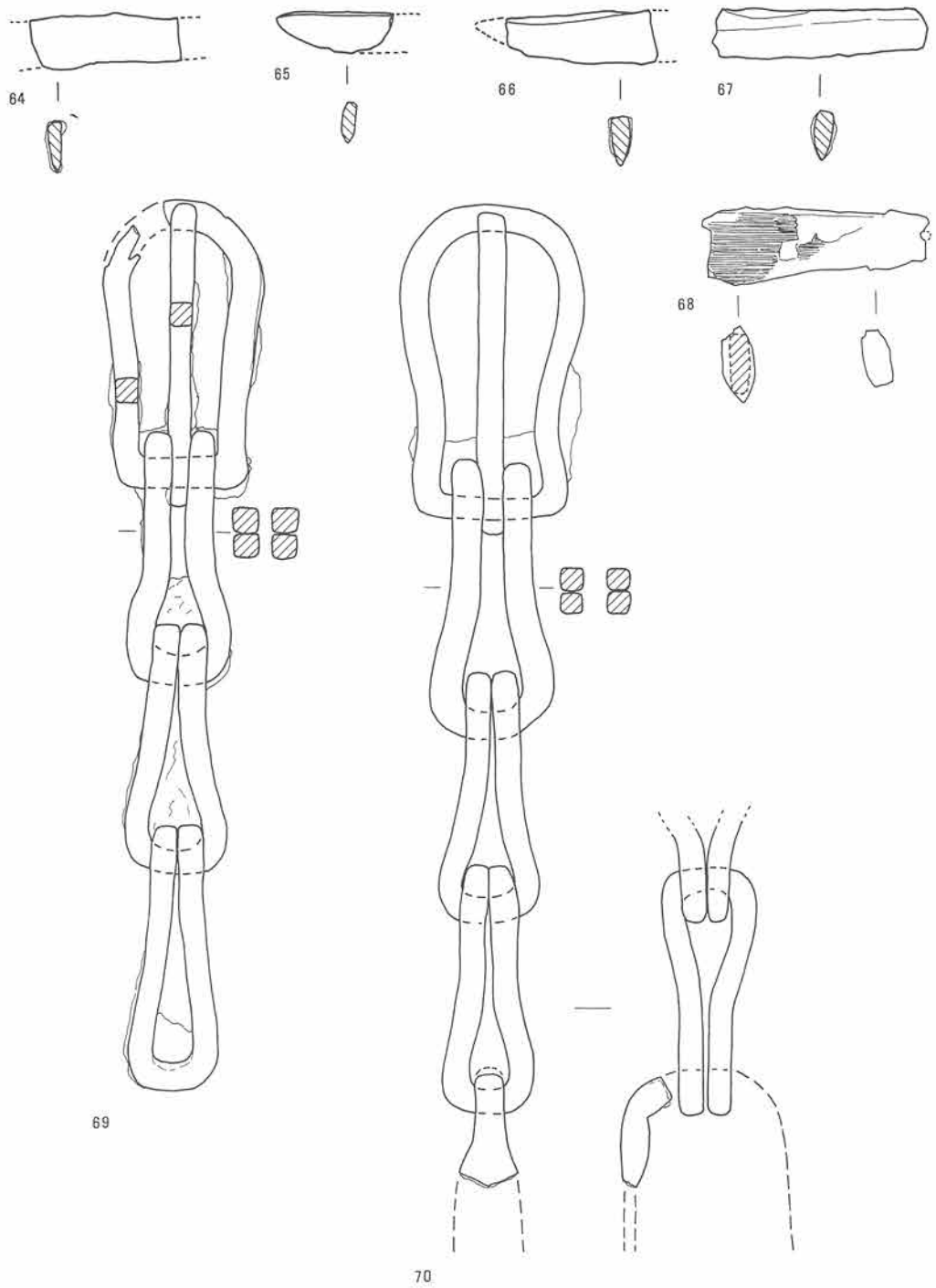


第64図 赤茂1号墳出土遺物9 (1/2)

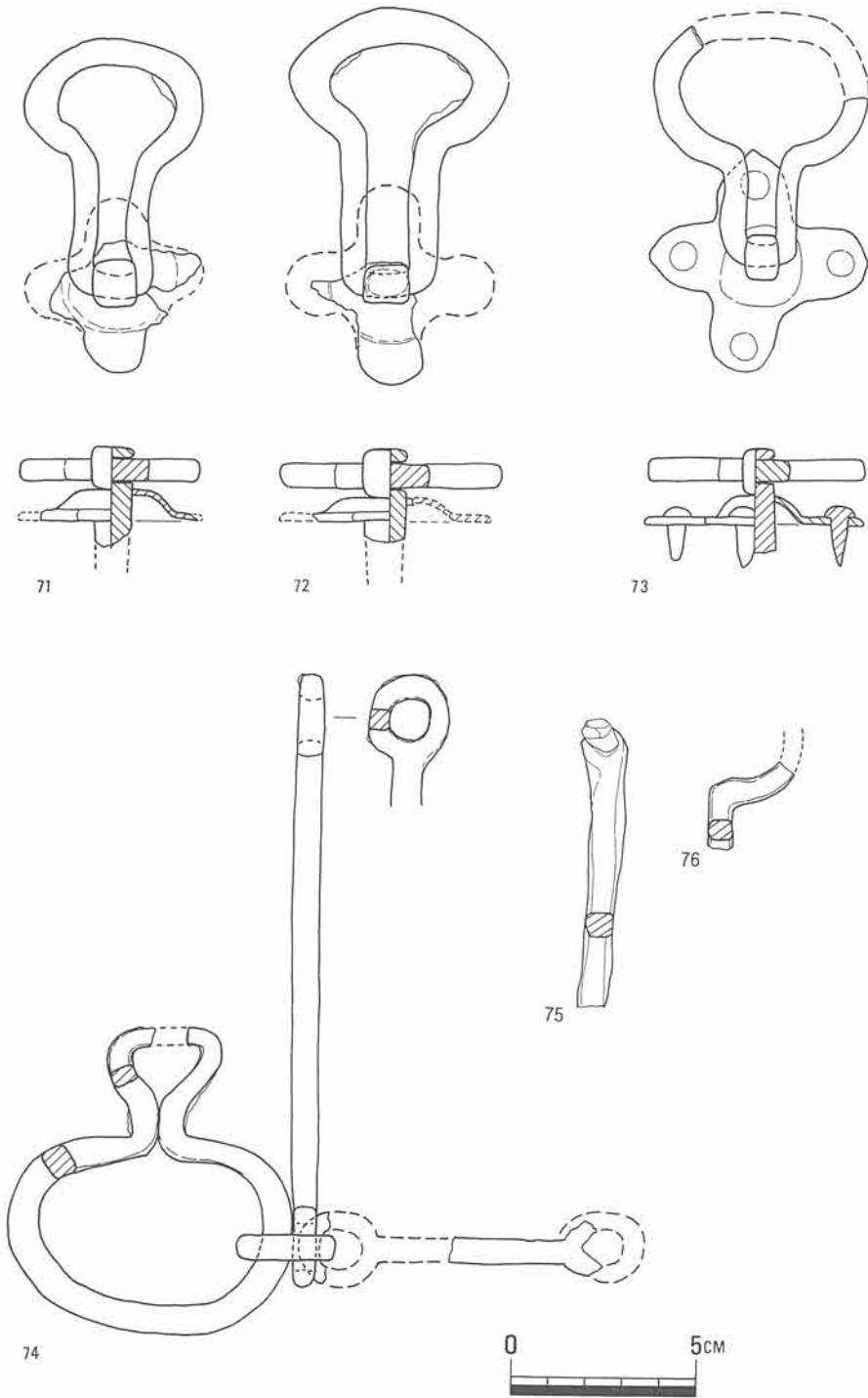


第65図 赤茂1号墳出土遺物10 (1/2)

谷尻遺跡（赤茂地区）



第66图 赤茂1号墳出土遺物11 (1/2)



第67图 赤茂1号墳出土遺物12（1/2）

刀（68） 大半は破損しており残存しているのはナカゴの一部である。したがって全容は形状、大きさともにわからない。右端は目釘穴の部分で折れており、穴は半分だけ形状を止める。また木質痕の付着も一部認められる。

馬具（69～74） 馬具は一応一式揃った状態で出土している。69・70は<sup>みずお</sup>鍔である。69は鉸具と三連の鎖からなる。70は鍔とその下方に鍔上部金具が付いたものである。鍔上部金具は破片が1片残っているだけで全体の形状は不明である。

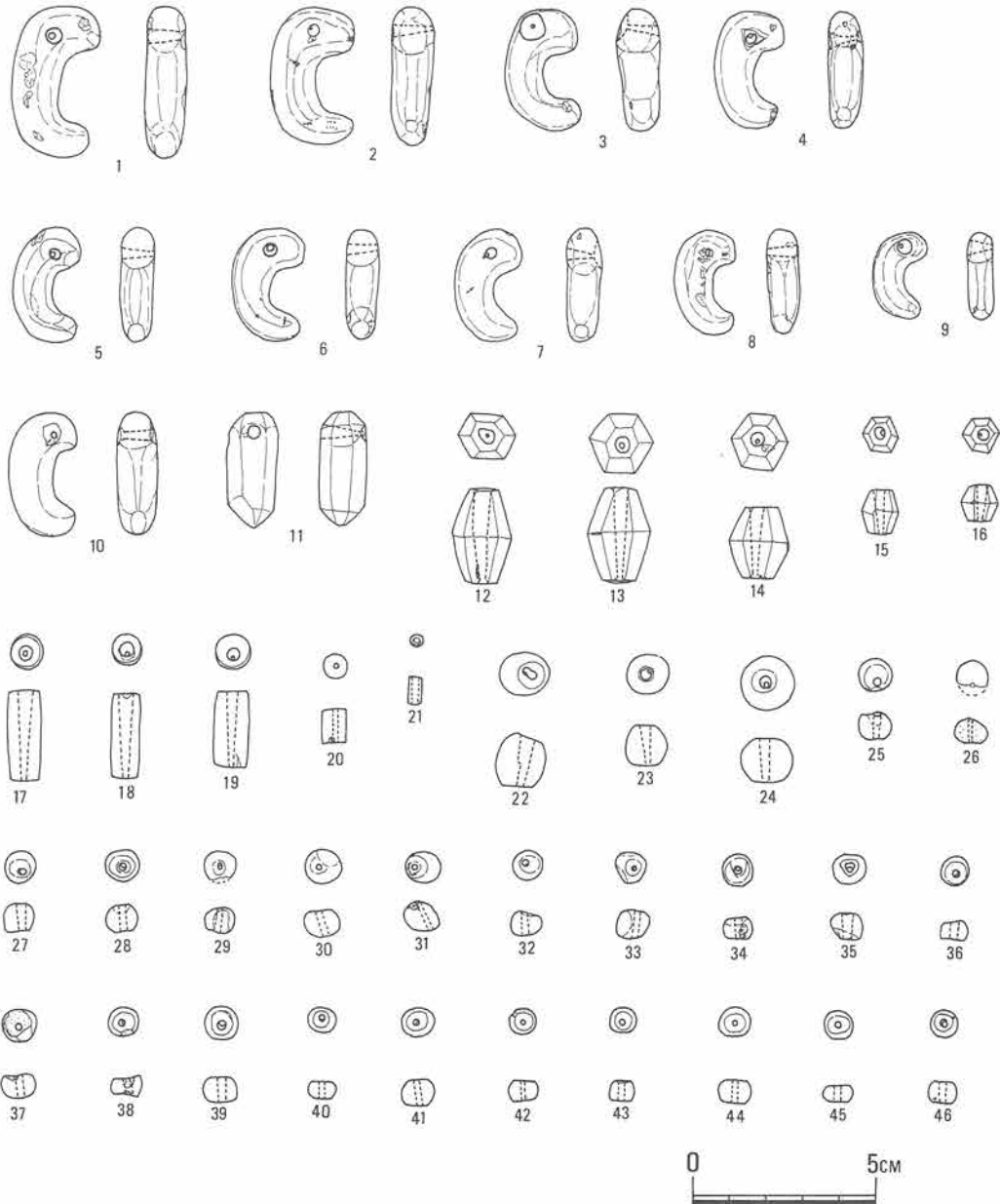
71・72・73は<sup>しおで</sup>鞍である。71と72は対になっており鞍の通常位置（磯の部分）に付く。座金具は4弁の花びら状を呈し中心部の径3cm余の部分は膨らむ形状で、一見すると辻金具のようである。鉸部は上部が自由に動くように環状にしたものであるが下部は欠損している。73は1点のみで対にはならない。座金具は71、72と同様に4弁の花びら状を呈し、中心部は直径約2cm部分が膨らむが花びら部分の先端は尖っている。鉸脚は上部を同じく環状にしたもので下部は欠損する。また鉸脚は座金具の中心部以外にも各花びら部分に付いており、長さ1.6cmと短く頭部分は半球状で先端は尖る。座金具から先には木質痕が付着しており、木製の鞍に取り付けた様子が伺える。管見によれば他に類例をみない。通常鞍は1対の場合が多いが、本例では3個出土しており73は鞍のどの部分に付くものか不明である。韓国新羅古墳出土例などに鞍が2対のものなどが出土しているが、日本での類例は少ない。ただ、栃木県新田大塚出土品（注1）に「海」の部分に環が付くものがあり、あるいはこれに類似するものかも知れない。

75は<sup>くつわ</sup>轡ある。轡も本来左右1対であるはずだが、鏡板と引手の一方が検出されていない。同類の轡は福岡県猿の塚古墳（注2）、旭1号墳（注3）、埼玉県黒田第1号墳（注4）、長野県薄町もみの塚（注5）、愛媛県相の谷8号墳（注6）、大分県飛山20号横穴（注7）、岡山県小中古墳（注8）、岐阜県大牧1号墳（注9）から出土しているが小中古墳例を除き引手壺が異なる。第67図76が別作りの引手壺としてこれに付く可能性もあるが引手壺は直線である例もあり、断定はできない。

#### （装身具類）

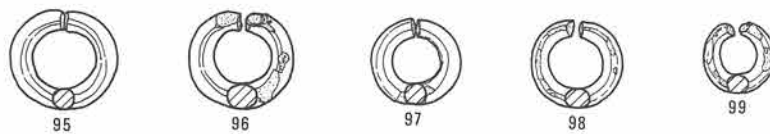
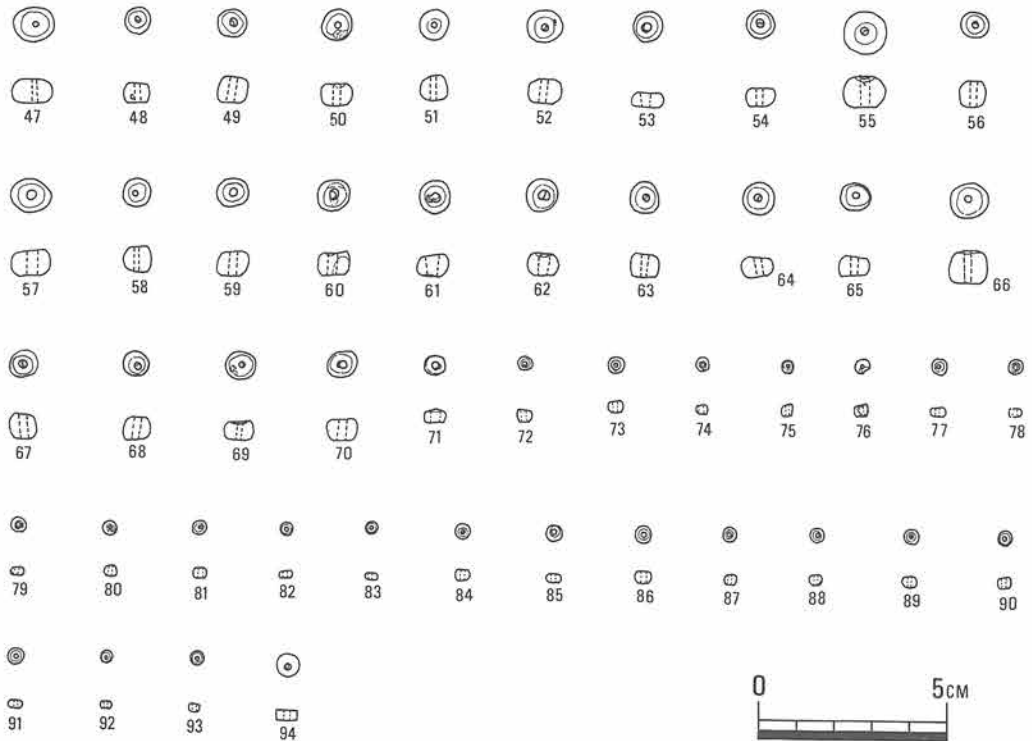
破片のため実測不可能だったガラス玉2個を除いて99個体を図示した。出土地点は排水溝内を除いては大多数が床面に近い攪乱層内より発見されたものである。1～10は勾玉で、10が水晶製である他はすべてメノウ製である。11は水晶製垂玉で結晶をそのまま利用したものである。12～16は切子玉で16が碧玉製である他はすべて水晶製である。17～21は管玉で、18は10の勾玉と並んで珍しい水晶製である。20がガラス製で紺色を呈す他は碧玉製である。22、23は棗玉である。特に22は緑白色を呈すものでヒスイ製の可能性があり、穿孔に一度失敗した痕跡が認められる。24～38は練玉である。外面は黒褐色、内面は茶褐色を呈す。39～93はガラス玉で、39～70は紺色を呈しやゝ大粒のものであり、71～93はコバルトブルーのビーズ玉である。94は滑石製の平玉である。

95～99は耳環である。95は表面がすべて剝離しているため金環か銀環かは不明であるが、96とはほぼ同寸大であり、96には表面に黄白色を呈する箔が残っていることから95も96同様金環の可能性は強い。97も銅地が出て箔は残っていない。98は金箔が非常に良好な状態で残っており、黄金色を呈す金環である。97と同寸大で1対の可能性が考えられる。99はやゝ小ぶりの金環で所々箔が剝離している銅地が露出しているが黄白色を呈し比較的残存状態は良い。



第68図 赤茂1号墳出土遺物13（1/2）

谷尻遺跡（赤茂地区）



第69図 赤茂1号墳出土遺物14（1/2）

5 小結

古墳破壊の時期

当古墳は調査前は茶畑の下にあり、その存在は全く知られていなかった。しかも石室の破壊状況に比べ出土遺物は豊富であったことから、比較的早い時期に破壊されたのではないかと考える。それは第4項中世の遺構遺物で述べる建物群は墳丘を取り除き周溝を埋めた平坦面上に築いていることからわかる。また当古墳の南西約1.5km離れた小字小松、小殿部落付近の水田は元禄年間に備中松山藩主水谷氏の時に整備されたという記録がある。（注10）この時期は日本各地で盛んに新田開発を行っている。赤茂地区についても工事の記録はないが新田開発を行ったと考えられるもので、遅くともこの時期には破壊されたと十分考えられる。

古墳築造の時期

石室内から出土した副葬品、特に須恵器を中心に古墳築造の時期及び追葬の時期について考察してみたい。

杯蓋は天井部をヘラケズリによる調整を施しているものとヘラ切り未調整のものに分かれる。それらの口径も10.2cm～16.0cmのものまで幅がある。また杯身も同様に底部の調整はヘラケズリを施したものとヘラ切り未調整のものがあり、口径も8.8cm～14.0cmまで大きさに幅がみられる。高杯についても長脚一段透かしのものから短脚無蓋のものまで5つのタイプに分かれる。杯蓋、杯身はそれぞれA～Fタイプに細分され、最も古いと考えられるのはAタイプで、最も新しいと考えられるのはFタイプである。このことから古墳築造の年代は6世紀の後半と推定され、その後7世紀の初頭まで追葬が行われたと考えるが、追葬の回数については明確にしえない。（森田）

注1 後藤守一「古墳発掘品報告」帝室博物館 昭和12年

注2 福岡市教育委員会「和白遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告第18集 1971.3

注3 注2に同じ

注4 黒田古墳発掘調査会「黒田古墳群」 1975.3

注5 本郷村教育委員会「信濃浅間古墳」 1966.4

注6 西田栄他「愛媛県今治市近見相の谷8号墳発掘調査概報」 1972.9

注7 大分県教育委員会「飛山」大分県文化財調査報告第28号 1973.3

注8 岡山県教育委員会「小中古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7（中縦4） 1985.3

注9 名古屋市博物館「特別展 古墳時代の馬具」出品目録 1985.7

注10 上房郡誌

注11 陶邑



### 3 奈良時代の遺構・遺物

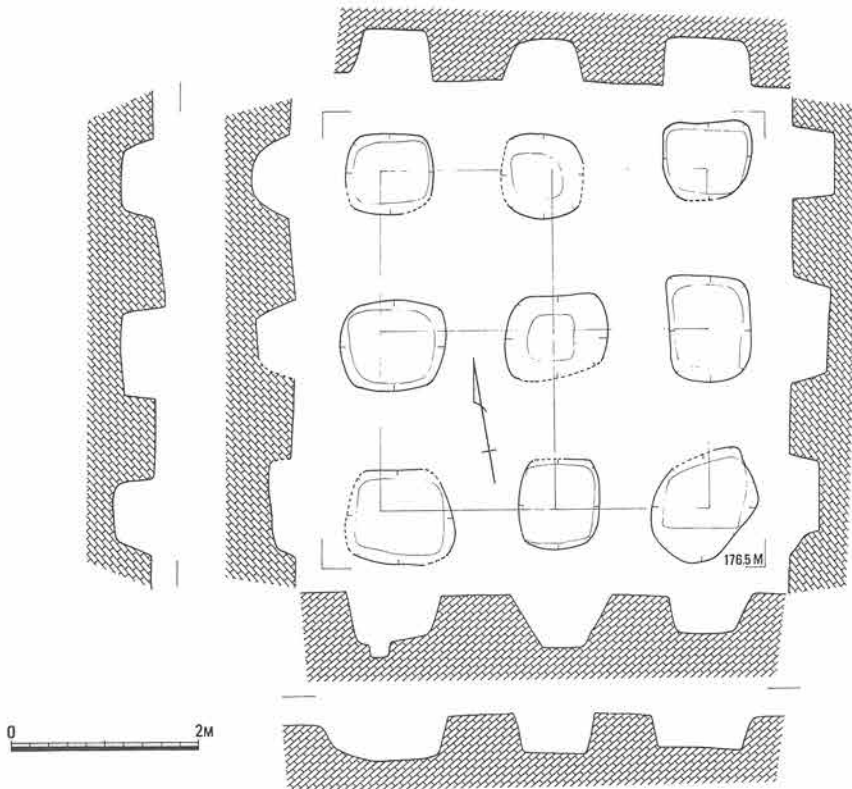
#### (1) 建物

##### 建物36（第70図、図版19-1）

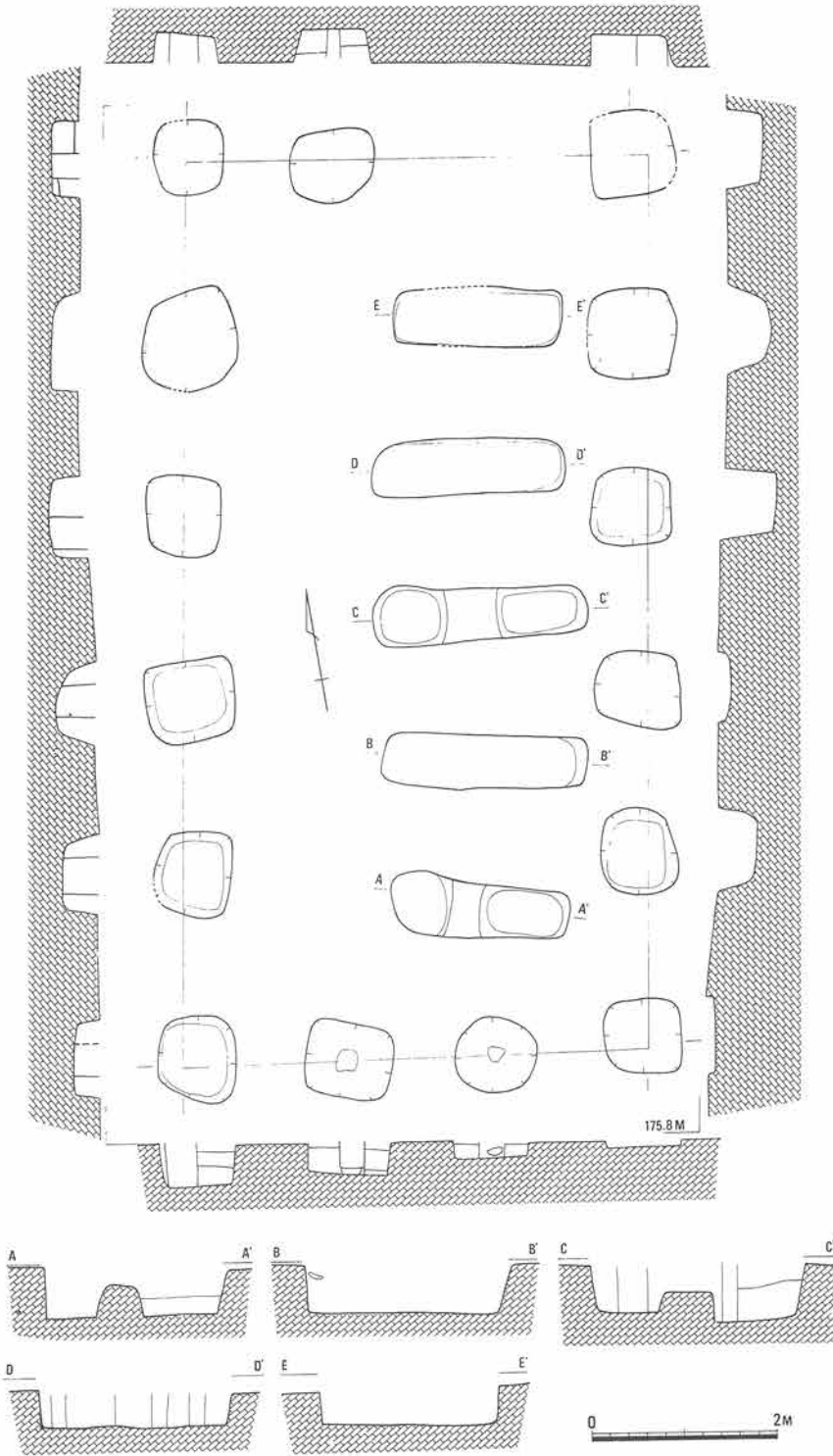
2×2間の総柱の建物である。建物の規模は、南北方向3.60m、東西方向3.45mを測る。柱穴の掘り形の平面形は、一辺1m程の方形を呈し、検出面からの深さ30～60cmを測る。西側中央の柱穴で建物の重量により沈下したと考えられる柱痕跡を検出した。建物の長軸の方向はN-11°-Eを示す。

##### 建物42（第71図、図版19-2）

桁行5間、梁行3間の建物である。南側6mに位置する建物1と東側柱穴列が並び、併設されていたと考えられる。北側柱穴列東から2本目は検出できなかった。柱掘り形は一辺約1mの隅丸方形ないし方形プランを示すが、いびつなものもありやゝ不揃いである。柱痕跡は検出面では確認できなかったが、断面では掘り形埋土が黒灰色土と基盤層の黄色土の混成土（中には部分的に版築状を呈す柱穴も認められた）で形成されているのに対して、柱痕跡は黒灰色の単一土となっている。しかし、東側柱穴列の内、北東隅丸の柱穴を除く5本の柱穴は、土層の堆積状態が前述した他の柱穴列のように明確でないために柱痕は確認されなかった。柱間距離は、南側梁行



第70図 建物36（1/80）



第71図 建物42 (1/80)

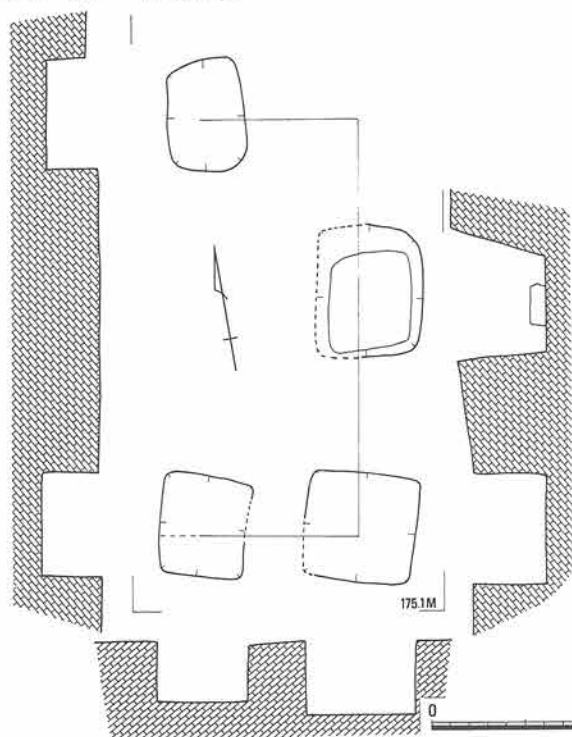
谷尻遺跡（赤茂地区）

では西側1間分が1.85mを測り、ほかは1.50~1.65mを測る。桁行では中央柱穴間で1.80mを測りその外側は1.95mを測り、中央柱穴間が狭く外側2間は広がる。この柱穴に囲まれるようにして布掘りの遺構を検出した。幅60cm、長さ210cmを測り、平面形は隅丸長方形を基本とするが若干いびつなものもある。中には、掘り形中央を掘り残して土堤状に穴を二分割した遺構が2ヶ所において確認された。5ヶ所の遺構の内、南から3、4番目の遺構からは、それぞれ柱痕跡が確認された。南から3番目の遺構の断面観察（C-C'断面参照）では、中央の土堤を境としてその西側掘り形の両端ならびに東側掘り形西端部において、黒灰色を呈する径16cmの柱痕跡が確認された。東側掘り形の東端部においては柱痕跡は検出できなかったが、西側の状況から推察すれば、東端部にも柱が建てられていたことが考えられる。出土遺物は埋土内より少数の須恵器片を検出した。いずれも奈良時代の杯である。

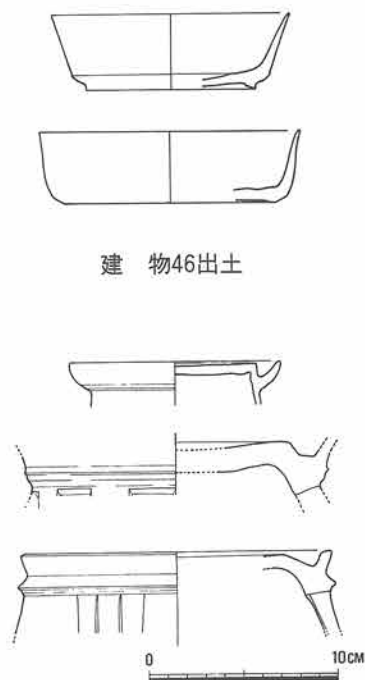
建物47（第72・73図）

建物36・42より西に23m離れて検出した。梁行2間、桁行は調査区外に延びるため不明だが1間分検出した。柱穴は一部検出できない個所があった。梁行中央の柱穴底より根石と考えられる平坦な石を検出した。柱穴の平面形は一辺約1.20mの方形を呈する。低位台地の辺端部にあたり削平をあまり受けなかったのか、検出面からの深さ1mを越える柱穴もあった。建物の長軸方向はN-80°-Wを示す。

（岩崎）



第72図 建物47（1/80）



建物46出土

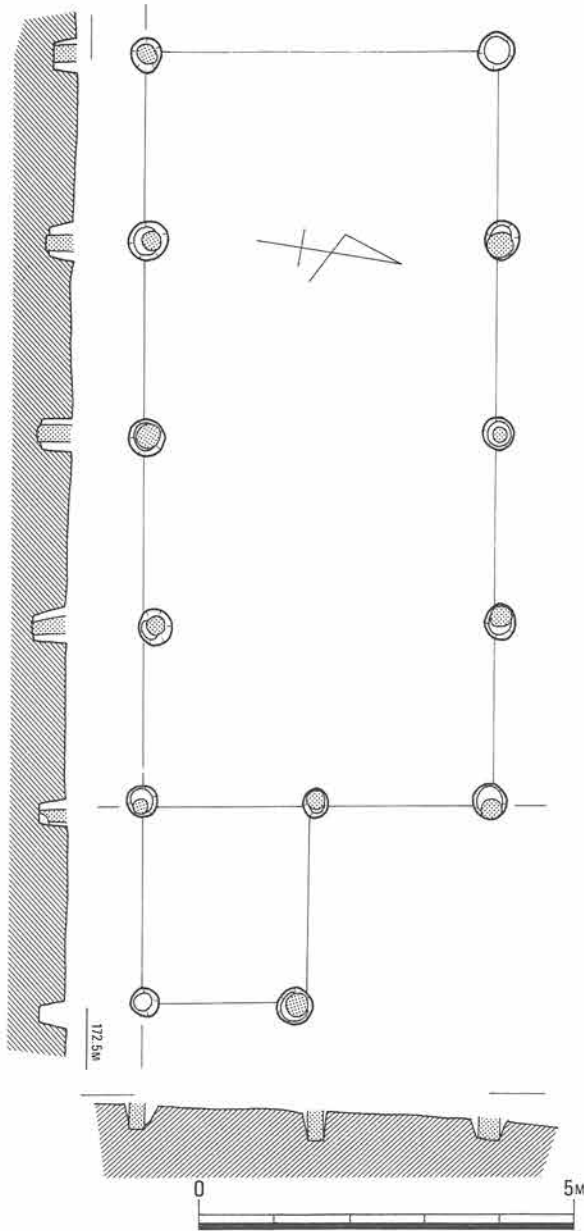
第73図 建物・包含層出土遺物（1/4）

#### 4 中世の遺構・遺物

##### (1) 建物

##### 建物1（第74図、図版20-1）

H-1区、1号住居址の上層に位置する。主軸を東西方向にもち、桁行4間、梁行1間の主



第74図 建物1（1/100）

屋に1間×1間の付属部分のつくものである。柱穴は暗茶褐色粘質土を掘り込んでおり、大部分の柱痕が残っていた。規模は東端の付属部分を含めて桁行12.65m、梁行4.60mを測る。

##### 建物2（第75図）

建物1の6m東方に位置し1間×1間の建物である。桁行3.80m、梁行1.95mを測り柱は4本とも整然と並んでいる。主軸は東西方向であり、建物3・4・8とほぼ同じ方向に向いている。

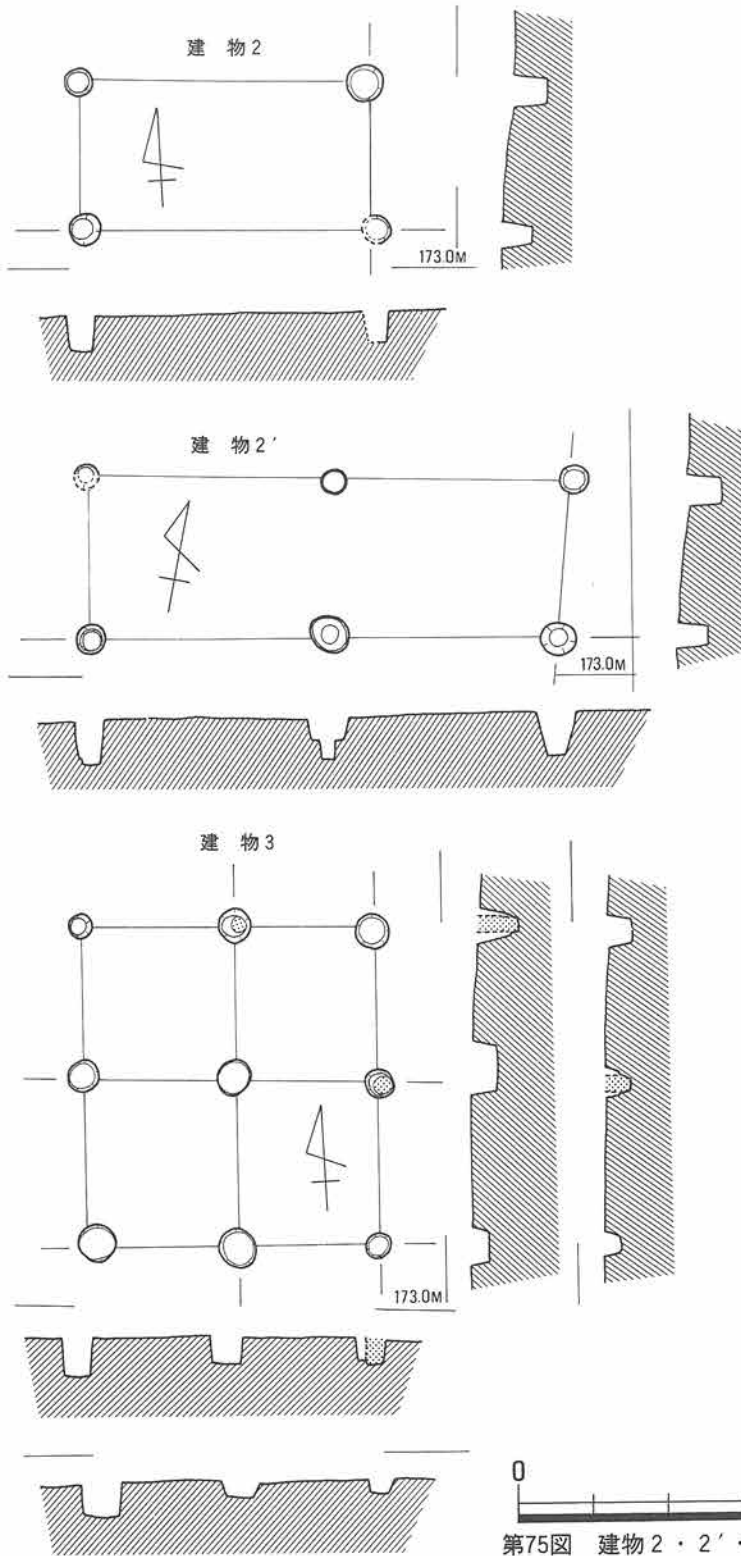
##### 建物2'（第75図）

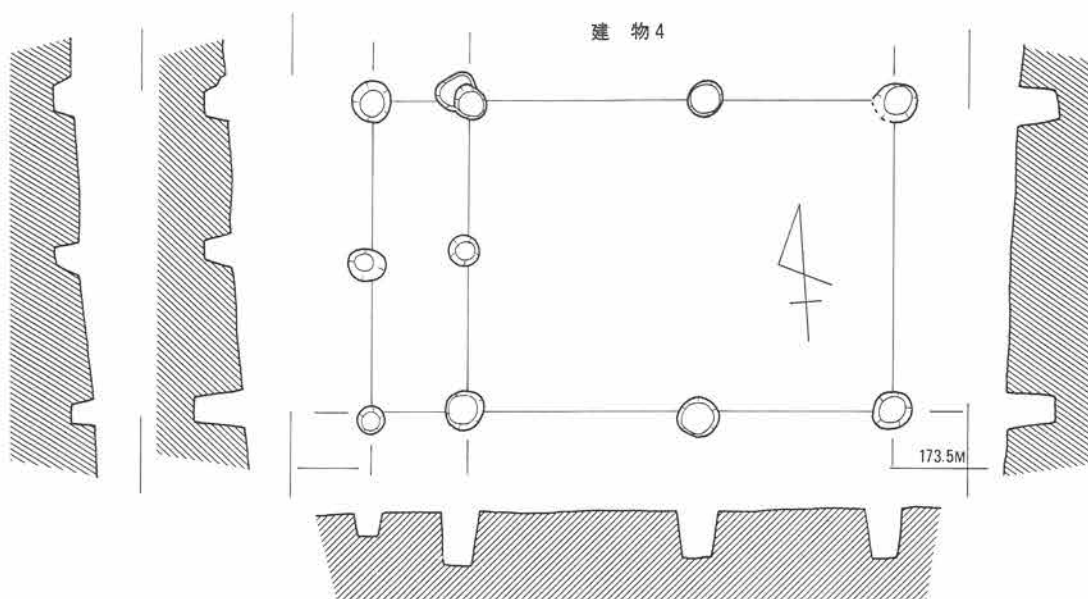
建物2と西側半分が重複する位置にある。桁行2間、梁行1間の建物で、規模は桁行6.20～6.45m、梁行2.10mを測る。主軸は東西方向であるが建物2よりやや北へ振っており、建物1とほぼ同じ方向である。

##### 建物3（第75図）

I-1区、建物2・2'の南方1.5mの位置に隣接している1×1間の総柱の建物である。長軸方向をほぼ真北にとるもので南北4.20～4.30m、東西3.90mを測り、柱はかなり整然と並んでいる。柱痕は一部について残存していたがほとんどは消失している。

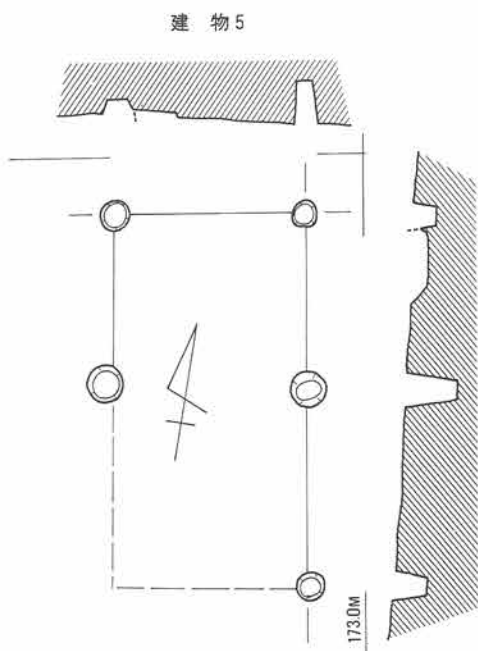
谷尻遺跡（赤茂地区）





建物4（第76図）

建物3の6m東方、建物8の7m西方に並行する位置にある。東側の梁行の真中の柱は未検出であるが桁行2間、梁行2間で桁行の西側に廂をもつ建物である。桁行の柱間距離は2.50～3.15mであるのに対し、廂は1.25mである。規模は廂部分を含めて桁行7.00m、梁行4.30mを測る。



建物5（第76図）

I-1区、建物4のすぐ北に隣接し、他と異なって南北方向に主軸をもつ建物である。桁行2間、梁行1間であるが、南西隅の柱は後世の土壌により消失している。建物5は主軸方向を同じくするものはないが、建物1・2'とは直交する。規模は桁行5.00m、梁行2.50mを測る。

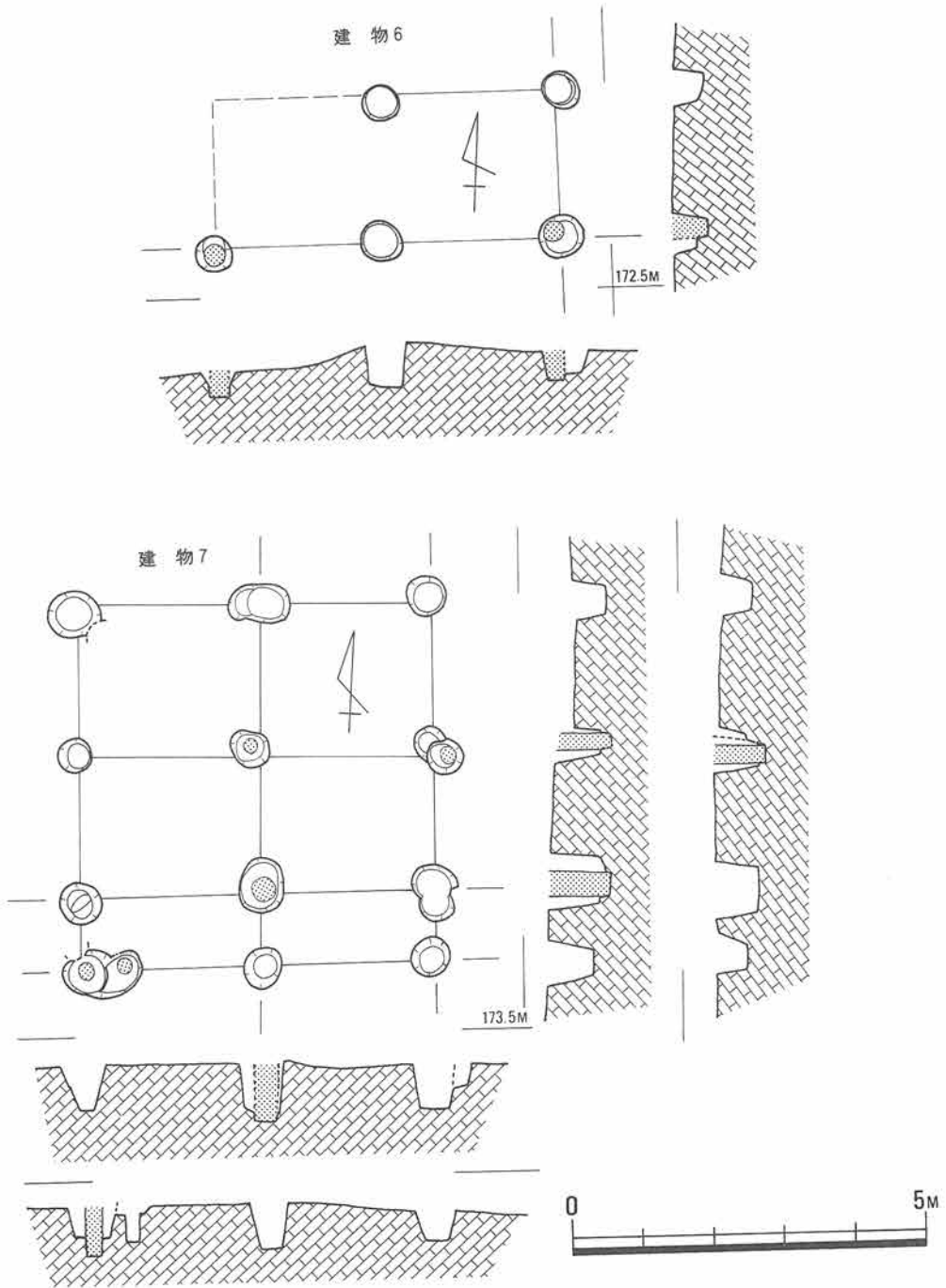
建物6（第77図）

I-1区とJ-1区にまたがって調査区の北端に位置する。そのため北西隅の柱穴は未検出である。桁行2間、梁行1間の建物で主軸を東

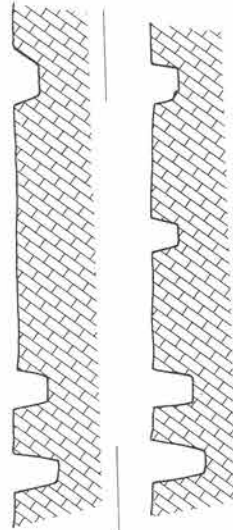
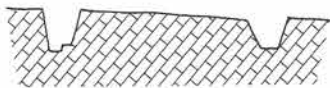
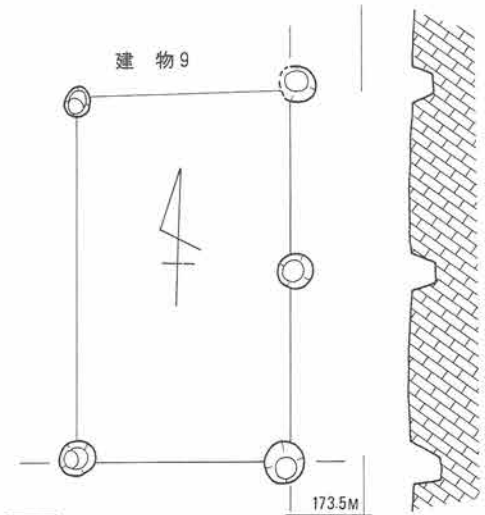
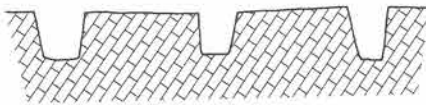
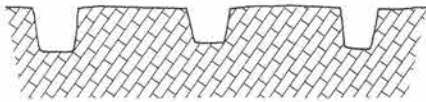
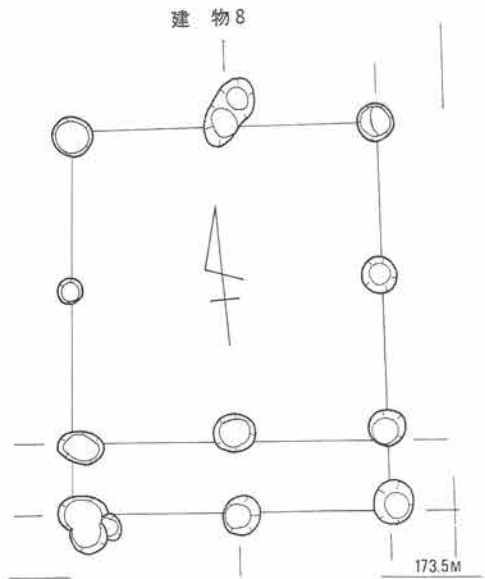


第76図 建物4・5（1/100）

谷尻遺跡（赤茂地区）



第77図 建物 6・7 (1/100)



西方向に向けている。建物7・建物10と主軸方向を同じくし、建物9とは主軸方向が直交する。建物の規模は桁行4.80m、梁行2.00mを測る。

建物7（第77図）

建物6の7m南方に位置し、主軸を東西方向に持つ総柱の建物である。桁行2間、梁行3間で南側に廂を持つ建物である。

規模は廂を含めて桁行5.00m、梁行5.25mを測るもので、ほぼ正方形に近い。建物6・建物10と主軸方向を同じくする。

建物8（第78図）

建物7と建物9に挟まれた位置にあり、主軸は南北方向に向いている。建物7と同様に南側に廂を持つ桁行3間、梁行2間の建物である。規模は廂部分を含めて桁行5.25m、梁行4.00～4.20mを測る。主軸方向を同じくするものは建物2・建物3・建物4がある。

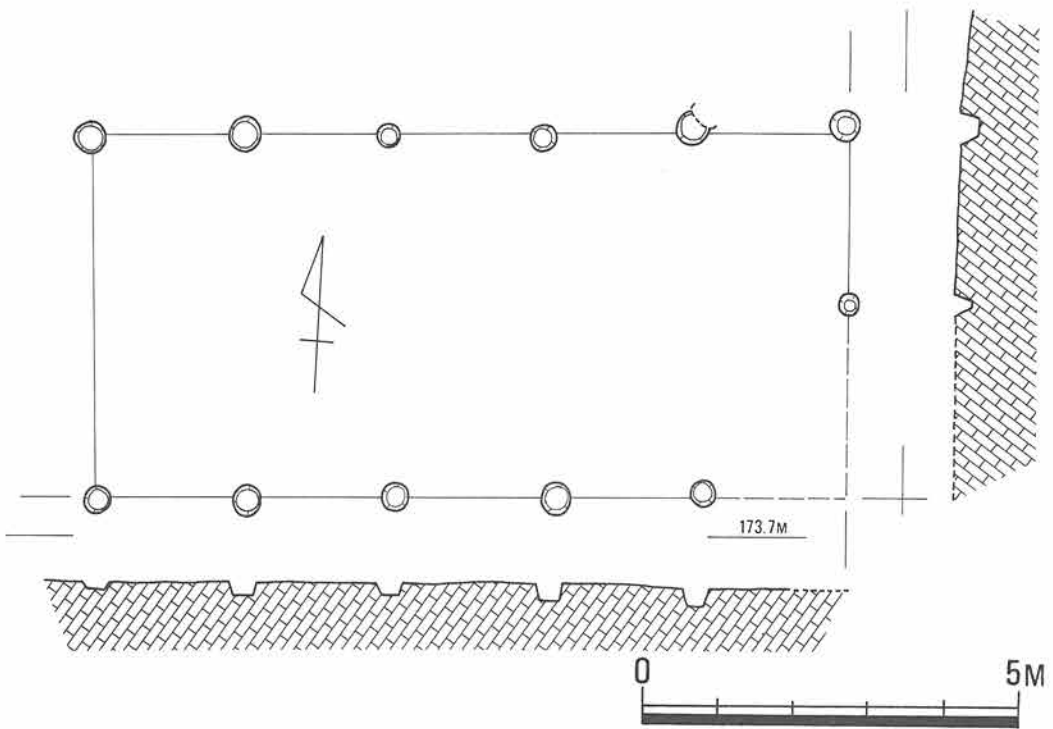
建物9（第78図）

J-1区、建物8の東隣りに位置し、桁行2間、梁行1間の建物である。規模は桁行5.00m、梁行2.75mを測り、主軸を東西方向に持つ。同一の主軸方向のものは無いが建物6・7・10とは直交する。



第78図 建物8・9（1/100）





第79図 建物10（1/100）

建物10（第79図）

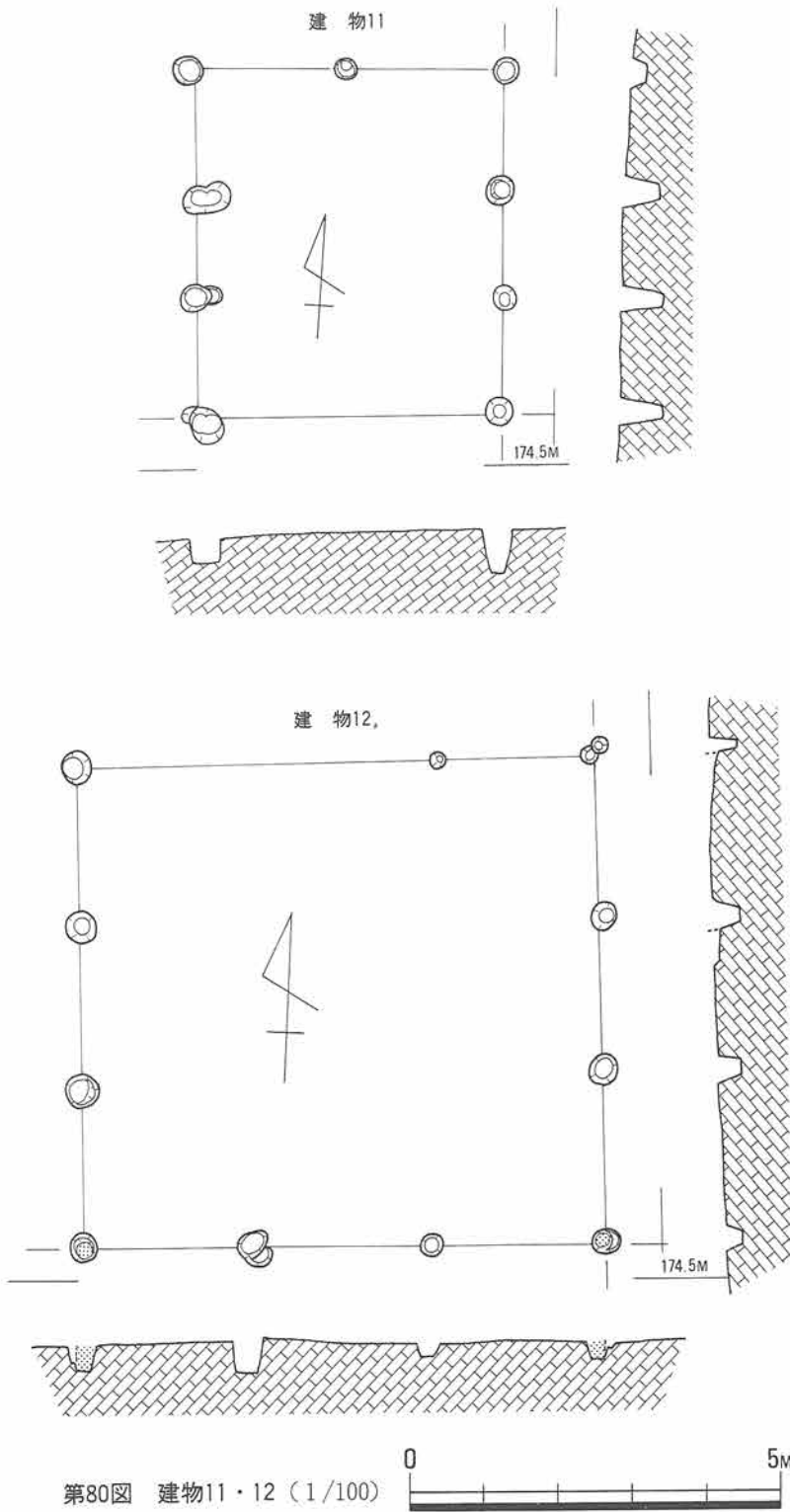
J-1区とJ-2区にまたがって建物8の南に隣接する位置にある。主軸方向を東西に向け、桁行5間、梁行2間の細長い建物である。建物10は丘陵の東端に近く検出した柱穴はいずれも削平をうけて浅く、南東隅の柱穴は検出できなかった。規模は桁行10.00m、梁行4.70mを測る。建物6・7と主軸方向を同一にし、建物9とは直交する。

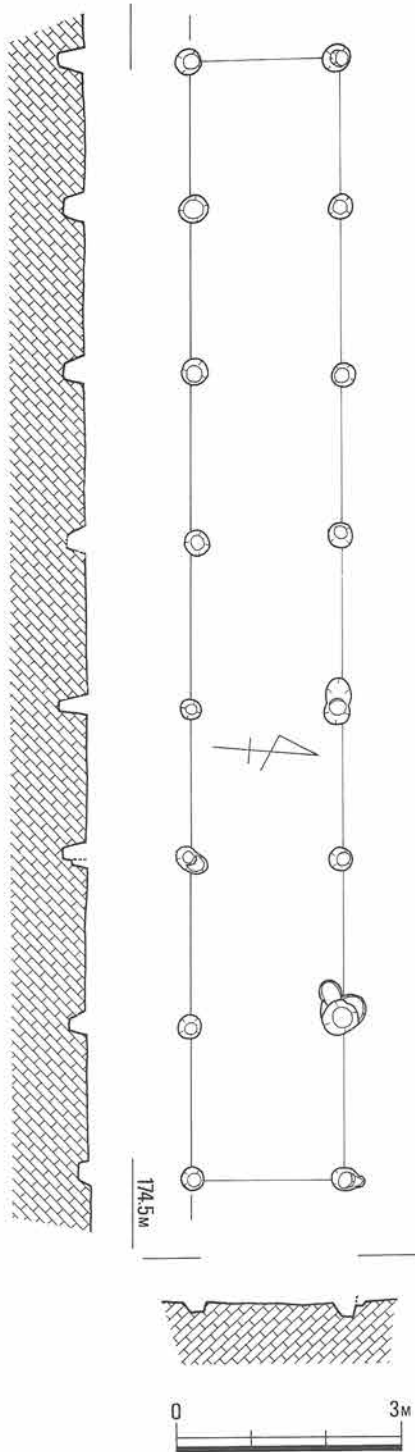
建物11（第80図）

H-3区に位置し、南北に主軸方向を持つ建物である。桁行3間、梁行2間でその規模はそれぞれ4.50mと4.15mを測り、正方形に近い形状の建物である。建物14・18・21・22と主軸方向は平行であり、建物12・16とは直交している。

建物12（第80図）

建物11の南に隣接しH-3区とI-3区の間位置する。主軸方向は東西に向いていると思われる3間×3間でその規模もそれぞれ7.10m、6.60mを測りほぼ正方形に近いプランである。建物16と主軸方向を同じくし、建物11・14・18・21・22とは直交する。





第81図 建物13 (1/100)

建物13 (第81図)

I-3区に位置し、桁行8間、梁行1間の細長い建物で、それぞれの規模は14.90m、2.05mを測る。主軸方向はほぼ東西を向いているが、周囲の建物とは多少方向が異なっており主軸を同一にするものは他に無い。また柱穴内に埋まっていた土は灰褐色土でまだ腐蝕の進んでいない土壌であり、建物群の中では新しいものと考えられる。

建物14 (第82図、図版21-1)

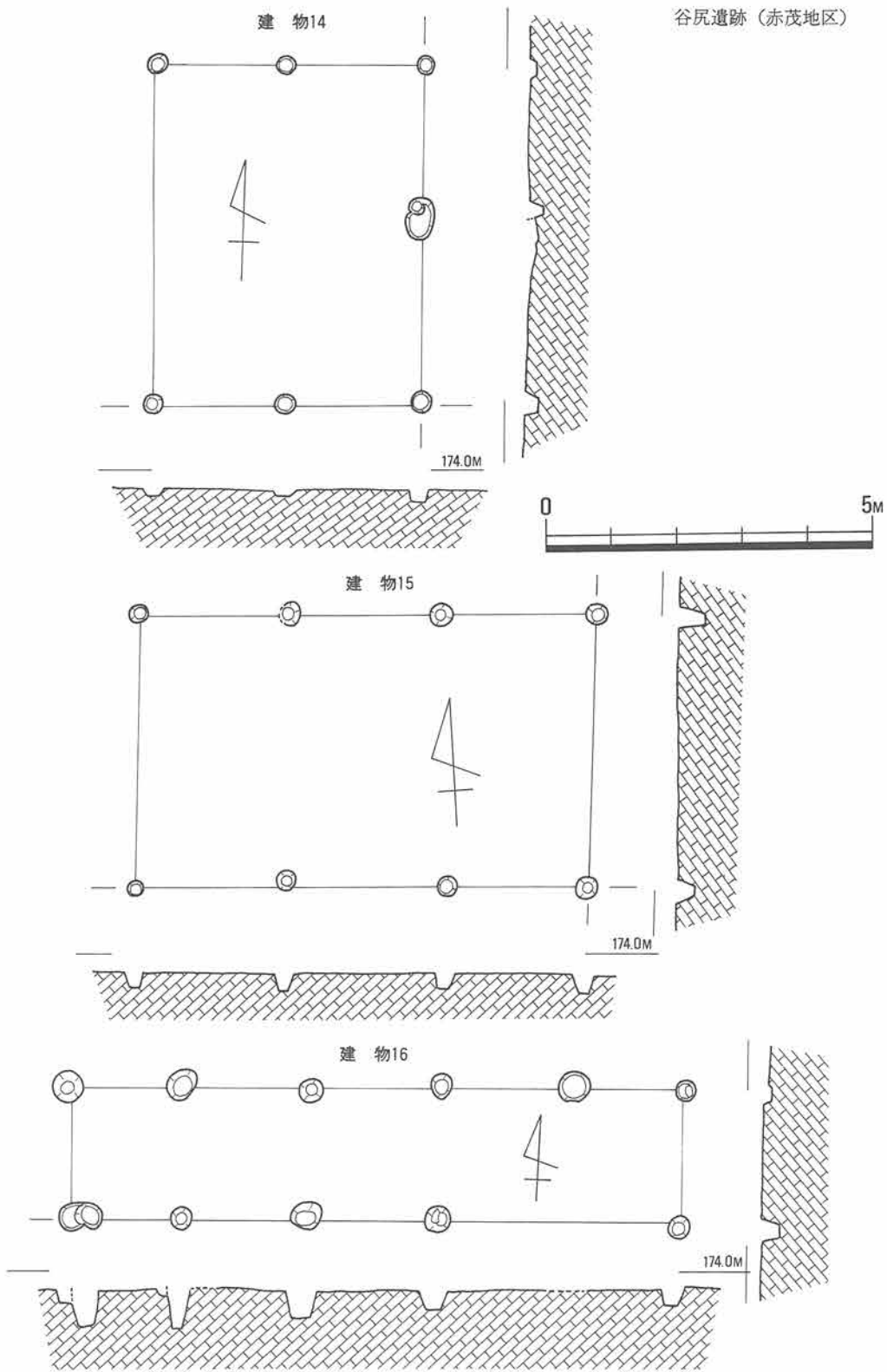
I-3区に位置し、建物13と重複している。建物14は桁行2間、梁行2間でそれぞれ5.20m、4.10mを測る。建物の主軸は南北方向に向いており、建物11・18・21・22と同一方向である。建物12・16とは直角する。

建物15 (第82図)

I-3区、建物14の北隣りに位置する、桁行3間、梁行1間の建物である。規模はそれぞれ6.95m、4.20mを測る。主軸方向は東西を向いており建物12と同一方向である。桁行の柱間距離は約2.30mに対し梁行は4.20mとほぼ2倍もの長さがあるにも拘らず、柱穴が検出されなかったのは、梁行の中間の柱は掘立柱ではない柱であった可能性が考えられる。恐らく礎石は置かれていたであろうが、耕地化される際に除去されたと考えられる。

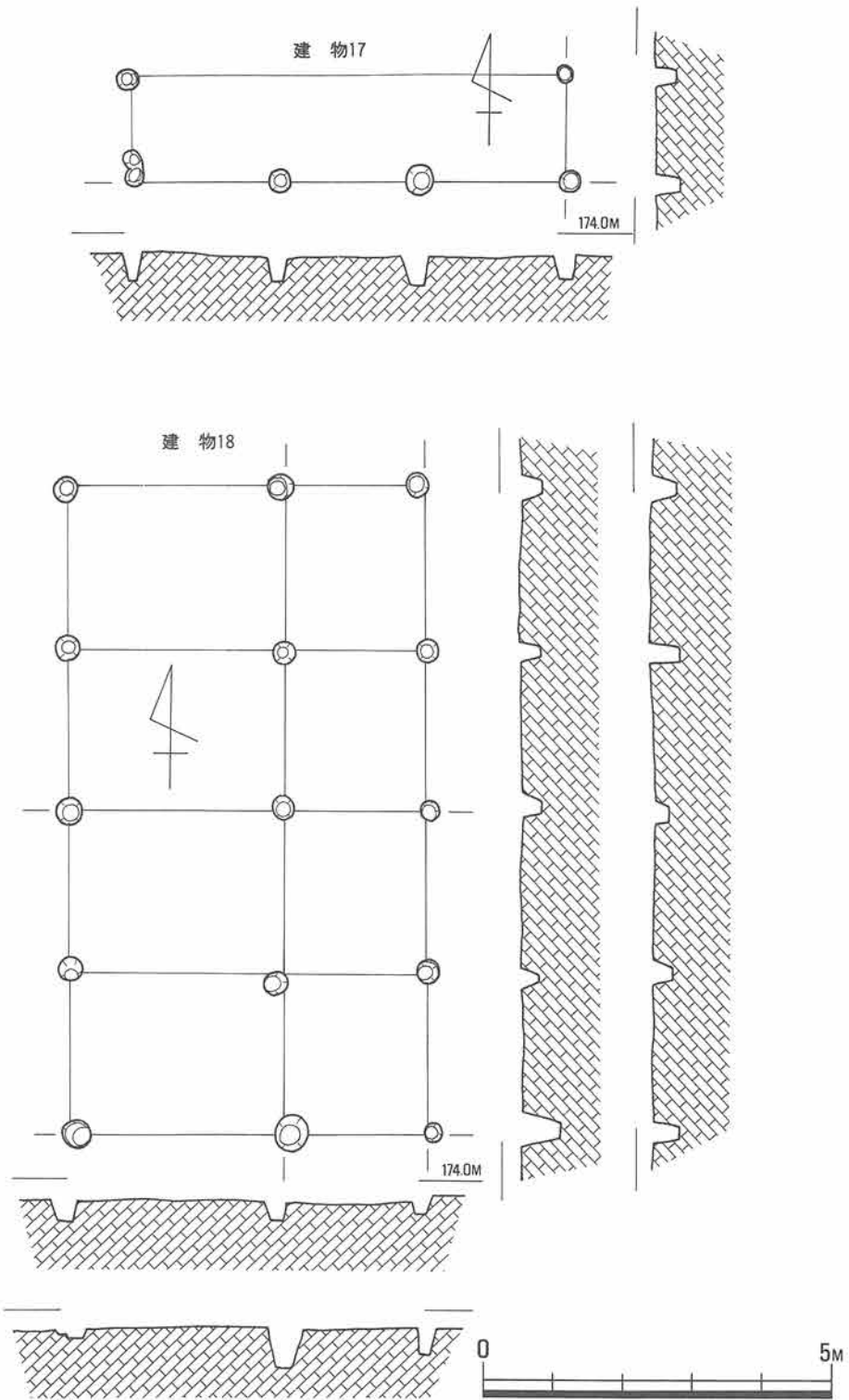
建物16 (第82図)

I-3区、建物11と建物17に挟まれた位置にある。桁行5間、梁行1間で、それぞれ9.45m、2.00mを測る細長い建物である。主軸方向は東西方向に向いており建物12と同一方向である。桁行の南側の柱穴は新しいピットによって掘削

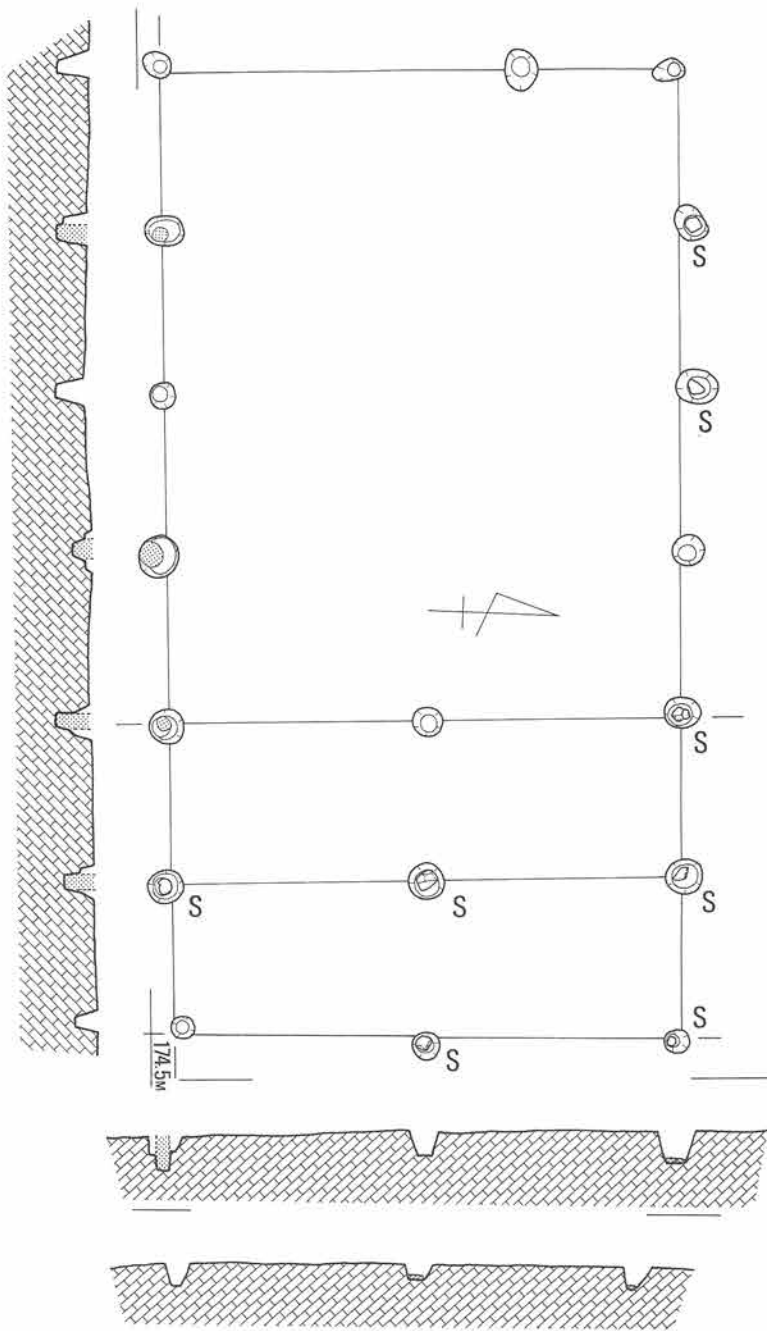


第82図 建物14~16 (1/100)

谷尻遺跡（赤茂地区）



第83図 建物17・18 (1/100)



第84図 建物19（1/100）

## 谷尻遺跡（赤茂地区）

されており検出することはできなかった。

### 建物17（第83図）

I－3区の北東端に位置し、建物16の東に隣接するような位置にあって同じく東西方向に主軸線に向けているが2つの建物はわずかに方向がずれている。桁行3間、梁行1間で規模は6.25m、1.50mである。桁行の北側の中間の柱は検出されていないが、押し立てた柱であるか否かは確認できない。

### 建物18（第83図）

J－3区、建物15の東側に位置する。桁行4間、梁行2間で、規模はそれぞれ9.35mと5.00mを測る。建物の主軸方向は南北に向いており、建物11・14・18・21・22と同一である。またこの建物の構造は総柱であるが、梁行の中間柱の位置は真中より少し東に寄っており、柱間距離は3.05mと2.05mである。

### 建物19（第84図）

J－3区にあり建物群中では最も南に位置する一つである。建物の主軸は東西方向に向いており、建物20と同一方向である。桁行6間、梁行は2間又は3間と思われるが不明瞭である。規模は13.00mと6.70mを測る大きなもので、その広さも87.1㎡あり、この建物群中で最も大規模なものである。また柱穴も他と比較して直径、深さともに大きいばかりでなく、底部には15～25cm大の根石を置いてある柱穴も検出されておりかなりの重量に耐えうる構造であることがわかる。梁行の柱の数については西側と東側では位置が異なる。東側の柱穴は真中に位置するが西側のものは真中より北に寄っており、こちら側は押し立てた柱であったかもしくは入口であるために間隔を広くとったのではないかと考える。

### 建物20（第85図、図版21－2）

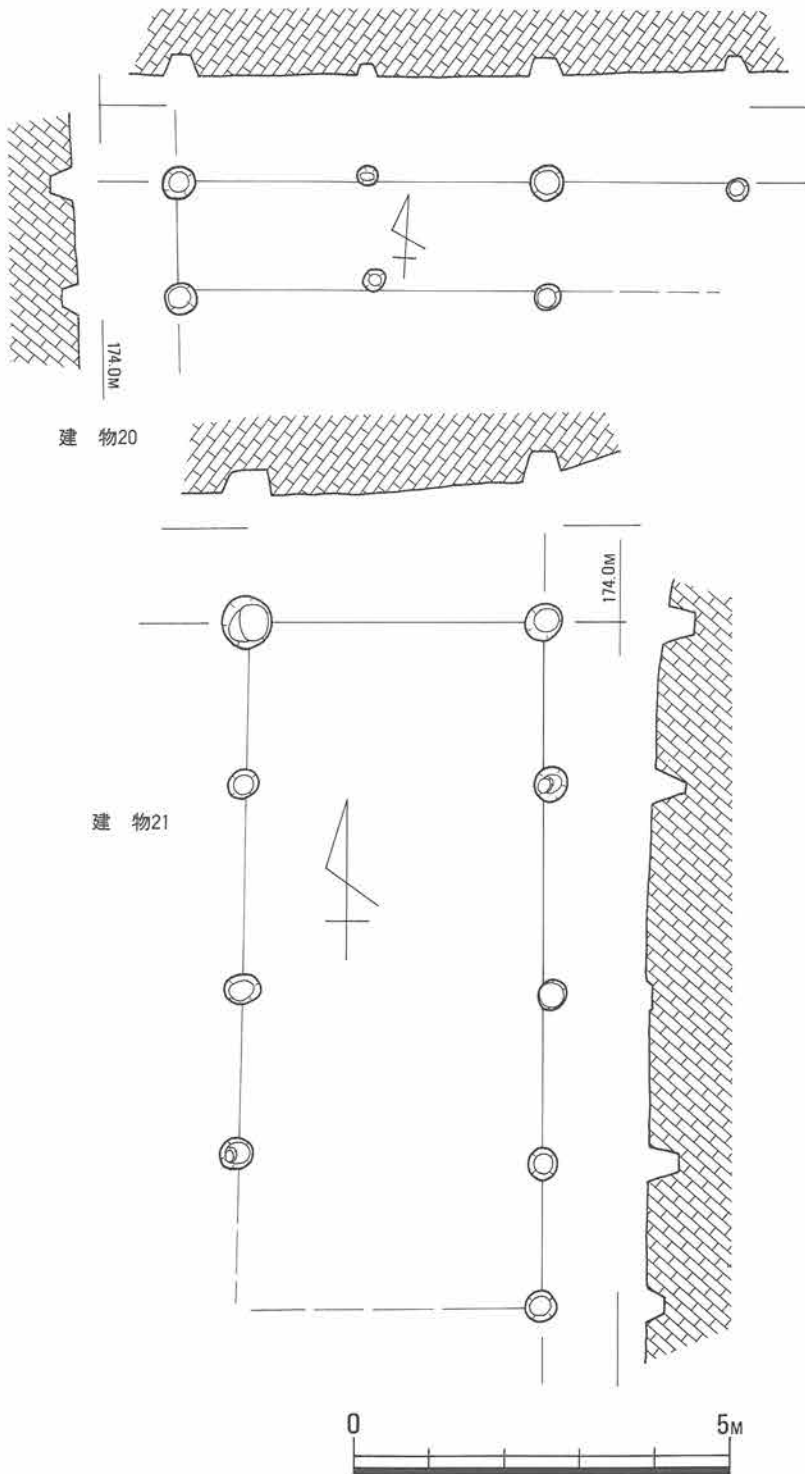
J－3区、建物19の北側に隣接する位置にある。桁行3間、梁行1間でその規模はそれぞれ7.45mと1.55mを測る小さい建物である。主軸方向は東西を向いており建物19と同一である。柱穴の南東端の一つは検出できていない。

### 建物21（第85図）

K－3区、溝1つ隔てて建物19の東側に位置し、この建物群中最も東に寄っている。桁行4間、梁行1間で、その規模はそれぞれ9.10m、4.00mを測る。主軸方向は南北を向いており、位置は少し離れるが建物11・14・18・22と同じである。

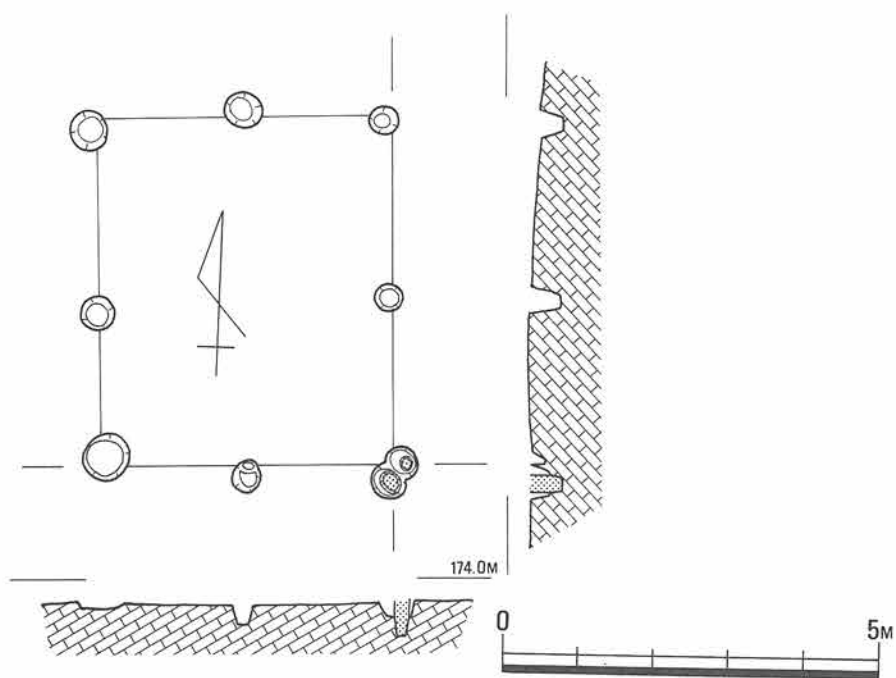
### 建物22（第86図）

J－2区と3区にまたがって位置する。主軸方向は南北に向き、桁行2間、梁行2間の建物である。その規模はそれぞれ4.60m、3.80mを測る小規模のものである。建物22は建物18の北隣に位置し、主軸方向は同一である。



第85図 建物20・21 (1/100)



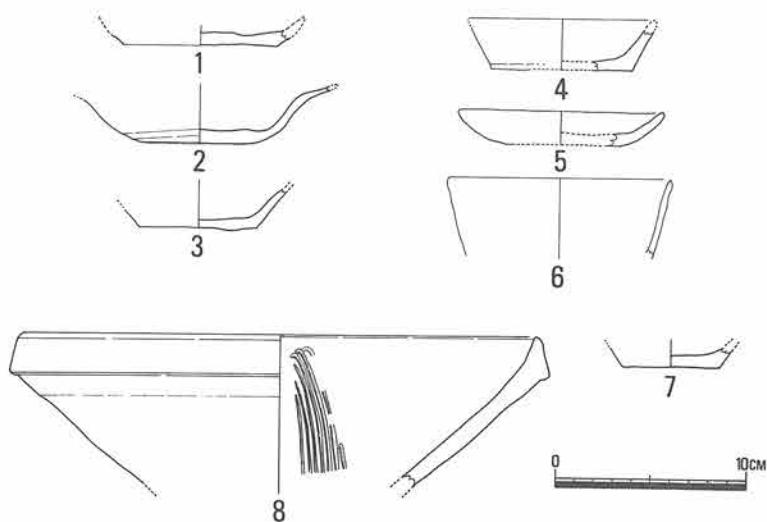


第86図 建物22（1/100）

建物出土遺物（第87図）

各建物の柱穴内から出土したものである。1は建物1、2と3は建物2'、4は建物15、5は建物16、6は建物8、7と8は建物18より出土したものである。6は淡灰茶色の釉のかかった陶器、7は備前焼の挿鉢である他はすべて土師器の皿である。土師器はいずれも底部に板目痕が認められる。図示

した以外にも建物2・4・5・7・9・12・21から多少土器片が出土しているがいずれも小片のため図示しえなかった。それらの大部分は土師皿の小片である。（森田）

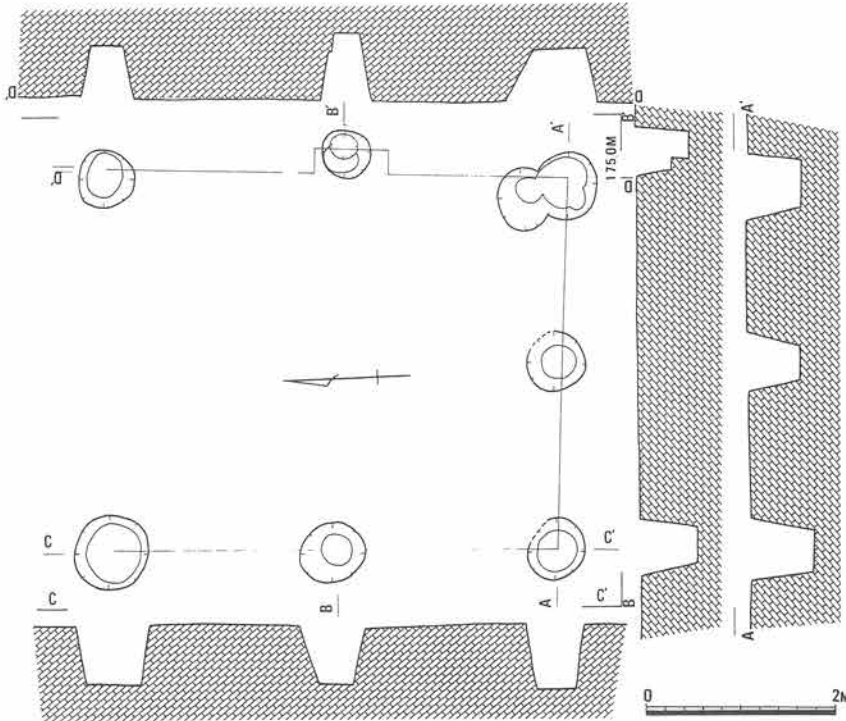


第87図 建物群出土遺物（1/4）

建物30（第88図、図版22-2）

建物32の西側に隣接して建物31と重複して検出した桁行、梁行ともに2間の建物である。建物の規模は、桁行4.70m、梁行3.90mを測る。東側柱穴列は中央の柱穴が少し東へずれ、柱間も西側よりいくぶん長い。柱穴の掘り形の平面形は、ほぼ円形を呈する。

建物の長軸方向は、 $N-3^{\circ}-E$ を示している。



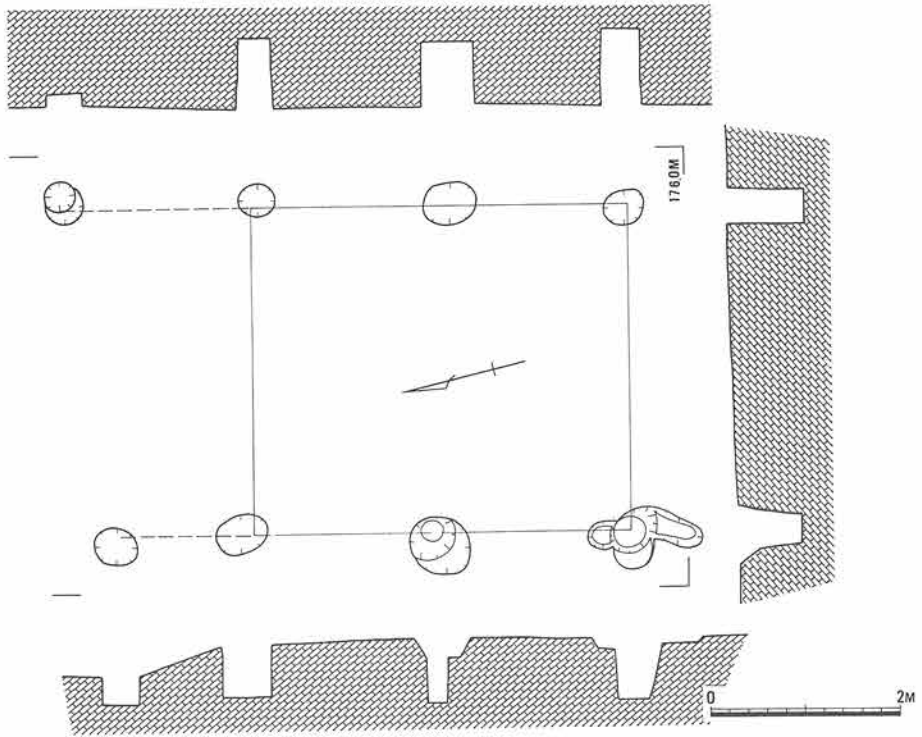
第88図 建物30（1/80）

建物46（第89図）

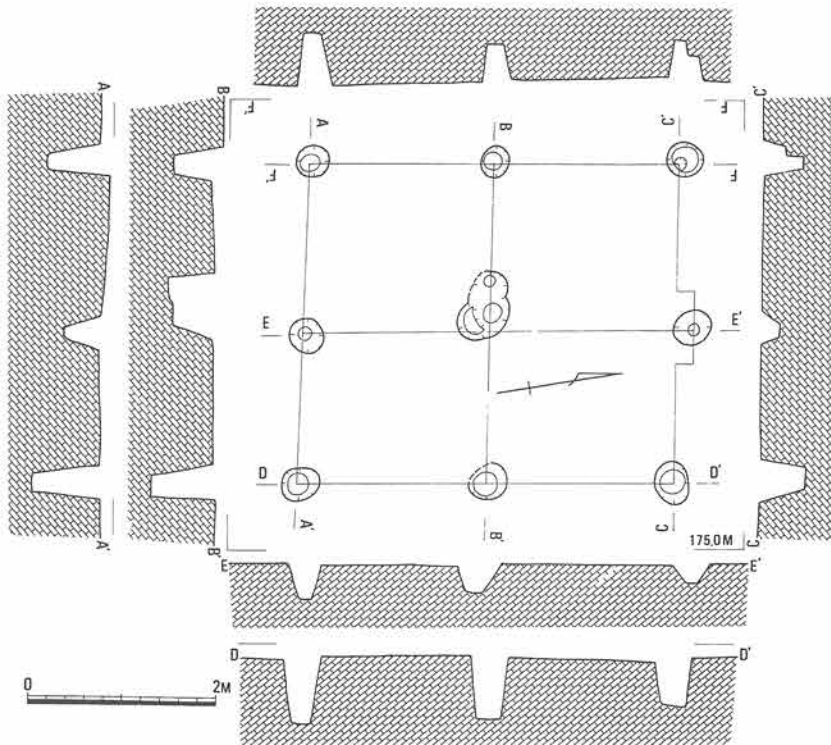
建物40の北約6mの位置に検出した桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行が2.00m等間に対し梁行は3.50mと広く、梁行中央に柱をもう1本想定させるものである。桁行は西側柱穴列では北側に、もう1間伸びる可能性があるが西側柱穴列ではこれに対応する柱穴がなく、ここでは2間×1間の建物と考えたい。柱穴の掘り形の平面形は円形を呈し、建物の長軸方向は、 $N-14^{\circ}-E$ を示している。

建物31（第99図、図版22-2）

建物30と一部重複して南側に検出した。建物は2×2間の総柱の建物である。建物の規模は、南北方向3.40m、東西方向4.00mを測る。中央柱穴列の北2本の柱穴は、それぞれ北及び西に少しずれる。掘り形の平面形は円形を呈しており、西側柱穴列の北の柱穴で、建物の重量により沈下したと考えられる柱痕跡を検出した。建物の長軸方向は、 $N-11^{\circ}-E$ を示す。



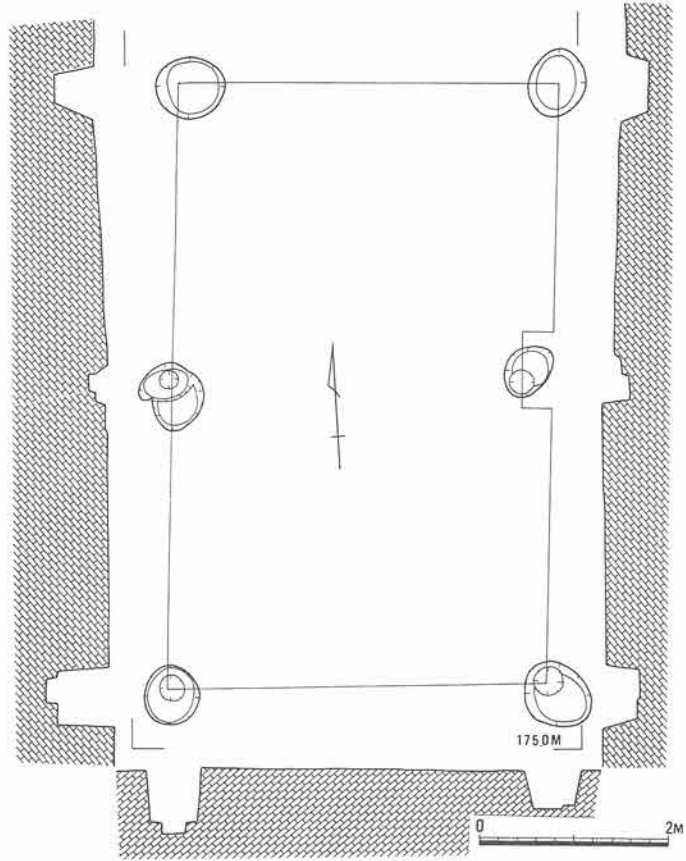
第89図 建物46 (1/80)



第90図 建物31 (1/80)

建物33（第91図）

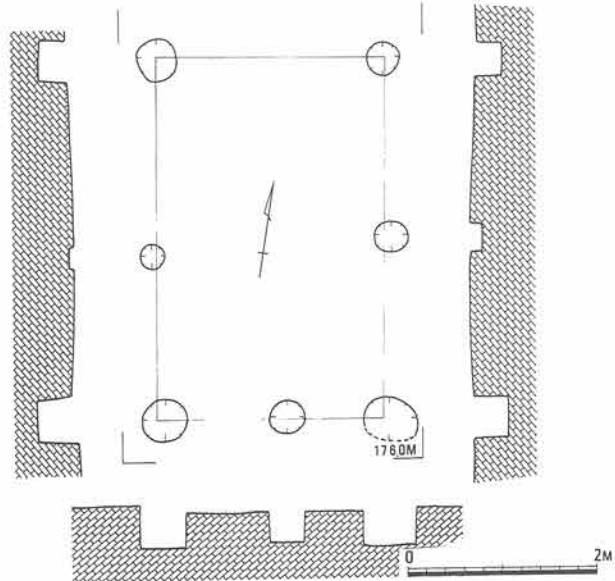
建物32と重複して建物30の東5mの位置に検出した桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、桁行6.30m、梁行4.00mを測り、平均柱間距離は桁行が3.15m、梁行4.00mと梁行が広がっている。柱穴の掘り形の平面形はどの柱穴もほぼ円形を呈し、ほぼすべての柱穴から柱痕跡を検出するとともに、半数の柱穴において抜き取り痕が認められた。



第91図 建物33（1/80）

建物45（第92図）

建物44と重複して建物43の北東約2.5mの位置に検出した。北側梁行の中柱は検出されなかった。建物は桁行2間、梁行2間である。規模は、桁行3.90m、梁行2.40mを測る。平均柱間距離は桁行1.95mに対し梁行1.20mと狭くなっている。掘り形の平面形は円形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。桁行中央のみ約10cmと浅い。



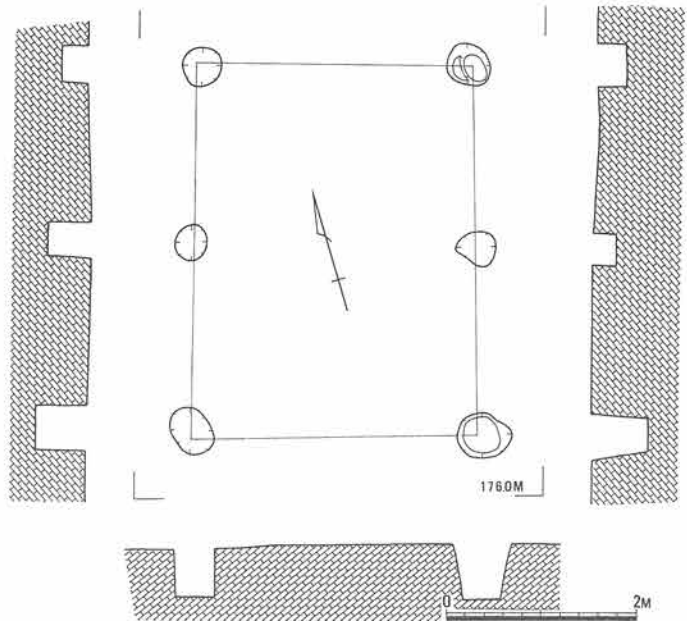
第92図 建物45（1/80）

建物の長軸方向は、N - 8° - Wを示す。

谷尻遺跡（赤茂地区）

建物44（第93図）

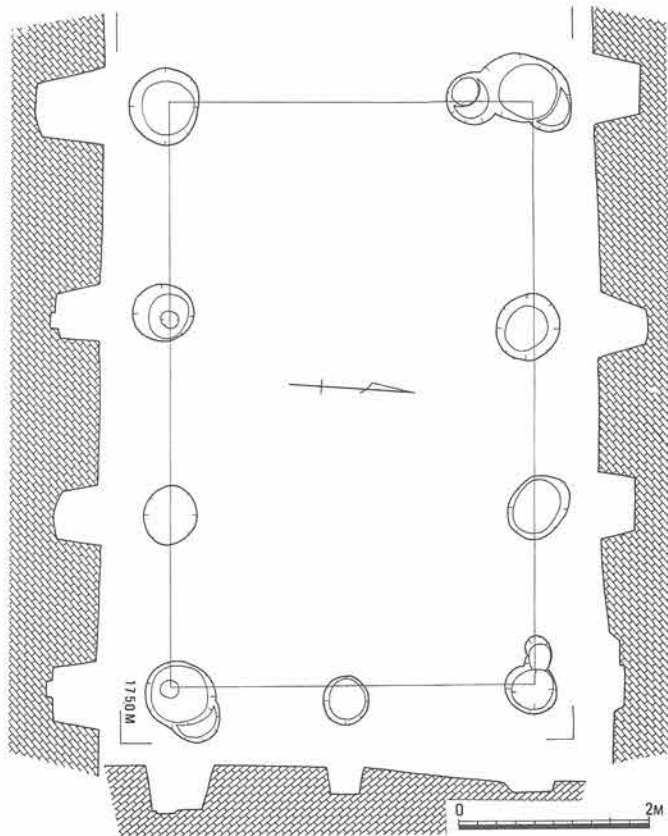
建物45と重複した状態で検出した。桁行2間、梁行1間の建物である。建物の規模は、梁行3.80m、桁行2.40mを測る。柱の掘り形は円形を呈し、直径40cm前後を測る。この建物は81年度確認調査で建物45とともに検出されたもので、南西隅の柱穴より土師質小皿片が出土している。建物の長軸方向は、 $N-16^{\circ}-E$ を示している。



第93図 建物44（1/80）

建物32（第94図、図版22-2）

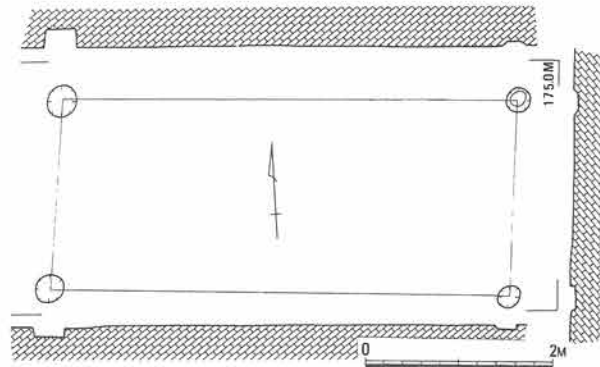
建物33と重複し、建物30に並行して検出した $3 \times 2$ 間の建物である。西側中央の柱穴は検出できなかった。柱間距離は梁行及び桁行の東2間分は1.95mを測るが、桁行の西1間分は2.40mと広がっている。しかし、掘り形は直約80cmの円形を呈し、柱穴の大きさ深さ等周辺にこれに対応するものがないため、この建物を構成する柱と考えたい。建物の長軸方向は、 $N-86^{\circ}-W$ を示し、建物28・29・30・31・33と同様に主軸は、溝1より北で検出された建物と同じ方向を向き溝より南で検出したほかの建物とは異なる。



第94図 建物32（1/80）

建物29(第95図、図版22-1)

建物28の南側に並行して  
 検出した1間×1間の建物  
 である。桁行、梁行はそれ  
 ぞれ4.75mと2.10mを測  
 り、桁行が非常に広い。残  
 存状態が悪いので桁行中央  
 に柱が存在した可能性もあ  
 る。掘り形は円形を呈す  
 が、直径約25cmとほかの建  
 物と比較して非常に小さ  
 い。建物の長軸方向は、N  
 -5°-Eを示している。

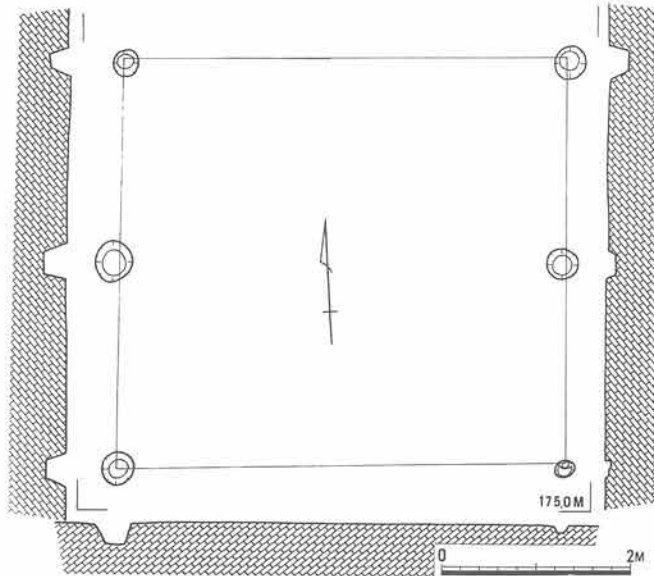


第95図 建物29 (1/80)

建物28(第96図、図版22-1)

建物29の北側に検出した  
 2間×1間の建物で、規模  
 は桁行4.65m、梁行4.35m  
 と桁行が長いほぼ方形  
 に近い平面形をなす。

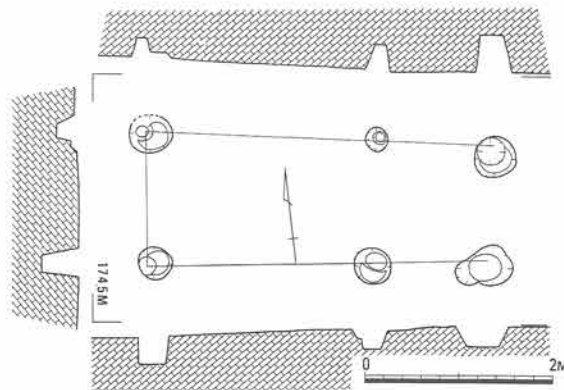
建物の長軸方向は、N-  
 5°-Eを示す。建物29と  
 併設していたと思われる。



第96図 建物28 (1/80)

建物27' (第97図)

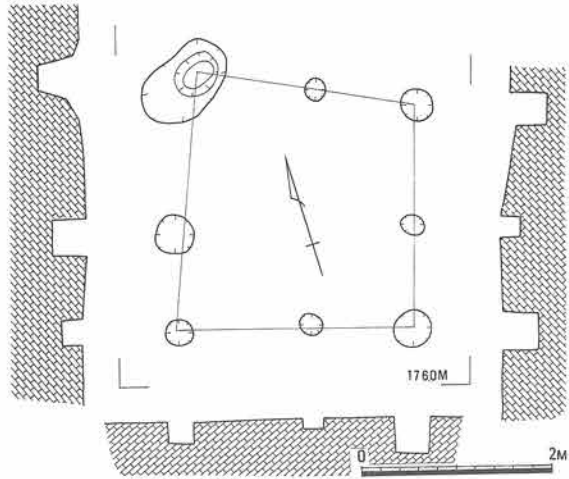
建物27の南側に検出した  
 建物で桁行3.50m、梁行西  
 側で1.40m、東側で1.20m  
 の建物である。桁行は柱間  
 距離から西側より2本目の  
 柱が考えられるが南北どち  
 らの桁行からも検出できな  
 かった。長軸方向はN-  
 8°-Eを示す。



第97図 建物27' (1/80)

建物43（第98図）

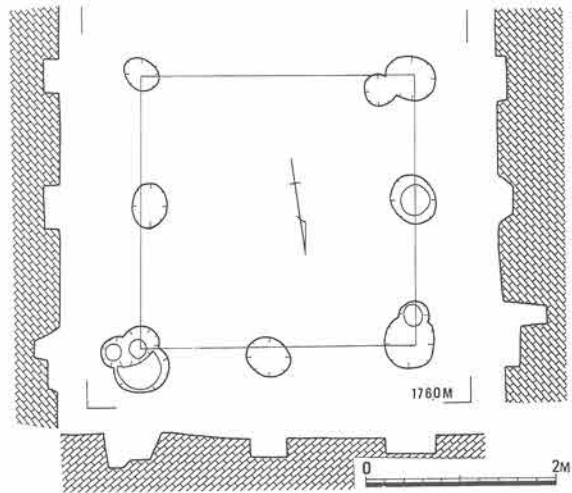
建物44・45の南東側に隣接して検出した。若干いびつな形態を呈し、東西に長く東にすぼまる。2間×2間の不安定なプランである。柱間距離も1.05m～1.80mとまばらで、柱掘り形も隅の柱は直径40cm程度に対し中央の柱は25cm程度で、深さも浅く支え柱の大きさで、建物規模も2間×2間の建物としては小規模である。建物の長軸方向は、N-17°-Eを示す。



第98図 建物43（1/80）

建物40（第99図）

建物39の東に近接して検出した2間×2間の建物である。南側中央の柱穴は検出できなかった。建物の規模は、桁行、梁行ともに2.85mを測るが、柱間距離はどの柱穴列とも1.50mと1.35mの異なった距離の組み合わせで、平面形は正方形を呈す。建物43同様に2間×2間の建物としては小規模の建物である。建物の長軸の方向は、N-8°-Eを示す。



第99図 建物40（1/80）

小結

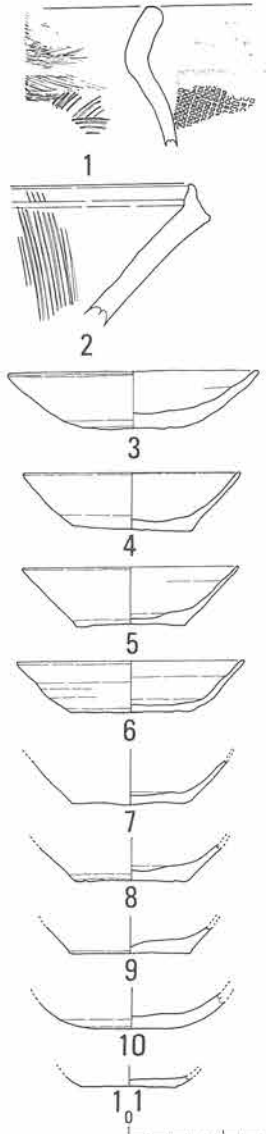
中世の建物は後述する溝1に囲まれた建物1～23までと溝1以南で検出した建物24以降とに大別される。建物1～23までは第4章第3節で詳しく述べるのでここでは省略し建物24以降について述べる。溝1に囲まれた建物群に比較して小さな建物しか検出できなかった。最も大きなものは建物32の2×3間ではかかは2×2間以下の建物であり、主軸の向きも不規則であり、建物1～23と主軸が同じ向きの建物は少なかった。建物の柱穴掘り形は、削平のためか浅いものが多く柱痕はほとんど検出できなかった。

遺物も備前焼の壺・甕・播鉢片、勝間田焼の甕片、土師器の小破片が少量出土したのみで図化できずここでは割愛した。

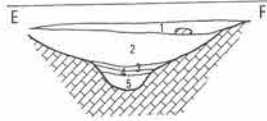
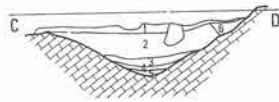
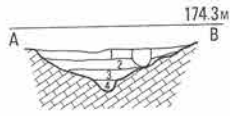
（岩崎）

(2) 溝

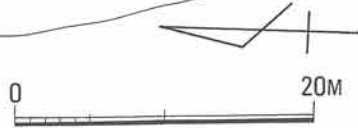
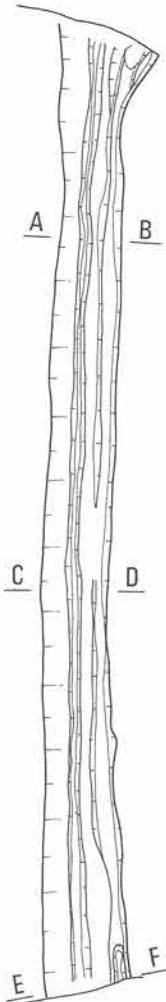
溝 1 (第100・101図・図版23-1)



第100図 溝 1 出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄色土 (小石を多く含む)
- 2 黄灰色土
- 3 灰黄色粘質土
- 4 黄褐色粘質土
- 5 暗灰黄色粘質土
- 6 灰茶褐色土



第101図 溝 1 (1/500) ・断面図 (1/150)



谷尻遺跡（赤茂地区）

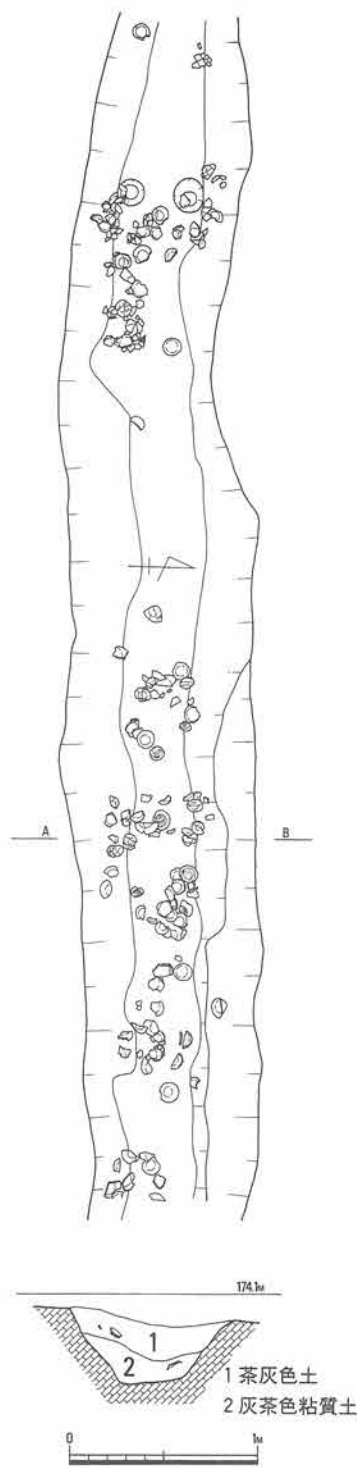
溝は第140図で示すように建物1～建物22までの中世の建物群を囲む溝であるが、北側と東側は崖面となっているため西側と南側の二方にのみ認められる。未掘部分もあるが確認した範囲内では長さ130mにも及び幅は4.2～5.85m、深さは0.8～1.3mを測る巨大な溝である。断面はゆるやかなV字状を呈しており土層の堆積状況は第101図に示すとおりである。主に地山土の黄色土が混入する土である。後世には第1層と第2層にまたがって暗渠排水が掘られており、この溝の廃絶後に水田化されたことがわかる。

出土遺物は多くない。1は中世陶器の甕で灰色に焼成されており、亀山焼と思われる。2は備前焼の插鉢である。備前焼はこの他にも甕・壺の破片も多少出土しているがいずれも図示不可能の小片である。3～11は土師皿で口径の大小はあるがいずれも底部はヘラによる切り離し痕が見られる。

溝2（第102・103図、図版23-2）

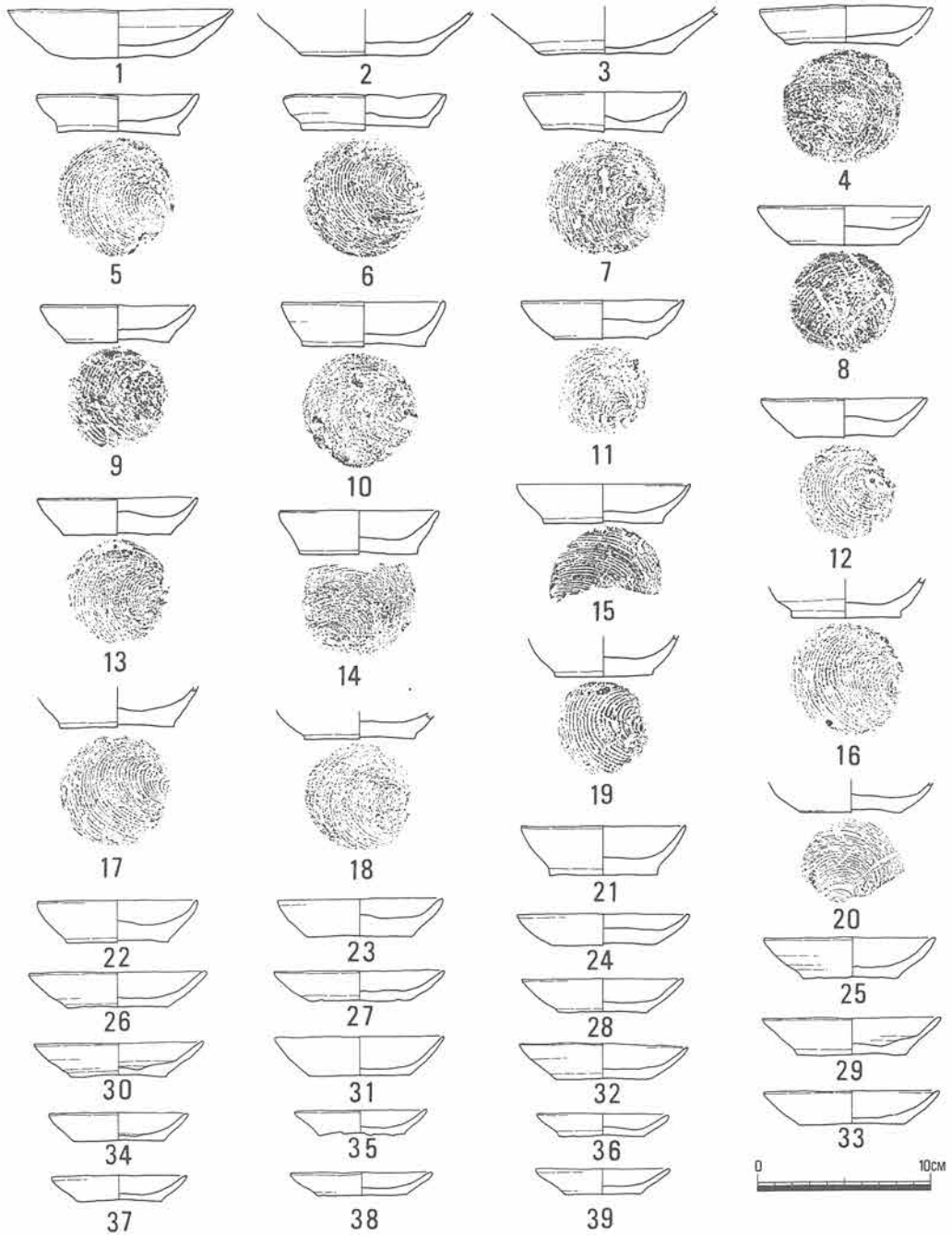
溝1の北5mに位置し、しかも溝1と平行に走るが、幅は0.5～1.0m、深さはおよそ0.3mと規模は小さい。しかし長さは70mを測り、あたかも建物11～建物20の一群の南側を画するような形状を呈するものでこれらの建物群に伴う溝と考えられる。図示した部分はちょうど建物19の南側に位置し、検出中は建物19の雨落溝を思わせるような位置関係である。この部分にのみ集中して土師皿が入りこんでいた。溝は上下2層に分かれていたが土師皿は両方に同じように入っていた。

出土遺物は多量の土師皿である。出土総量は整理箱に3箱分もあるが小片に破片化しており図示しえたのはその一部分である。これらは口径の大きさによって8cm前後のもの、9～9.5cmのもの、13cm前後のものと3つに分類できる。また底部をヘラ切りによるものと糸切りによるものに分かれるがその比率はやゝ糸切りものの方

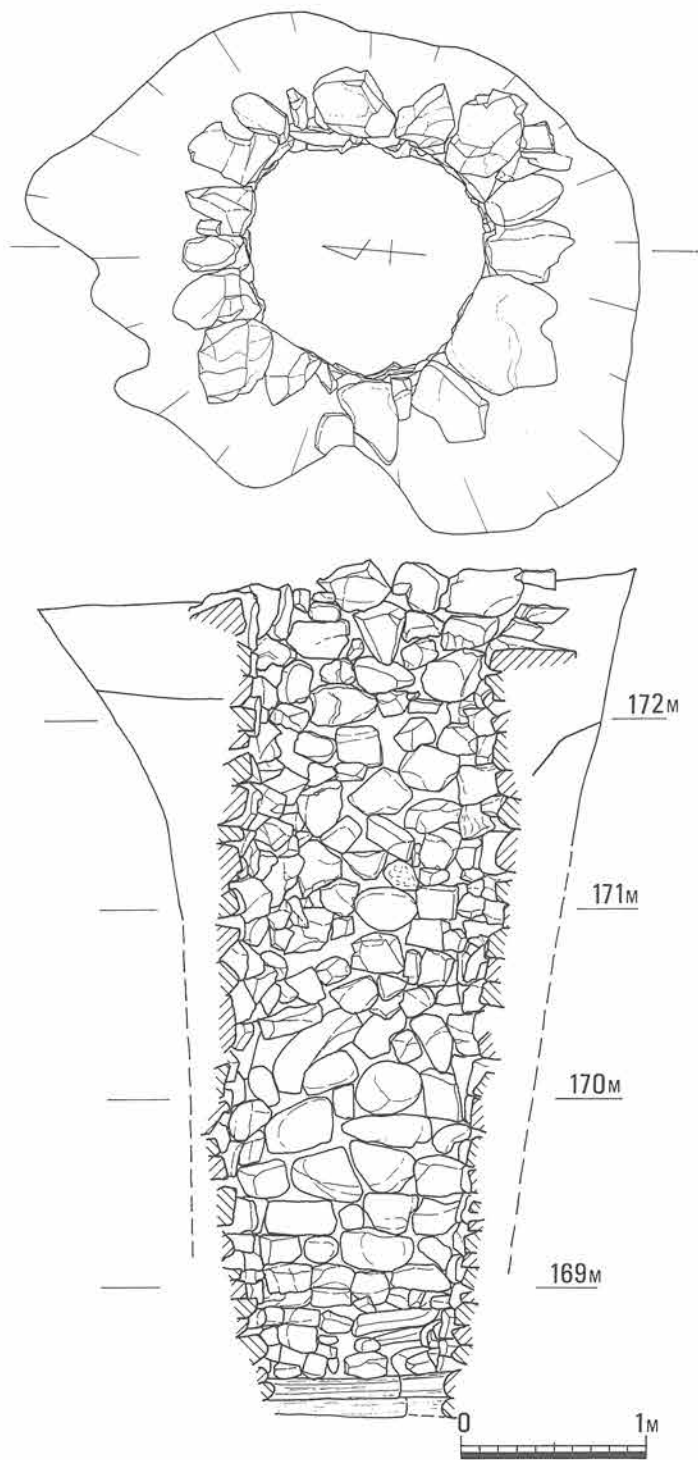


第102図 溝2（1/4）

が多い。しかし糸切りによるものは大部分が口径9～9.5cmのものであるのに対し、ヘラ切りによるものはいずれのサイズにも認められる。第103図では4～23が糸切りによるもので他はヘラ切りによるものである。



第103図 溝2出土遺物（1/4）



第104図 井戸1 (1/40)

## (3) 井戸

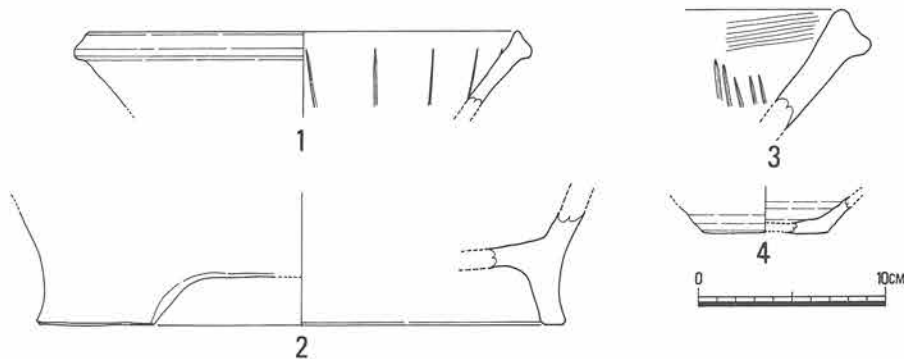
## 井戸 1（第104・105図、図版24-1・2）

H-2区にあって、ちょうど建物1と建物3の中間よりやや南側に位置して掘り込まれている。ここは調査前は畑で、葉たばこを栽培しており、井戸のある位置には人頭大の石がいくつかが転がっている状況であった。地区の人もこの畑には井戸があるということは以前からわかってきたもので、耕作土を除去した段階ですでに石組による構造であることが明らかになった。

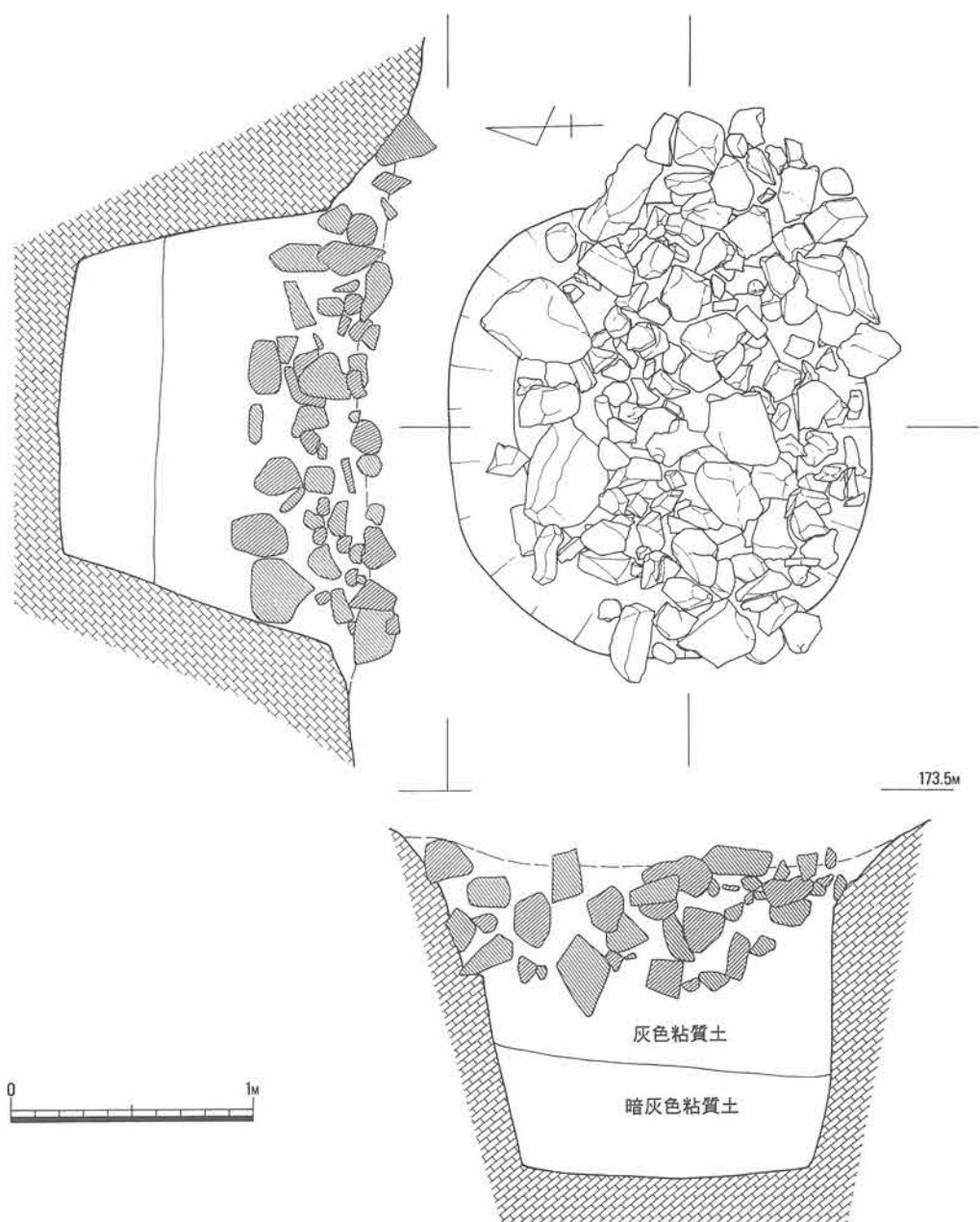
井戸1は上面で東西2.3m、南北3.2mの楕円形状の掘り形を掘り、拳大から人頭大の石を組合わせて円形につくったものである。井戸の規模は石組の内径が上面で1.2m、底面で0.95mである。深さは底部の木杵を含めて4.53mであるが、上面はわずかが削平されており本来はもう少し深かったと思われる。この深さは地山の下の方盤層にまで掘り込まれており、井戸の底はカキの化石層であった。井戸の構築方法はまず最初に、断面でちょうど三味線のバチを逆にした形状に素掘りをした後、太さ約10～15cmの丸太の両端にホゾを切って井桁に二段組む。そしてその上に裏込の土を入れながら石を積んでいったことが伺える。使用した石材は表面の磨耗した河原石は少なく、大部分がまだ稜線の明瞭な山石である。所々石灰岩が混入しており、特別に選んだものを使用したわけではなく、付近でとれるものを利用している。

井戸内には土砂が充満しており、下層に行くに従って粘質土となっていたが既に枯れており湧水は認められなかった。

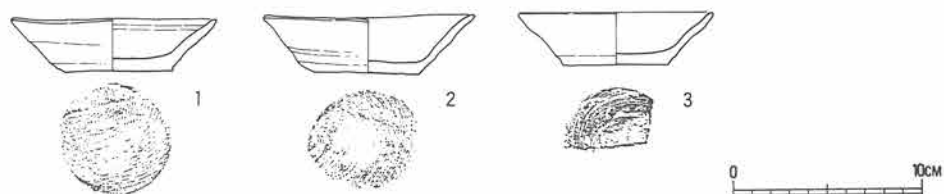
出土遺物はあまり多くなくしかも大部分は小破片で図示したのは4点だけである。第105図1、4は土師器である。土師皿は4以外に20点余出土しており底部はヘラ切りのものと糸切りによるものが見られる。2は瓦質陶器、3は備前焼である。備前焼は甕片も多少出土している。これ以外には五輪塔の笠石の部分が出土した。こごめ石と呼ばれる白色石灰岩製で、備中地方の多くの石造物に使用されている石である。



第105図 井戸1出土遺物（1/4）



第106図 井戸2 (1/30)



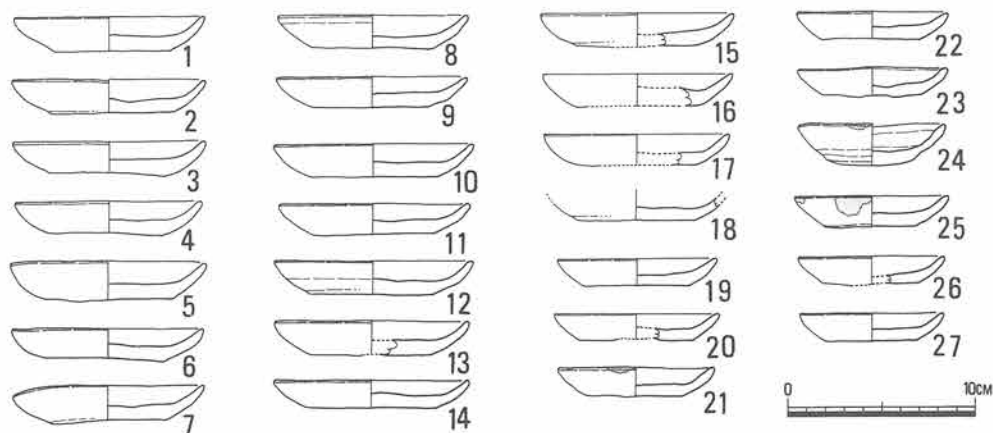
第107図 井戸2 出土遺物 (1/4)

## 井戸 2（第106～108図、図版25-1・2）

H-4区にあり、建物11～22の一群の南西端に位置する。井戸2は素掘りである。表土層を除去した段階では東西約6m、南北約3mの楕円形状に灰褐色土の埋土が認められた。更に掘り進めていくと東西の2.3m、南北1.7m、厚さ0.6mの範囲に集石が見られ、石の間には灰色粘質土が入っていた。井戸2の規模は上面で東西1.9m、南北1.75m、底部は円形で直径1.2mを測る。深さは1.3mを測り、かなり浅いが上面は検出状況から考えて上面が削平された様子はない。井戸内の埋土は2層に分かれ、上層には灰色粘質土、下層には暗灰色粘質土が入っており、この遺構は、深さからは井戸と断定し難いが埋土の質から一応井戸とする。上層に集石していた石材は井戸1と同様に角のある山石であるが、石炭岩やまだ十分に生成されていない比較的軟質の石材が多く、井戸の周囲に積んだり井戸枠に用いたりしたものではないと思われる。

出土遺物は底面近くから鹿の角が1点と集石の下から土師皿が3点出土したのみである。土師皿は3点とも底部は糸切りである。

また井戸2の北側、東西3.2m×南北2.3mの窪みの北側のちょうど縁にあたる部分から土師皿が27枚出土した。それらは一カ所にかたまった状態で出土しており、井戸の祀りに使用したのではないかと考えられる。土師皿27枚は口径9.9cm～10.6cmまでのもの18枚と、7.8cm～8.9cmまでのやゝ小さいもの9枚の二形式から成る。いずれもその成形方法は同じで底部はすべてヘラ切りで、板目がついている。形状はいずれも浅い皿状で体部はゆるく内湾しており、井戸2内出土の土師皿とは形状を異にする。中には口縁に煤の付着痕の認められるものがあり、日用品として使用していたことが伺える。（森田）

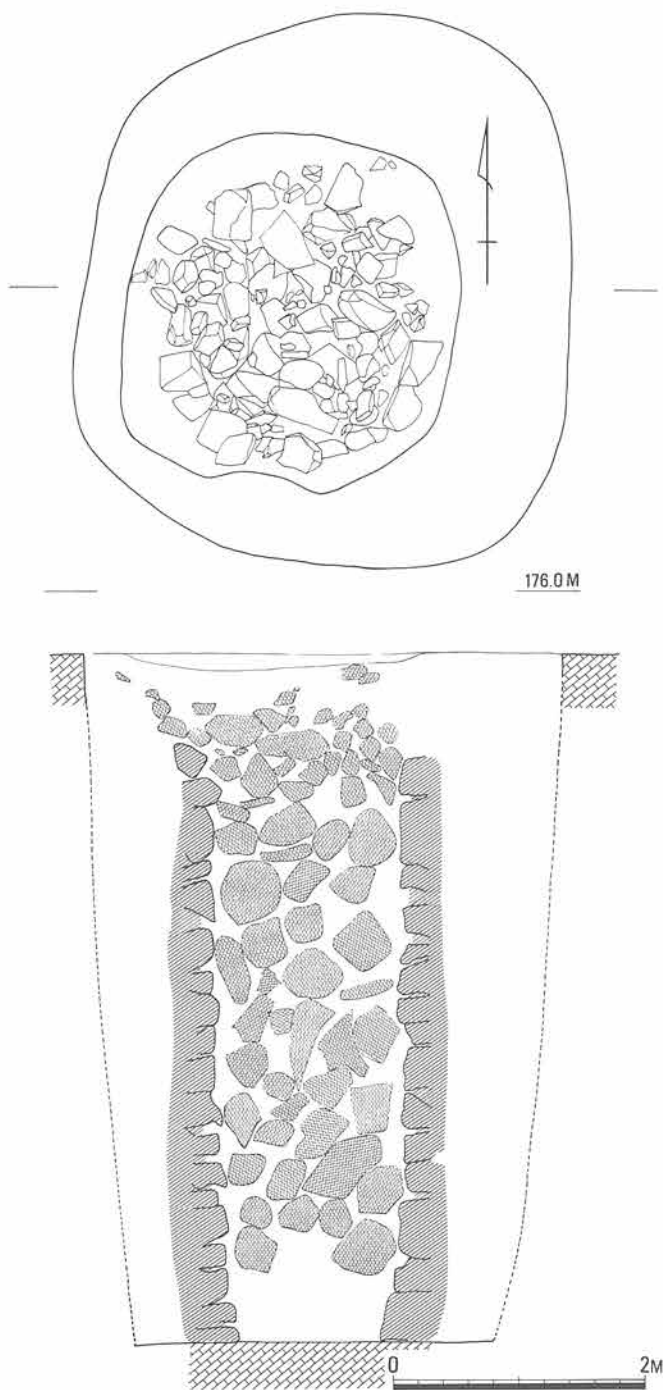


第108図 井戸2北側出土遺物（1/4）

谷尻遺跡（赤茂地区）

井戸3（第109図、図版26-1）

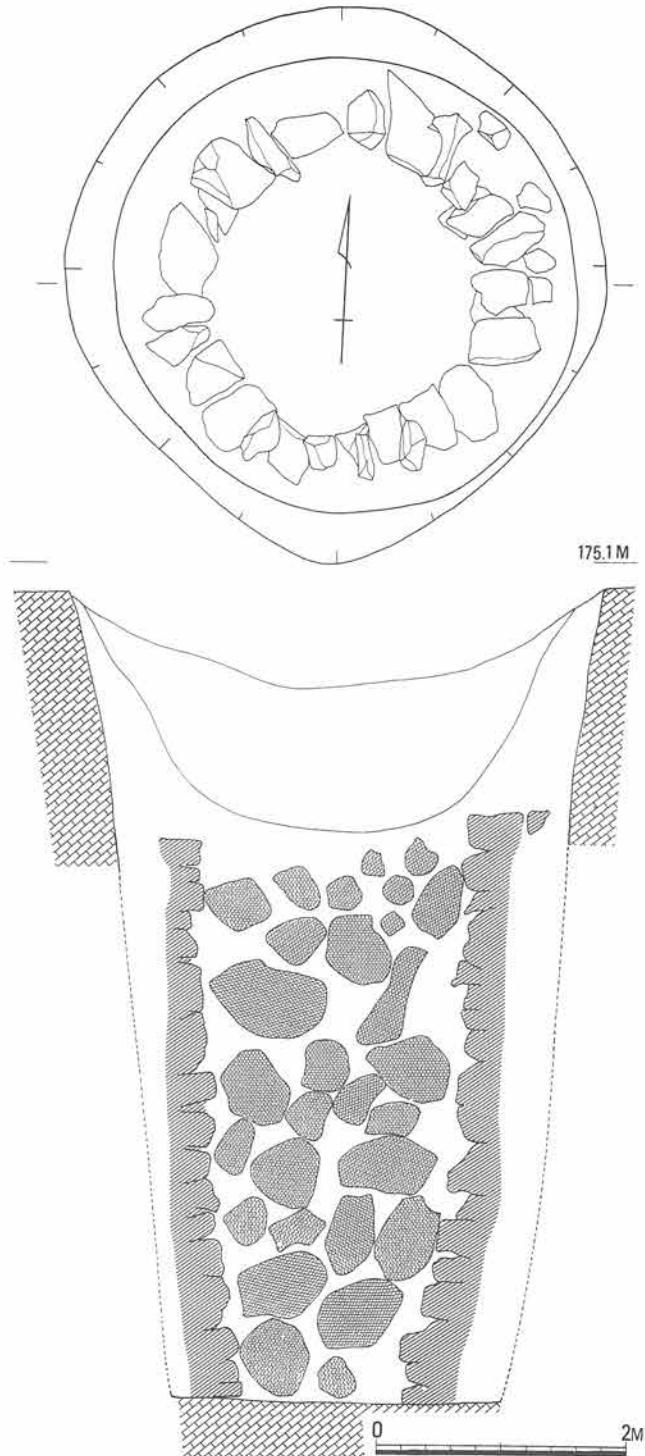
建物44・45の南10mに検出された石組の井戸である。掘り形は径1.90m×2.20mの若干いびつな隅丸方形のプランを呈し、深さ2.70mを測り砂岩層まで掘削されていた。その掘り形内に人頭大からやゝ大きめの石を積み上げて、石組を構築していた。石組内は、底部に泥土の堆積が見られたが、それから上部は検出面直下まで捨石で意識的に埋めており意図的な廃絶と推察される。捨石は、石組上面までは特に大きな石が用いられており中には100kgを越える巨大な石も入れられていた。石組からは比較的小さな石で埋められていた。出土遺物は埋め石上面で、備前焼插鉢片及び中層ではぼ1体分の犬の骨が出土した。保存状態は良く検出できなかったのは頭骨・右鎖骨・右腰骨・右下肢骨及び脊椎・肋骨・指骨の一部で、出土した骨に人為的な傷はなかった。ほかに小動物骨・昆虫・植物の種子が多量に検出された。



第109図 井戸3（1/60）

## 井戸4(第110図、図版26-2)

井戸3の北西28mに検出された石組の井戸である。井戸は径2.20mのほぼ円形を呈し、検出面より深さ3.30mを測り砂岩層まで掘り下げられていた。その掘り形内に井戸3と同様大きさ、種類の異なった石を積み上げて構築している。石組は下部1mは、逆「ハ」字形に少しずつ広げて積み上げ、そこから上方はほぼ同径の規模で積み上げていた。しかし、井戸検出面から下方1mまでは石組が無い。おそらく、もと構築されていたものの井戸廃棄の段階で石をはずしたと考えられる。上屋等の有無は不明だが、西方向へ一筋の溝が掘り込まれており井戸に付属する排水溝と考えられる。石組内部は、井戸3と同様に捨石で石組残存部上面まで埋められていた。又、小動物骨・昆虫・植物種子・木の葉・木の小枝なども同様に多量に検出された。井戸4は井戸3と規模、石の積み方、廃棄の状況等ほとんど同じである。



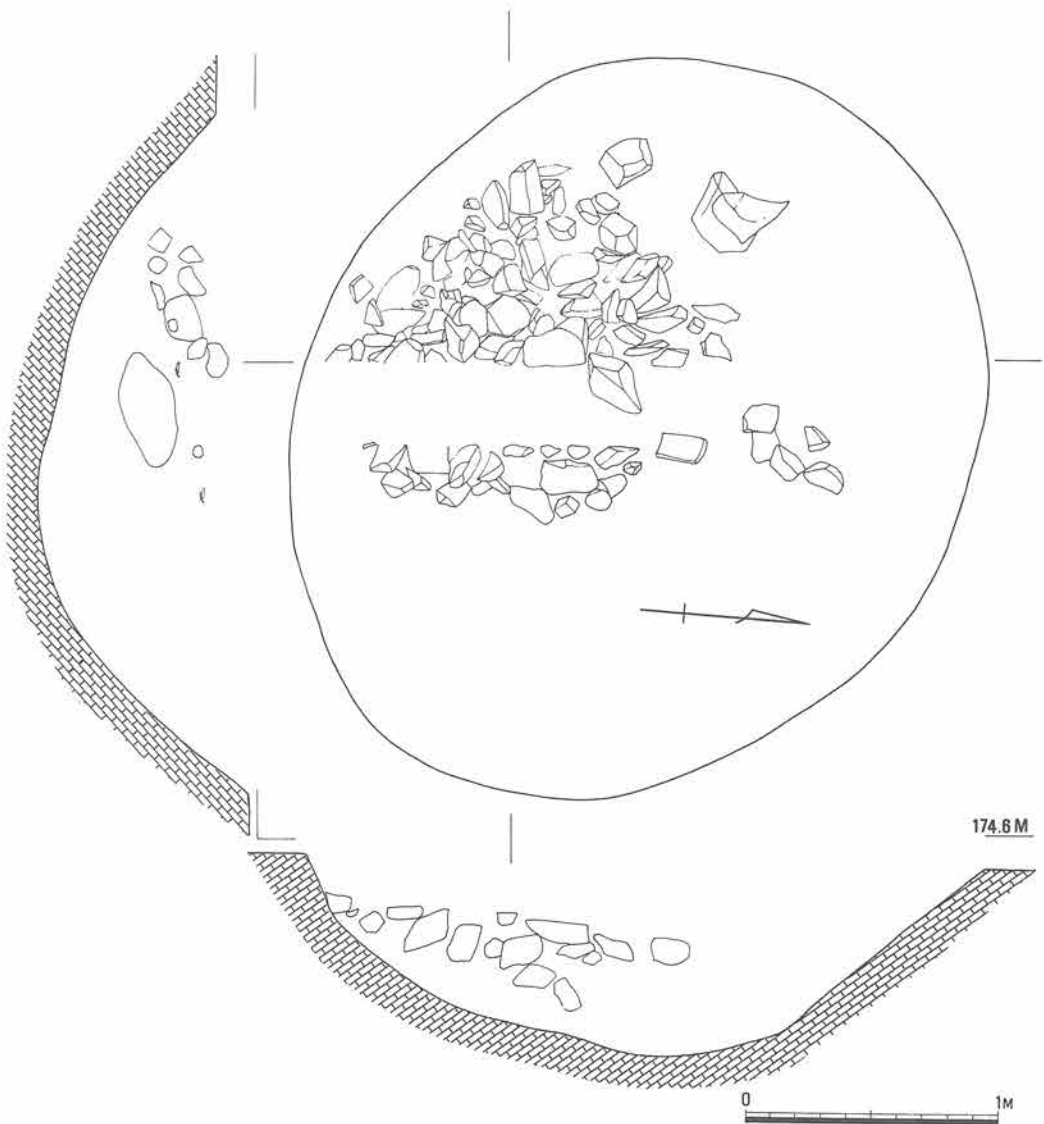
第110図 井戸4 (1/60)



谷尻遺跡（赤茂地区）

井戸5（第111図、図版27-1）

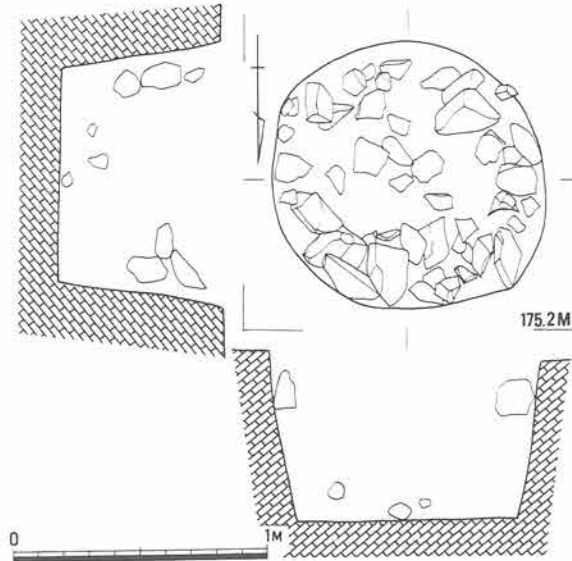
井戸4の北西約20mに検出された素掘りの井戸で平面形は3.1m×2.6mの楕円形を呈し、深さ75cmを測る。掘り形は約35°というゆるい角度で挿鉢状に掘り下げられていた。形態に反して湧水量は多く調査時においても常時井戸の1/2を満たす保水状態であった。南西部分には多量の石及び瓦が捨てられていた。石は約半数が焼けていた。瓦は隣接していた英賀廃寺のものと考えられ、平瓦・丸瓦だけである。比較的大きな破片が多い。井戸3・4同様意図的な廃絶を具現していた。出土遺物は前述の瓦に混在して土師質小皿の小破片が少量出土した。この小皿からこの井戸の時代を中世と考えている。



第111図 井戸5（1/60）

井戸 7（第112図、図版27-2）

井戸 4 の北東約12mに検出された遺構である。平面形は約1 mのほぼ円形を呈し、深さ60cmを測る。検出時は土壙と考えられる様相を示していたが、下部40cmは木質の痕跡が残り板による井戸枠の存在が想定されるため井戸として取り扱う。上部は石を積み上げていたと思われるが、検出できたのは一段のみであるが周囲の遺構の状況からあまり削平は受けていないと考えられる。出土遺物は土師



第112図 井戸 7（1/60）

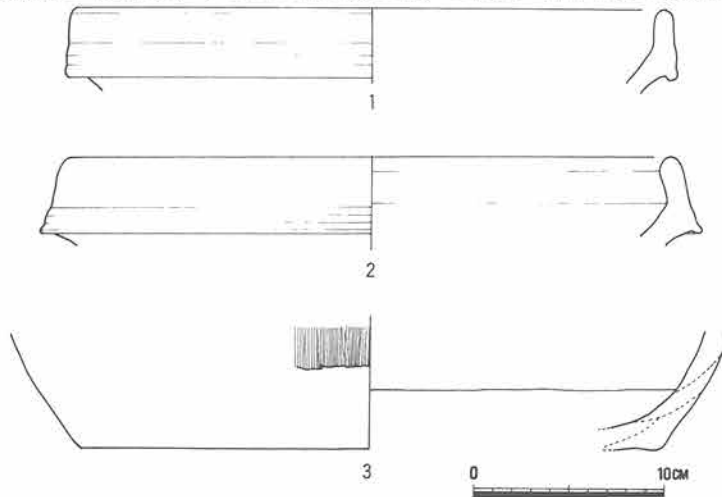
質小皿、備前焼の甕等の小破片が上部で少量検出されただけである。

中世井戸小結（第113図）

井戸 3～7 出土遺物は、小破片で図化できる破片はほとんどなく、一括して記載した。1は井戸 3 の捨石上面で検出された備前焼插鉢である。2は井戸 6 の中層より出土した備前焼插鉢である。3は井戸 4 上部で出土した備前焼甕底部である。

石組井戸は調査区内で 4 基検出したが、形態上は酷似しどの井戸も砂岩層を井戸底としており、井戸底に陣木のある井戸 1・7 と無い井戸 3・4 と一部構造上の違いが認められるのみである。前者は松丸太を方形に二段組み、その上に石を積み上げており、石組下段の横断面は胴張りの方形を呈す。

それに対し後者は掘り形の底の砂岩層から直接石組を始めるため、最下段からほぼ円形を呈する違いが認められるだけである。遺物から井戸 3～7 の時期は、いずれも室町時代と考えられる。（岩崎）



第113図 井戸出土遺物（1/4）

(4) 土壌

土壌52（第114・115図）

H-2区とI-2区の間中点に位置し、土壌9の北西2mに近接している。平面形は長辺約2.11m、短辺約1.49mを測るが不整長方形を呈する。底部も平坦ではなくゆるやかな凹面を呈す。検出時には既に上面は削平を受けており、深さは20cm余しか残存していない。土壌内には土器のほか石や焼土、木炭片が混入していたが主に第2層の黄灰褐色土中である。

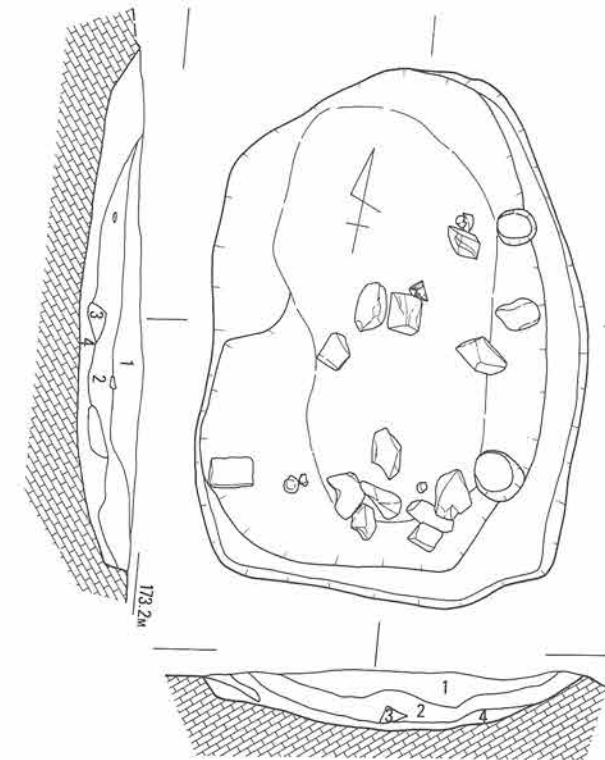
出土遺物は第115図に図示した。すべて土師皿で、口径の大小はあるが7を除いて内湾する

体部を有する同一プロポーシオンである。また底部は9点ともヘラ切り痕が認められる。これ以外に備前焼の播鉢片も出土している。

土壌9（第116・117図、図版28-1）

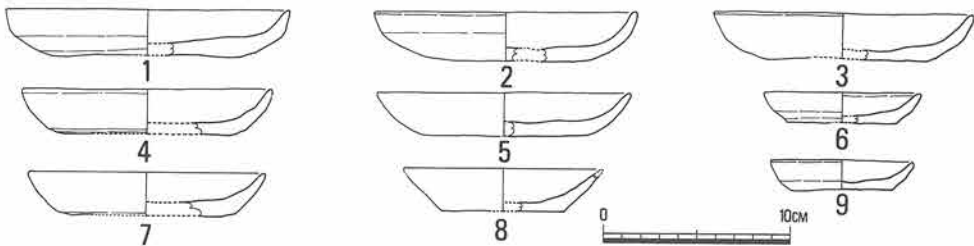
土壌9はH-2区にあって、建物1～10を1群とする建物群と建物11～22を1群とする建物群とのほぼ中間点に位置する。

平面は東西1.68m、南北1.6mを測る隅丸方形を呈す。上面は削平されており深さは現状で0.29mである。遺構は地山面をほぼ垂直に掘り込んでおり、底部はフラットである。土壌内には多数の土師皿と鉄釘が入っており、その性格は墓と推定される。土壌内埋土は3層に分かれており、そのうち遺物の主に出土する層位は上

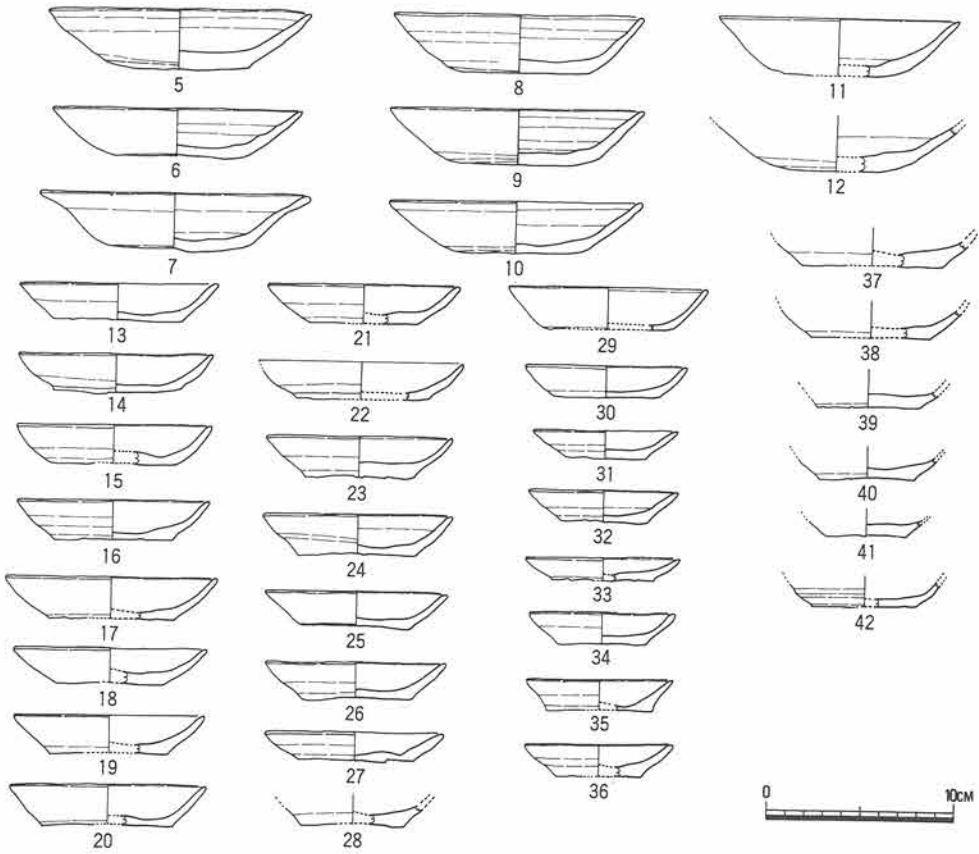
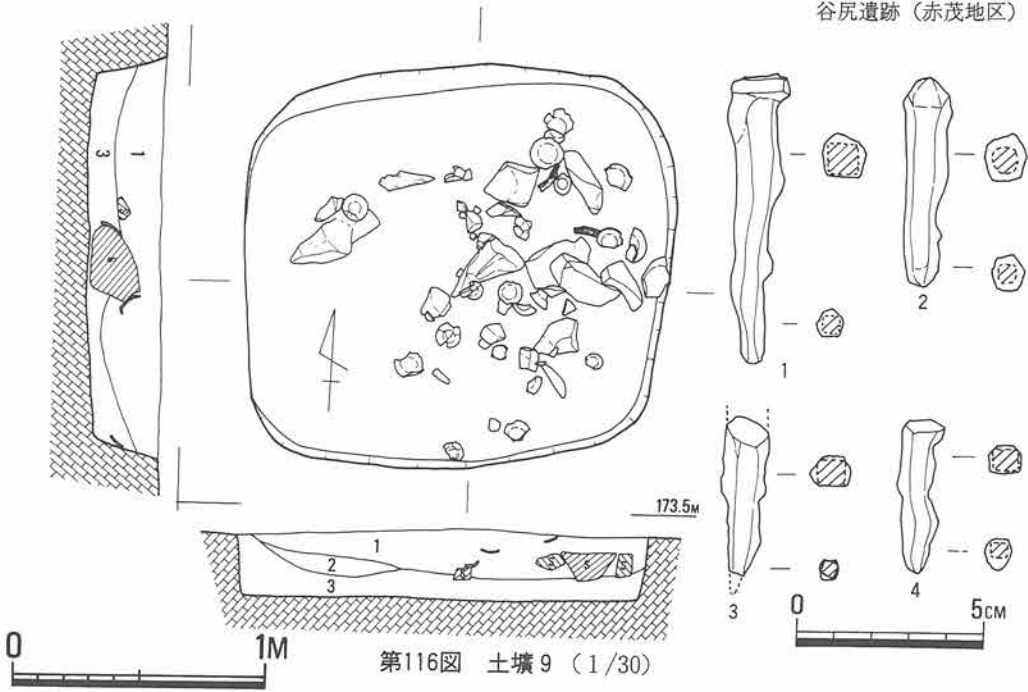


第114図 土壌52（1/30）

- 1 灰褐色土
- 2 黄灰褐色土
- 3 灰褐色粘質土
- 4 暗灰褐色粘質土



第115図 土壌52出土遺物（1/4）



#### 谷尻遺跡（赤茂地区）

面の第1層である。また下層からは鉄釘が出土しており、このことから土壌内に木棺を置いた後土で覆い、その上に石をいくつかと多数の土師皿をお供えしたことが伺える。

出土遺物は第117図に示した如く多数の土師皿と鉄釘である。図示した土師皿は38枚であるがこれ以外にも小破片は多く相当数の供献であったと考えられる。土師皿は口径の大きさから3つに分類できる。まず口径12.6cm～14.2cm大のもの、口径9.6cm～11cm大のもの、そして口径7.6cm～8.4cm大のものである。形状は多少外湾する体部をもつものがあるが総じて内湾している。これらは口径の違いはあるが同一の方法で製作されており底部もすべてヘラによる切り離し痕が認められる。

#### 土壌23（第118図）

土壌23はI-3区にあって建物16の柱穴と重複している。柱穴が埋まった後に土壌を掘っており中には灰茶褐色土が入っていた。土壌の中央部には5～15cm大の石が多数入っていたが上面のみである。土器等の遺物は何も出土しなかった。

#### 土壌24（第118・119図）

平面は長径63cm、短径48.5cmの楕円形を呈す。断面は多少平坦面をもつ碗形で深さ26cm余を測る。上方に10～20cm大の石が乗っておりその下には土師皿5点が入っていた。

#### 土壌33（第118・119図）

平面は直径約23.5cmを測る円形を呈し、断面は浅い挿鉢状を呈する。土壌内には土師皿が2点入っていたのみである。

#### 土壌40（第118・120図、図版28-2）

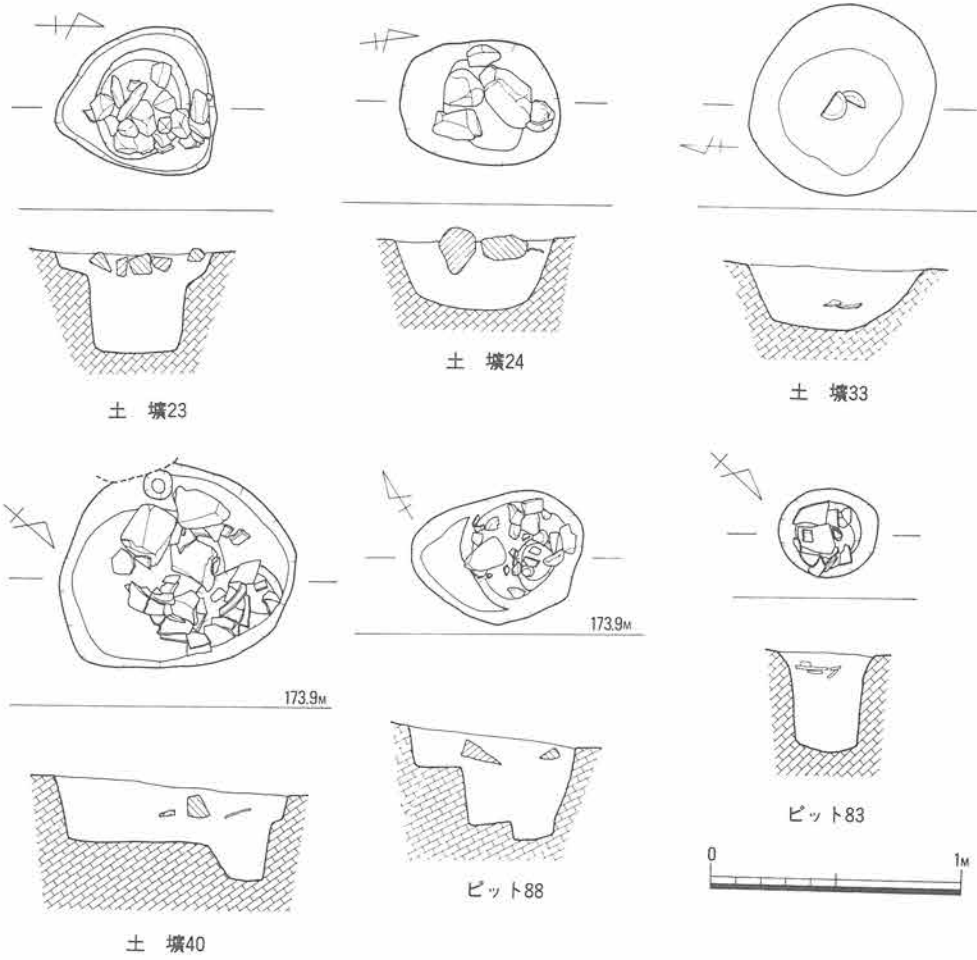
平面形は約62cmのやゝいびつな円形を呈し灰茶褐色土中には多量の土器片と20cm大の石が3個入っていた。土壌は上面が既に削平された状態で検出されており上土中にもかなりの量の土器片が入っていた。土器はすべて備前焼の甕片で、上からの圧力で一度に押しつぶされたような状態で出土した。全部で6個体分出土しているがそのうち3点を図示した。1は図上復元したものである。高さ60cm、口径40cm、最大径56cmを測る口縁端部の玉縁は下方に垂れ下る形状である。底部内面と口縁～肩部にかけては淡緑色の釉がかかっていた。

#### ピット-88（第118・119図）

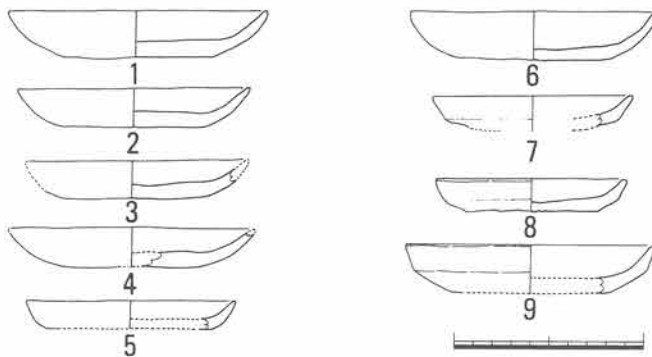
69cm×50cmの楕円形を呈し、深さ39cmを測る土壌である。土壌内の上層に5～15cm大の石とその間に破片となった土師皿が入っていた。埋土は灰茶褐色土で中には木炭と焼土の小片が多少入っていた。

#### ピット-83（第118図）

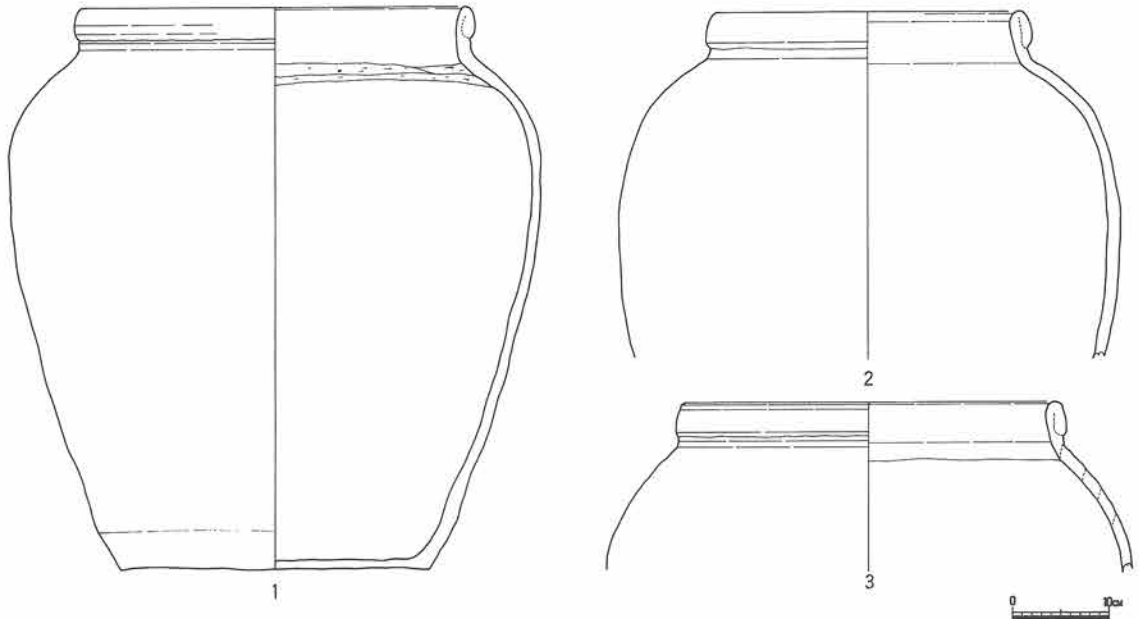
40cm×35cmのほぼ円形に近い形状を呈す。深さは38cmを測る。土壌内上層には備前焼の甕が押し潰されたような状態で入っていた。



第118図 土坑23・24・33・40・88・83



第119図 土坑24・33・88出土遺物（1/4）



第120図 土壙40出土遺物（1/8）

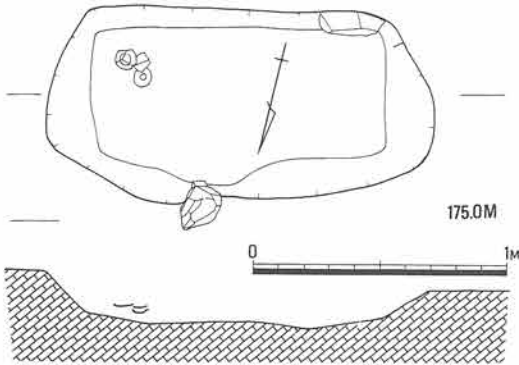
土壙、柱穴内出土遺物（第125・126図）

中世から近世にかけての土壙、ピットは多数出土しているが、そのうち何らかの遺物が中に入っていたものは270余りである。しかし、そのうちの大部分は実測不可能な小破片であるため図示することができたのはそのごく一部である。土器番号の後に（ ）で示した数字は遺構番号である。（ ）で示した以外は次に述べるとおりである。第125図の1～7は土壙26、9～11は土壙29、12～15は土壙21、16～17は土壙42、19～20は土壙15、21～23と30は土壙30、25～27は土壙39、28～29は土壙48、31～52は土壙36、53～55は土壙50からの出土である。第126図の58～59はP-47、61～62はP-54、63～64はP-56、66～70はP-163、71～72はP-63、76～77はP-86、78～79と84～89はP-88、82～83はP-68、90～92はP-69、104～105はP-154、108～109はP-104からの出土である。

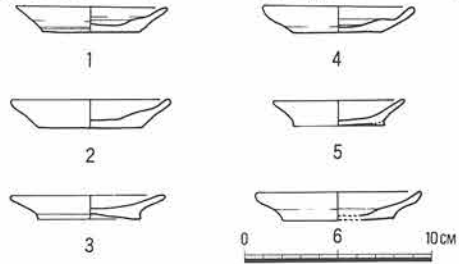
30は甕の羽口である。先端部分が約1/3周しか残存してなく内径は推定で3 cmを測る。53は備前焼の播鉢である。外面暗赤茶色を呈すもので、口縁端部は上下に肥厚するが外面に凹線は見られない。内面には8条1組の播目が刻まれている。111、113も備前焼の播鉢である。111の口縁端部は上方により肥厚するが外面の凹線は認められない。109は蓋である。土鍋の蓋で瓦質に焼成されている。110は亀山焼と思われる甕である。それ以外はすべて土師器の皿である。かなりのものが磨耗していて判別不可能なものもあるが、管見する限りでは底部はヘラ切りで切り離されており糸切りのものは見当たらない。（森田）

土墳墓126（第121・122図、図版29-2）

建物26の南東3.50mの位置に土墳墓124と並んで検出した。掘り形は150×75cmの若干いびつな長方形を呈す。土墳東より小口に土師質小皿8枚が折り重なるようにして一括埋納されていた。



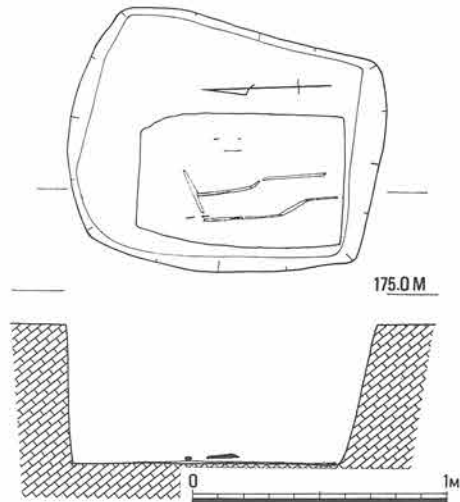
第121図 土墳墓126（1/30）



第122図 土墳墓126出土遺物（1/4）

土墳墓1676（第123図、図版30-1）

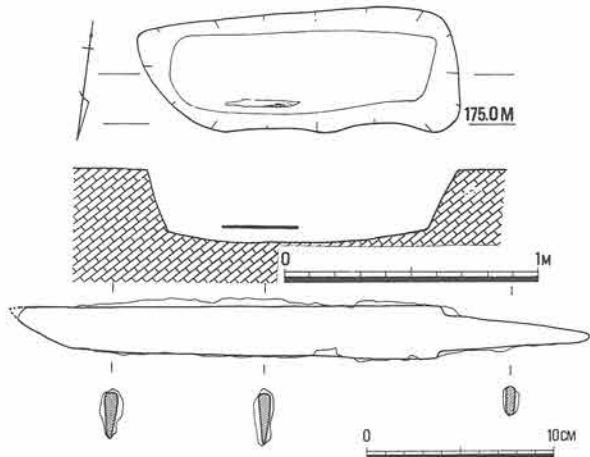
調査区中央部東に土墳墓8基一列に並んで検出した中の一基である。90×120cmの台形状のプランを呈し、深さ53cmを測る。底面は水平で、52×83cmの長方形をなす木棺底板の痕跡が認められる。人骨は四肢骨しか認められなかった。副葬品として寛永通宝が木棺内、頭部と腹部から各2枚ずつ、ばらばらに検出された。



第123図 土墳墓1676(1/30)

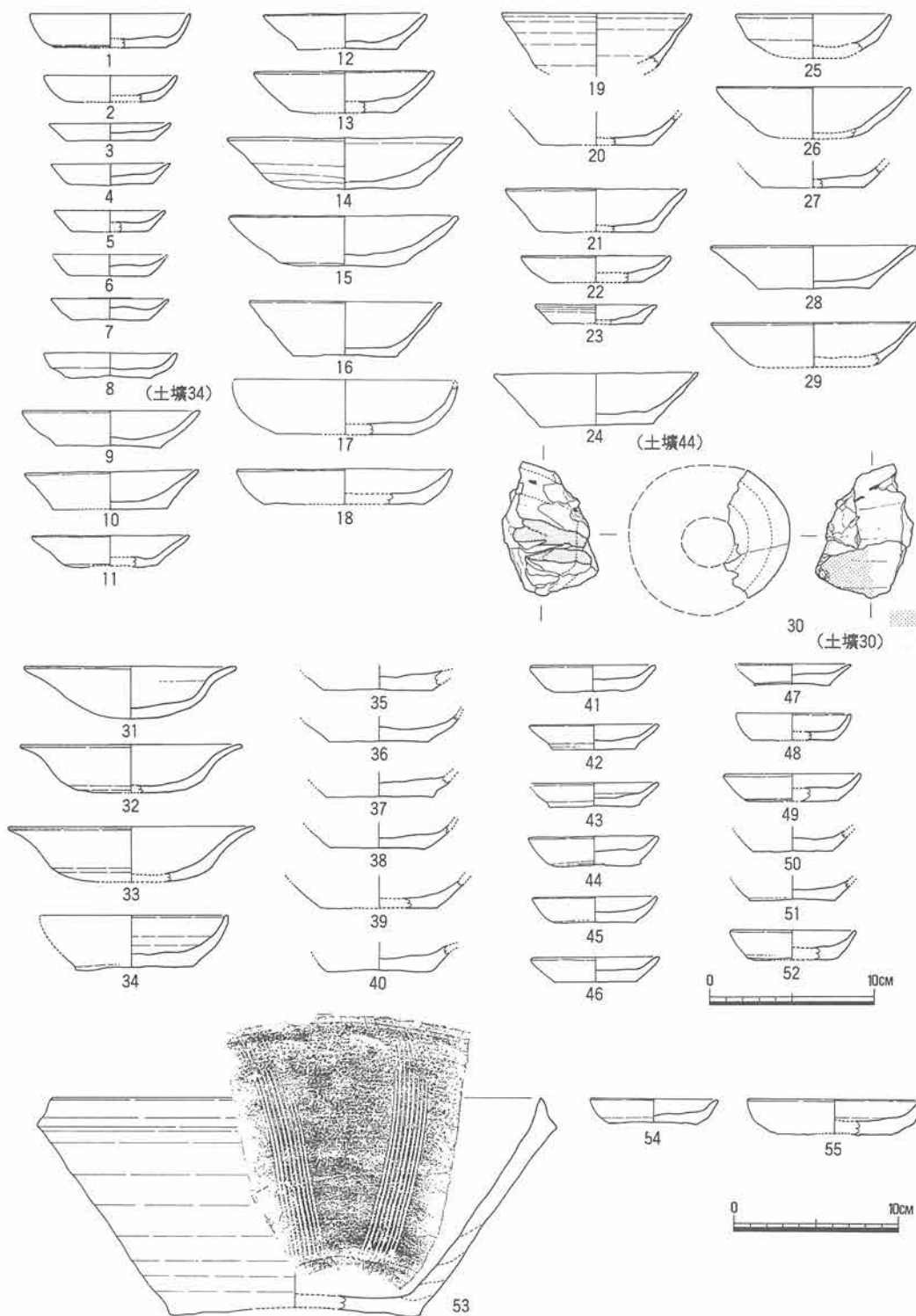
土墳墓124（第124図、図版30-2）

土墳墓126と並んで検出した。120×45cmのいびつな方形を呈し、深さ28cmを測る。土墳墓126同様人骨は検出されず刃の長さ22.8cmの小刀が底部より少し浮いた状態で検出された。出土遺物から土墳墓と考えられる。（岩崎）

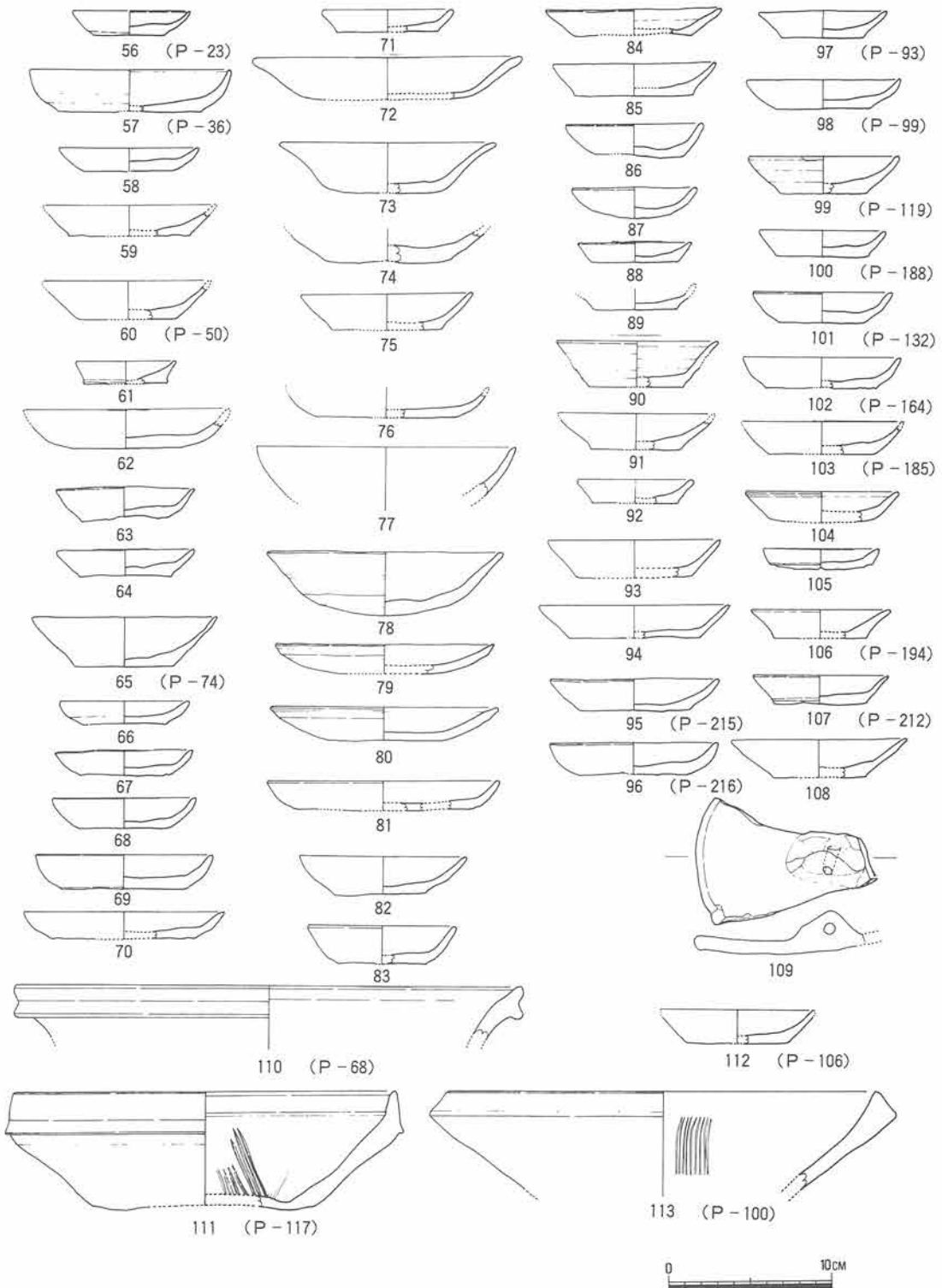


第124図 土墳墓124（1/30）・出土遺物（1/4）



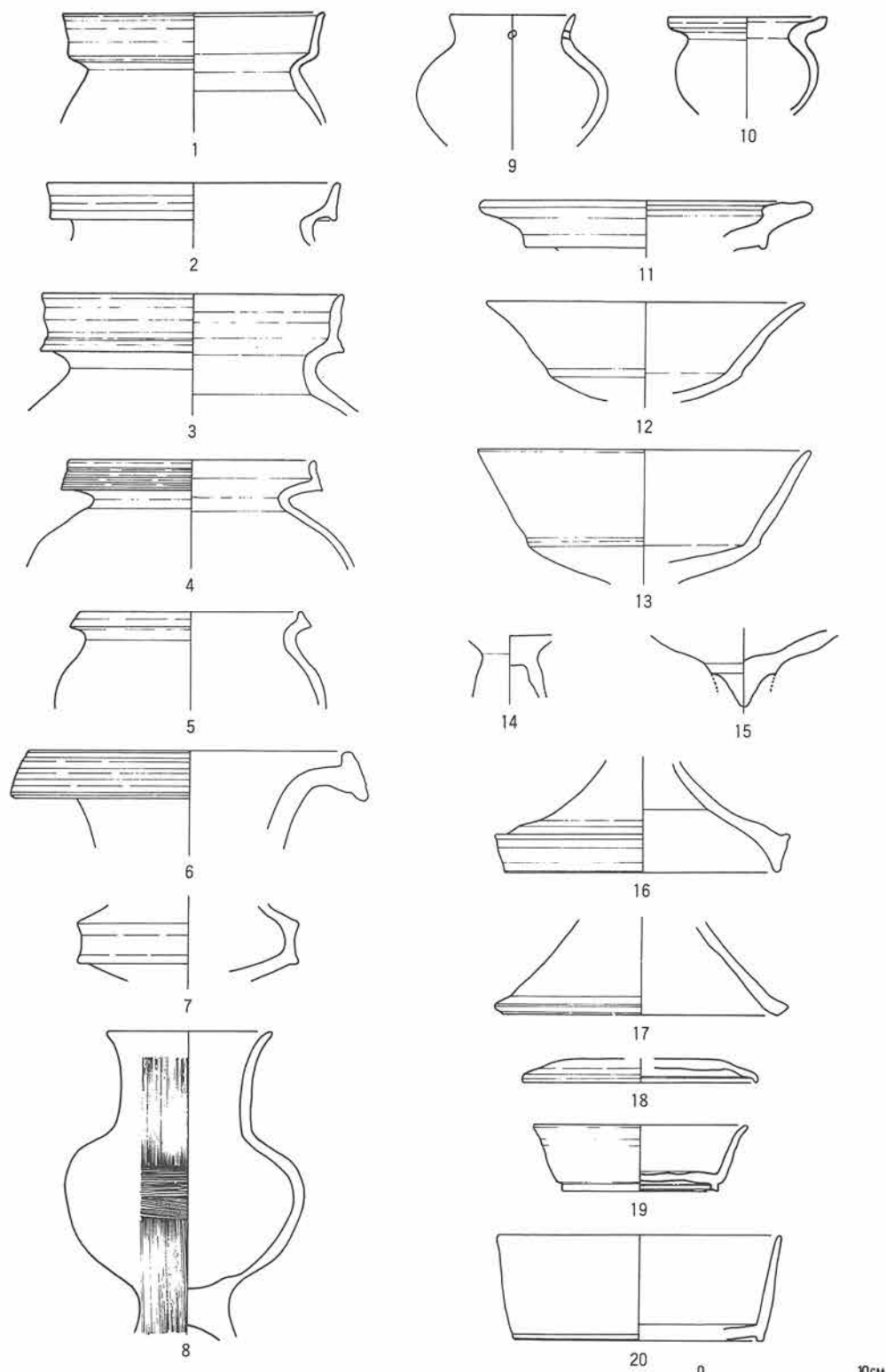


第125図 その他の土壙・柱穴出土遺物1 (1/4)

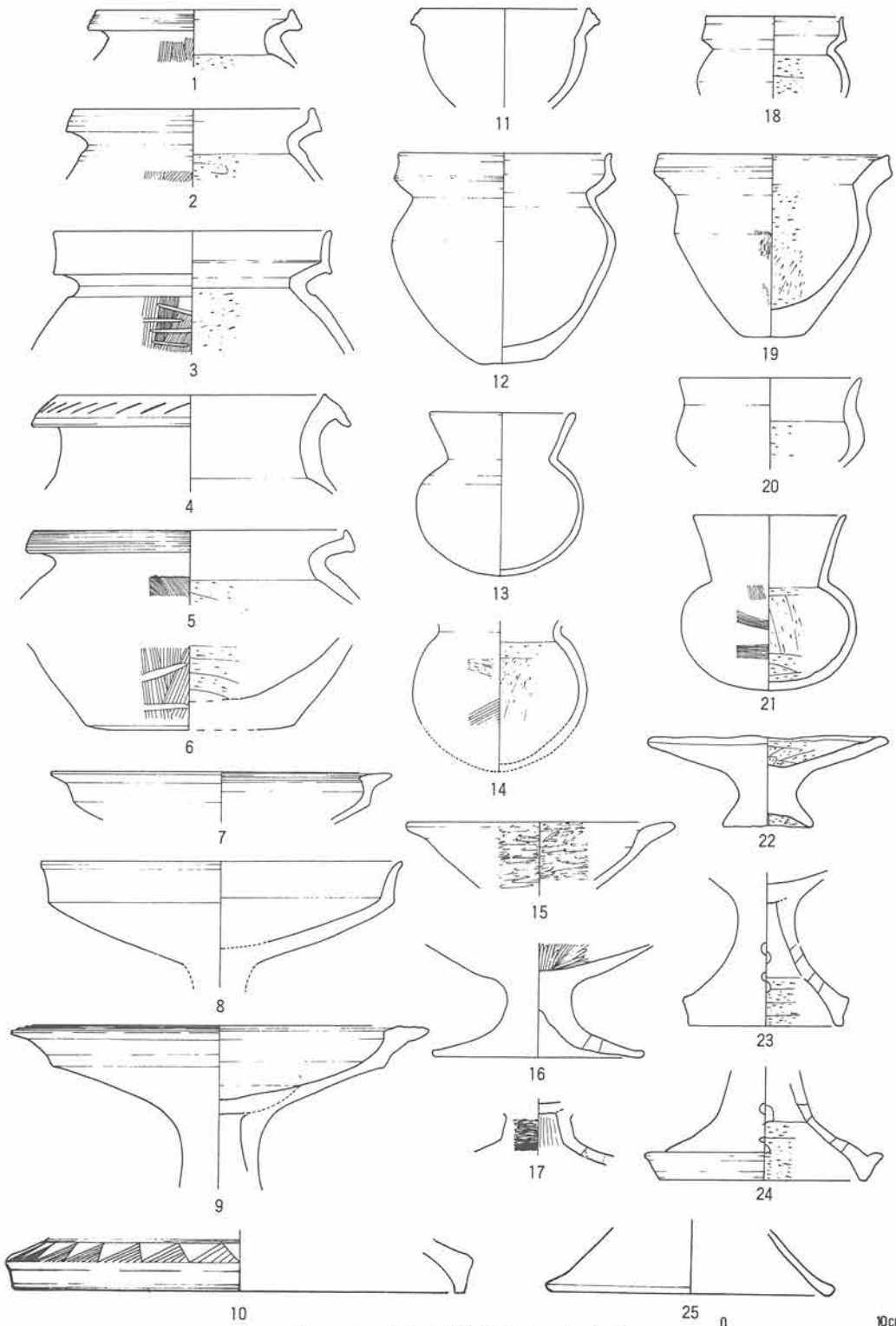


第126図 その他の土壙・柱穴出土遺物2（1/4）

谷尻遺跡（赤茂地区）

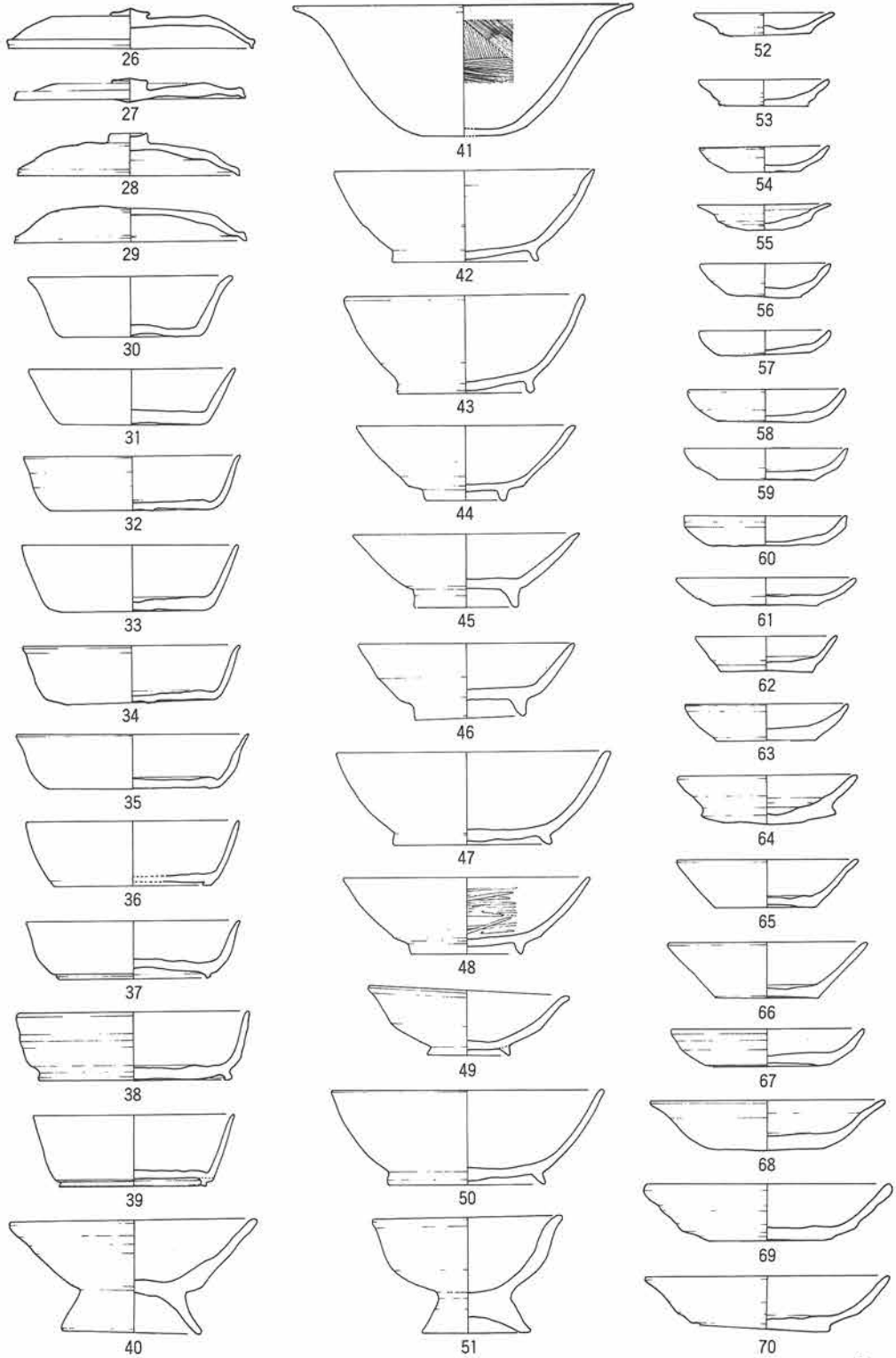


第127図 その他の土壌・柱穴出土遺物3（1/4）



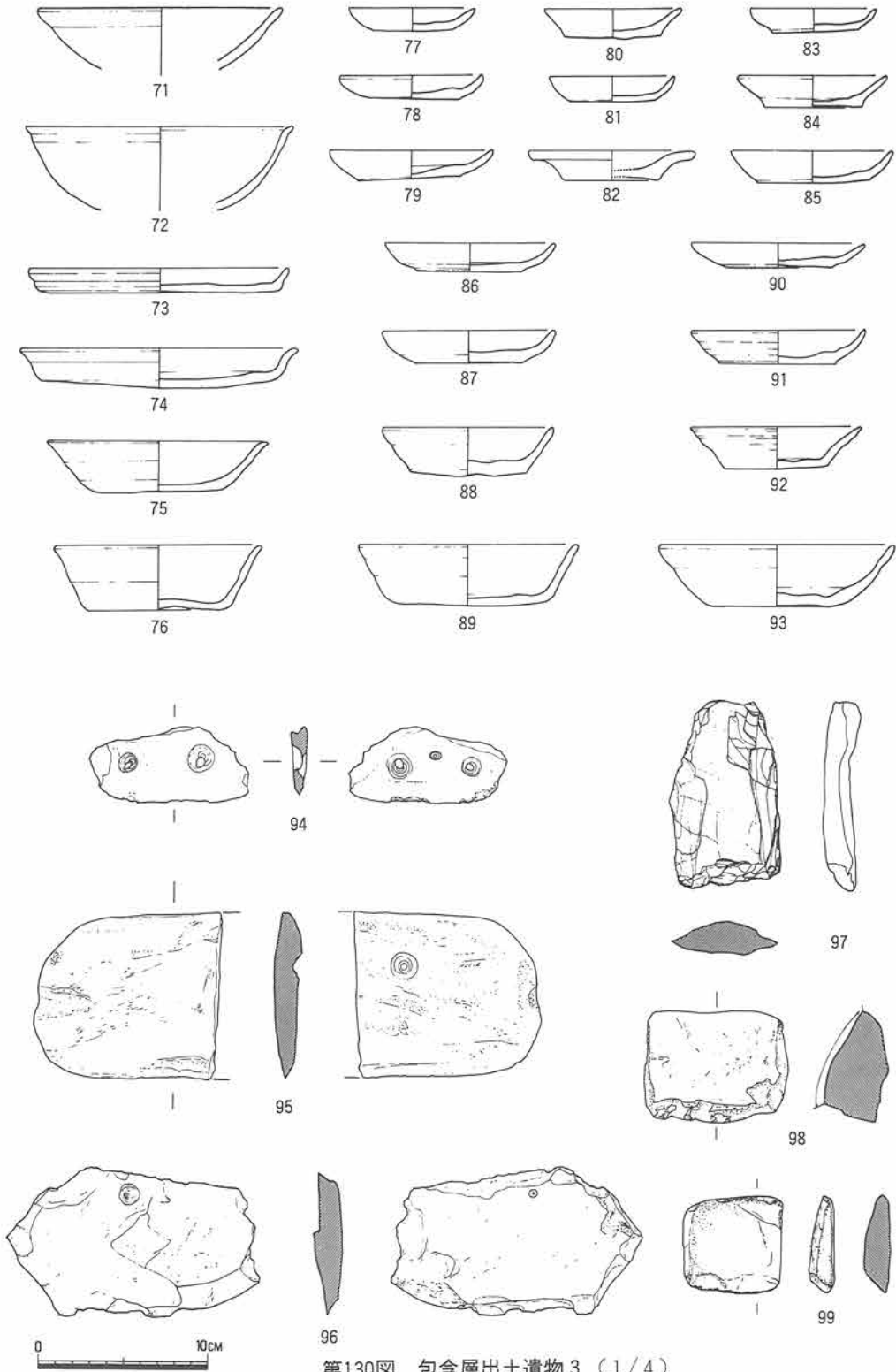
第128図 包含層出土遺物1 (1/4)

谷尻遺跡（赤茂地区）



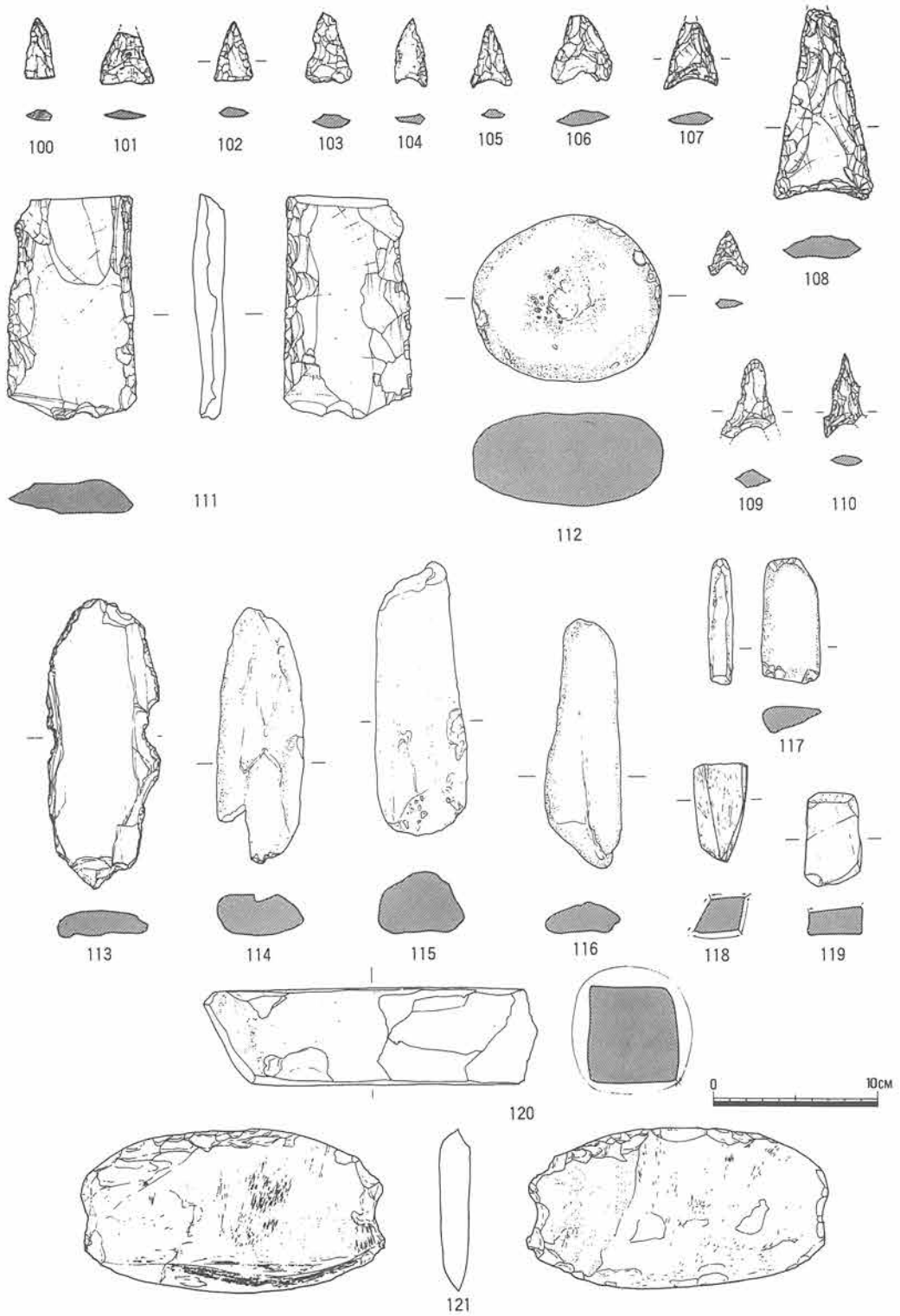
第129図 包含層出土遺物 2 (1/4)

谷尻遺跡（赤茂地区）



第130図 包含層出土遺物3 (1/4)

谷尻遺跡（赤茂地区）



第131図 包含層出土遺物4 (1/4, 100~111は1/2) (岩崎)

## (5) 小結

谷尻遺跡（赤茂地区）からは全域にわたって中世の遺構が検出されている。中世の遺構の存在することは確認調査の段階でも判明していたが、本調査では予想を上回る広範囲にわたって出土している。今回検出した遺構は掘立柱建物35棟、井戸7、土塋、溝などである。しかしこれらの遺構の時期については調査区域が耕地化されるにあたって削平されているため出土遺物が少ない、もしくはあっても小破片に破碎された状態であるため時期判定の資料になりえない場合も多い。また遺構の性格から言って掘立柱建物などは遺構に伴う遺物の出土例は少ない。それは本遺跡の場合も例外ではなく、遺構に伴って出土している遺物は少ないが備前焼の播鉢、甕を中心に考察してみたい。

備前焼については花器、茶器を中心とした美術鑑賞的な見方が主の研究に対し、昭和40年代に入って間壁忠彦、間壁葎子両氏が、考古資料を中心とした編年研究(注1)を発表したのを契機にその編年研究は飛躍的進歩をとげた。ここではそれらを参考にしていきたい。

本遺跡出土の備前焼は播鉢と甕が主である。甕の良好な資料は第120図土塋40出土のものがあり、3点図示しているがいずれも大甕である。全体の形状のわかるのは1だけであるが3点とも口縁の形状は類似しており同一時期と考えられる。口縁部の玉縁は垂れ下がっているが、凹線は認められないもので間壁編年で言えばN期の後半、即ち室町時代の後半の範疇に入る。播鉢は溝1、井戸1・3・5・6と土塋50、ピット117等から出土している。中でも最も残りの良い第125図53の播鉢は口縁部が上下に拡張され、上方は特に引き伸ばされて端部はやゝ尖って終るもので、上記編年ではN期の後半に入る。他の播鉢も大まかにみて大部分がN期の範疇に含まれると考えられるが、その中でも多少の時期差はある。たとえば、第113図の井戸3・6、第126図の111は口縁部分の上方への拡張がさらになされておし新しい様相を呈している。

また多数出土した土師質の皿には底部が糸切りのものと押圧によるものが見られる。土師質皿についてはまだ十分な編年研究がなされていないが、12世紀後半とされている沖ノ店1号窯(注2)では土師質の小皿はすべて糸切りによるものであり、また同遺跡の中世溝(15世紀後半～16世紀前半)出土の土師質小皿も糸切り底のものは押圧によるものより先に消滅している。糸切り底の土師質皿は溝2、井戸2から出土しており、特に溝2のものは口径6.2～11.2cmと小皿ばかりである。

以上のことから中世遺構は室町時代後半の時期と考える。その中でも溝2は他より多少古くなる可能性もある。

(森田)

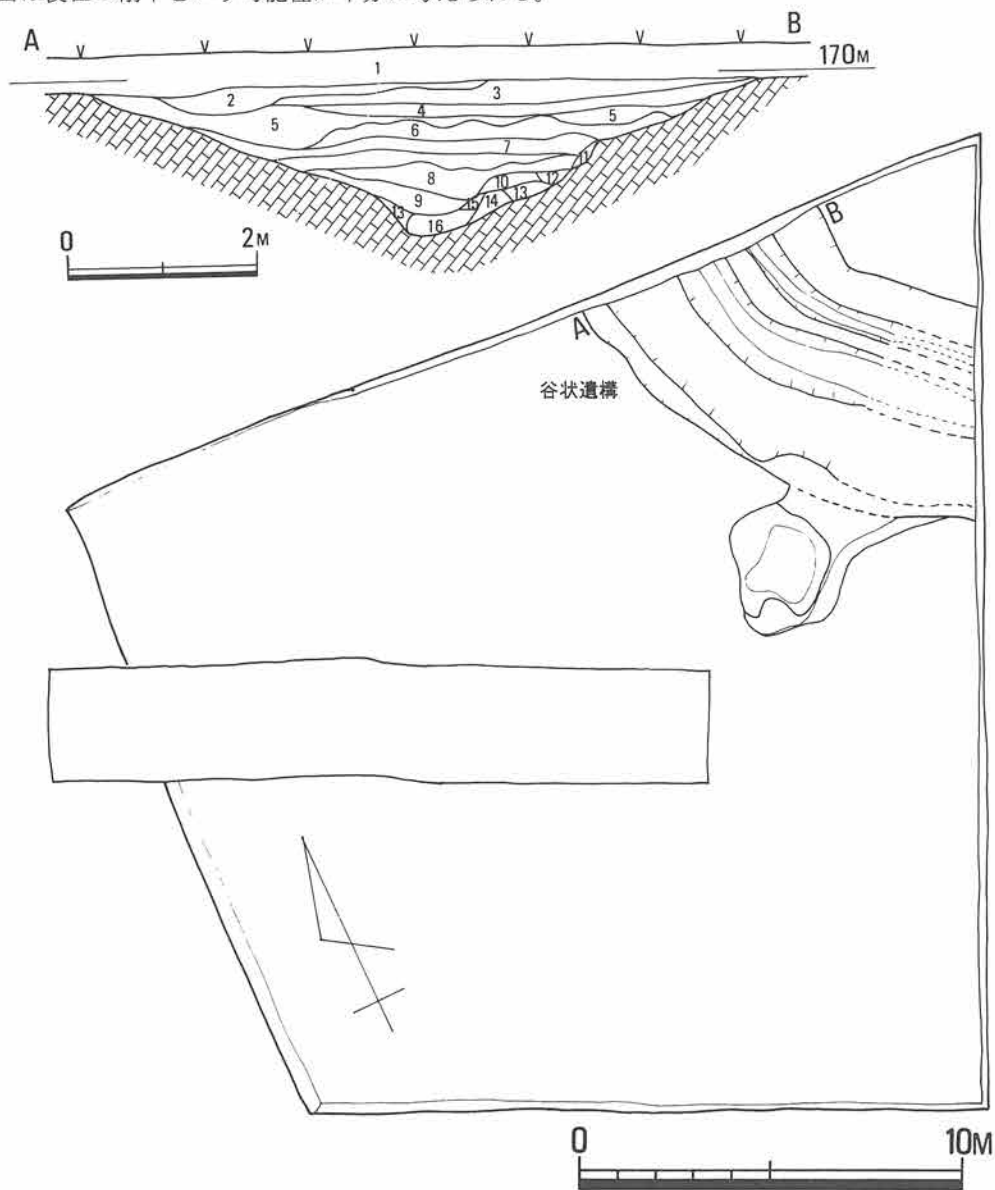
注1 間壁忠彦、間壁葎子「備前焼研究ノート」(1)～(3)『倉敷考古館研究集報』第1号、第2号、第5号、1966～1968

注2 伊藤晃、浅倉秀昭、江見正己「沖の店遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42岡山県教育委員会 1981.3



### 第2節 第2地点の調査（第132図、図版31-1）

第2地点は第1地点の南100mに位置し、同一尾根上の基部に立地する。調査前は水田であった。第2地点は英賀廃寺の寺域が一町四方であること（昭和55年の発掘調査で確認済み）から、調査区の西端は地域の東端を示す築地もしくは溝状遺構の検出が予想されたが、実際に検出したのは谷状遺構1本だけである。しかし本地点は西と北に隣接する水田と比較して約20cmも高いにも拘らず35cm余の耕作土の直下は地山面になっており、寺域を示す遺構の未検出は後世の削平という可能性が十分に考えられる。

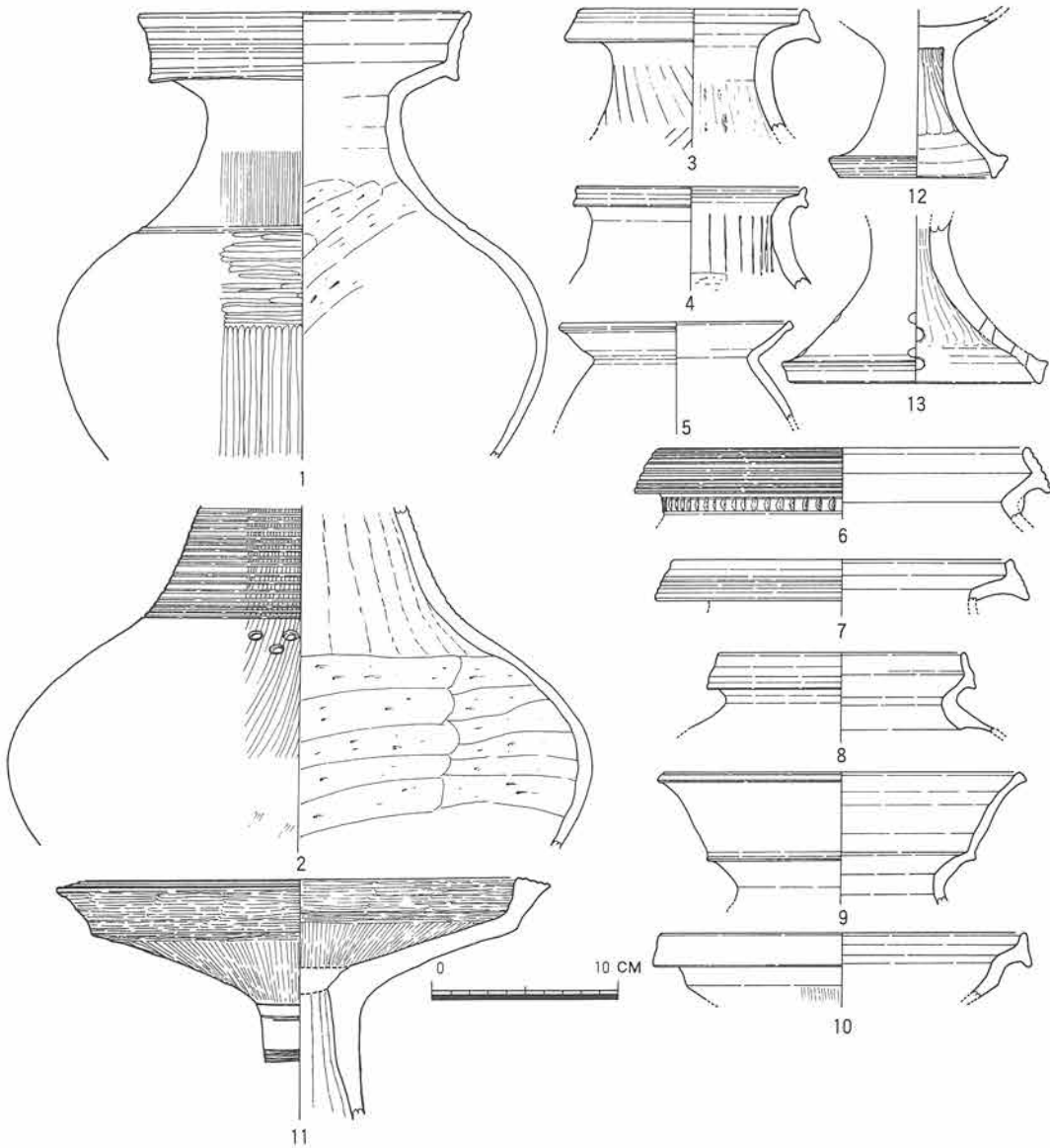


第132図 第2地点全体図（1/200）・谷状遺構断面図（1/80）

谷状遺構（第132・133図）

調査区の北東端から検出された。東から北へ向うちょうどコーナーの部分にあたるもので、この遺構は第1地点の西側に広がる谷部に続いている。谷の幅は6.9m、深さは1.6mを測り断面は逆三角形を呈す。遺物は主に弥生式土器が入っていたが、第3層、第4層を中心に第5層、第6層までは認められるが第7層からは検出されてなく、上層部分に周辺から流入したものと考えられる。

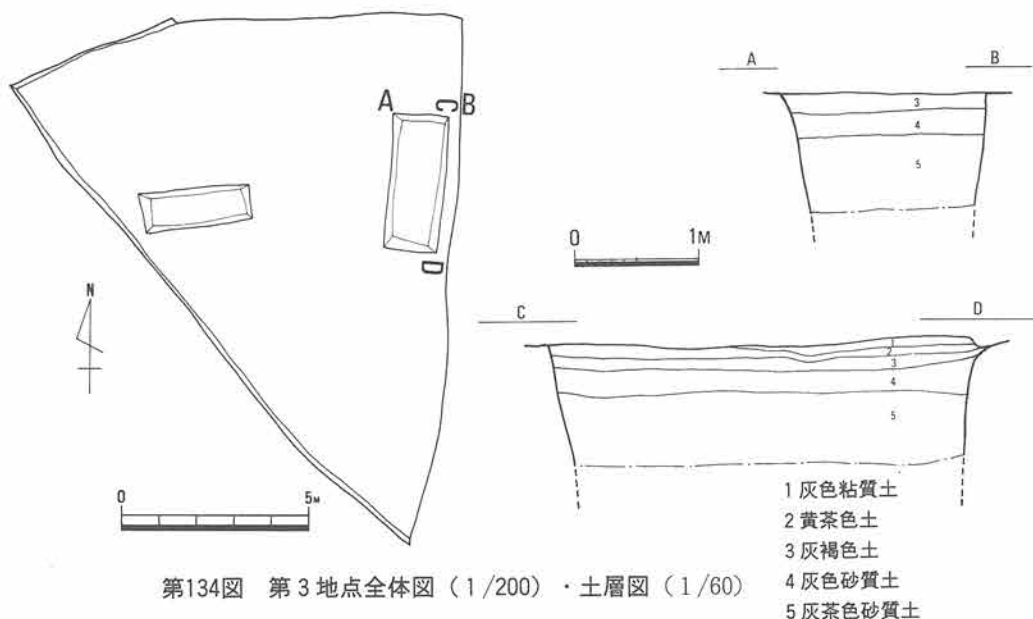
出土遺物は第133図に示したが、これ以外に整理箱約6箱出土している。



第133図 谷状遺構出土遺物（1/4）

### 第3節 第3地点の調査（第134図）

第3地点は第2地点とは英賀廃寺の寺域を挟んでちょうど110m余西に位置し、英賀廃寺がある尾根の西端にあたる。そのため、本調査地点は現時点で西に走る谷川の影響を受けて耕作土の下の床土から下層は1m以上にもわたって3～10cm大の砂利層となっており湧水が著しいため地山面まで掘り出すことはできなかった。遺構、遺物についても特筆すべきものは検出されていない。



第134図 第3地点全体図（1/200）・土層図（1/60）

### 第4節 第4地点の調査（第135図、図版31-2）

第4地点は第2地点で検出された谷を隔てて、第1地点と向かいあう形で西側の尾根の先端に位置する。東西に長い調査区の中央部分は尾根頂部であるが、両端は谷部になっているため堆積土は厚い。検出した遺構は掘立柱建物4棟と、柱穴、溝等である。

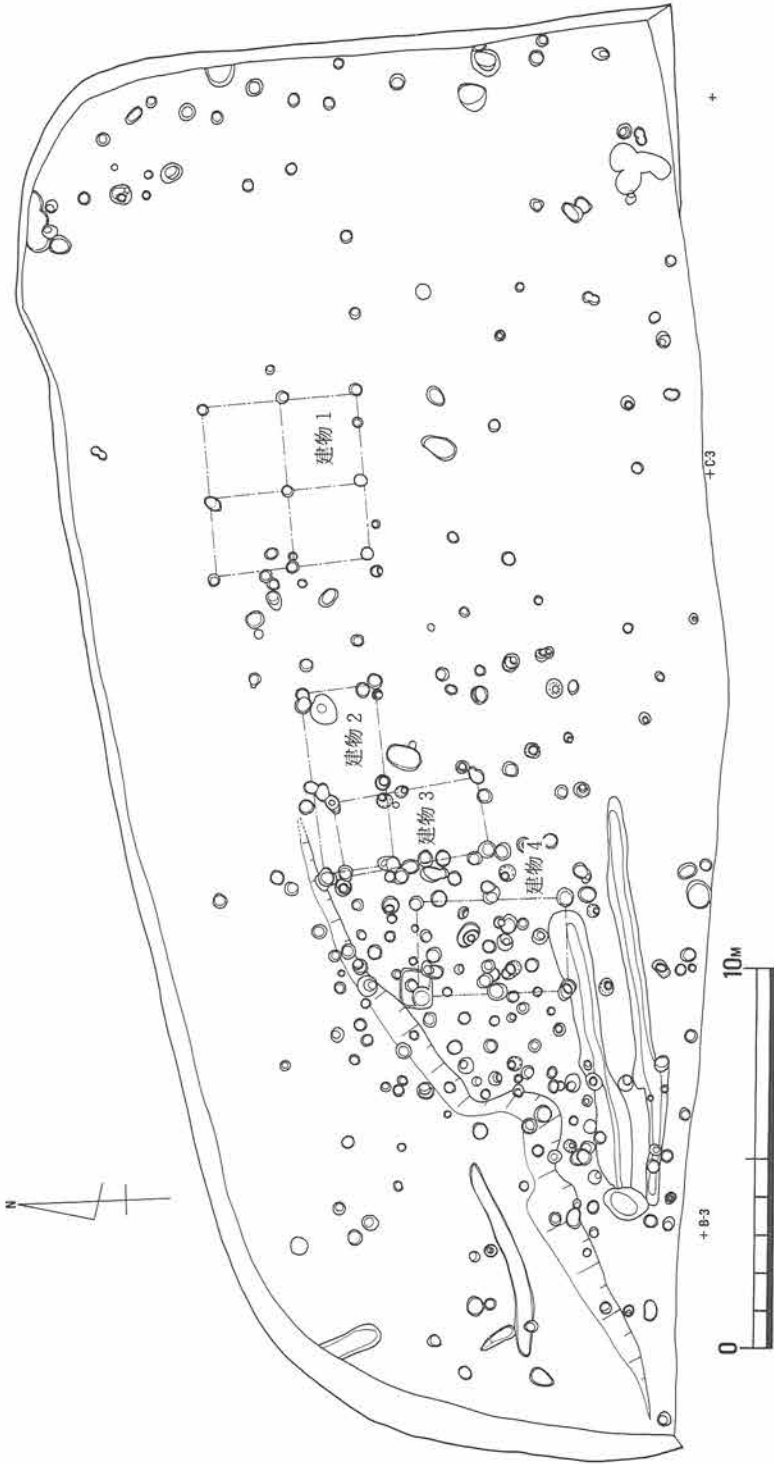
#### (1) 建物

##### 建物1（第136図）

2間×2間で真中にも柱を持つ総柱の建物である。長軸方向は東西を向いており、東西4.30m、南北4.10mを測りほぼ正方形に近い。尾根頂部にあるため柱穴の上半は削平されていて浅くなっている。

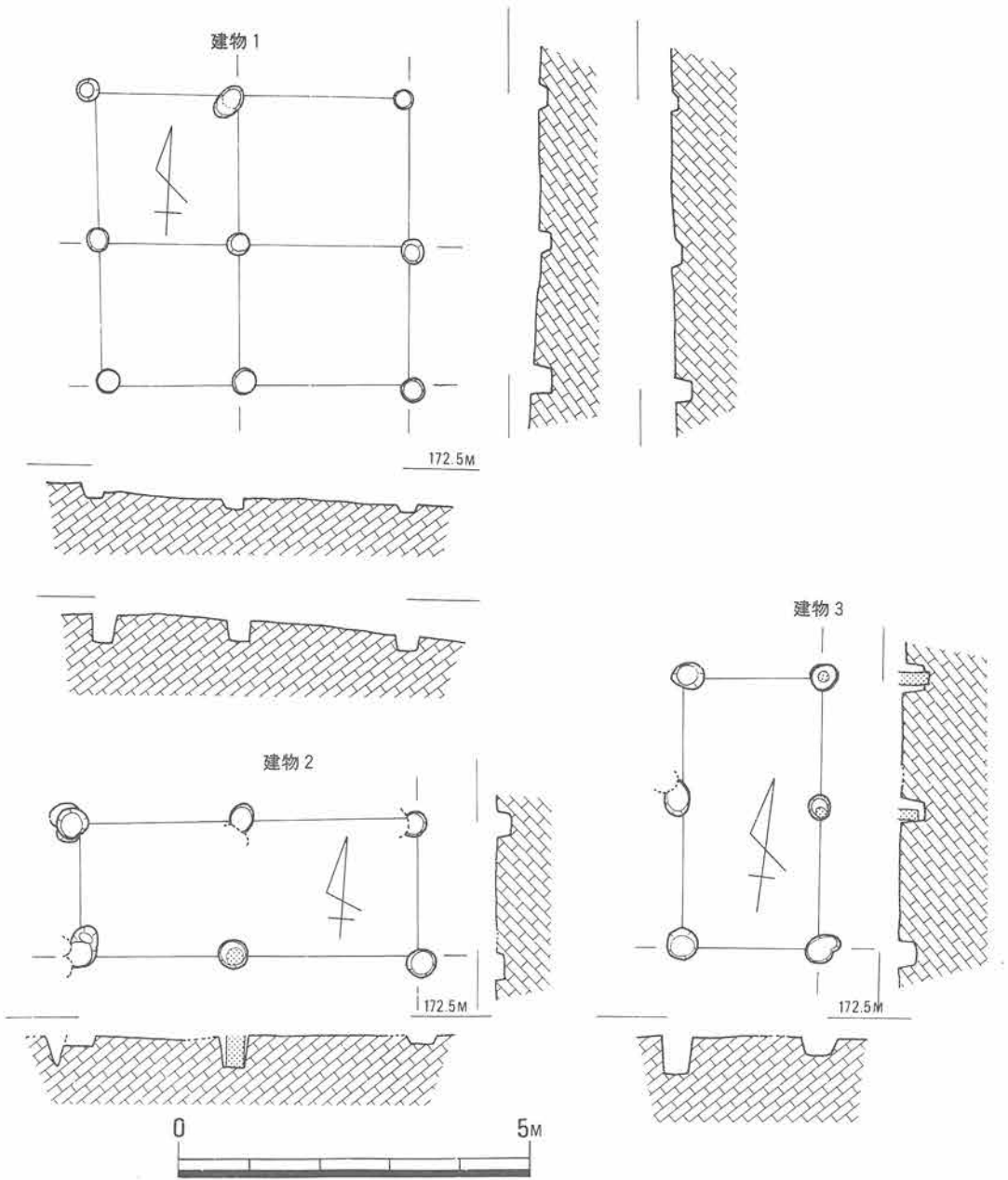
##### 建物2（第136図）

桁行2間、梁行1間の建物である。長軸方向は東西に向いており建物1と同一方向である。規模は桁行4.85m、梁行1.90mを測る。建物3と重複しているが両者の新旧関係については不明である。



第135図 第4地点全体図（1/200）

谷尻遺跡（赤茂地区）



第136図 建物1・2・3 (1/100)

建物3 (第136図)

桁行2間、梁行2間の建物で建物2と重複しているが、長軸方向は南北を向く。規模は桁行3.85m、梁行1.95mである。

建物4 (第137図)

桁行2間、梁行1間の建物である。規模は桁行3.95m、梁行2.45mである。長軸方向は南北

に向いているが、建物3とはやゝずれている。

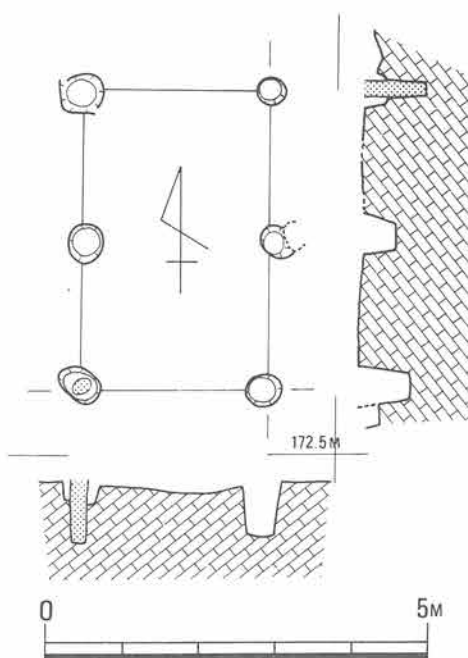
また建物1・建物2とも直交はしない。

出土遺物については4棟の建物に伴うものは出土していない。従って時期を判定することは出来ないが、第138図に示したピット内の出土遺物や、埋土中から検出された土器片を参考に考えてみたい。図示した以外には備前焼、亀山焼なども出土しており、大まかに室町時代の終り頃から江戸時代の初め頃と考える。

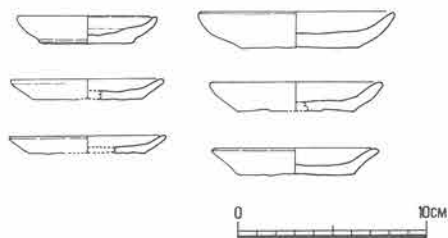
#### 第4地点出土遺物（第138図）

本調査区内より検出したピット内の出土遺物である。すべて土師皿でいずれも底部はヘラによる切り離し痕が認められるものである。

（森田）



第137図 建物4（1/100）



第138図 第4地点出土遺物（1/4）

## 第4章 ま と め

### 第1節 谷尻遺跡赤茂地区発掘調査概要

今回の発掘調査で検出された遺構は竪穴住居址28軒、建物47棟のほか数十の土壇及び1万以上にのぼるおびただしい柱穴等、当初の予想をはるかにこえる膨大な数となった。検出された遺構の内、竪穴住居址と建物についてはほぼすべて記載しえたが、土壇については、代表的なものについて、柱穴については主だった柱穴内遺物の記載にとどまった。

以下時代別に今調査で検主された遺構・遺物について谷尻地区と対比させて考えていきたい。

調査で出土した遺物で最も古いものは、縄文時代早期まで遡る。楕円の押型文土器が2点出土している。ほぼ同時期の土器片は谷尻地区のほか2ヶ所で出土しており（注1）、現時点でこれより古い遺物は出土していない。以後谷尻地区では晩期の遺物が急増するとともに、土壇等遺構が検出されるが、赤茂地区では遺構は認められず、ほかに縄文時代の遺物は石鏃2点と土器片数点出土したにとどまった。続く弥生時代も前・中期の遺構は検出されず、包含層から土器片数片出土したのみである。後期になると竪穴住居址のほか多数の土壇が検出された（第139図参照）。古墳時代になると初頭の住居址3棟と土壇1基が検出されている。この弥生時代後期から古墳時代にかけての住居址のあり方は谷尻地区とは時代幅に差が見られ赤茂地区から谷尻地区へと住居区が移っていったことがわかる。その後、赤茂地区へ人が入るのは建物36・42・47の建てられる奈良時代まで数百年にわたる空白期間があり、この期間内の遺構は6C後半に築造され、7Cまで追葬が行なわれた赤茂1号墳のみとなる（第2節に記載する）。この期間は遺構が検出されないだけでなく遺物もほとんど検出されなかった。

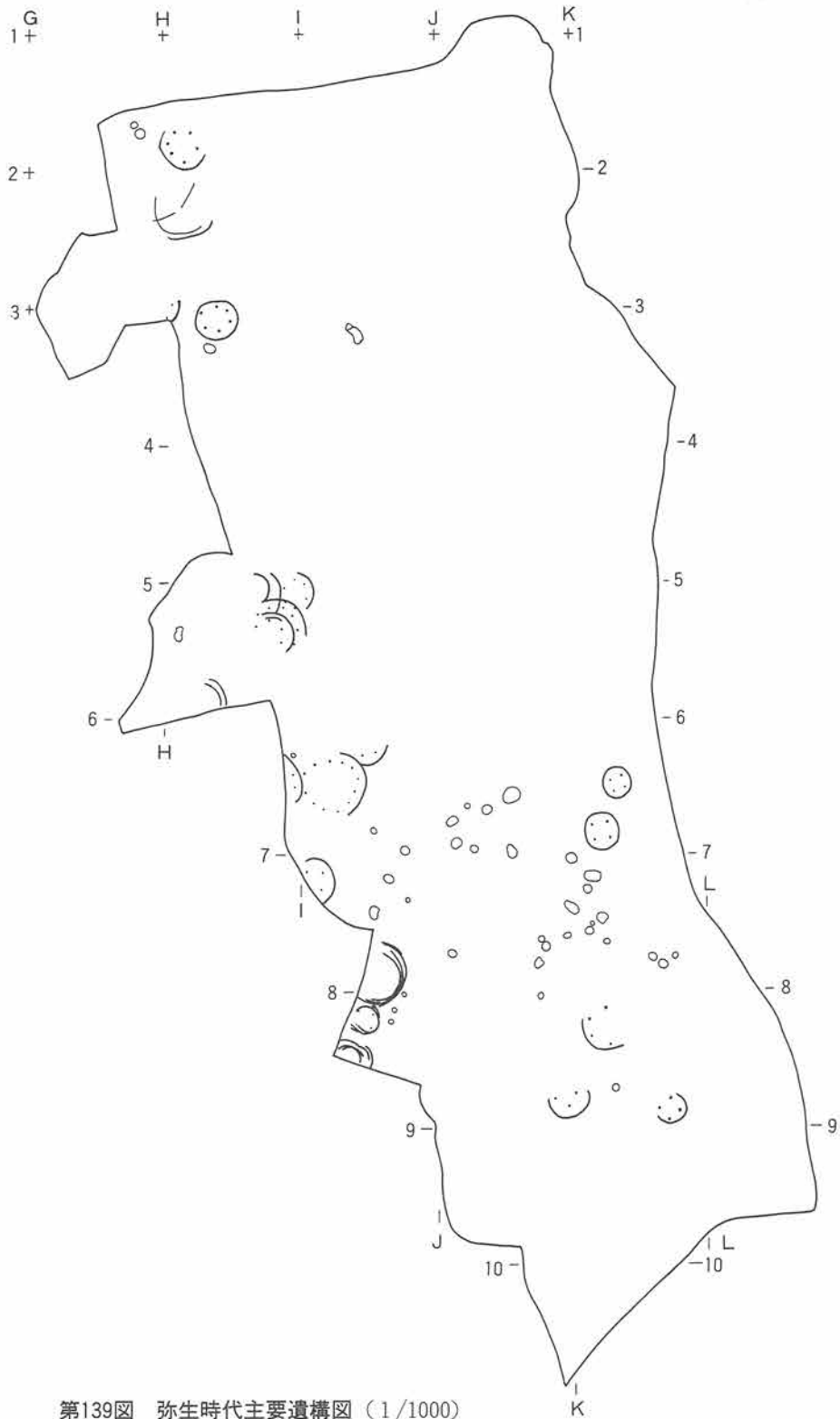
奈良時代の遺構はこの3棟だけであるが建物と、近接する英賀発寺は約60mとしか離れておらず、包含層遺物も第1地点では北半ではほとんど出土せず、南半、英賀廃寺より出土することや工事中の立合いで検出した建物等が3、廃寺関連の遺構は、第1地点の側ではなく廃寺南側の地区に集中すると考えられる。

室町時代になると「堀り」と考えられる溝1に囲まれた建物群が検出された（第3節に記載）。この時代の遺構は谷尻地区をはじめ植木遺跡で検出されている（注2）。町の平野部を見下ろす山々の頂には備中三城の一つに数えられる才田（佐井田）城のほか13の山城が築かれ（注3）、群雄割拠の時代を迎える。こうした時代背景からこの建物群はこうした山城を拠点とした武士の居館であると考えられる。（岩崎）

注1 谷尻遺跡のほか備中平遺跡、空古墳盛土内より出土している。

注2 植木遺跡では幅4.5mの「空堀り」と建物群が検出されている。

注3 『上房郡誌』・『皆部村史』・『日本城郭大系』や現存の古文書等に記載が見られる。



第139図 弥生時代主要遺構図 (1/1000)



## 第2節 赤茂1号墳

### 1 出土遺物の特徴

赤茂1号墳は墳丘の直径約16mを測る円墳で左片袖式の横穴式石室を内部主体とする古墳である。石室の規模は残存長6.8m（玄室長4.7m）を測る。6世紀の後半に築造され、7世紀初頭まで追葬が行われている。古墳から出土した遺物は約300点にも及び、古墳の破壊状況から考えれば非常に多い。その内容は土器、鉄器（釘、刀子、大刀、鉄鏃、馬具）、装身具と一応一式揃っているといった状態であるが、その中で特徴的なものを取り上げてみると、まず馬具がある。馬具は鉄製で何ら装飾のない質素なものではあるが鐙鞆、鞍、轡が出土しており一応一式揃った状態で出土している。しかも、鞍の中には他に類例を見ないものも含まれている。また、多数出土した装飾具のうち玉類に特徴的なものが見られる。水晶製勾玉と管玉、ヒスイ製棗玉である。水晶は石材としては珍しくないが、勾玉や管玉に加工した例は少ない。ヒスイは石材として珍しい。どちらの石も硬い材質であり、ヒスイ製棗玉は一度穿孔に失敗しておりその加工に費した労は想像以上であったであろう。

### 2 町内の古墳との比較

これまで北房町内で発掘調査された古墳のうち赤茂1号墳とはほぼ同時期のものと比較してみたい。既調査の古墳は空古墳（注1）、土井2号墳（注2）、大谷1号墳（注3）の3基である。そのうち最も大きいのは土井2号墳で墳丘は無いが全長9.77mを測る左片袖式の石室を有する。2番目は空古墳で、墳丘の直径11.5m、石室長は8.9mを測り右片袖式である。最後に大谷1号墳であるが、これは墳丘の直径約10m、石室は左片袖式で残存長6.5mを測る。出土遺物の量は土井2号墳が際立って少ないほか2基はほぼ同量である。しかし、その内容については土井2号墳と空古墳とは大いに異なる。土井2号墳からは金銅装の頭椎大刀が出土しており、被葬者の権力の相異が如実に現われている。

さて、これらの古墳と比較して、赤茂1号墳の規模は石室の全長を欠くが墳丘の大きさから土井2号墳と空古墳の中間と思われる。また副葬品の量は赤茂1号墳が一番多く残存しているが、上述したとおりで際立って権力を誇示するようなものは無い。しかし、頭椎大刀を除く限りでは土井2号墳のものより量、質ともにむしろ豊富である。以上のことから赤茂1号墳は6世紀後半～7世紀前半にかけての備中川上流域においては中の上クラスの古墳であると言えるであろう。

### 3 被葬者について

赤茂1号墳は北房町内で最も多くの古墳が存在する上水田地区の中でも備中川右岸では東端に位置する古墳である。当古墳以東の丘陵は急峻になるため古墳は築造されていない。現在の国道313号線が敷設される以前の旧道（備中川沿いに美作国栗原郷へ通ずる）は備中川の右岸

の山沿いに通っており、赤茂1号墳の立地する場所は上水田への出入口とも言うべきところである。また赤茂1号墳は群集することなく単独で一基だけ、しかも周辺の古墳から離れた所に位置しており、付近の同時期の古墳とは異なった在り方をしている。また当古墳の南200mには英賀廃寺（白鳳時代建立）があり、さらに西2kmには英賀郡衙とされている小殿遺跡もあり、当地域は律令社会に入っても政治的に重要な地であったことが伺える。このことから赤茂1号墳の被葬者は6世紀後半に台頭してきた小地域首長ではないかと考える。

注1 田仲満雄 「空古墳」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 11 岡山県教育委員会 1976. 3

注2 平井 勝 「土井2号墳」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 29 岡山県教育委員会 1979. 3

注3 伊藤 晃 「大谷1号墳」 北房町教育委員会 1975. 3

### 第3節 中世の建物

#### 1 建物群の分類

中世の遺構は調査区のほぼ全域から検出されているがここでは溝1によって囲まれた建物群を中心に考察してみたい。

今回検出された建物は23棟である。23棟は東西65m、南北62m、約4000㎡の面積を測る平坦面に建てられている。この4000㎡の平坦面は北と東を自然地形により、南と西を幅約5mの溝によって画されており一見して一般民家とは異なる様相を呈する。

さて、23棟の建物は2つのグループに分かれて建てられている。井戸1を中心に建てられた11棟で建物1～建物11までの1グループと井戸2を中心に建てられた建物12～建物23である。このうち建物14は柱穴内の土層から他の建物より新しい時期であることと、建物23は柱穴の並びが今一度明確でないため、ここでは除外する。井戸1を中心とする一群を北群、井戸2を中心とする一群を南群と呼ぶ。

さらに北群は建物の方向に従ってA（建物1・建物2'・建物5）、B（建物2・建物3・建物4・建物8）、C（建物6・建物7・建物9・建物10）の3つにグルーピングすることができる。同様に南群はD（建物11・建物12・建物14・建物16・建物17・建物18・建物21）、E（建物15）、F（建物19・建物20）にグルーピングされる。

北群のA、B、Cグループは各グループごとにそれぞれ主屋となる建物（建物1・建物4・建物10）と従となる建物から構成されている。そのうち建物3と建物7は倉庫と考えられる建物であり、B・Cは主屋、倉庫と1間×2間の納屋らしき簡素な建物からなる。

## 谷尻遺跡（赤茂地区）

南群は北群とは異なり倉庫は見られないが、Dグループは建物18を主屋として中庭を囲むように6棟の建物が配置されている。このグループには建物21が入っているが建物21は溝2で区切られた外にあるため他の6棟と同一時期に建てたか否かは不明である。たとえ同一時期としても1棟だけ離れて建てたかもしかも100㎡を越える建物で納屋や倉庫ではないと思われるがどのような建物であったかはわからない。Fグループは建物19を主屋とし、他には建物20が北に並ぶだけである。しかし、建物21とは溝2を隔てるが、建物の長軸方向は直角に近く同一時期に存在した可能性も考えられる。また溝2は建物19とはやゝ方向が異なっており、建物19と建物20の間の溝は別の時期と考えたい。Eグループの建物15は1棟だけ建物の方向が異なっておりD・Fグループの建物とは別の時期であると考えられる。従って溝1で囲まれた建物は全部で19棟が5つのグループに分類され、しかも北群は3グループ即ち3時期に、南群は2グループ即ち2時期に分かれることがわかる。

### 2 建物群の時期について

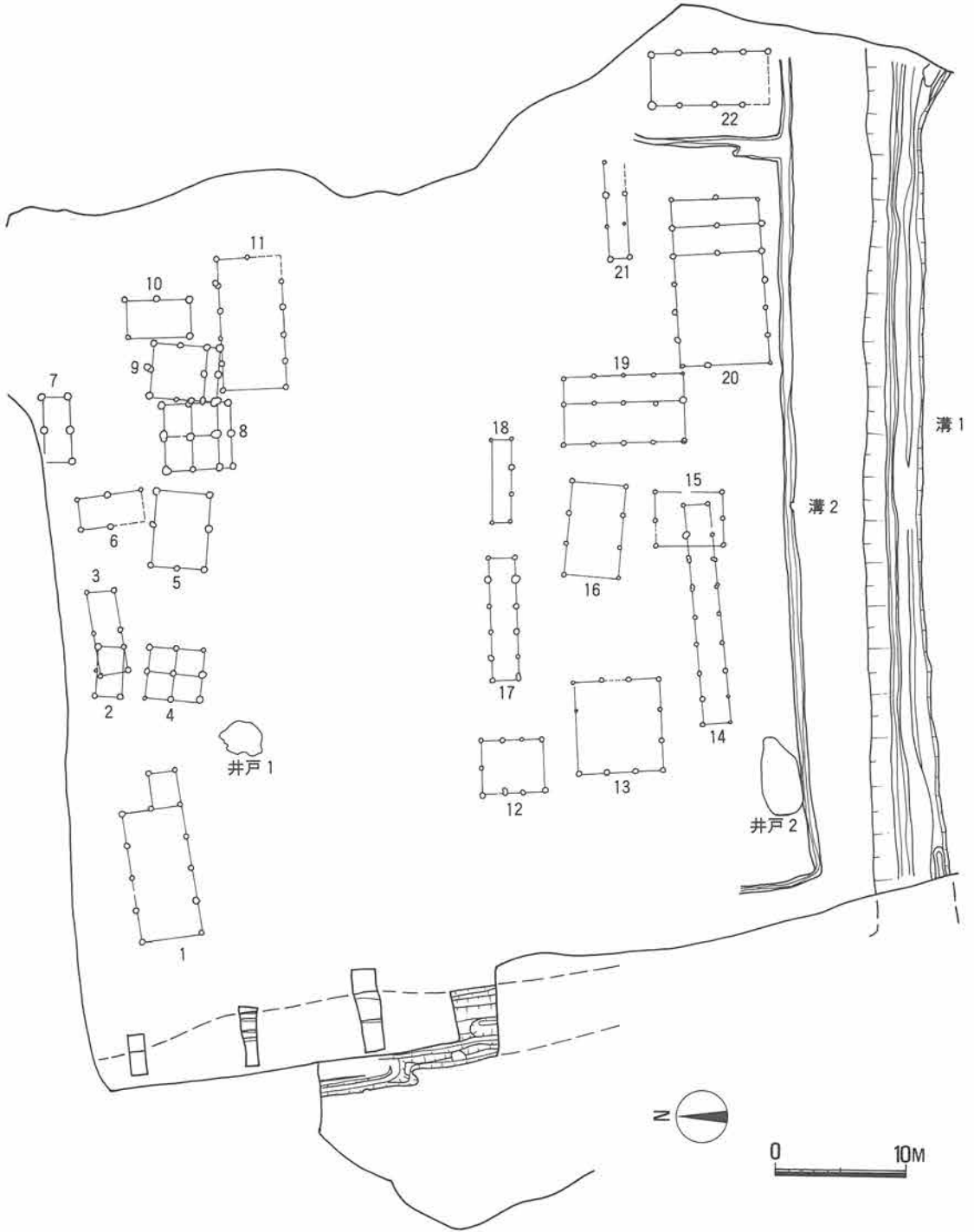
建物に伴って出土した遺物は土師質の皿だけであり、直接時期判定の手がかりは井戸1・井戸2・溝1・溝2出土の遺物である。それらには室町時代後半に比定される遺物が入っていたが、その中で遺構の使用もしくは廃絶直後に入ったと思われる状況は溝2だけで他は廃絶後に入ったと考えられる状況であった。従ってこれらの建物群は室町時代後半に廃絶されたと考えられる。開始の時期については明らかにすることができないが、鎌倉時代にまで遡るような遺物は包含層中にも認められず、一応室町時代の中葉～後半にかけての頃と推定する。また各建物の時間差についても前後関係はわからない。

### 3 建物群の性格

溝1で囲まれた19棟の建物群は武士の居館であると考えられる。第1の理由は堀と呼んでも良い大溝に囲まれた敷地内に主屋を中心として数棟の建物から構成されていること。第2には包含層中に青磁、自磁片が含まれていること。第3には時期が室町時代の後半であること。また、直線距離にして2.6km南の山頂には四ツ畝城（注1）という山城跡が残っている。第4に日常雑器の鍋、釜が出土しないのは、この時期は既に支配層には鉄製鍋が普及していたためである（注2）。以上の4点から武士の居館と考える。四ツ畝城と結びつける理由は記録があるわけではないが、山城への登り口に当遺跡が位置していることと、時期的にも中世山城の栄えた時期と一致することからこの居館の居住者は四ツ畝城主もしくはそれに近い人物であったと考えられる。（森田）

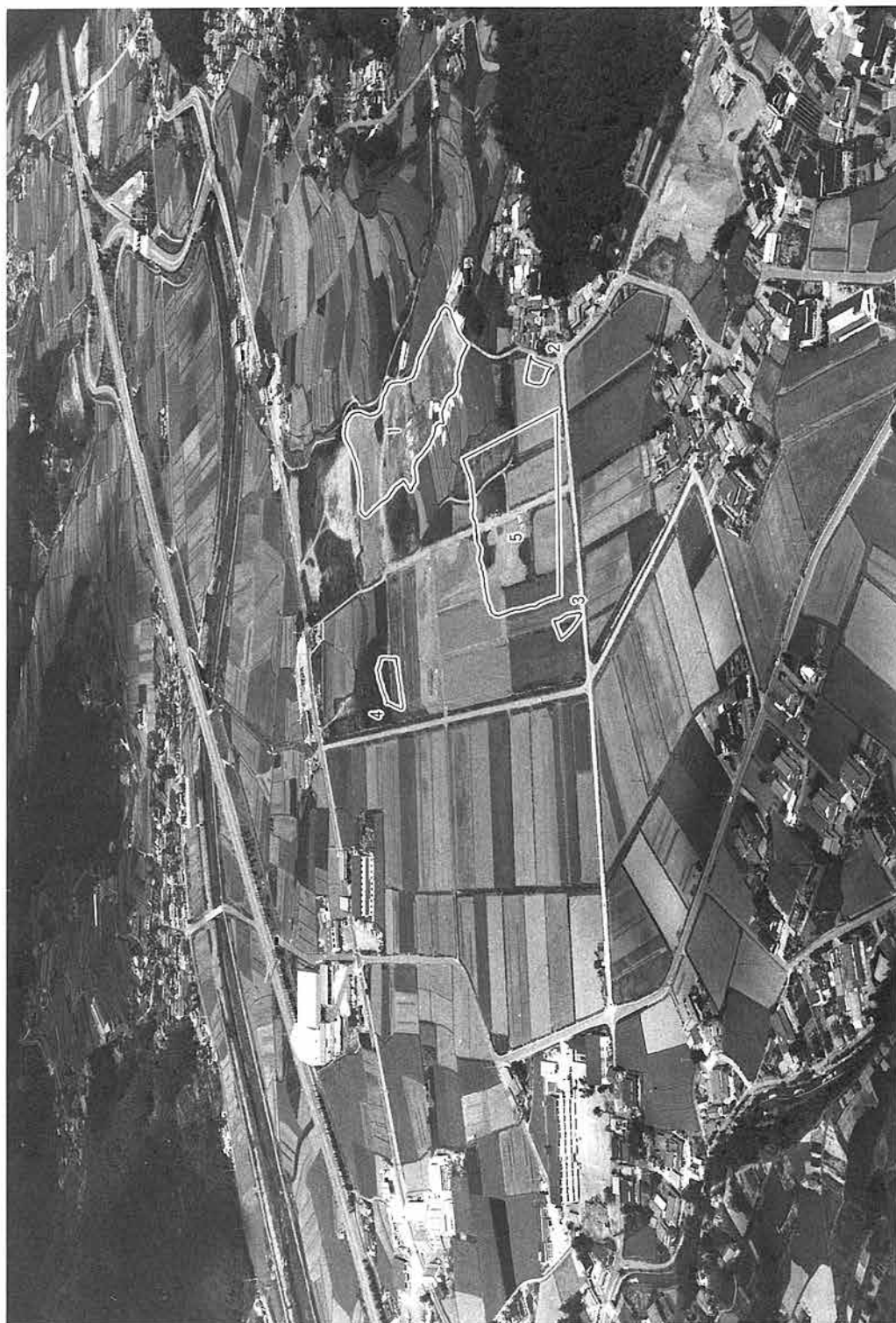
注1 永山卯三郎 「岡山県通史」 岡山県通史刊行会昭和5年による。

注2 広瀬和雄氏 （大阪府教育委員会文化財保護課）の御教示による。



第140図 中世建物配置図 (1/500)





谷尻遺跡航空写真

- 1. 第1調査地点
- 2. 第2調査地点
- 3. 第3調査地点
- 4. 第4調査地点
- 5. 英賀庵寺



1. J~K-7~10区全景 (北より)



2. J~K-6~7区全景 (北より)



1. 1-7区全景 (北より)



2. J~K-5区全景 (西より)



图版 4



1. 1·2·3号住居址



2. 7号住居址



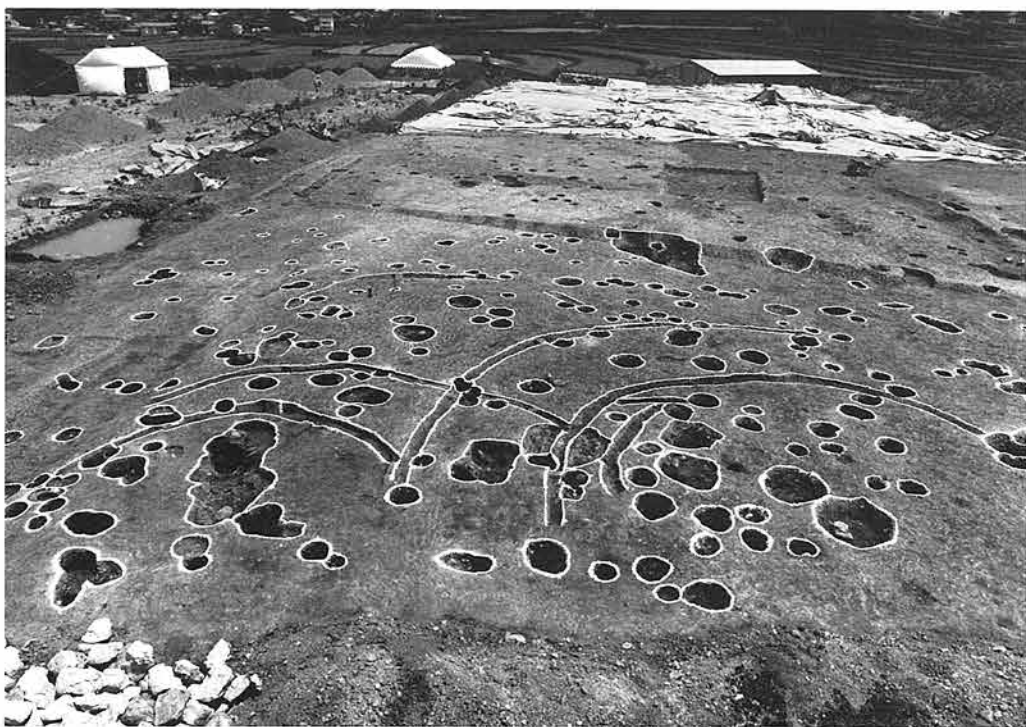
1. 7号住居址土器出土状况



2. 8号住居址



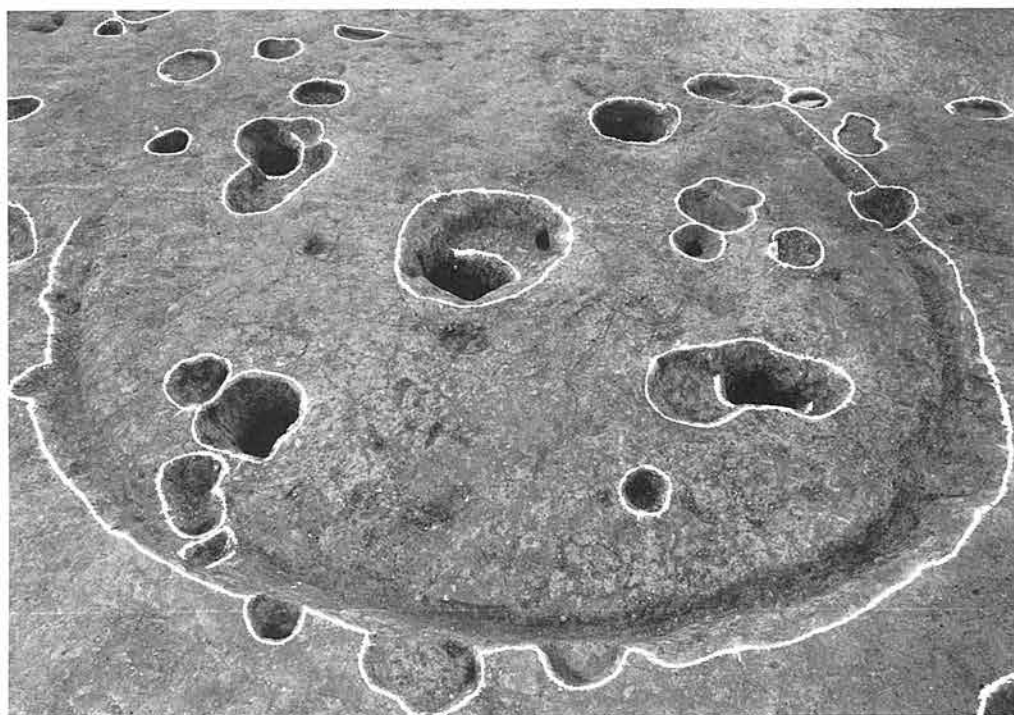
1. 9号住居址



2. 10・11・12・13・14号住居址



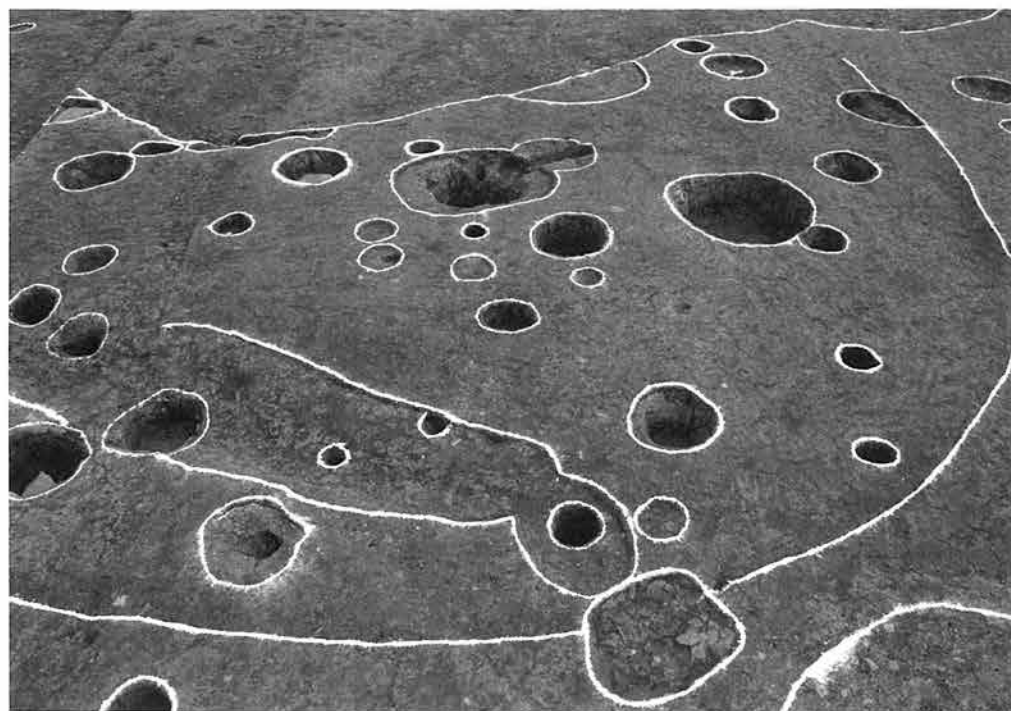
1. 19号住居址（東より）



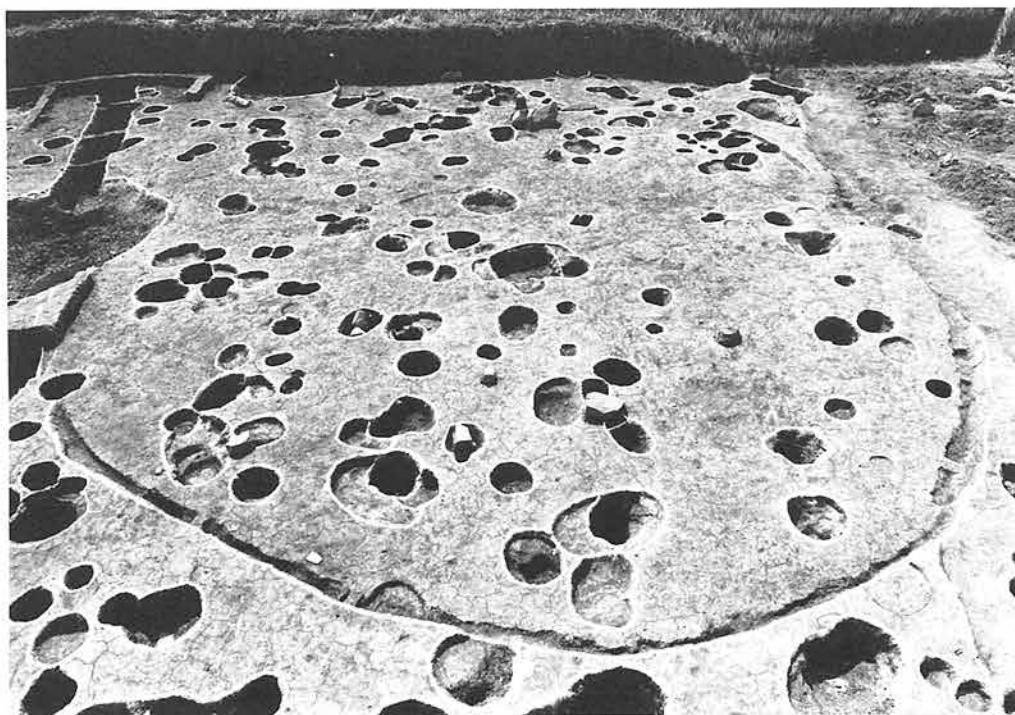
2. 21号住居址（南東より）



1. 26号住居址（西より）



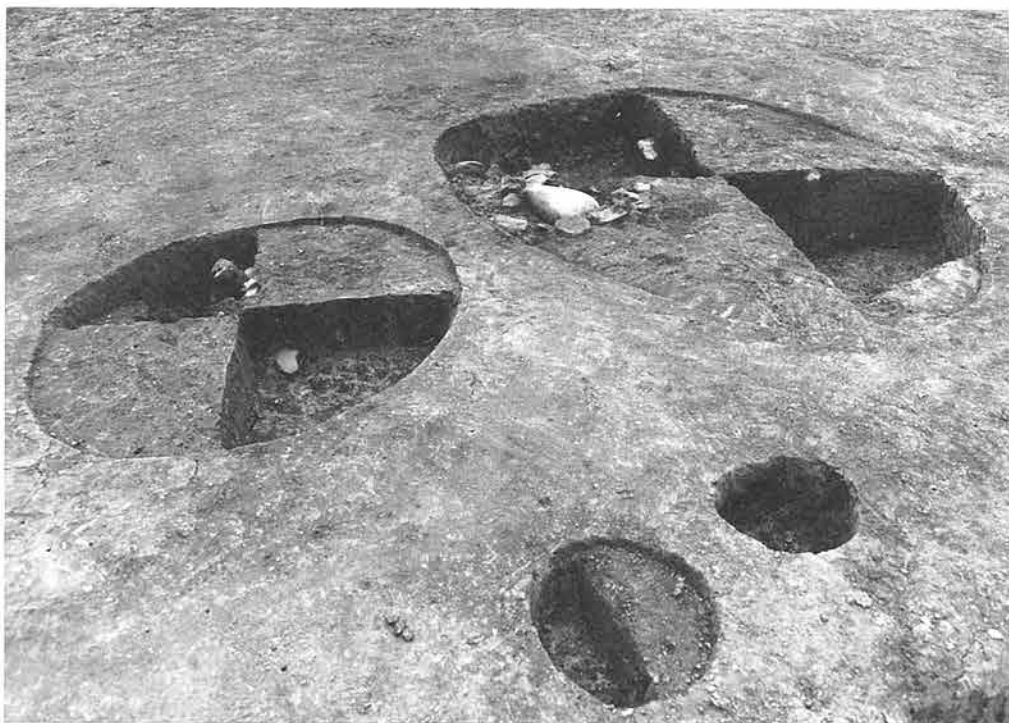
2. 20号住居址（西より）



1. 16号住居址（東より）



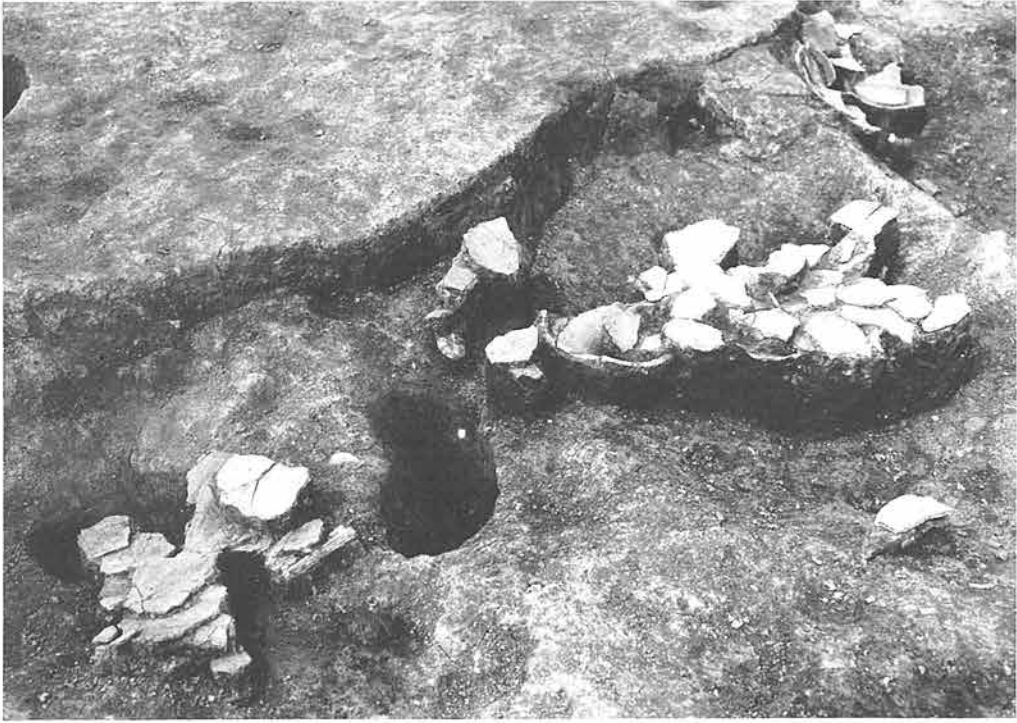
2. 土壙1205遺物出土状況（南より）



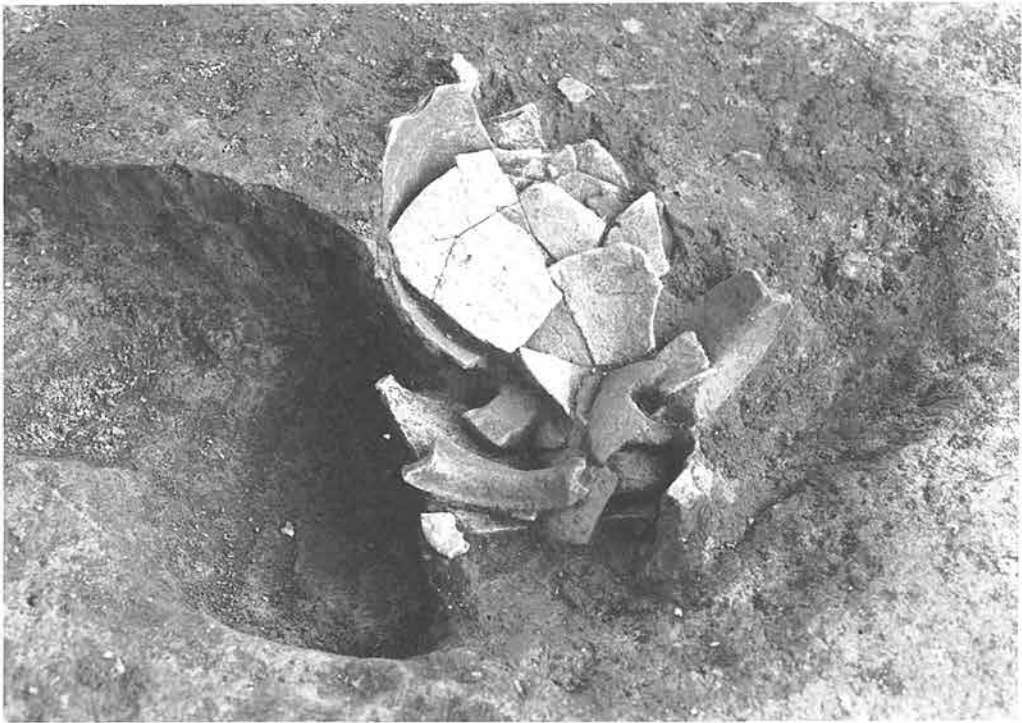
1. 土壌1・2



2. 土壌2 遺物出土状況



1. 遺物43 遺物出土状況

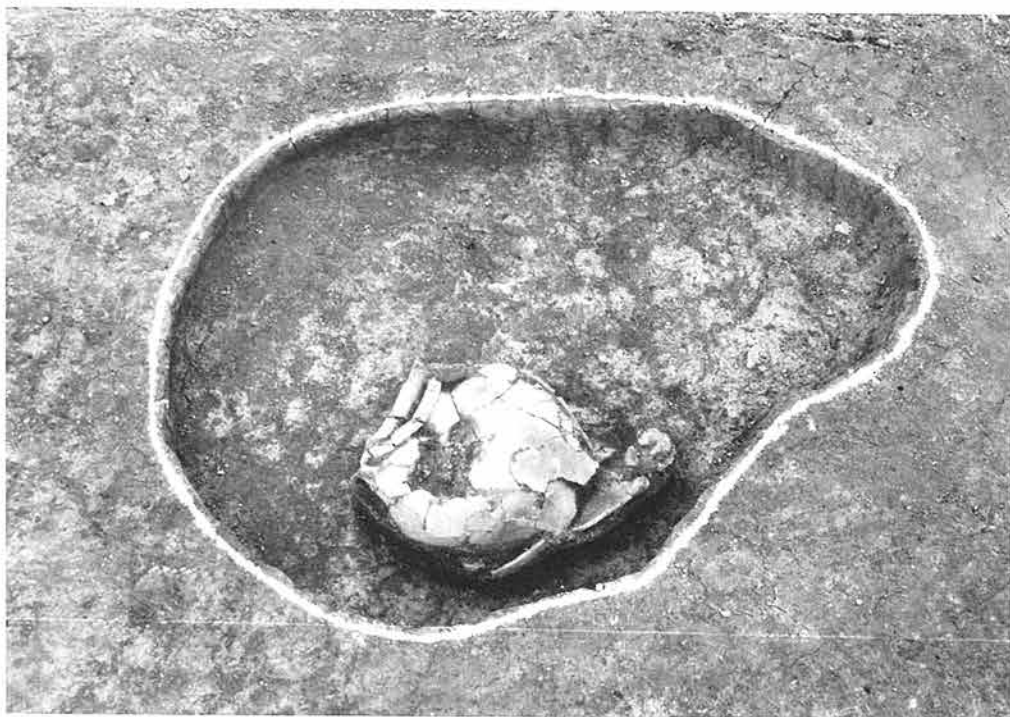


2. 土壙59遺物出土状況





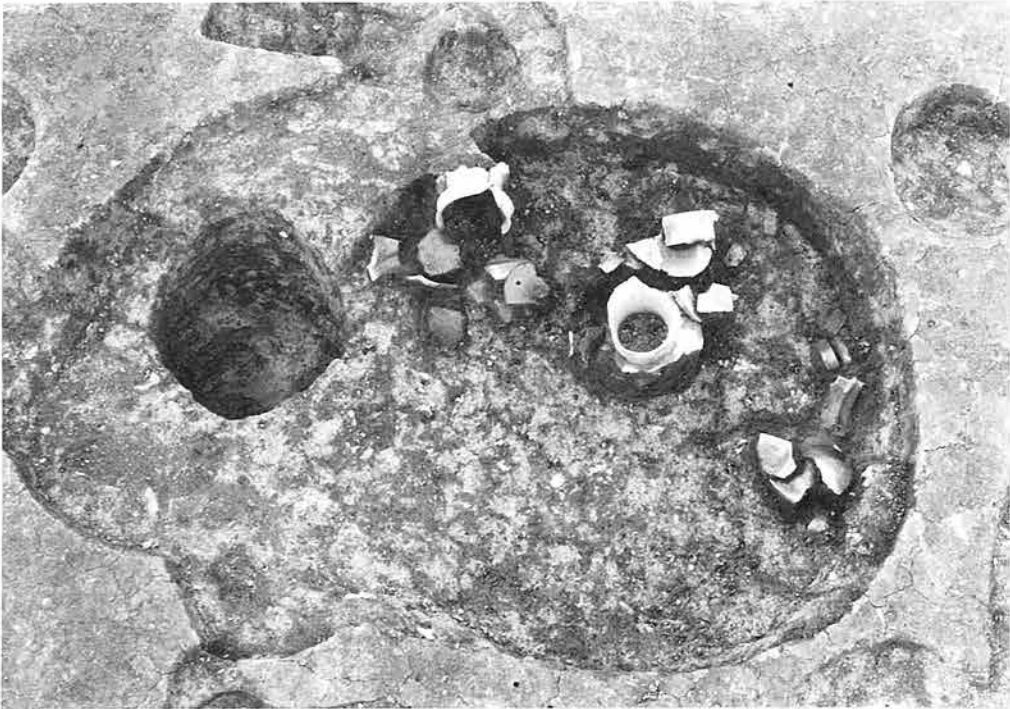
1. 土壙3000 (北より)



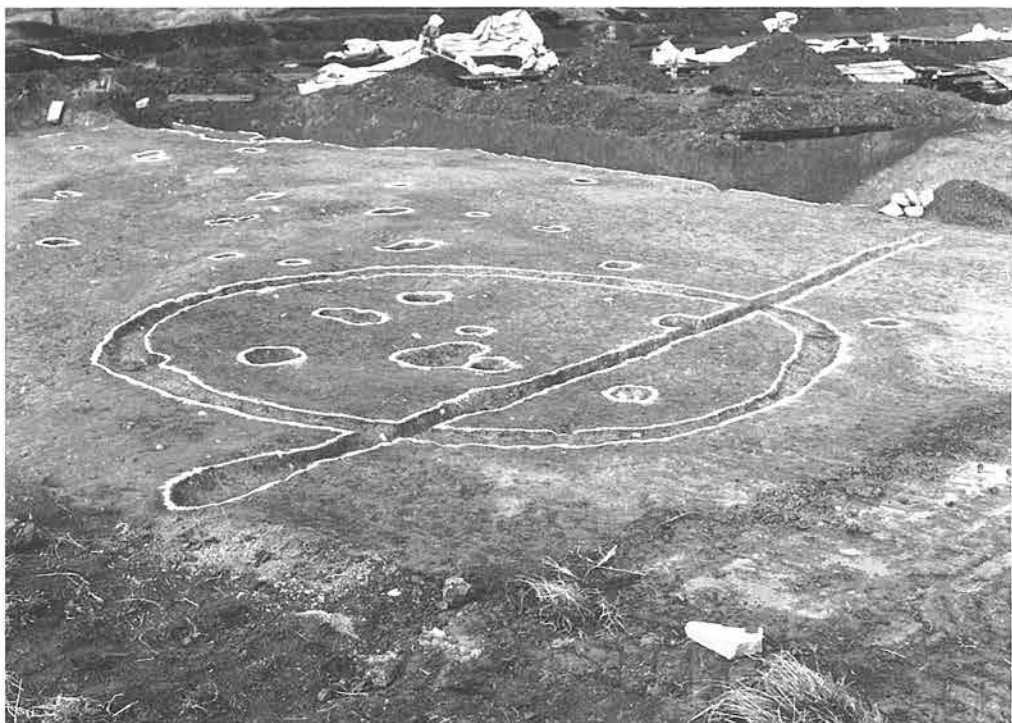
2. 土壙867 (北より)



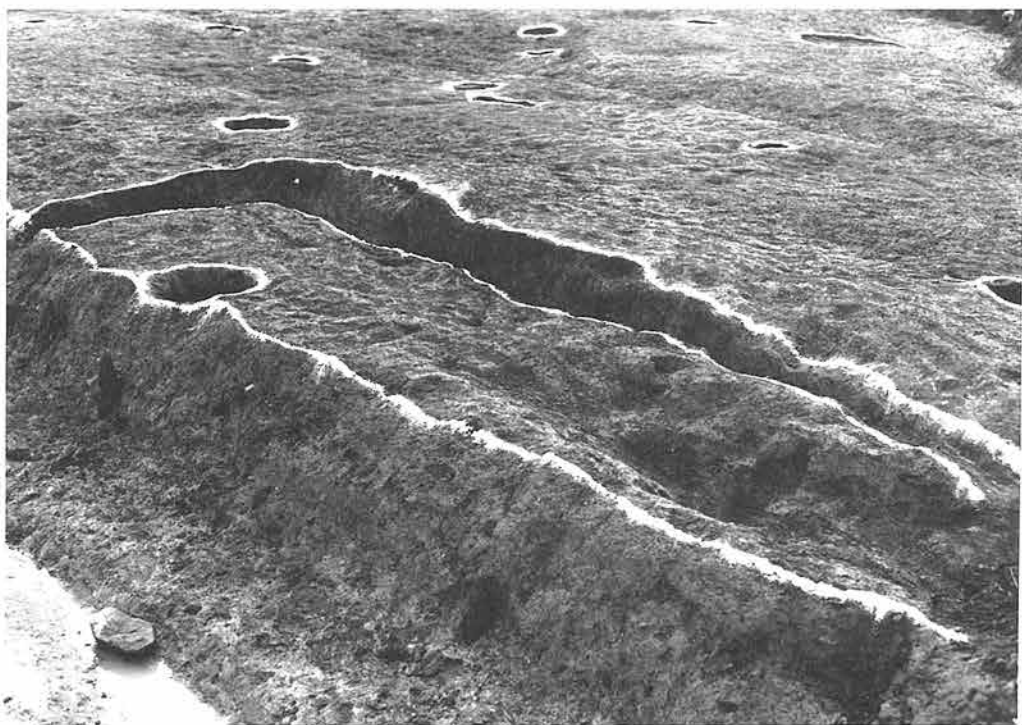
1. 土壙1088 (南より)



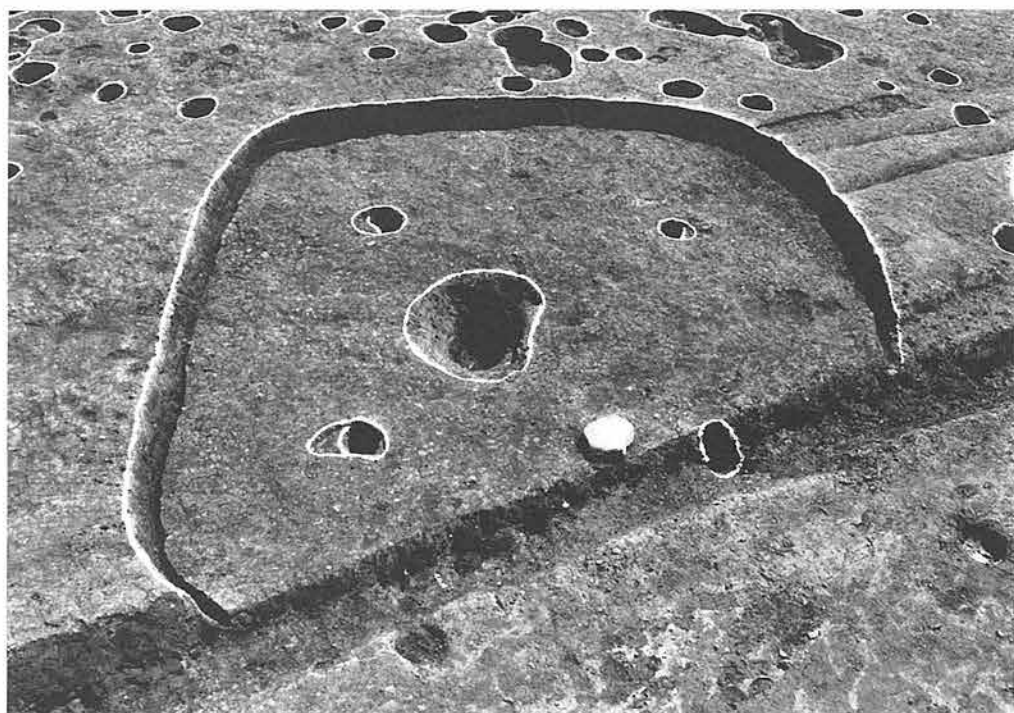
2. 土壙608 (南東より)



1. 5号住居址



2. 6号住居址



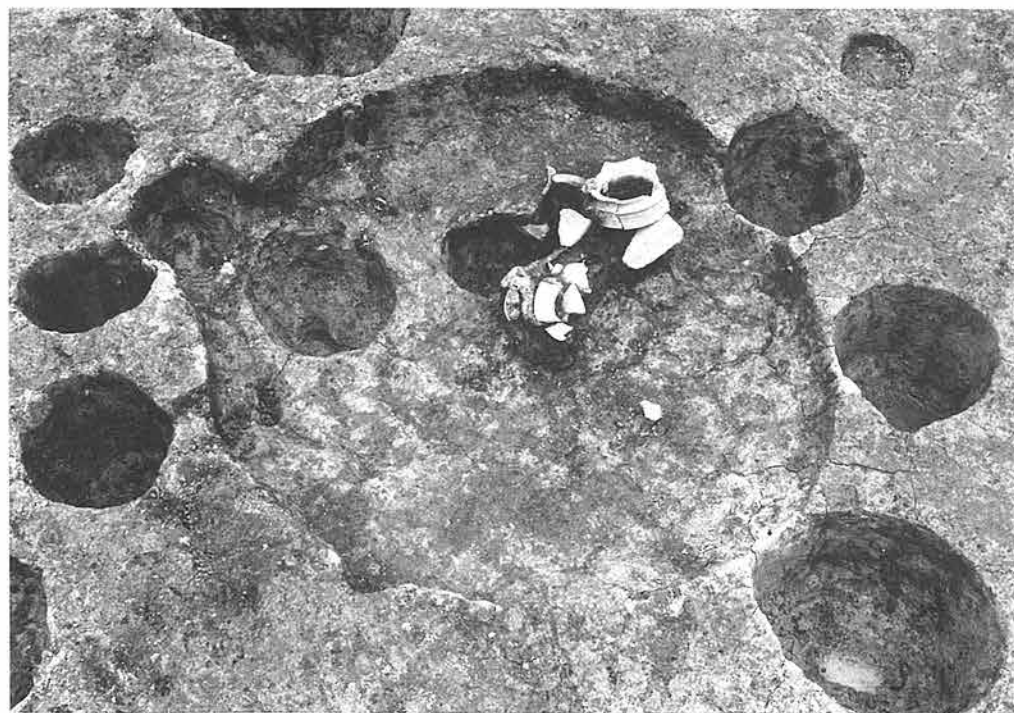
1. 17号住居址（北より）



2. 17号住居址小型仿製鏡出土状況



1. 23号住居址（南より）



2. 土壙1418遺物出土状況（北より）



1. 赤茂1号墳全景



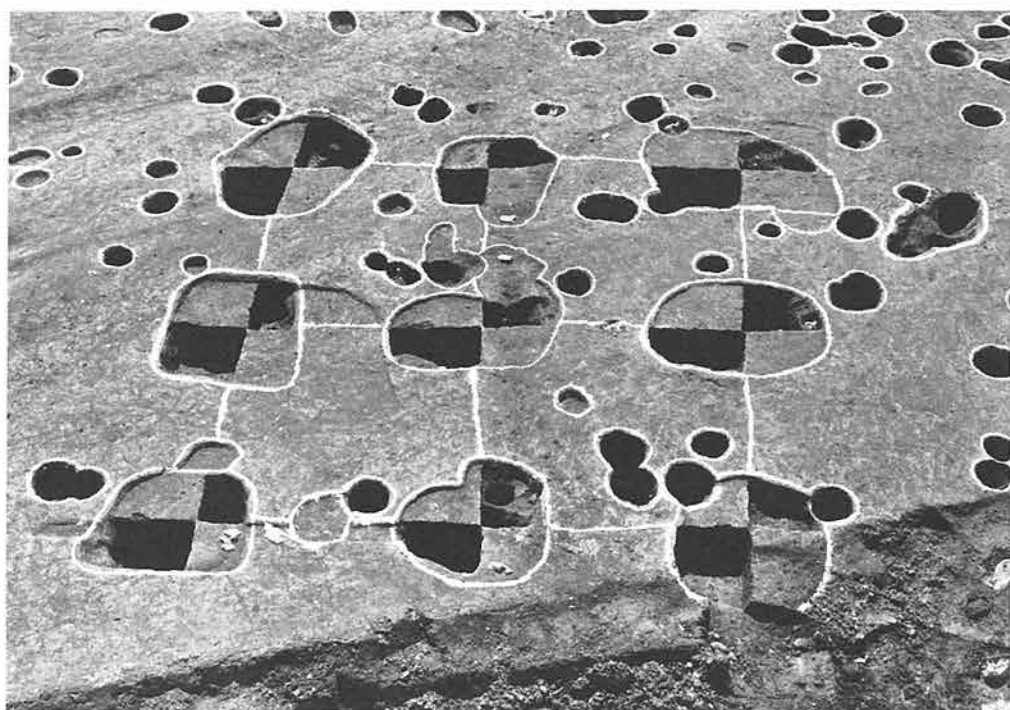
2. 赤茂1号墳遺物出土状況



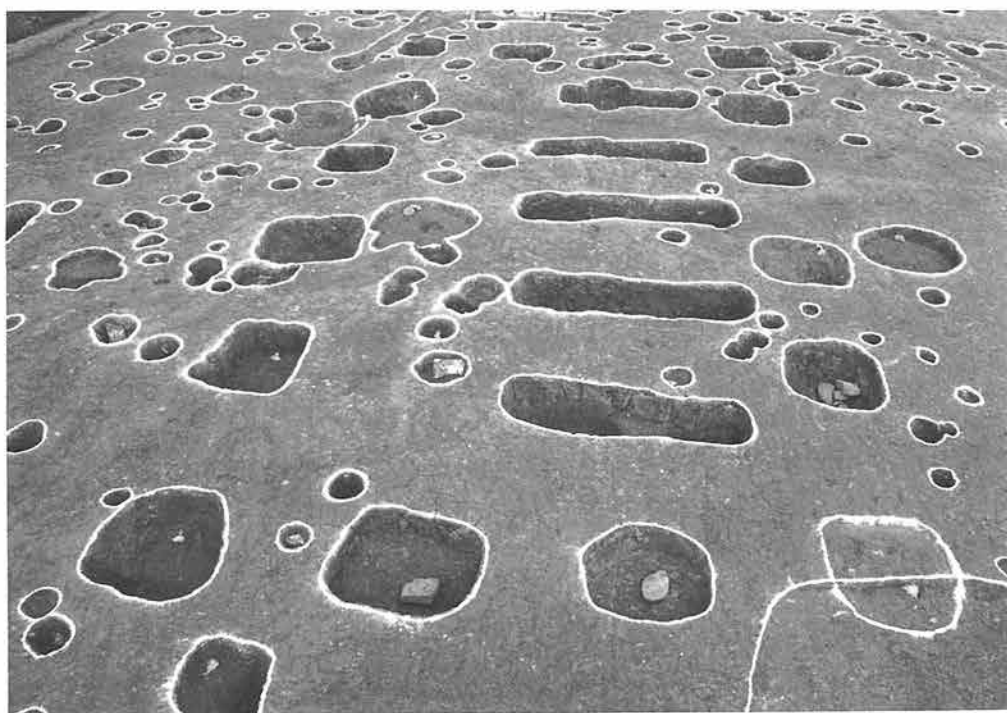
1. 赤茂1号墳石室内遺物除去後



2. 赤茂1号墳石室全景

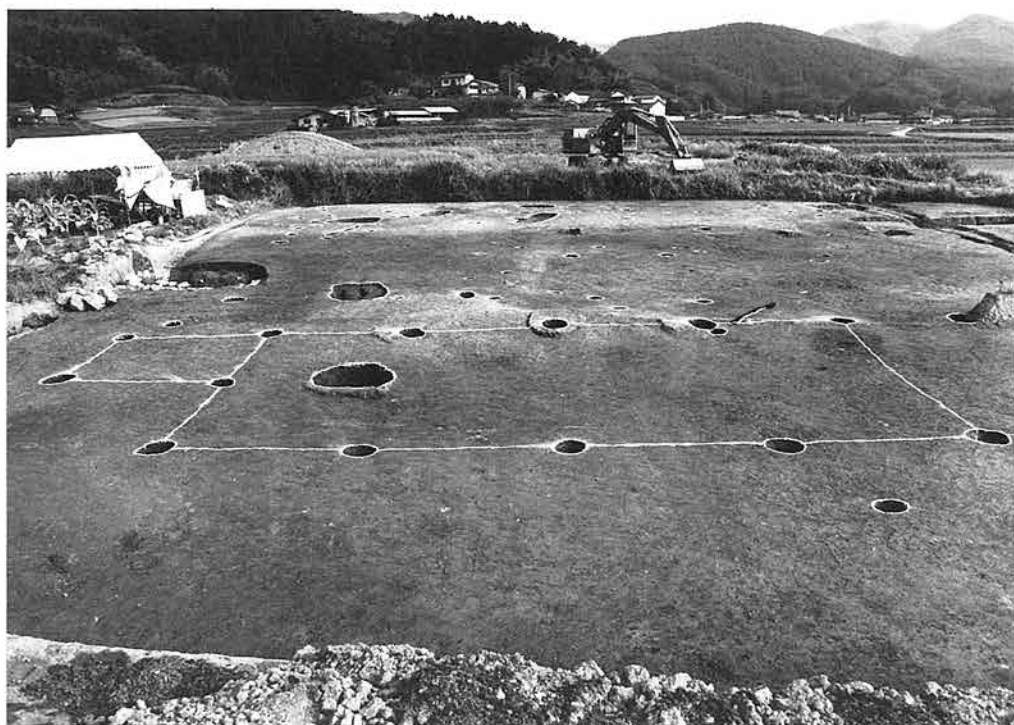


1. 建物36（北より）



2. 建物42（南より）

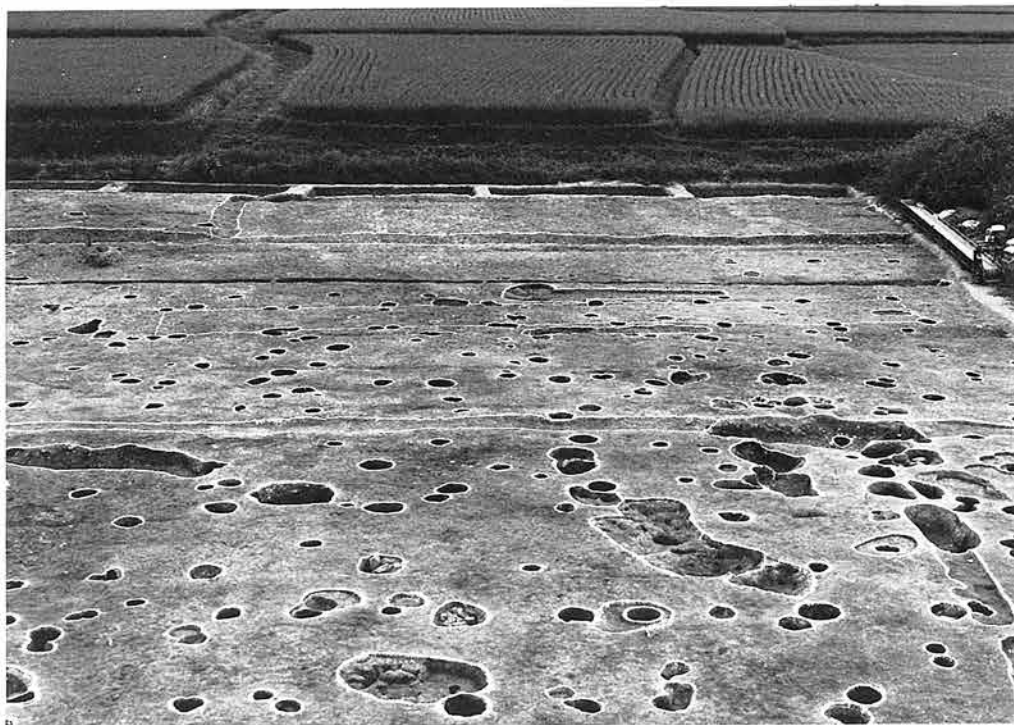




1. 建物 1



2. 建物 2～9 周辺



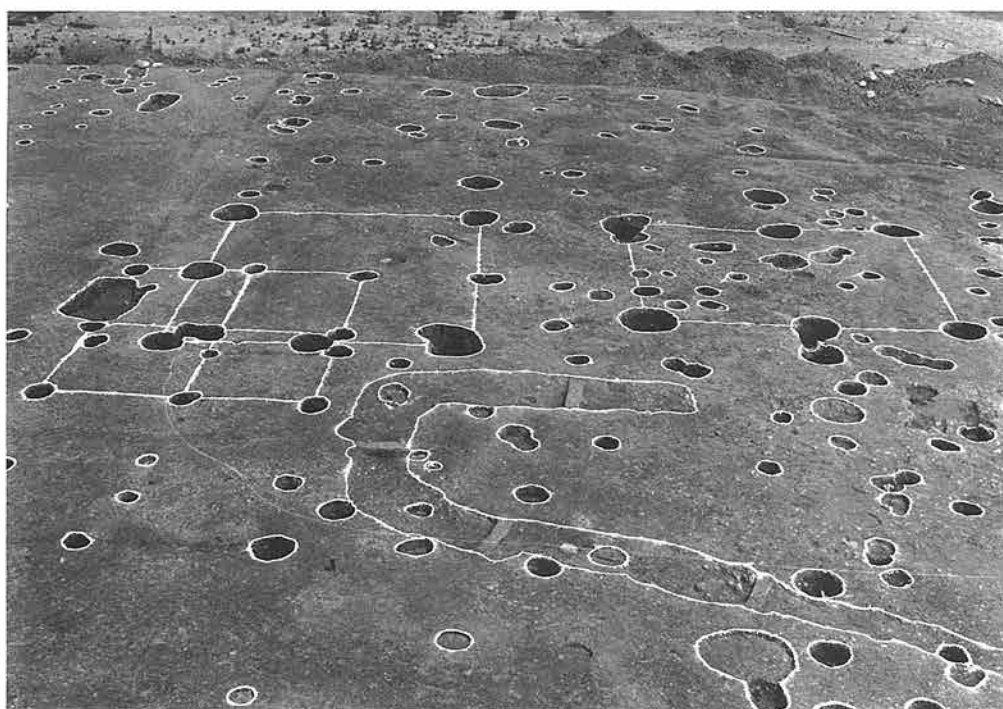
1. 建物14周辺



2. 建物20周辺



1. 建物28・29 (北より)



2. 建物30・31・32 (南より)



1. 溝 1



2. 溝 2 土器出土状況



1. 井戸 1



2. 井戸 1 断面



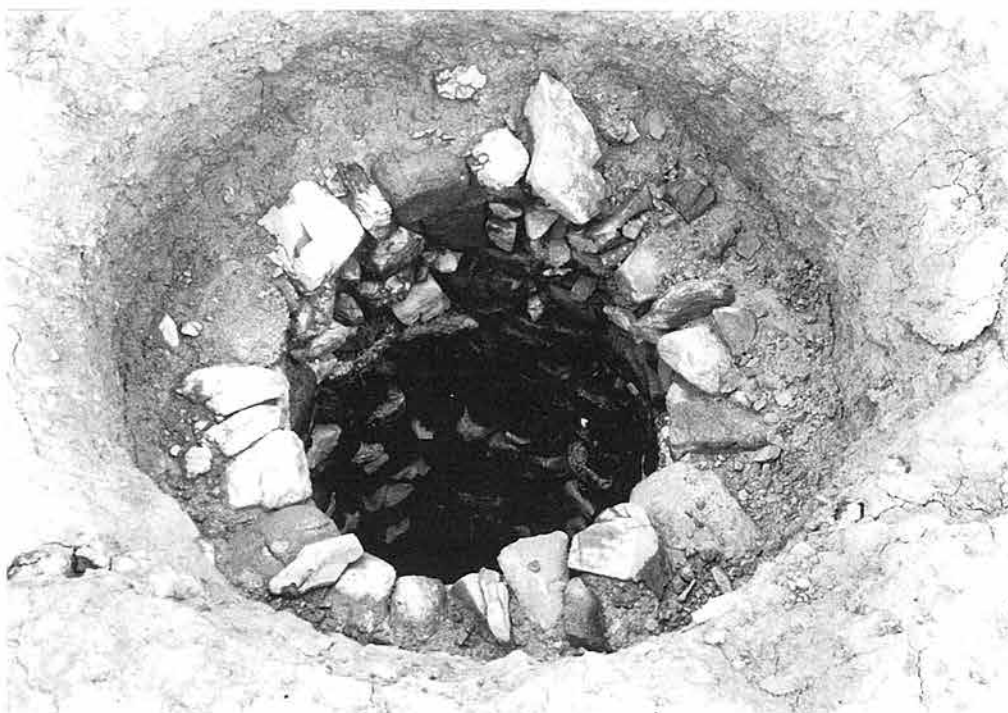
1. 井戸 2



2. 井戸 2 完掘状況



1. 井戸3 検出状況 (南より)



2. 井戸4 (北より)



1. 井戸5 (北より)



2. 井戸7 (西より)

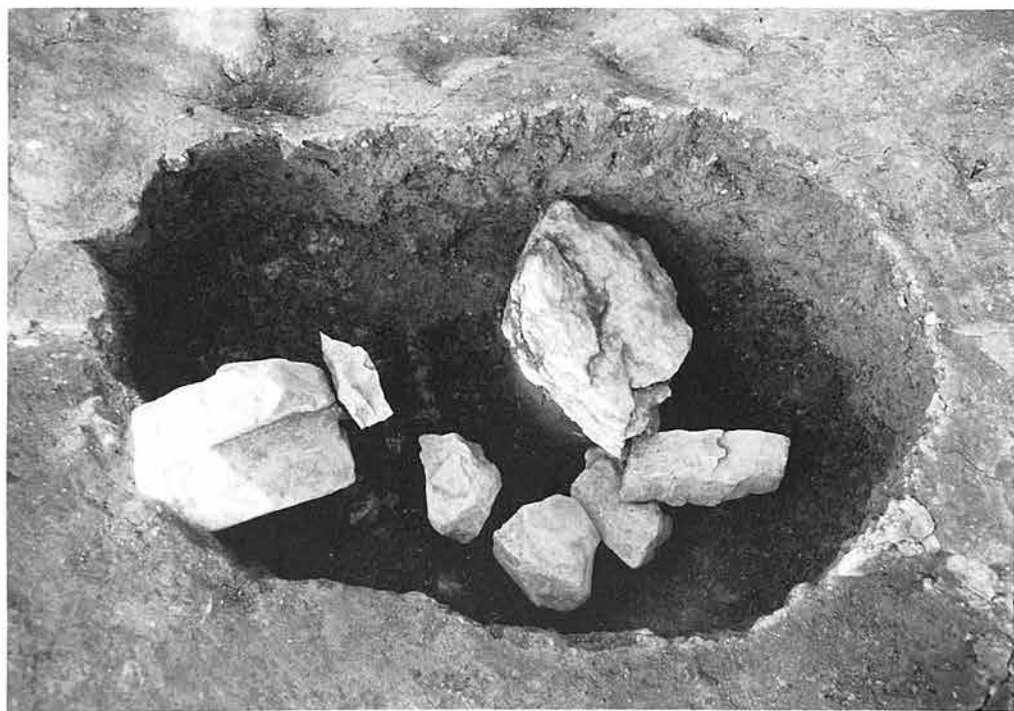




1. 土坑9



2. 土坑40



1. 炉



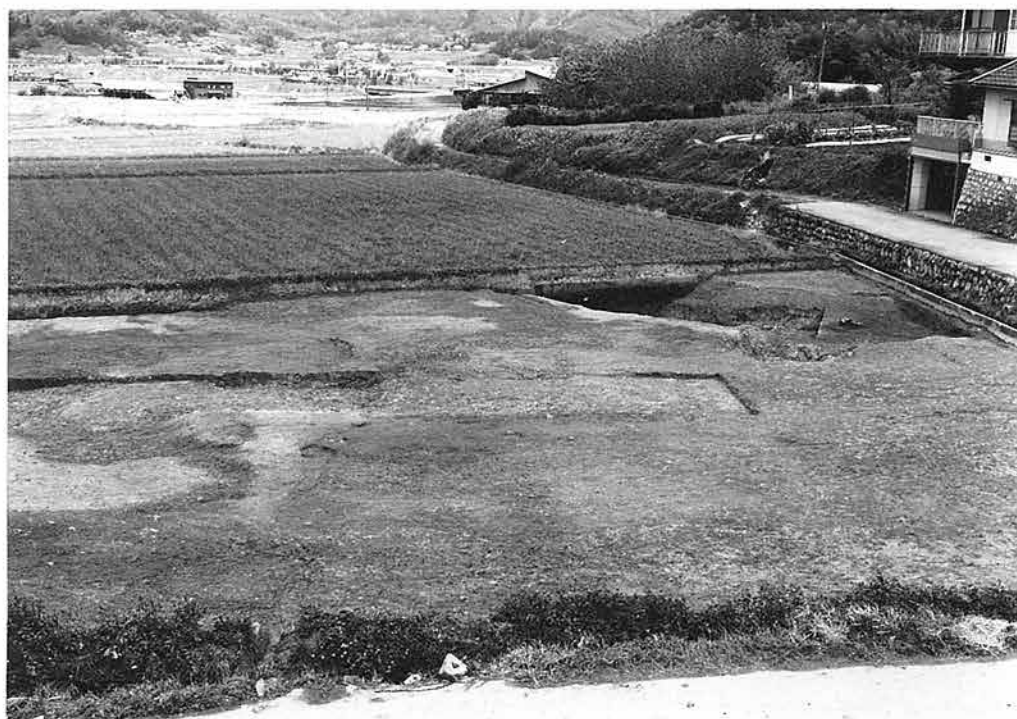
2. 土坑墓126



1. 土坑墓1676



2. 土坑墓124



1. 第2地点全景



2. 第4地点全景



1. 遺構検出風景



2. 作業風景



1. 作業風景



2. 見学会



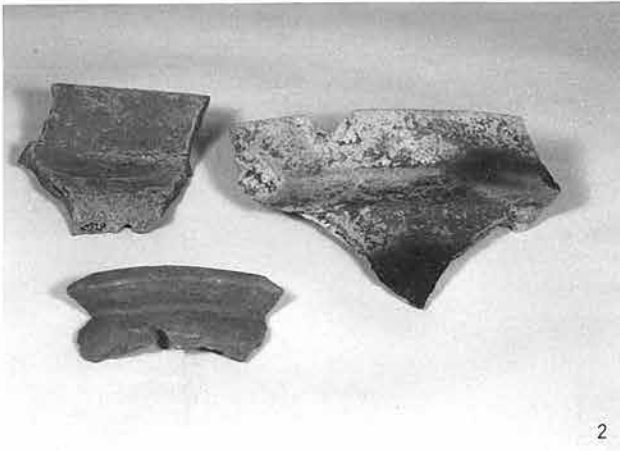
(1) 1号住居址 (2) 2·3号住居址 (3) 7号住居址 (4) 8号住居址、出土遺物



1



3



2



4



5



6



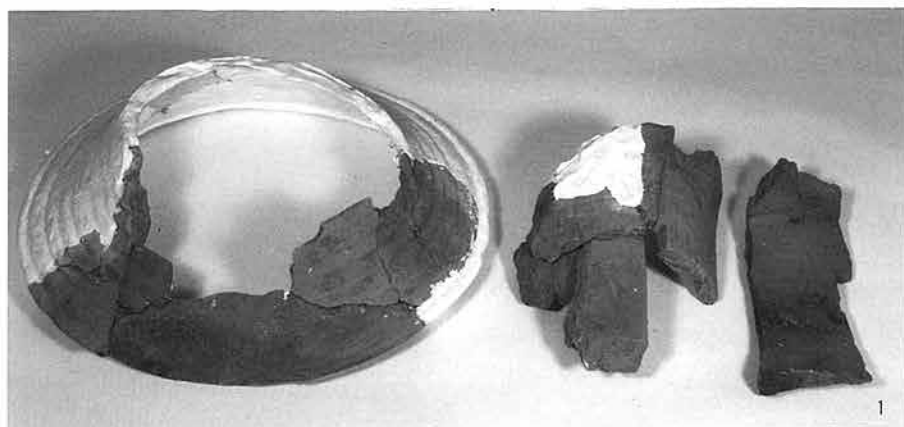
7

1 ~ 5 ; 8号住居址、6・7 ; 10号住居址出土遺物





1～5；土壙1出土遺物



1 · 2 ; 土壙 1、3 ; 土壙59、4 ; 土壙43出土遺物



赤茂1号墳出土遺物（須恵器）



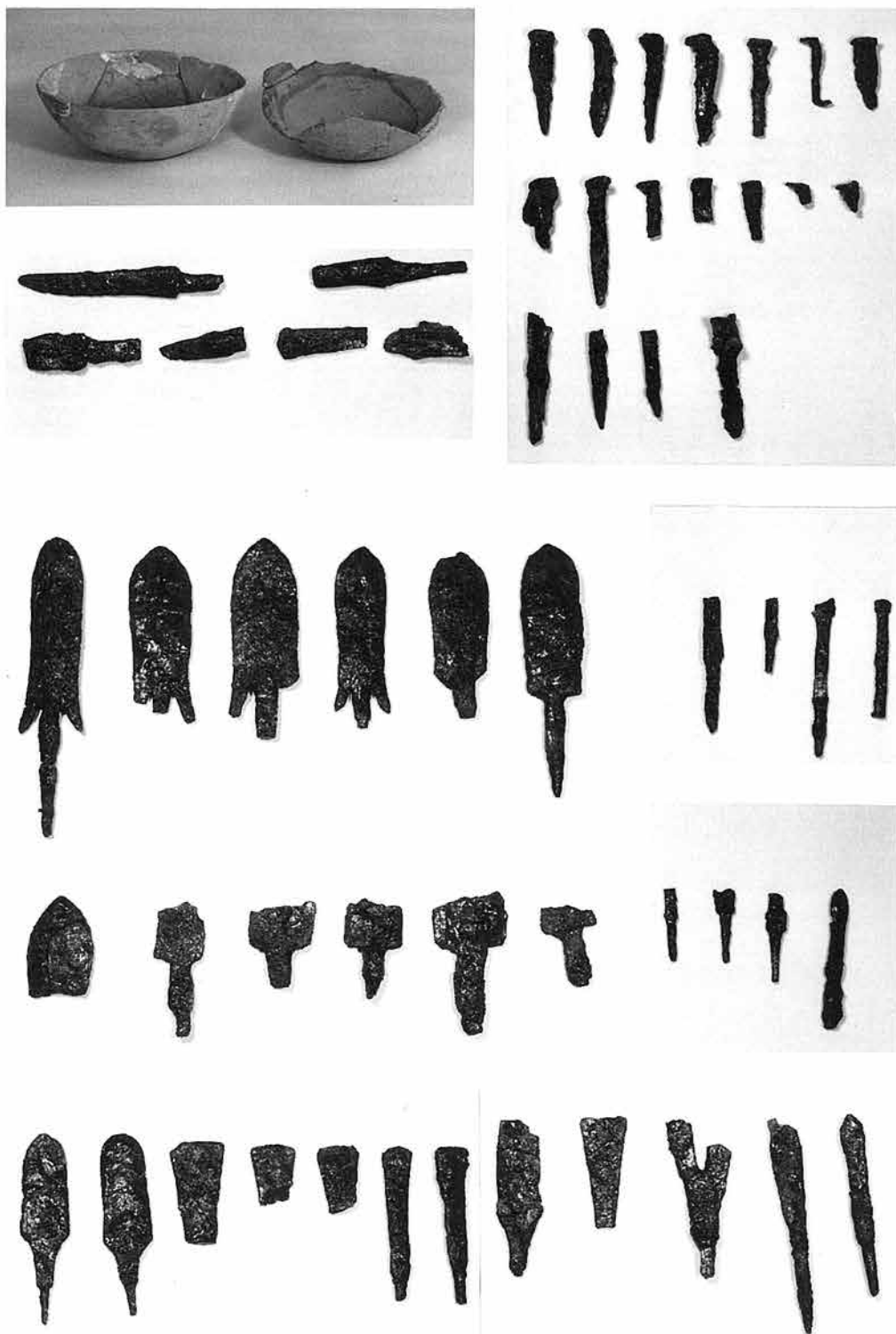
赤茂1号墳出土遺物（須恵器）



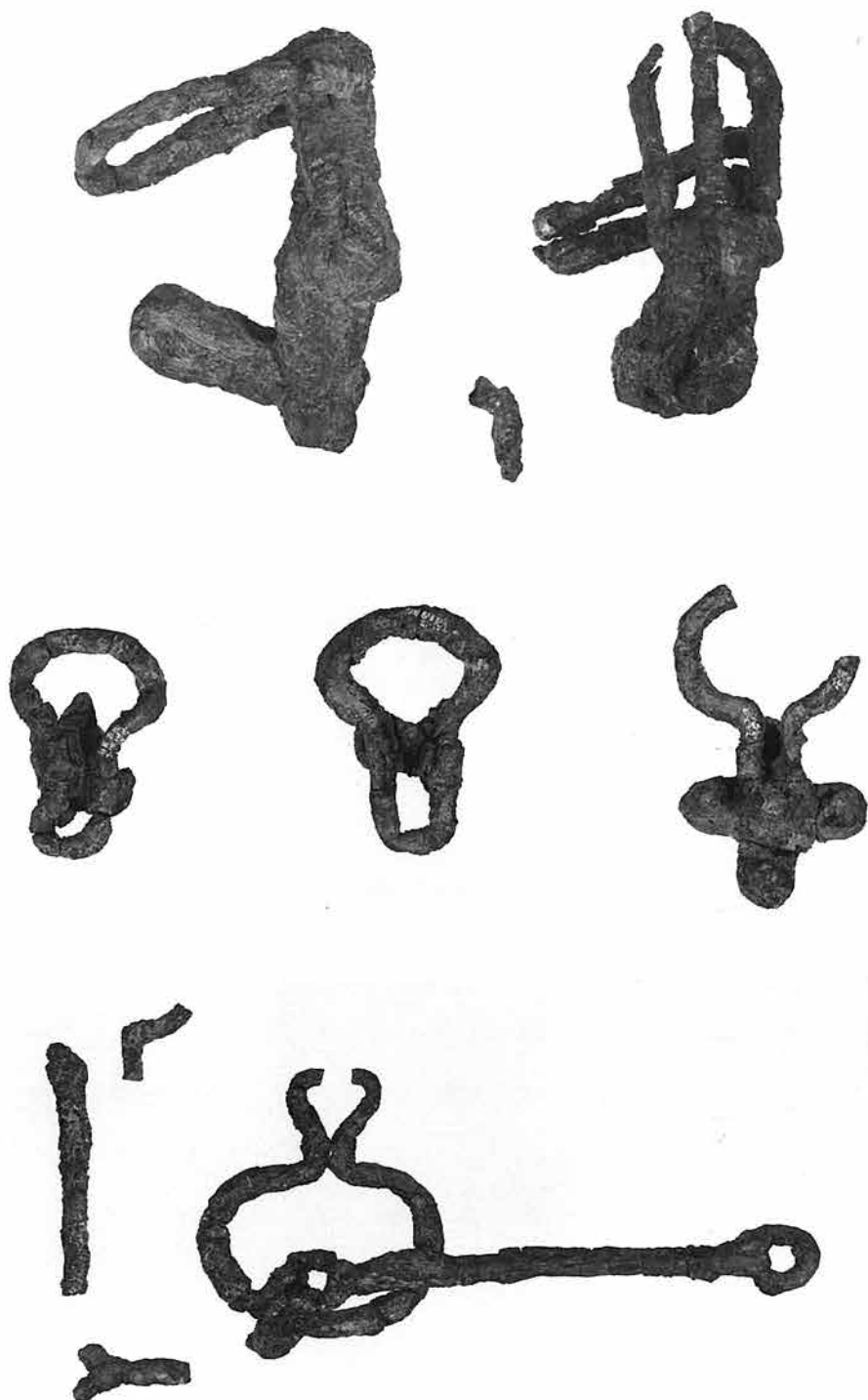
赤茂1号墳出土遺物（須恵器）



赤茂1号墳出土遺物（須恵器）

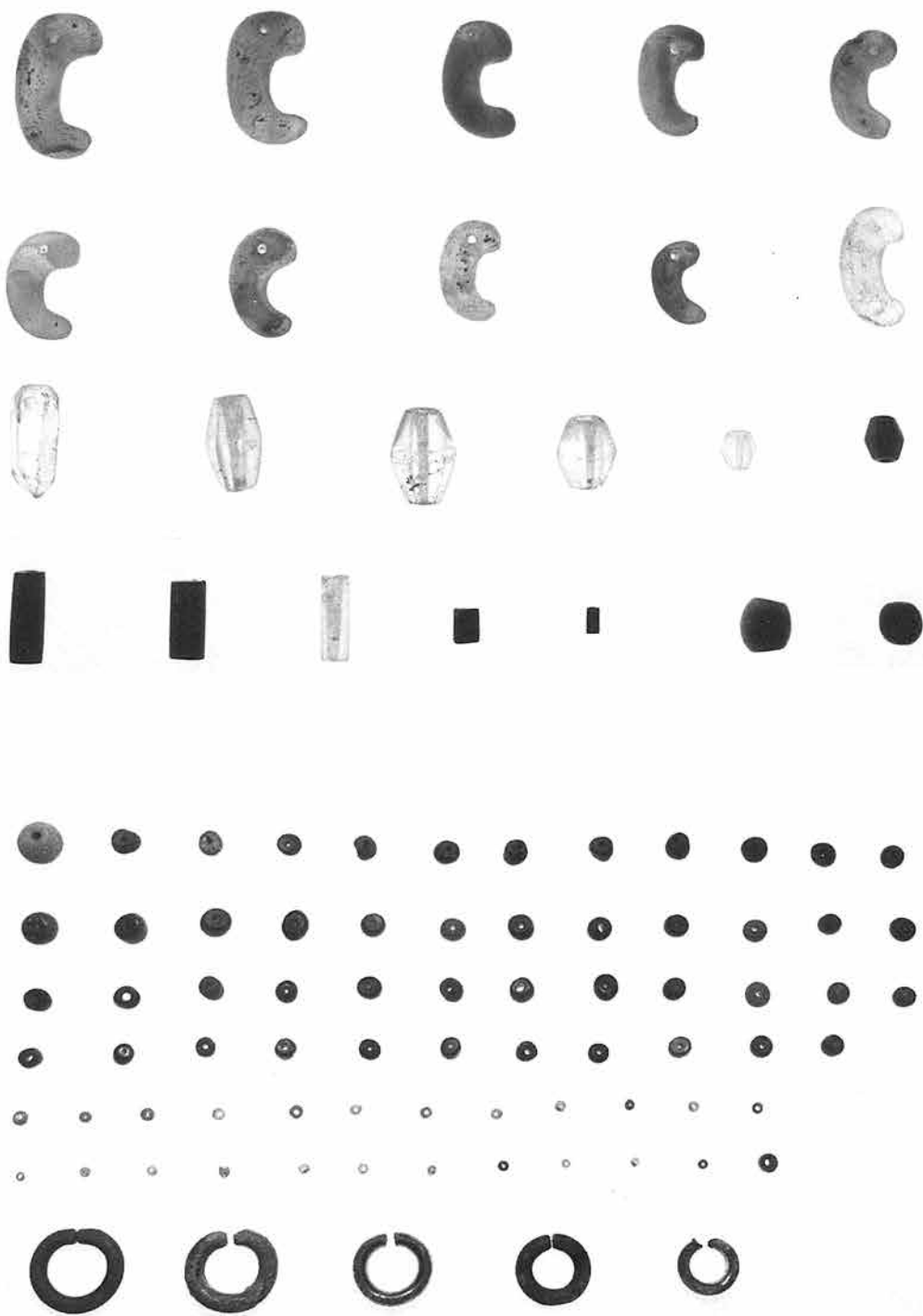


赤茂1号墳出土遺物（土師器、鉄器）

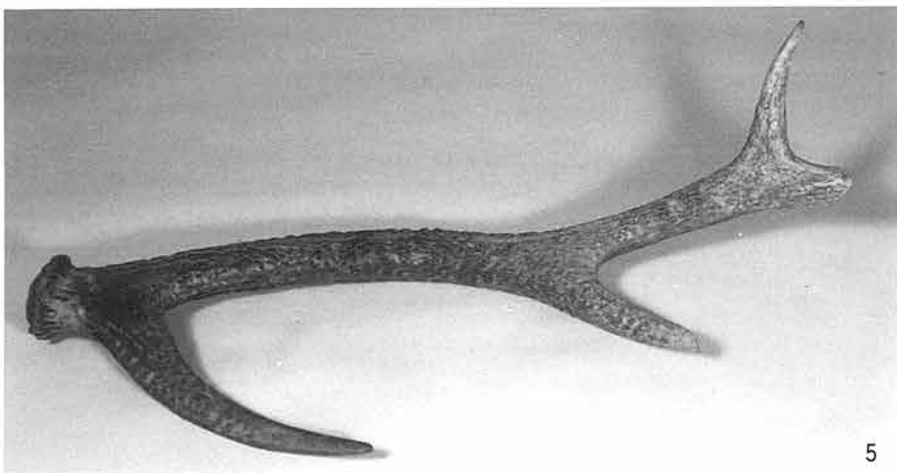
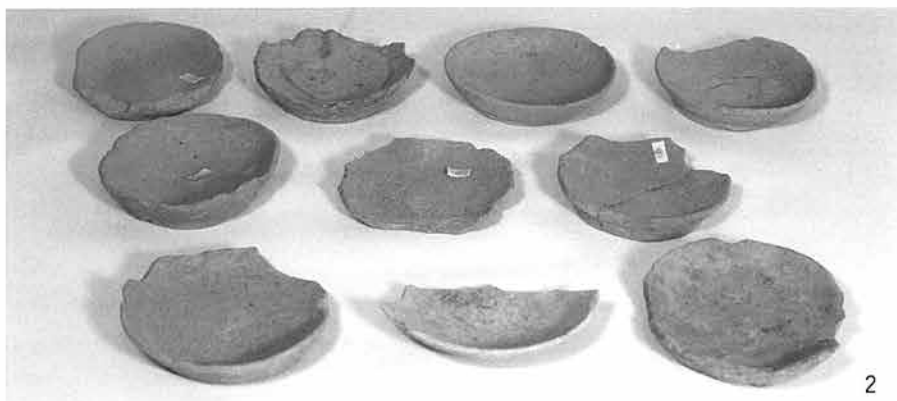


赤茂1号墳出土遺物（馬具）

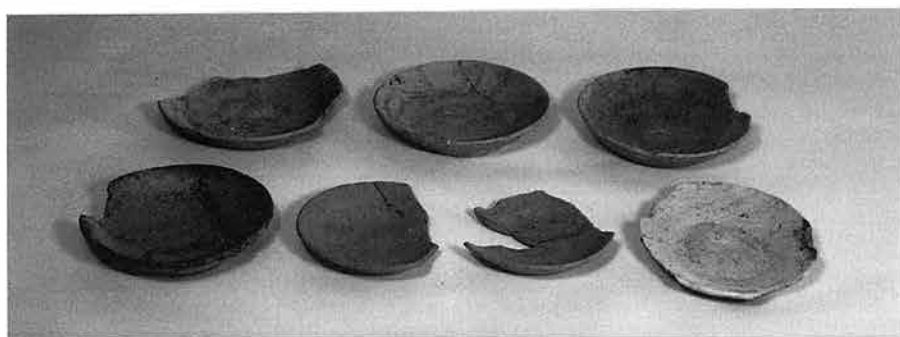
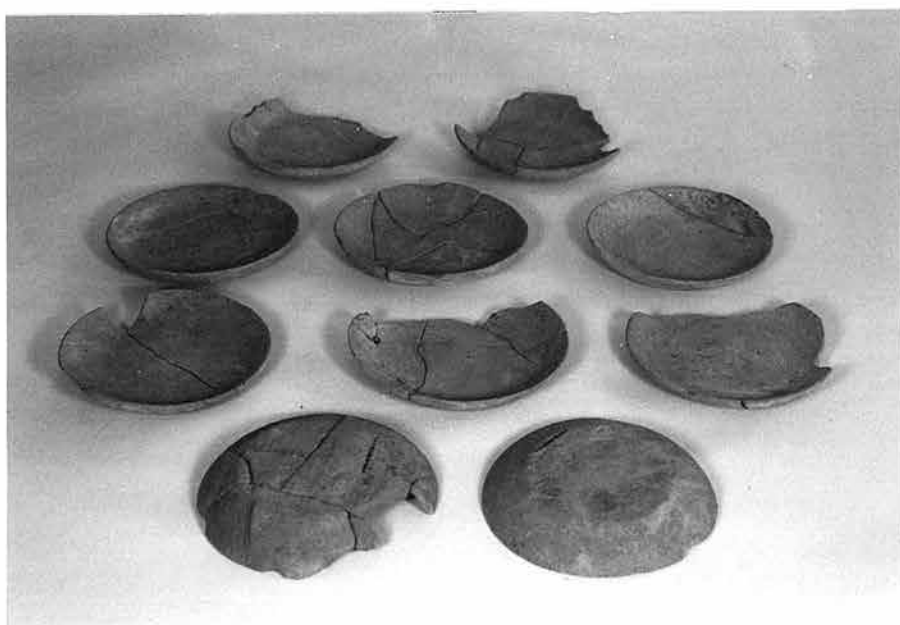




赤茂1号墳出土遺物（装身具類）



1 ; 溝1 2 ; 溝2 3 ; 井戸1 4・5 ; 井戸2出土遺物



土壙出土遺物



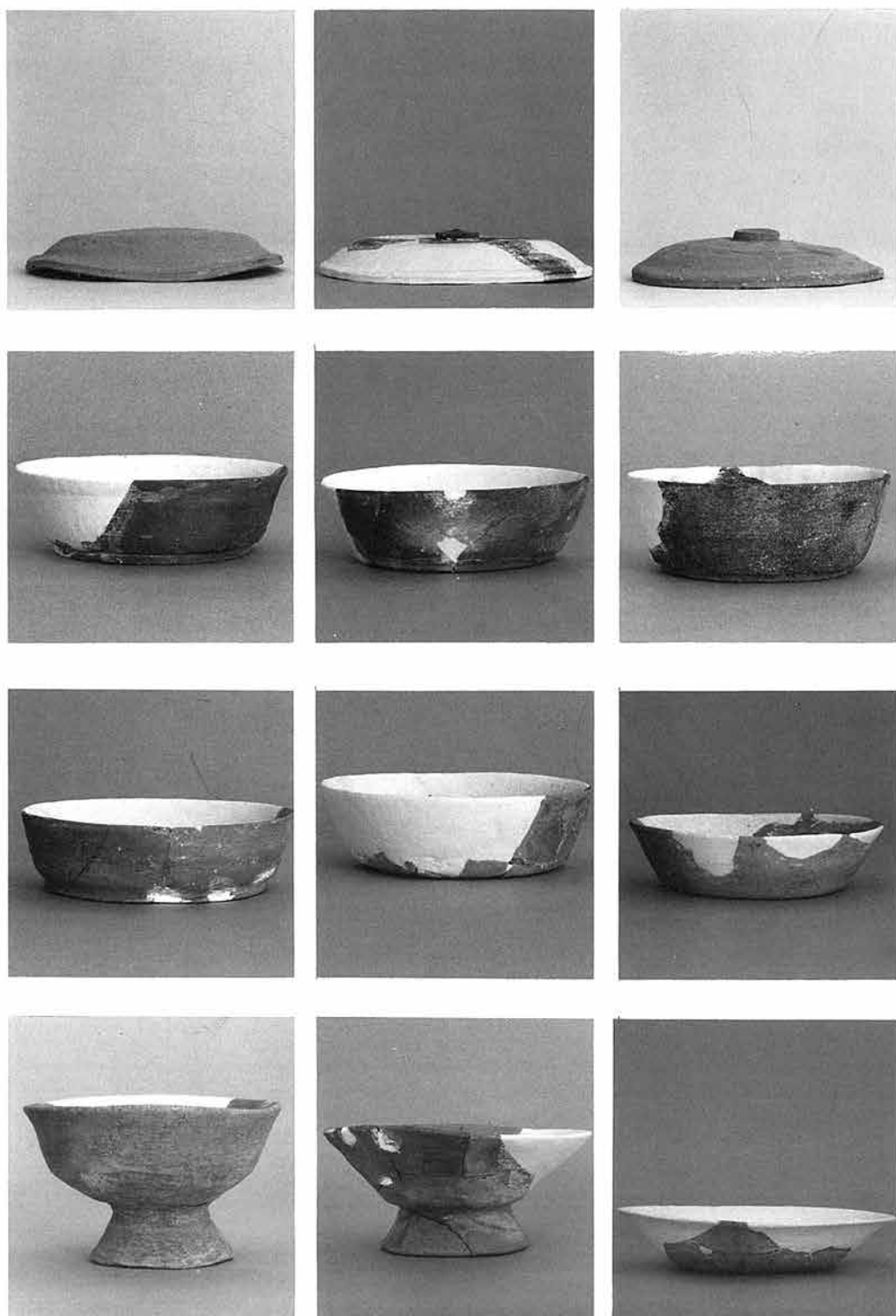
土城40出土遺物



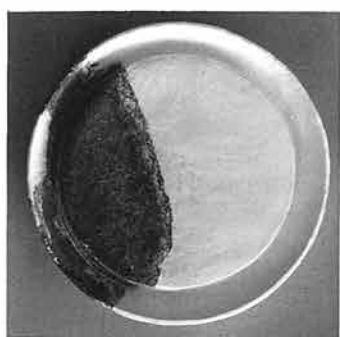
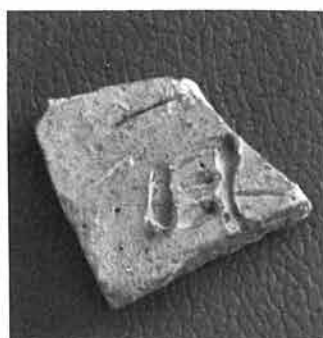
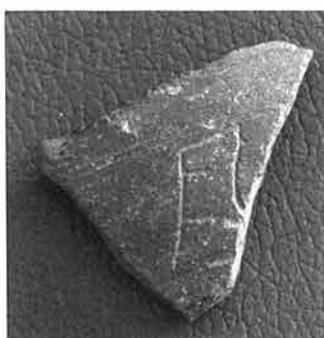
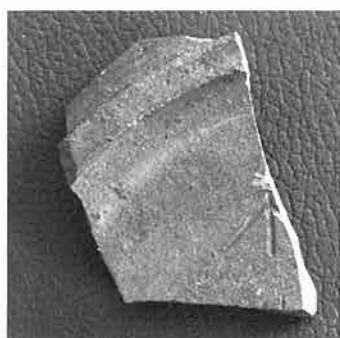
出土遺物



出土遺物

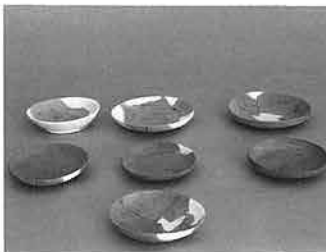


出土遺物

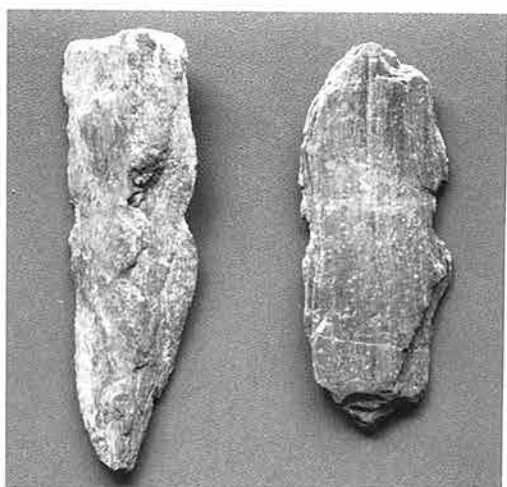
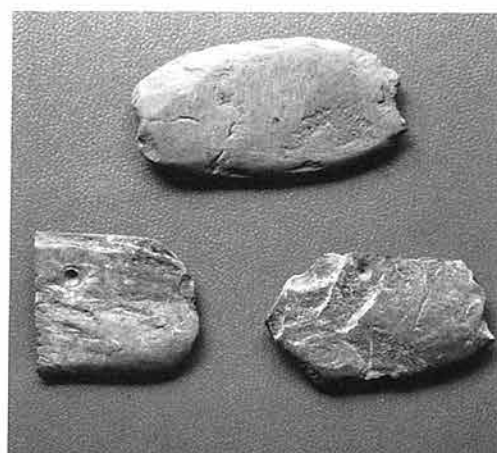
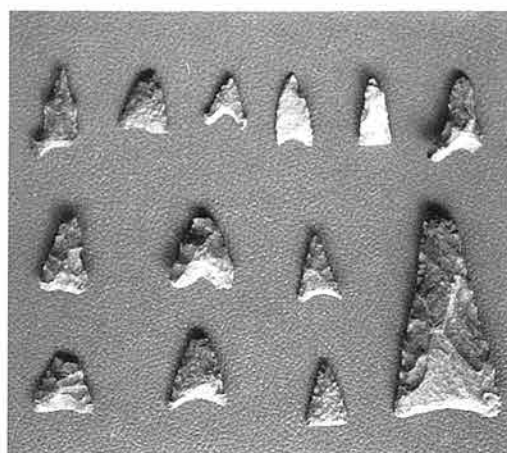
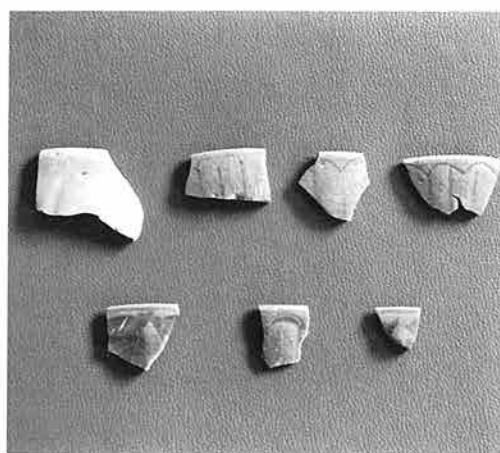
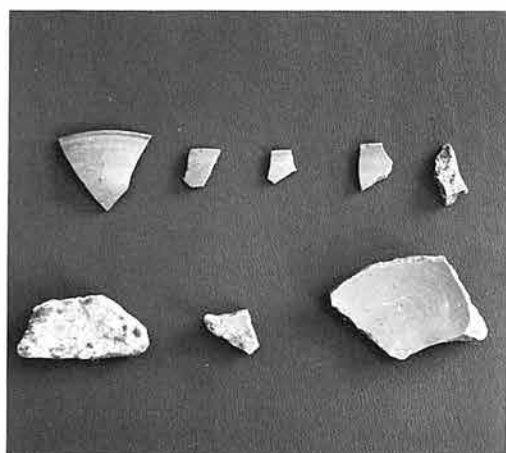


出土遺物





出土遺物



出土遺物

北房町埋蔵文化財発掘調査報告 4

谷 尻 遺 跡  
赤 茂 地 区

昭和61年 3月20日 印刷

昭和61年 3月31日 発行

編 集 北 房 町 教 育 委 員 会

印 刷 西 日 本 法 規 出 版 株 式 会 社



第1調査地点全体図 (1/300)



